

県道本吉小川線関係埋蔵文化財調査報告

山門ガラン遺跡

-福岡県みやま市瀬高町山門所在遺跡の調査-

福岡県文化財調査報告書 第226集

上 卷

2010

福岡県教育委員会

県道本吉小川線関係埋蔵文化財調査報告

山門ガラン遺跡

－福岡県みやま市瀬高町山門所在遺跡の調査－

福岡県文化財調査報告書 第226集

上 卷

序

本書は、一般県道本吉小川線の道路改良事業に先立って福岡県教育委員会が発掘調査を実施したみやま市に所在する山門ガラン遺跡、山門牛島遺跡および本吉遺跡の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査により、縄文時代から中世にかけての幅広い時代の遺跡を確認することができました。発掘調査前は、広大な田園地帯が広がる地でありましたが、こうした恵みを元とした様々な人の営みがあったことを伝えるものであります。

今回の発掘調査によって得られた成果が永く活用されることを願うものであり、この報告書が文化財愛護思想の普及に寄与することになれば幸いに存じます。

最後に、発掘調査・報告書作成の過程で、地元の方々をはじめとする関係各位の皆様の御協力が得られましたことに深く感謝いたします。

平成 22 年 3 月 31 日

福岡県教育委員会教育長

森 山 良 一

例 言

- 1 本書は、一般県道本吉小川線道路改良事業に伴って平成18～20年度に発掘調査を実施した埋蔵文化財に関する調査成果報告である。内容が多岐に渡るため、上・中・下巻の三分冊とし、山門ガラン遺跡・山門牛島遺跡・本吉遺跡を各々に収録した。
- 2 発掘調査・報告書作成は、福岡県土木部道路建設課の執行委任を受けて福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。なお、発掘調査・報告書作成に関してみやま市・同教育委員会の多大な御協力を得た。
- 3 遺構の実測・遺構写真の撮影等の現場作業は調査担当者を中心に行つた。出土遺物の整理・復元は九州歴史資料館において行つた。遺物の実測・製図をはじめとする報告書作成作業は福岡県教育庁総務部文化財保護課太宰府事務所において行つた。
- 4 出土遺物・図面等の記録類は九州歴史資料館において所蔵・管理される予定である。
- 5 空中写真是九州航空株式会社に委託し、ラジコンヘリコプターによる撮影を行つた。遺物写真是九州歴史資料館において撮影した。
- 6 本書に用いた地形図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図「柳川」「野町」である。
- 7 本書に用いる方位は世界測地系による座標北を用いるが、第2～5図に関しては国土座標II系によるものである。
- 8 本書の執筆は調査担当である小田和利（下巻V-4）・吉村靖徳（中巻IV-1・下巻V-3）・小川泰樹（中巻IV-3）・秦憲二（中巻IV-2）・岸本圭（上巻・下巻V-1）・坂元雄紀（中巻IV-4・下巻V-2）・が行つた。各巻のまとめについては文責を文末に記した。編集は上巻・下巻を岸本、中巻を小川が行つた。

上巻 山門ガラン遺跡

本文目次

I	はじめ	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の体制	11
II	位置と環境	12
III	山門ガラン遺跡	15
1	調査の経過	15
2	遺跡の概要	15
3	検出された遺構	16
堅穴住居	16	
掘立柱建物	85	
土坑	85	
甕棺墓	121	
溝	125	
ピット	142	
包含層	148	
4	まとめ	154

図版目次

図版 1	1. 遺跡全景（西から）	2. 遺跡全景（南東から）
図版 2	1. 遺跡全景（東から）	2. 1 区全景（西から）
図版 3	1. 2 区上層全景（上空から） 3. 4 区全景（上空から）	2. 3 区上層全景（上空から） 4. 山門ガラン遺跡現況
図版 4	1. 2 区下層東竪穴住居群（上空から）	2. 3 区下層竪穴住居群（上空から）
図版 5	1. 2 号竪穴住居（西から） 3. 4 号竪穴住居内ピット遺物出土状況（南から）	2. 3 号竪穴住居（南西から） 3. 4 号竪穴住居（西から）
図版 6	1. 8 号竪穴住居検出状況（南から） 3. 14 号竪穴住居（西から）	2. 10・11 号竪穴住居（南から）
図版 7	1. 2 区下層東竪穴住居群（東から） 3. 17 号竪穴住居遺物出土状況（西から）	2. 17 号竪穴住居遺物出土状況（北から）
図版 8	1. 18・19 号竪穴住居（南東から） 3. 24・25 号竪穴住居（南から）	2. 20 号竪穴住居（北から）
図版 9	1. 26 号竪穴住居遺物出土状況（北から） 3. 27 号竪穴住居遺物出土状況（北から）	2. 27 号竪穴住居（南西から）
図版 10	1. 30・33 号竪穴住居（南東から） 3. 1 号甕棺墓（南西から）	2. 38 号竪穴住居（南から）
図版 11	1. 5 号土坑（北から） 3. 9 号土坑（南西から）	2. 8 号土坑（南から）
図版 12	1. 11 号土坑（東から） 3. 13 号土坑（西から）	2. 12 号土坑（東から）
図版 13	1. 14 号土坑（東から） 3. 18～21 号土坑（東から）	2. 15 号土坑（南東から）
図版 14	1. 22～24 号土坑（北東から） 3. 26 号土坑（北東から）	2. 25 号土坑（西から）
図版 15	1. 27 号土坑（北東から） 3. 39 号土坑（南西から）	2. 36 号土坑（南から）
図版 16	1. 16 号土坑（北から） 3. 7～9 号溝（南東から）	2. 17 号土坑（南から）
図版 17	1. 1・2 号溝（北東から） 3. 出土箋	2. 1 区鏡出土状況 4. 1 区包含層堆積状況（北東から）
図版 18	竪穴住居出土土器①	
図版 19	竪穴住居出土土器②	
図版 20	竪穴住居出土土器③	
図版 21	竪穴住居出土土器④	
図版 22	竪穴住居出土土器⑤・土坑出土土器①	

- 图版 23 土坑出土土器②
- 图版 24 土坑出土土器③
- 图版 25 土坑出土土器④
- 图版 26 沟出土土器·出土金属器·出土石器①
- 图版 27 出土石器②
- 图版 28 出土石器③

挿図目次

第 1 図	県道本吉小川線と周辺交通網 (1/200,000)	1
第 2 図	県道本吉小川線関係文化財調査地 (1/6,000)	3-4
第 3 図	山門ガラン遺跡周辺地形図 (1/3,000)	5
第 4 図	山門牛島遺跡周辺地形図 (1/3,000)	6
第 5 図	本吉遺跡周辺地形図 (1/3,000)	7
第 6 図	みやま市の位置	12
第 7 図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	13
第 8 図	山門ガラン遺跡 7 区遺構配置図 (1/300)	16
第 9 図	山門ガラン遺跡遺構配置図 (1/300)	17-18
第 10 図	1 ~ 5 号竪穴住居・3 号溝実測図 (1/60)	19
第 11 図	1 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	20
第 12 図	2 号竪穴住居出土遺物実測図① (1/3)	21
第 13 図	2 号竪穴住居出土遺物実測図② (1/3、23 は 1/2)	22
第 14 図	3 号竪穴住居出土遺物実測図① (1/3)	23
第 15 図	3 号竪穴住居出土遺物実測図② (1/3)	24
第 16 図	3 号竪穴住居出土遺物実測図③ (1/3)	25
第 17 図	3 号竪穴住居出土遺物実測図④ (1/3)	26
第 18 図	3 号竪穴住居出土遺物実測図⑤ (1/3)	27
第 19 図	3 号竪穴住居出土遺物実測図⑥ (1/3)	28
第 20 図	3 号竪穴住居出土遺物実測図⑦ (1/3、50・52 は 1/2、51 は 2/3)	29
第 21 図	4 号竪穴住居出土遺物実測図① (1/3)	30
第 22 図	4 号竪穴住居出土遺物実測図② (1/3)	31
第 23 図	5 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	32
第 24 図	6・7 号竪穴住居実測図 (1/60)	32
第 25 図	6 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3、6 は 1/2)	33
第 26 図	7 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	34
第 27 図	8・9 号竪穴住居実測図 (1/60)	35
第 28 図	8 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	36
第 29 図	9 号竪穴住居出土遺物実測図① (1/3)	37
第 30 図	9 号竪穴住居出土遺物実測図② (1/2、17 は 1/3)	38
第 31 図	10 ~ 12 号竪穴住居実測図 (1/60)	39
第 32 図	10・11 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3、13 は 1/2)	40
第 33 図	13 号竪穴住居実測図 (1/60)	41
第 34 図	12・13 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3、4 は 1/2)	42
第 35 図	14・15 号竪穴住居・4 号土坑実測図 (1/60)	43
第 36 図	14 ~ 16 号竪穴住居検出面出土遺物実測図① (1/3)	44

第 37 図	14 ~ 16 号竪穴住居検出面出土遺物実測図② (1/3)	45
第 38 図	14 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3、11 ~ 14 は 1/2、15 は 1/1)	46
第 39 図	15・16 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	47
第 40 図	16・17 号竪穴住居実測図 (1/60)	48
第 41 図	17 号竪穴住居出土遺物実測図① (1/3)	49
第 42 図	17 号竪穴住居出土遺物実測図② (1/3)	50
第 43 図	17 号竪穴住居出土遺物実測図③ (1/3)	51
第 44 図	17 号竪穴住居出土遺物実測図④ (1/4)	52
第 45 図	17 号竪穴住居出土遺物実測図⑤ (1/3)	53
第 46 図	17 号竪穴住居出土遺物実測図⑥ (1/3、29 は 1/2)	54
第 47 図	18・19 号竪穴住居・1 号建物実測図 (1/60)	55
第 48 図	18・19 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3、8・15 は 1/2)	56
第 49 図	20 号竪穴住居実測図 (1/60)	57
第 50 図	20 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3、6 は 1/2)	58
第 51 図	21 ~ 23 号竪穴住居実測図 (1/60)	59
第 52 図	21・22 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	60
第 53 図	23 ~ 25 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	61
第 54 図	24 ~ 26 号竪穴住居実測図 (1/60)	62
第 55 図	26 号竪穴住居出土遺物実測図① (1/3)	63
第 56 図	26 号竪穴住居出土遺物実測図② (1/3、20 は 1/2)	64
第 57 図	27 ~ 29 号竪穴住居実測図 (1/60)	65
第 58 図	27 号竪穴住居出土遺物実測図① (1/3)	66
第 59 図	27 号竪穴住居出土遺物実測図② (1/3)	67
第 60 図	29 ~ 33 号竪穴住居実測図 (1/60)	68
第 61 図	30 号竪穴住居検出面出土遺物実測図① (1/3)	69
第 62 図	30 号竪穴住居検出面出土遺物実測図② (1/4)	70
第 63 図	28・30・31 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3、9 は 1/1)	71
第 64 図	32 号竪穴住居出土遺物実測図① (1/3)	72
第 65 図	32 号竪穴住居出土遺物実測図② (1/3)	73
第 66 図	33 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	74
第 67 図	34・35 号竪穴住居実測図 (1/60)	75
第 68 図	34 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3、16 は 1/2)	76
第 69 図	35 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	77
第 70 図	36 ~ 38 号竪穴住居実測図 (1/60)	78
第 71 図	36 号竪穴住居出土遺物実測図① (1/3)	79
第 72 図	36 号竪穴住居出土遺物実測図② (1/3、13 は 1/2)	80
第 73 図	37 号竪穴住居出土遺物実測図① (1/3)	81
第 74 図	37 号竪穴住居出土遺物実測図② (1/3)	82

第 75 図	38 号堅穴住居出土遺物実測図① (1/3)	83
第 76 図	38 号堅穴住居出土遺物実測図② (1/3)	84
第 77 図	39 号堅穴住居 7 号土坑実測図 (1/60)	85
第 78 図	1 ~ 3 号土坑実測図 (1/60)	86
第 79 図	1 号土坑出土遺物実測図① (1/3)	87
第 80 図	1 号土坑出土遺物実測図② (1/3、29 は 1/2)	88
第 81 図	2・3 号土坑出土遺物実測図 (1/3、6 は 1/2)	89
第 82 図	5・6 号土坑実測図 (1/40)	90
第 83 図	5 号土坑出土遺物実測図① (1/3)	91
第 84 図	5 号土坑出土遺物実測図② (1/3、13 は 1/2)	92
第 85 図	6 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	92
第 86 図	7 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	93
第 87 図	8 号土坑実測図 (1/40)	94
第 88 図	8 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	94
第 89 図	9 ~ 13 号土坑実測図 (1/40)	95
第 90 図	9・10 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	96
第 91 図	11 ~ 14 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	97
第 92 図	14・15 号土坑実測図 (1/40)	99
第 93 図	16・17 号土坑実測図 (1/40)	99
第 94 図	15 ~ 17 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	100
第 95 図	18 ~ 24 号土坑実測図 (1/40)	101-102
第 96 図	18・19 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	103
第 97 図	20 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	104
第 98 図	21・22 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	106
第 99 図	23・24 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	107
第 100 図	25 ~ 31 号土坑実測図 (1/40)	108
第 101 図	25 ~ 27 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	109
第 102 図	29 ~ 31 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	110
第 103 図	32 ~ 35 号土坑実測図 (1/40)	112
第 104 図	32 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	113
第 105 図	33 ~ 36 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	114
第 106 図	36 ~ 40 号土坑実測図 (1/40)	115
第 107 図	37 ~ 39 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	116
第 108 図	40・41 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	117
第 109 図	41 ~ 45 号土坑実測図 (1/40)	118
第 110 図	42 ~ 45 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	119
第 111 図	1 号甕棺墓実測図 (1/20)	121
第 112 図	1 号甕棺墓出土遺物実測図 (1 は 1/4、2 は 1/3)	122

第113図	1・2号溝実測図(1/60)	123-124
第114図	1号溝出土遺物実測図(1/3、16・17・20は1/2)	125
第115図	2号溝出土遺物実測図(1/3)	126
第116図	1・2号溝下層出土遺物実測図(1/3、6は2/3)	127
第117図	3号溝出土遺物実測図(1/3)	128
第118図	4～6号溝実測図(1/60)	129
第119図	4号溝出土遺物実測図(1/3)	131
第120図	5・6号溝出土遺物実測図(1/3)	132
第121図	7～13号溝実測図(1/60)	133-134
第122図	7号溝出土遺物実測図①(1/3)	135
第123図	7号溝出土遺物実測図②(1/3)	136
第124図	8・9号溝出土遺物実測図(1/3)	137
第125図	11～13号溝出土遺物実測図(1/3)	138
第126図	7・11号溝出土遺物実測図(1/3、5は2/3、6～8は1/2)	139
第127図	14号溝出土遺物実測図(1/3)	139
第128図	1区ピット出土遺物実測図(1/3)	140
第129図	2区ピット出土遺物実測図①(1/3、20は1/2)	141
第130図	2区ピット出土遺物実測図②(1/3)	142
第131図	3区ピット出土遺物実測図①(1/3)	143
第132図	3区ピット出土遺物実測図②(1/3)	144
第133図	4区ピット出土遺物実測図(1/3)	145
第134図	1区包含層(茶褐色砂・灰色砂礫)出土遺物実測図(1/3)	146
第135図	1区包含層(茶褐色土)出土遺物実測図①(1/3)	147
第136図	1区包含層(茶褐色土)出土遺物実測図②(1/3)	148
第137図	1区包含層(茶褐色土)出土遺物実測図③(1/3)	149
第138図	1区包含層(茶褐色土)出土遺物実測図④(1/3、54・55は1/2、56は1/1)	150
第139図	2区包含層出土遺物実測図(1/3)	151
第140図	5・6区出土遺物実測図①(1/3)	152
第141図	5・6区出土遺物実測図②(1/3)	153
第142図	7区出土遺物実測図(1/3)	154

中巻・下巻 本文目次

中巻 山門牛島遺跡

IV 山門牛島遺跡.....	1
1 2次調査	1
1) 調査の概要	1
2) 遺構と遺物	1
3) 小結	26
2 3次調査 1区	27
1) 調査の概要	27
2) 遺構と遺物	27
3) 小結	60
3 3次調査 2区	65
1) 調査の概要	65
2) 遺構と遺物	65
3) 小結	103
4 4次調査	115
1) 調査の概要	115
2) 遺構と遺物	115
3) 小結	122
5 5次調査	123
1) 調査の概要	123
2) 基本土層	123
3) 遺構と遺物	123
4) 小結	141
6 まとめ	142

下巻 本吉遺跡

V 本吉遺跡.....	1
1 I区第1次調査	1
1) 調査の経過	1
2) 遺跡の概要	1
3) 検出された遺構	3
2 I区第2次調査	43
1) 調査の経過	43
2) 遺跡の概要	43
3) 検出された遺構	45
3 II・III区の調査	67
1) 調査の経過	67
2) 遺跡の概要	67
3) 検出された遺構	67
4 IV区(本吉条里跡)の調査	69
1) 調査の経過	69
2) 検出された遺構	69
5 まとめ	75
1) 繩文時代の遺構・遺物について	75
2) 条里関連の遺構について	76

I はじめに

1 調査に至る経緯

県道本吉小川線は福岡県みやま市瀬高町本吉の県道飯江長田線との交差点を起点とし、同小川の国道443号線東町交差点を終点とする延長2,084mの一般県道である。2004（平成16）年に福岡県とNEXCO西日本九州支社は広域高速交通網の確立に向け、九州自動車道みやま柳川インターチェンジの設置を計画した。みやま柳川インターチェンジは、九州自動車道の八女インターチェンジから7.2km、南関インターチェンジから9.4kmの位置にある。みやま市や柳川市へのアクセスは、従来はこれらインターチェンジからアクセスする必要があり、また国道443号線や国道209号線の慢性的な渋滞と相まってスムーズとはいえない状況であった。

みやま柳川インターチェンジの設置およびそのアクセス道としてこの県道本吉小川線のバイパスが計画された。バイパスは国道443号線小川交差点を終点とするもので、延長は2,206mとなる。国道443号線小川交差点から西へは国道443号線三橋瀬高バイパスへと接続する。国道443号線三橋瀬高バイパスは西進すると柳川市へとスムーズにアクセスでき、また有明海沿岸道路徳益インターチェンジへと繋がる。すなわち、県道本吉小川線のバイパスは、九州自動車道と柳川市、更には有明海沿岸道路を経て大川市や佐賀空港・三池港等多方面へのアクセスを容易にするものであり、筑後地域と福岡地域との交通道路網の強化が計られ、地域の活性化が期待される。このような広域高速交通網の確立とともに、水郷柳川等の観光振興の促進にも



第1図 県道本吉小川線と周辺交通網 (1/200,000)

繋がるものといえよう。

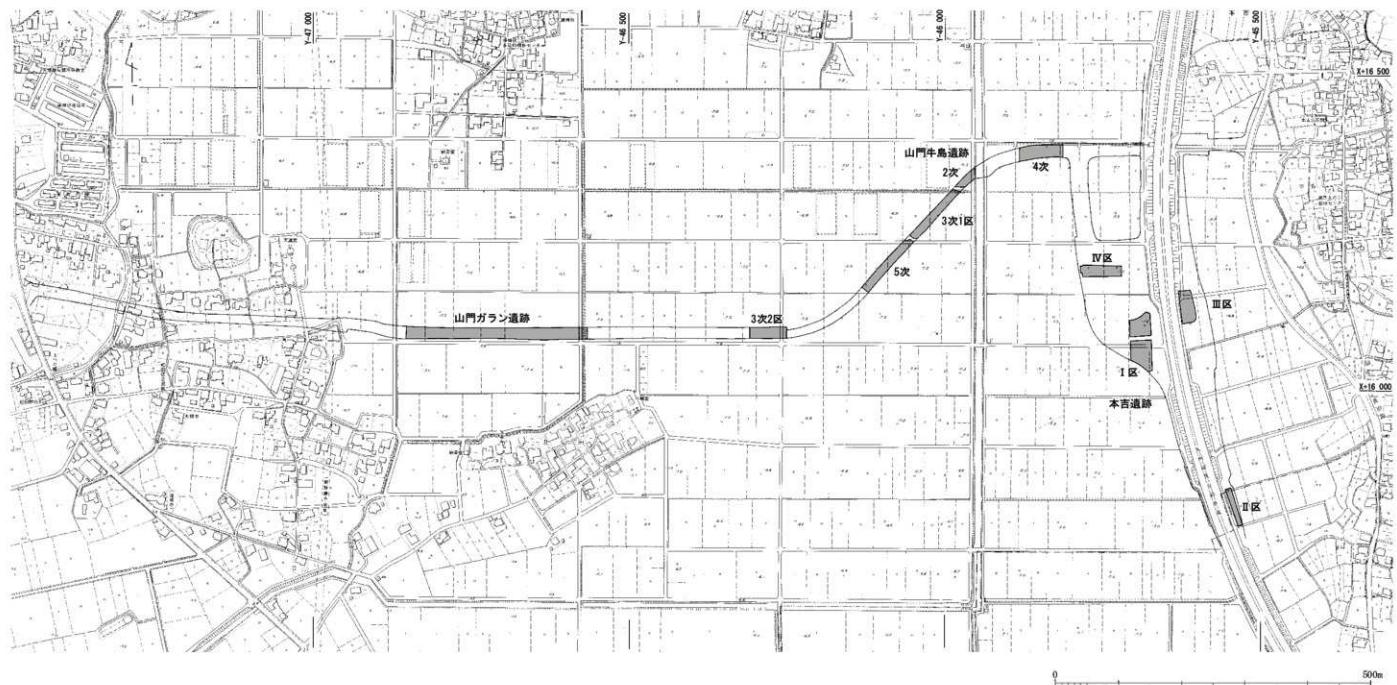
平成 16 年度中に整備計画が決定し、供用開始は平成 20 年度とされた。県の主要政策としても位置付けられ、事業は急ピッチで進められることとなつた。文化財に関する協議は平成 18 年度から始められた。6 月 13 日に瀬高町教育委員会との第 1 回目の協議として、1978 年刊行の福岡県遺跡等分布地図と対照したところ、周知の埋蔵文化財包蔵地であるガラン遺跡等に含まれ、文化財の存在が高いと判断された。特に九州新幹線建設予定地と交差する地点は、平成 17 年度に本調査を実施した松田掛畠遺跡に含まれ、また瀬高町教育委員会が県営圃場整備事業でクリーク部分のみ発掘調査を実施した山門牛島遺跡に含まれることから、全線にわたって試掘・確認調査を実施する必要があるとの方向性を決定した。2 日後に工事を担当する福岡県柳川土木事務所との協議をもち、文化財調査の早期着手と文化財の有無が未確定の部分に関しては一刻も早く試掘調査を実施してほしい旨の返答を得た。その結果、用地買収が済んだ地点から試掘・確認調査を実施し、文化財が確認された場合は速やかに調査に着手する方向で調整した。平成 18 年度の段階では瀬高町教育委員会には専門職員が配置されておらず、嘱託職員が図書館と兼務の形で文化財保護行政を担当する状況であった。本事業に関しては、事業規模の大きさ等から県教育委員会が基本的には主体となることとし、試掘調査等の際には町教育委員会の立会を求める等の対応ですすめた。

試掘調査は、用地買収の済んでいる地点から順次進めることとしたが、アクセス経路や營農、水路の関係から効率よく進めることができない地点もあった。調査地点とその主要な内容は第 3 ~ 5 図、第 1 表に挙げた通りである。

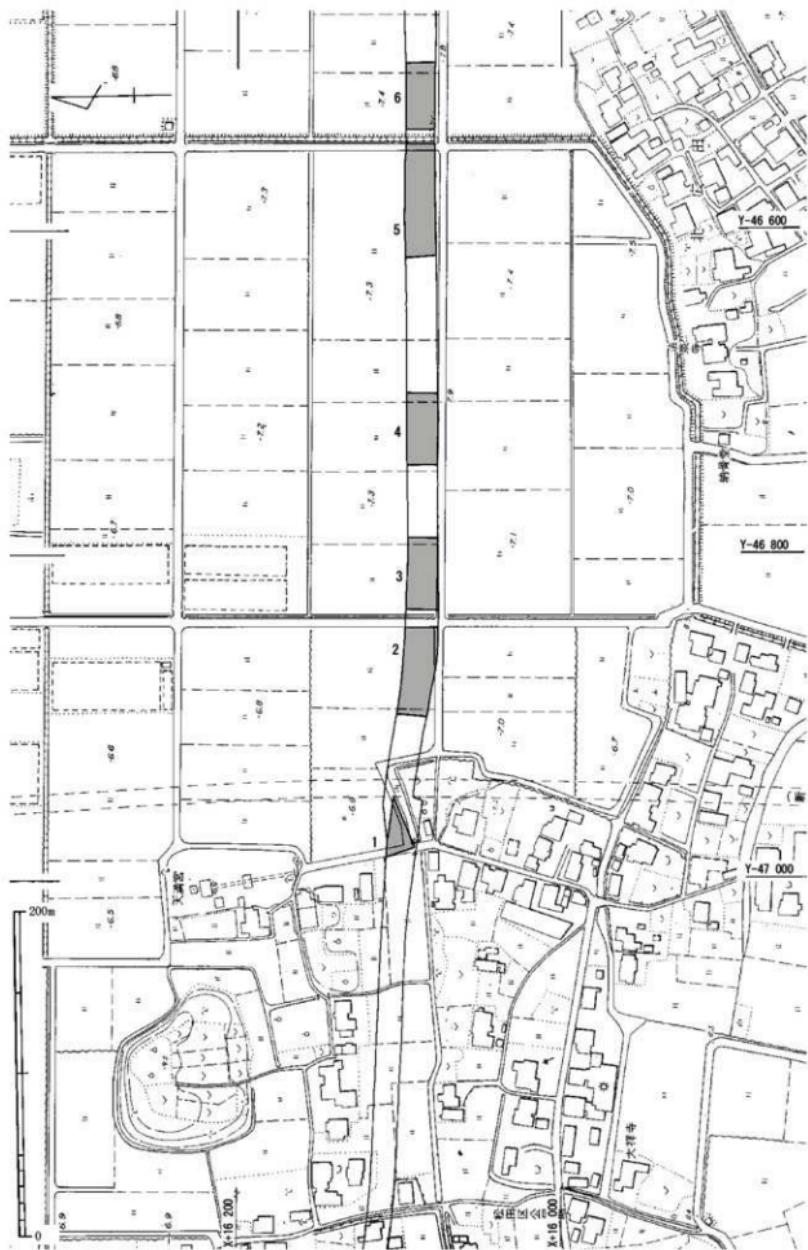
まず試掘調査で着手した地点はインターチェンジ予定地である。当地点は本吉条里遺跡として、条里の痕跡を現代の水田によく反映する地域であったが、昭和 53 年度から計画・実施された県営圃場整備事業により一変してしまっている。なお、九州縦貫自動車道建設に先立つ発掘調査では、今回の事業地に隣接して、本吉条里遺跡として部分的ではあるが発掘調査が行われている。諸般の事情により報告がなされていなかったが、今回の報告にあたって下巻まとめて概要を示している。試掘調査は 6 月 29 日に実施した。調査にあたっては、条里の痕跡が確認されるかどうかという意識をもち、圃場整備事業前の図面を重ね合わせた上でトレンドの位置に配慮してすすめたものの、明瞭な遺構を確認することはできなかった。大半のトレンドで文化財が確認されず半ば終了かと思った時点で、縄文土器を多数含む遺物包含層が検出され驚かされた。周辺にトレンドを設定して調査対象を決定したが、比較的狭い範囲に集中して分布することがわかり、試掘調査の難しさを改めて思った次第である。当地点は先述のとおり本吉条里遺跡として、知られてはいたものの範囲の理解が不明瞭だったことと、「条里」関係以外の文化財が確認されたこと等から、本吉遺跡として改めて周知化することとした。



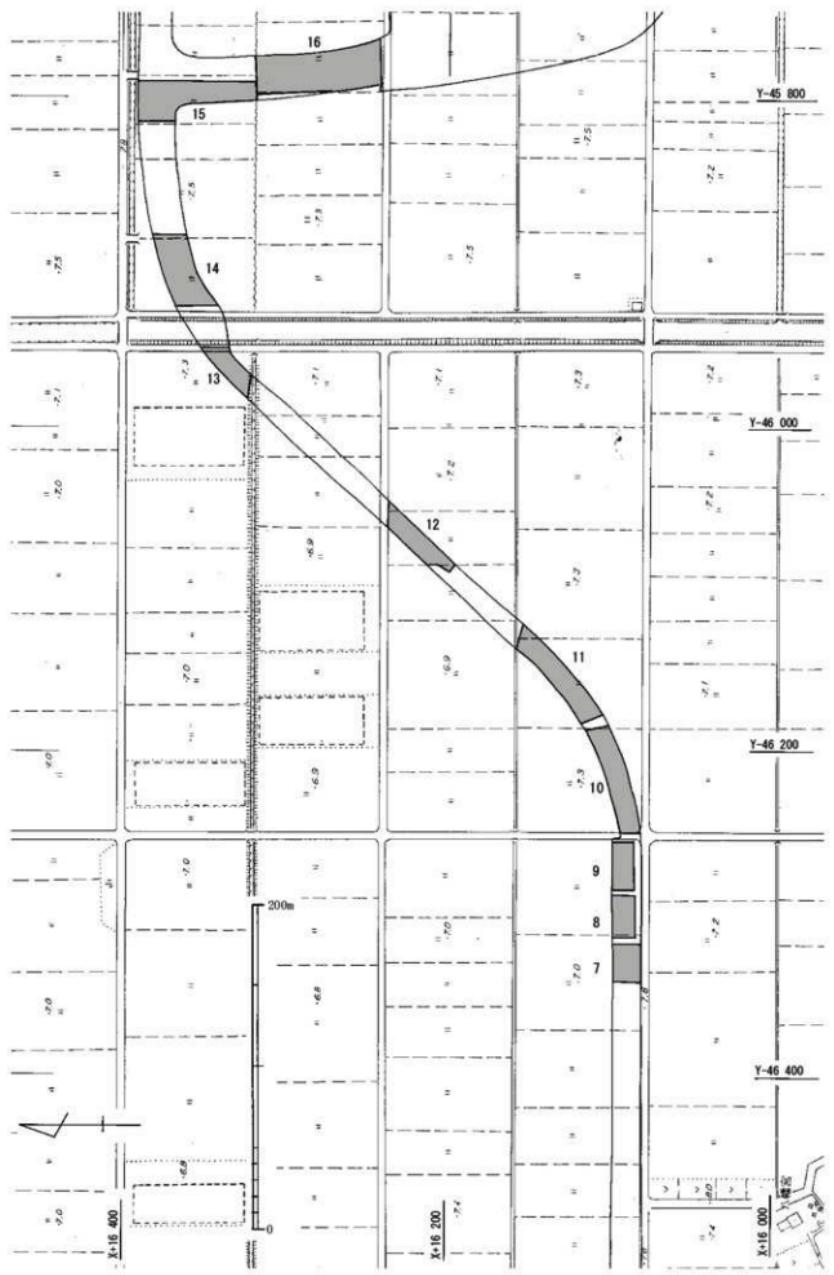
写真 1 試掘調査風景



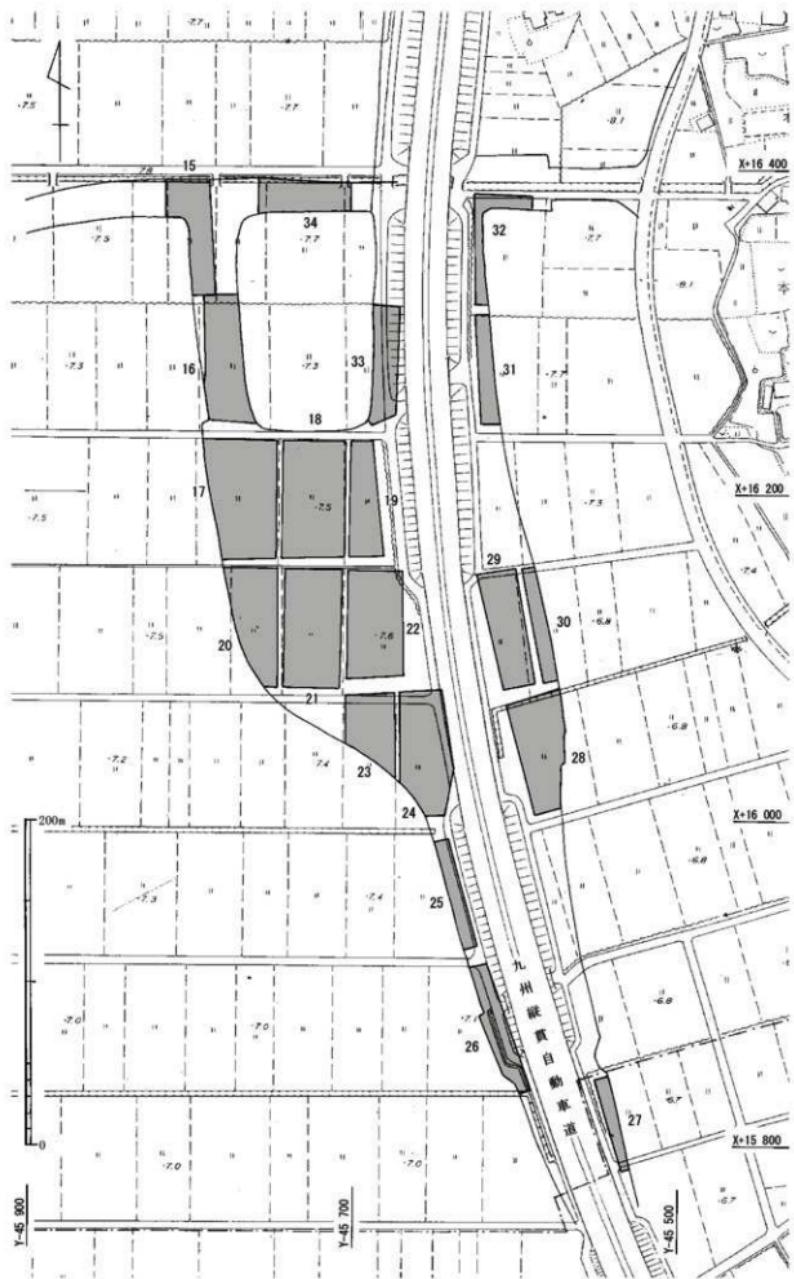
第2図 県道本吉小川線関係文化財調査地 (1/6,000)



第3図 山門ガラン遺跡周辺地形図（1/3,000）



第4図 山門牛島遺跡周辺地形図 (1/3,000)



第5図 本吉遺跡周辺地形図 (1/3,000)

第1表 県道本吉小川線関係試掘調査一覧

番号	地番	試堀日	調査担当	概要	備考
1	2420-1	H19. 8. 21	小 池	-1000まで整地、-2000で地山	
2	2418-1・2・3	H19. 8. 21	小 池	-500で遺構面	市 教 委 対 応
3	2213	H18. 12	小 池	表土下で包含層	山門ガラン遺跡
4	2211	H18. 12	小 池	表土下で包含層	山門ガラン遺跡
5	2208	H18. 12	小 池	表土下で包含層	山門ガラン遺跡
6	2182	H19. 11. 21	岸 本	文化財なし	
7	2186	H19. 8. 21	小 池	-300で地山 文化財なし	
8	2187-2	H19. 11. 21	岸 本	西側浅い(-300で地山)、東側-400で地山	山門牛島遺跡3次2区
9	2188	H19. 11. 21	岸 本	-400で遺構面	山門牛島遺跡3次2区
10	2091-1	H20. 6. 13	坂 元	-500で地山 西端で流路 弥生わずかに含む	
11	2092-1	H20. 6. 13	坂 元	-550で地山 文化財なし	
12	2086-1	H20. 6. 13	坂 元	-100で遺構面	山門牛島遺跡4次
13	2157	H18. 10. 23	岸 本	-250～300で遺構面	山門牛島遺跡2次
14	2116	H20. 4. 25 H20. 6. 13	坂 元	-300で地山 文化財なし	
15	2013	H19. 5. 10	吉 村	-350で地山 文化財なし	
16	2062	H18. 10. 20	岸 本	-200～300で地山 文化財なし	
17	2070-2	H19. 12. 21	小 田	-450～750で遺構面	本吉 遺跡 IV 区
18	2071	H18. 10. 20	岸 本	-250～450で地山、文化財なし	
19	2072	H18. 10. 20	岸 本	-350～650で地山。 最南のトレンチのみ-800で地山、縄文土器小片含む	
20	2075-1・2	H20. 4. 25	岸 本	-400で地山 小溝・ピット検出し掘削するが遺物なし	
21	2074	H18. 6. 29	岸 本	-150で遺物包含層	本吉 遺跡 I 区
22	2073	H18. 6. 29	岸 本	-500で地山	
23	2124	H20. 6. 17	坂 元	-300～800で地山 落ち込み部 遺物は含まれるが遺構なし	
24	2125	H18. 10. 19	岸 本	-750～800で地山 西に向かって浅くなる(-400)。文化財なし	
25	2133	H18. 12	小池・岸本	文化財なし	
26	2182-1・2		岸 本	-1500で流木等有機物層 谷部か	
27	2137	H18. 12	小池・岸本		本吉 遺跡 II 区
28	2055-2	H18. 12	小池・岸本		本吉 遺跡 III 区
29	2056	H18. 12	小池・岸本	文化財なし	
30	2055-2		小池・岸本	文化財なし	
31	2039-1	H18. 12	小池・岸本	文化財なし	
32	2035 2037-6	H18. 12	小池・岸本	文化財なし	
33	2060	H18. 12	小池・岸本	文化財なし	
34	2011-1		坂 元	文化財なし	

なお、平成18年度に実施した本吉遺跡（I区1次調査）の道路を挟んで南側は用地買収が済んでいなかったため、平成20年に用地買収が済んだ時点で発掘調査を行うこととした（I区2次調査）。

柳川土木事務所との協議の中で、路線中にクリークを跨ぐ箇所があり、橋梁等の構造物を構築する関係で早期に文化財の対応をとの申し入れがあった。該当地点は、ちょうどそのクリーク施工に先立って瀬高町教育委員会が山門牛島遺跡として本調査をおこなっている地点であり、ほぼ確実に文化

財が存在するとの回答を行った。用地買収は中途半端で、調査が効率的ではないとの協議をおこなったが、隣接地を借地して排土置き場とする等の調整を経て平成18年12月から本吉遺跡の本調査と並行して行うこととした（山門牛島遺跡2次調査）。なお、町教育委員会が実施した昭和63年度の発掘調査を山門牛島遺跡1次調査と呼称することとした。なお、山門牛島遺跡2次調査地点の対岸は用地買収の関係で平成20年1月からはいることとなった（山門牛島遺跡4次調査）。

九州縦貫自動車道隣接地で文化財が確認された地点の発掘調査は吉村を調査担当として平成19年2月26日から入った（本吉遺跡II・III区）。調査面積も少なく遺構密度も低かったことから3月16日には全ての作業を終了した。

県道部分については山門ガラン遺跡周辺が用地買収と重機搬入の関係から取り組むことができた。用地買収が済んでいない地点もあったが、隣接地の状況等から判断して調査対象を絞り込むこととした。調査の結果、文化財が確認されたことで早期に着手することを求められたが、調査員の関係で山門牛島遺跡2次調査が終了するのを待つかなかつた。調査では多数の遺構・遺物が確認されたが、試掘調査時の時間的な関係で遺構密度や遺構面の状況まで確認していかなかつたため、途中で調査予算を増額する事態を招いてしまった。

山門ガラン遺跡の発掘調査が終了した時点で、今後の道路事業の展開と文化財調査の関係を調整する協議の場をもつこととした。インターチェンジ供用時期については変更の余地がないとのことで、文化財調査に対する緊急性は以前よりも増して求められることとなっていた。本路線に対する予備調査の開始時期は、先述のように瀬高町教育委員会に専門職員が配置されていなかつたために県教育委員会が主体となつた経緯があるが、その後平成19年1月29日に三池郡高田町・山門郡山川町・瀬高町の三町が合併してみやま市が誕生し、高田町・山川町に所属していた文化財専門職員がそのままみやま市教育委員会で文化財保護業務を担当することとなつた。福岡県教育委員会の基本姿勢としてわが町の文化財はわが町で守るという理念のもと、事業の円滑な実施に向けて調査体制の協力が得られるよう協議を重ねた。また柳川土木事務所からも事業の円滑な遂行のため協力が求められた。その結果、県教育委員会が引き続き調査を実施するのと並行して、調査区の役割分担を決めて市教育委員会が事業主体となって発掘調査



写真2 発掘調査風景

を進める方向で整った。役割分担に関しては、山門牛島遺跡・本吉遺跡の隣接地についてはこれらの発掘調査を既に県教育委員会が着手しているため、引き続き担当することとし、用地買収の関係からも未着手である九州新幹線付近より西の国道443号線小川交差点までの区間を市教育委員会が担当することとした。また柳川土木事務所との協議の中でも予算区分が当該区間が別個となっていることから、事務処理に都合が良い点もあり、先の区間については市と委託契約を結ぶことで調整をすすめた。

山門ガラン遺跡周辺より東側の地点の試掘調査は平成19年11月に調査を実施した。その結果、遺構は明瞭に検出されなかつたものの多量の弥生土器等が出土し、発掘調査が必要と判断された。本調査地点より東側に関しては、道路が水田を斜めに横切るもので、営農や水路の関係上、試掘・本発掘調査の対応がすぐには取れない状況であった。しかし、先に文化財を確認した地点から考えて、山門牛島遺跡2次調査までの区間は、文化財がある可能性が高いことを柳川土木事務所に伝えた。その後、用地買収・営農に関する協議が整った地点から順次調査をすすめることとなった（山門牛島遺跡3・5次調査）。

平成20年度は用地等の関係で着手が遅れていた本吉遺跡I区第2次調査・山門牛島遺跡第5次調査を慌しいスケジュールで11月に終了させ、一般県道本吉小川線バイパスは平成21年3月26日に開通、みやま柳川インターチェンジはつづく3月29日に供用された。



写真3 出土品整理作業風景



写真4 県道本吉小川線全景（清水山より）

出土品の整理作業は平成20年度から本格的に実施することとなった。発掘調査に最初に取り掛かった本吉遺跡については、上記のように平成20年度にも発掘調査を行うものとしていたため、その年度の整理作業は山門ガラン遺跡を中心に実施した。当初の計画では、報告書の印刷製本までを予定していたが、遺物量の多さと同時並行に進めていた他遺跡の整理作業もまた遺物量が多く時間を要したため、平成21年度に送ることとし、平成21年度にこれまでの成果をまとめて刊行することとした。

2 調査の体制

発掘調査および報告書作成に係る福岡県教育委員会の体制は下記のとおりである。

福岡県教育委員会

	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度
総括				
教育長	森山 良一	森山 良一	森山 良一	森山 良一
教育次長	清水 圭輔	橘崎洋二郎	橘崎洋二郎	亀岡 靖
総務部長	大島 和寛	大島 和寛	荒巻 俊彦	荒巻 俊彦
文化財保護課長	磯村 幸男	磯村 幸男	磯村 幸男	平川 昌弘
副課長	佐々木隆彦	佐々木隆彦	池邊 元明	池邊 元明
参事	新原 正典	新原 正典	新原 正典	伊崎 俊秋
			伊崎 俊秋	
参事	池邊 元明	池邊 元明	小池 史哲	小池 史哲
(兼課長技術補佐)	小池 史哲	小池 史哲		
課長補佐	中薗 宏	安川 正郷	前原 俊史	前原 俊史
参事補佐		伊崎 俊秋		日高 公徳
庶務				
管理係長	井手 優二	井手 優二	富永 育夫	富永 育夫
管理係	渕上 大輔		小宮 辰之	野田 雅
調査・報告書作成				
調査第一係長	小田 和利	小田 和利	小田 和利	吉村 靖徳
調査第一係	吉村 靖徳	吉村 靖徳	岸本 圭	岸本 圭
	岸本 圭	岸本 圭	坂元 雄紀	
	今井 涼子	今井 涼子		
調査第二係		小川 泰樹		小川 泰樹
		秦 憲二		秦 憲二
		一瀬 智		城門 義廣
		城門 義廣		
アジア文化交流センター				
			坂元 雄紀	

なお、発掘調査および調査報告書作成作業にあたり、みやま市・同教育委員会をはじめてとして御協力いただいた関係各位に厚く感謝申し上げます。

III 位置と環境

本報告にある山門ガラン遺跡・山門牛島遺跡・本吉遺跡は、福岡県みやま市瀬高町山門および本吉に所在する遺跡である。みやま市は福岡県の南東部に位置する、2007年1月29日に三池郡高田町と山門郡瀬高町・山川町が合併して誕生した市であり、遺跡は旧瀬高町に位置する。市名の「みやま」とは、三池郡の「三」と山門郡の「山」をとったもので、親しみやすさ等の意見から平仮名標記にされたという。

遺跡は標高7m程度の広い田園地帯に位置する。この平野は矢部川が形成した沖積地であり、筑紫平野の一角にあたる。矢部川はみやま市瀬高町内では北東地区から南西地区に向かって蛇行を繰り返しながら流れるもので、遺跡に対しては約4km離れた位置となる。

遺跡の東は標高200～400mを測る丘陵が南北に走る。遺跡の東にある清水山は標高350mと、遺跡の標高に対して比較的急な傾斜をなす。この丘陵は福岡県と熊本県境を形成する筑肥山地から北西方向に派生してくるものである。

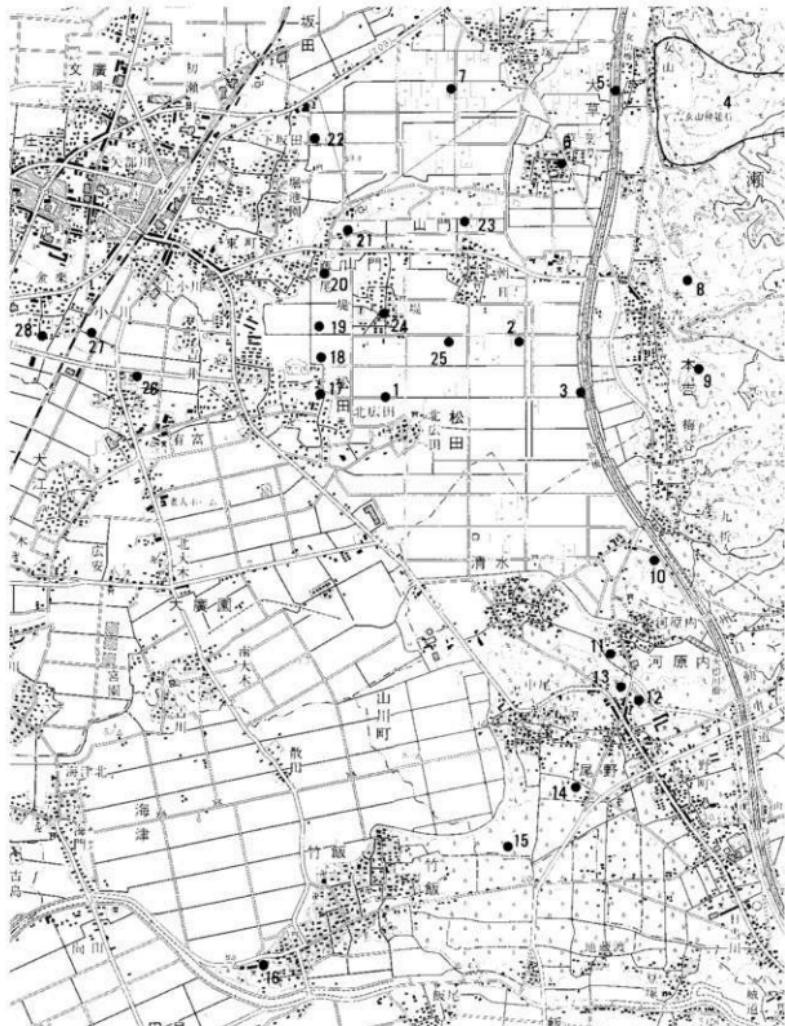
極めて平坦にみえる遺跡周辺の地形であるが、これは不整形な耕地と狭小な道路、取水経路の改善等を目的として昭和50年代から実施された農業基盤整備事業によるものである。圃場整備前の旧地形をみると、遺跡周辺は北東から南西方向へ平行して流れる河川とその作用による起伏があることが読み取れる。水田の畦畔の形状は地形に従うものといえるが、それに加えて条里制を反映した痕跡を良好に残す地域として知られていた。条里制の痕跡は本吉遺跡周辺では明瞭に留めているが、山門ガラン遺跡周辺では認め難い。これは既に昭和初期に圃場整備事業が行われているため、条里制の痕跡は早い段階に失われていると考えられる。

そうした農業基盤整備事業に係り、本遺跡周辺においても多くの発掘調査が実施されている。それらの調査により、多くの成果が得られているが、それらについては各報告書および九州新幹線建設に係る発掘調査報告に詳細にまとめられているため、参考にされたい。

遺跡の分布状況をみると、今回報告する遺跡群より北側に数多くの遺跡が存在し、南側は希薄なことがわかる。この状況は、九州新幹線建設に先立つ試掘調査でも示されている。すなわち、山門ガラン遺跡に近い松田掛畠遺跡より南では、試掘調査の結果によると青灰色の粘質土の堆積を主とするもので、文化財は確認されておらず、南で再び文化財が確認されるのはみやま市高田町の海津横馬場遺跡である。この間の約3km、現在の大根川流域は低地が広範に存在したものとみられ、有明海が湾入していた可能性も考えられ、上記海津横馬場遺跡の所在する字名、「海津」もそのことを示すものといえる。



第6図 みやま市の位置



第7図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

- | | | | | |
|--------------|-------------------|-------------|-------------|------------|
| 1. 山門ガラン遺跡 | 2. 山門牛島遺跡 | 3. 本吉遺跡 | 4. 女山神龍石 | 5. 大道端遺跡 |
| 6. 草葉遺跡 | 7. 権現塚北遺跡・権現塚古墳 | | 8. 三船山遺跡 | 9. 成合寺谷1号墳 |
| 10. 九折大塚古墳 | 11. 山ノ上古墳 | 12. クワソヌ塚古墳 | 13. 赤坂古墳群 | 14. 長者原遺跡 |
| 15. 竹飯犬ノ馬場遺跡 | 16. 海津横馬場遺跡・竹海校遺跡 | | 17. 松田掛煙遺跡 | 18. 山門前田遺跡 |
| 19. 山門北池遺跡 | 20. 藤の尾垣添遺跡 | 21. 車塚古墳 | 22. 小川柳ノ内遺跡 | 23. 御仁田遺跡 |
| 24. 堤古墳群 | 25. フミアガリ遺跡 | 26. 上批杷遺跡 | 27. 鉢田遺跡 | 28. 金栗遺跡 |

この海津横馬場遺跡が存在する低台地も弥生時代から古墳時代を中心とする遺跡集中地帯である。特に同台地の本吉遺跡に近いみやま市山川町にはクワンス塚古墳・九折大塚古墳等の首長墓クラスの古墳が築かれており、政治的にも重要な位置にあったことを伝える。

このように、この地にはかつての海であった地域を除き高密度で文化財が分布している状況がわかる。山海の恵みは縄文時代・弥生時代の暮らしを支え、また交通の要衝という点もまた遺跡が集中する背景となったといえよう。現在のみやま市は南北にJR鹿児島本線が走り、近年中には九州新幹線も開業する。また九州自動車道と国道 209 号線が南北に、国道 443 号線が東西に貫く。古代もまた矢部川の水運の他にも古代官道の西海道がのびていたことが知られており、その推定地は山門牛島遺跡を通るものと想定されている。本吉遺跡の北 3 km には女山神籠石が存在することも、交通の要衝として古代から重視されていたことを物語るものといえよう。

【参考文献】

周辺遺跡の状況については下記報告に簡潔にまとめられているので参照されたい。

大庭孝夫・坂元雄紀編 2006 『山門前田遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第 3 集

大庭孝夫編 2007 『山門北池遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第 6 集

III 山門ガラン遺跡

1 調査の経過

調査対象地はほぼ東西に走る道路敷地であるが、用地買収・耕作等の関係で対象地の東から発掘調査を進めることとした。路線は現道である農道を北側に拡幅するものであるが、現道下は調査の困難さと施工の際に大きく扱わないとから調査対象から外している。また発掘調査で全面掘削を行うと、現道からの耕作機器の搬入ができなくなり、かつ現道北側に沿って設置されている農業用のパイプラインからの取水ができなくなるため、耕作機器のための通路と取水口にあわせた水路を確保する必要があった。そのため、調査区を複数区画することとなったが、東から1区・2区…と呼称することとした。

2 遺跡の概要

1区についてはほぼ東半分は谷地形となっており、遺物包含層が形成されている（第113図）。1区より東の試掘調査成果から考えても、本遺跡の東端を示すものといえよう。ちょうど包含層の基点にあたる位置に2号溝が北東—南西方向に走り、それの西側に平行して1号溝が存在するが、この溝は調査区内において方向を西に転じている。この1号溝は西に向かって調査区を貫いている。1区で検出された遺構は円形の土坑に限られ、中世の井戸以外は堅穴住居跡等の性格が判断できる遺構は検出されなかった。

2区では、小ピットが多数検出される面を確認し遺構面とした。小ピット以外にも径約1.5mの円形土坑が確認され、井戸であることが掘削の結果判断された。調査区南西部では溝状遺構もしくは長楕円形土坑が複数検出された。これらの遺構は出土遺物から概ね中世に位置づけられるが、調査区東方ではその密度が薄くなり、その下層にあると見られる弥生時代の住居跡が確認された。また甕棺が検出されたのもこの面である。これらとは別の弥生時代の遺構については、調査区西寄りの位置でも多数の土器が出土する地点が確認されたが、精査しても遺構の輪郭は掴めなかった。また、1区で確認された1号溝は2区に続くものと見られたが、調査区東端で一部検出されたに留まった。これらのことから、2区においては調査区西側を中心に中世の遺構面が存在するが、西へ行くにつれてその密度は減少し、下層弥生時代の遺構が検出されているものと判断された。

2区は、下層の弥生時代遺構面の存在が想定されたため、3区の調査と平行して2区下層の検出を目指した。その結果、高密度の弥生時代住居群が検出された。住居群は調査区東半分の一群と、調査区南西部の一群とに大きく二分される。また弥生時代住居を切る形で1号溝がやや弧を描きながら調査区を東西に流れる。

3区は2区西半分と同様、上層に中世の遺構面があり、下層には弥生時代の遺構面が確認された。中世の遺構は3区東半分に井戸群があり、3区西半分に溝状遺構が複数並行して走り、長くはないもののその溝状遺構に直行する溝状遺構が検出された。井戸群と溝状遺構との間には2区と同様のピット群が存在するが、溝状遺構より西側ではピット群は顕著な分布を示さない。3区下層の弥生時代の遺構は調査区東半で多数の堅穴住居が検出され、切り合いが著しい。1号溝は3区下層において直線的に西北西方向へ走り、3区北辺の中央付近で調査区外へ出る。

4区は中世と弥生時代の遺構面が同一面で検出された。中世の遺構は大半が井戸であり、2・

3区でみられた小ピットが皆無であることから、中世の遺構面は大きく削平を受けており深度のある井戸のみが検出されたと考えができる。弥生時代の遺構も残存は良いものとはいえない。

5区は多数のピットが検出されたものの不整形なものが大半を占める。住居跡等性格のわかるものはなく、遺物も碎片となったものが含まれる程度で、良好な出土状況を示さない。地山は2~4区にみられた安定した黄褐色土ではなく疊層であり、1区にみられた包含層に近い状況を示す。

6区では土器等の遺物は出土するものの、検出された遺構は比較的新しいと判断されるクリークのみであり、遺物はその周辺に包含層として形成されているのみであった。

調査対象の西端である7区とした地点も新しいクリークが検出されたのみであり、簡潔に測量を済ませ調査を終了させた。

6区と7区の間には用地買収が未了であった区間があるが、耕作土を工事着工前に搬出する際に確認したところ、耕作土下は地山が検出され、遺構らしいものは確認できず土器等の出土もまばらであった。6区および7区の調査成果から判断して文化財の存在は希薄であると考えられ、調査対象から外すこととした。

3 検出された遺構

竪穴住居

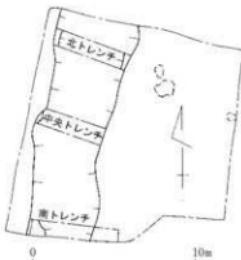
竪穴住居については39棟検出された。しかし切り合いの著しさや調査区端での検出例等から住居跡の数は本来より多いと思われる。逆に竪穴住居と判断して調査したもの、確証が得られず不安を残すものも含まれる。遺構の性格が即断できずに調査を進めたこともあり、遺構番号は全てS-Oとして記録の作成を実施している。今回の報告にあたっては第2表の対照番号表にある通りに呼称することとする。なお、若干の前後はあるが、西から順番に番号を振りなおすこととしている。

1号竪穴住居（第10図）

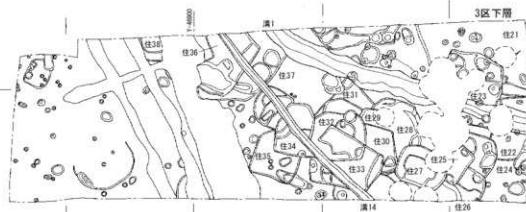
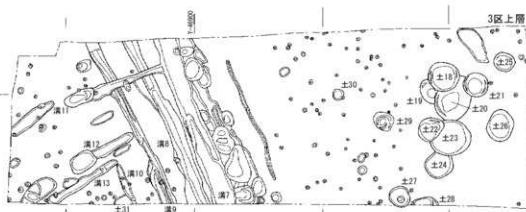
2区上層の調査区北東角で検出したもの。整った形状でコーナーを含む直線を検出したことから竪穴住居として報告するが、ごく一部を検出したに留まるにすぎない。西隣で検出した2号竪穴住居に切られる関係にあるが、下記に示す出土遺物からは検証できない。壁の方位はほぼ南北を向く。検出面から床面までの深さは約10cm。

出土遺物（第11図）

遺構の検出がわずかであったこともあり、出土遺物も少ない。1は鋤先口縁の甕口縁部小片。上面は内傾し、外面の突出が低い割りに、内面には強く張り出す。2はく字形に屈曲する甕の口縁部小片。口縁端部上面にキザミを連続させる。3は脚台付きの甕であろうか。ハ字形に開く脚部となるが、残存は良くない。

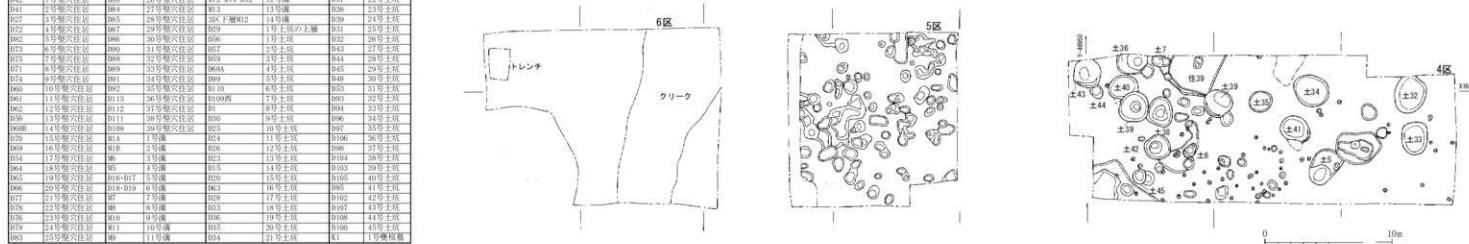


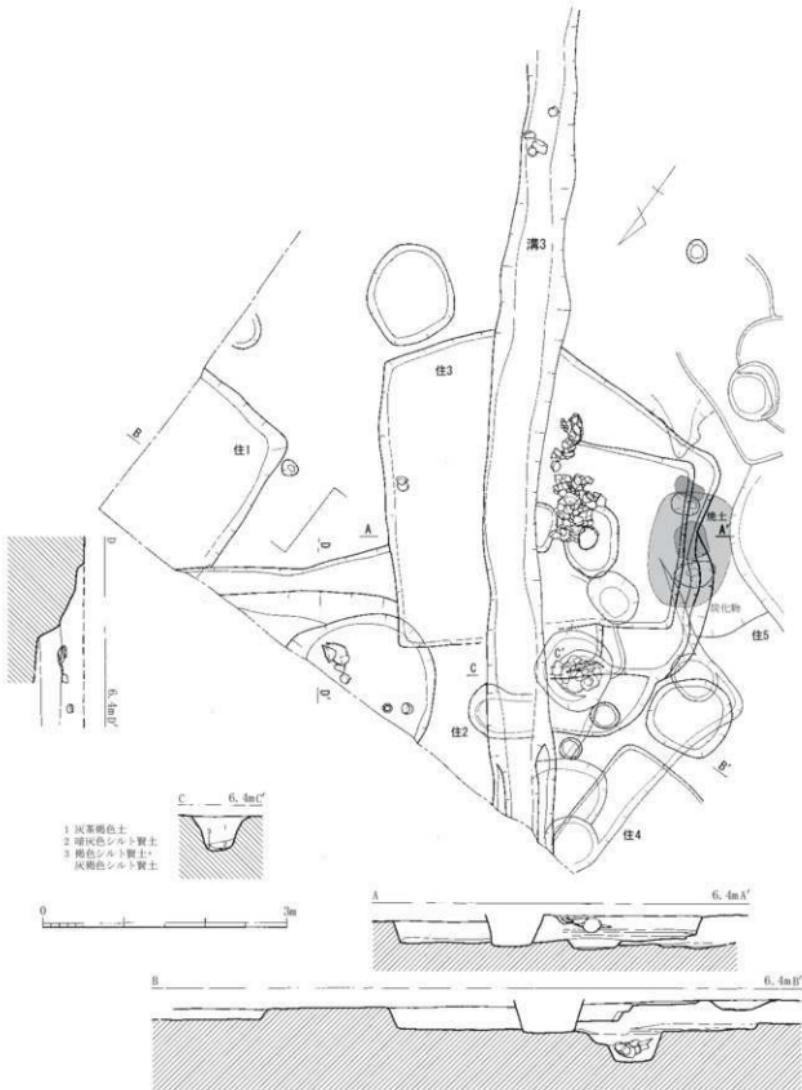
第8図 山門ガラン遺跡7区遺構配置図
(1/300)



測量名	測量時	測量名	測量時	測量名	測量時	測量名	測量時	測量名	測量時
B32 1号竪穴住居	089	26号竪穴住居	093	27号竪穴住居	097	1号竪穴住居	097	22号竪穴	097
B33 2号竪穴住居	084	28号竪穴住居	094	29号竪穴住居	094	2号竪穴住居	098	23号竪穴	098
B34 3号竪穴住居	087	28号竪穴住居	097	29号竪穴住居	097	3号竪穴住居	099	24号竪穴	099
B35 4号竪穴住居	087	29号竪穴住居	099	1号土坑の上層	091	25号竪穴	091	25号竪穴	091
B36 5号竪穴住居	086	30号竪穴住居	095	1号土坑	092	26号竪穴	092	26号竪穴	092
B37 6号竪穴住居	087	31号竪穴住居	096	2号土坑	093	27号竪穴	093	27号竪穴	093
B38 7号竪穴住居	089	32号竪穴住居	099	3号土坑	094	28号竪穴	094	28号竪穴	094
B39 8号竪穴住居	089	33号竪穴住居	098	4号土坑	095	29号竪穴	095	29号竪穴	095
B40 9号竪穴住居	092	34号竪穴住居	099	5号土坑	096	30号竪穴	096	31号竪穴	096
B41 10号竪穴住居	092	35号竪穴住居	099	6号土坑	097	31号竪穴	097	32号竪穴	097
B42 11号竪穴住居	093	36号竪穴住居	099	7号土坑	099	32号竪穴	099	33号竪穴	099
B43 12号竪穴住居	092	37号竪穴住居	096	8号土坑	094	33号竪穴	094	34号竪穴	094
B44 13号竪穴住居	093	38号竪穴住居	099	9号土坑	095	35号竪穴	095	36号竪穴	095
B45 14号竪穴住居	099	39号竪穴住居	025	10号土坑	097	37号竪穴	097	38号竪穴	097
B46 15号竪穴住居	094	1号横坑	024	11号土坑	096	36号竪穴	096	37号竪穴	096
B47 16号竪穴住居	095	2号横坑	025	12号土坑	097	38号竪穴	097	39号竪穴	097
B48 17号竪穴住居	096	3号横坑	023	13号土坑	094	38号竪穴	094	39号竪穴	094
B49 18号竪穴住居	095	4号横坑	015	14号土坑	093	39号竪穴	093	40号竪穴	093
B50 19号竪穴住居	096-097	5号横坑	020	15号土坑	095	40号竪穴	095	41号竪穴	095
B51 20号竪穴住居	097	6号横坑	021	16号土坑	097	42号竪穴	097	43号竪穴	097
B52 21号竪穴住居	097	7号横坑	028	17号土坑	092	44号竪穴	092	45号竪穴	092
B53 22号竪穴住居	098	8号横坑	033	18号土坑	097	46号竪穴	097	47号竪穴	097
B54 23号竪穴住居	098	9号横坑	026	19号土坑	094	48号竪穴	094	49号竪穴	094
B55 24号竪穴住居	091	10号横坑	035	20号土坑	090	49号竪穴	090	50号竪穴	090
B56 25号竪穴住居	097	11号横坑	034	21号土坑	01	1号櫛植遺	01	0	0

第2表 潜構名対照表





第10図 1～5号竪穴住居・3号溝実測図 (1/60)

2号竪穴住居（第10図）

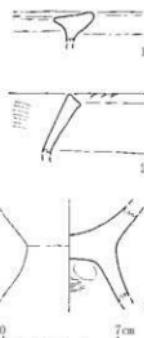
2区上層で検出したもので、西側は3号竪穴住居および3号溝に切られる。直線の辺をもつことから竪穴住居として報告するが、大半が調査区外へ続くことや、床面が中央に向かって傾斜をなすことから住居跡でない可能性を残す。住居西辺は埋土の違いが判然とせず、3号溝にちょうど切られる位置かもしれない。住居の方位は、北に対して約40度東に振る。床面にて調査区に沿って円形土坑が半分検出されたが、甕や鉢等まとまった遺物の出土がみられた。その土坑底面は住居検出面から約60cmを測り深いが、土器は土坑検出面（住居検出面から32cm）で集中して出土した。

出土遺物（第12・13図）

1はラッパ状に大きく開く口縁部をもつ壺。口縁部側面は強いナデにより広くつくられる。2～13は甕。1～9は口縁部で、9は内傾する口縁部外面に貼り付けによる肥厚帯を有する特殊な形態。小片であるが、敢えて口径を復元すると8.7cmとなる。9の他はく字形に屈曲する口縁部をもつ。屈曲度は7は強いものの大半は弱く、5は屈曲部にほとんど稜をもたない。胴部は長胴の砲弾形を呈するものが多いとみられ、7は球形に近いタイプである。タタキ成形後に綻ないし斜め方向のハケメで調整する。5・11は外面のタタキ痕を残したままである。内面にもハケメを施すものが多い。底部は11・12が丸底、13が凸レンズ状。10は脚が付くもので、おそらく長胴の体部が続くものであろう。14～19は屈曲する口縁部を有する鉢。くびれの度合いによっては、壺あるいは胴部の浅い甕に分類できるような資料も含む。口縁部形態は、14・17～19はく字形に外反し、15はごく短く立ち上がるもの、17は直立するものである。18の外面にタタキ調整がみられる他はハケメ調整。16・17は器形は畿内系の丸底壺に近いが、ハケメ調整や胎土は在地的。20・21は口縁に向かって大きく開く鉢で、底部は丸底。22は高杯脚部。細く直立する上半から大きく脚端に向かって開き、その境付近に小円孔を3箇所穿つ。23は頁岩製の砥石。中央部は使用により4mm程度に薄くなる。

3号竪穴住居（第10図）

2区上層で検出したもので3号溝に切られ、北東側で2号竪穴住居を切る。3号溝よりも東側では、住居かと判断される直線およびコーナーが検出されたが、3号溝よりも西側は包含層が載ることもあり、土器が多数出土するにもかかわらず非常に埋土の判別が困難であった。また2号竪穴住居との切り合い関係も判別し難く、当初の検出では逆に判断していたものの、遺構を下げる中で逆ではないかと変更した。東辺の状況から一辺3.5mの方形プランを為すものと判断されたが、上層の精査では西辺、特に南西コーナー周辺は最終的にも確定することができなかった。その後、下層まで下げた時点での検出でも、4号竪穴住居が検出され、住居の形状が確認できず炉跡のみ検出された5号竪穴住居等多数の切り合いがあったことが判明し、上層ではそれらの住居跡の輪郭が認識できなかつたと思われる。住居の方位を北東壁を基準に考

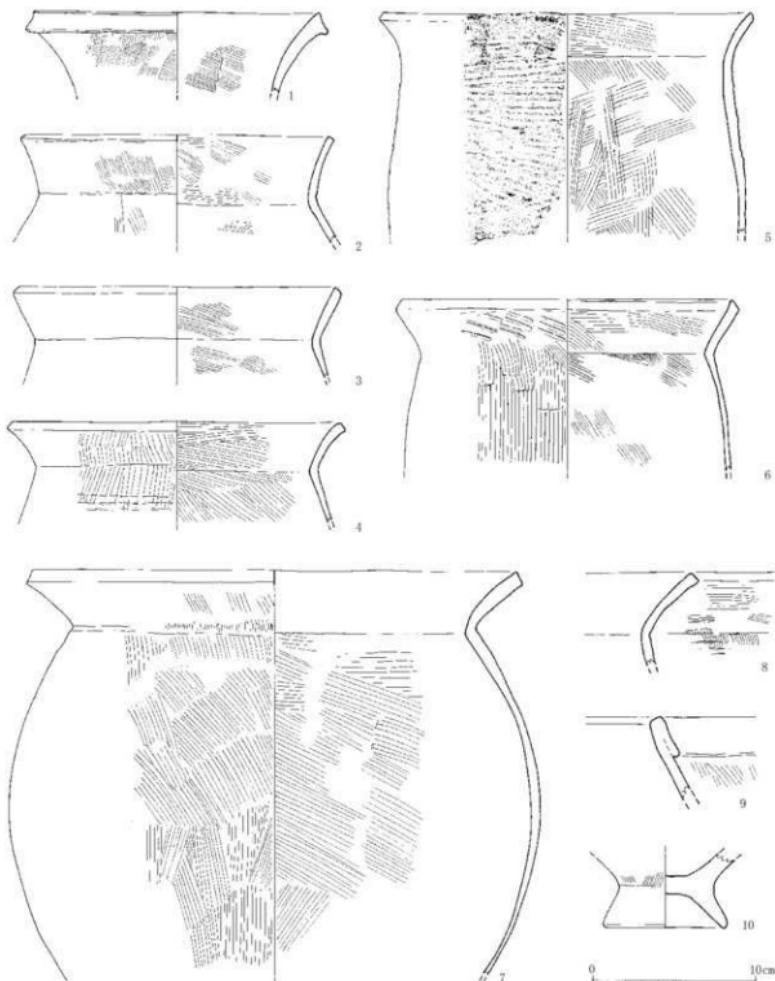


第11図 1号竪穴住居出土遺物
実測図（1/3）

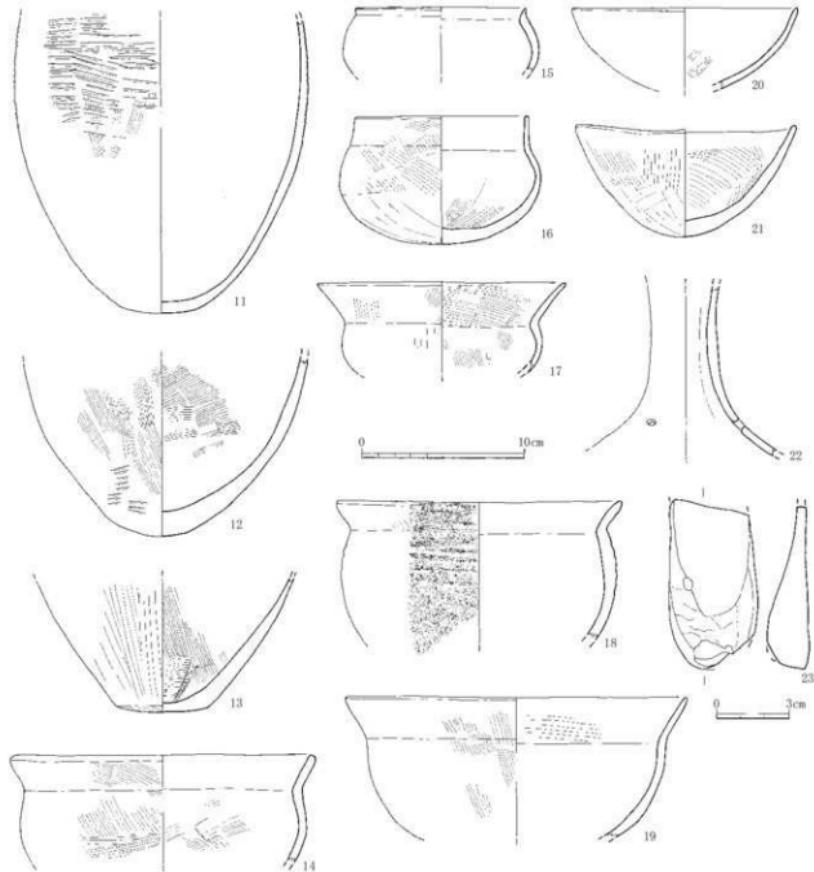
えると北から 35 度西に振るものと算出される。床面は検出面から約 25 cm 下げた時点で検出された。土器集中部に対応する位置の床面にて 90 cm × 60 cm の円形ピットが検出された。炭化物が多く含まれることから炉の存在が想定される。

出土遺物（第 14 ~ 20 図）

集中して出土した資料の多くは甕ないし壺である。器壁が薄く、かつ類似する資料が多くあ



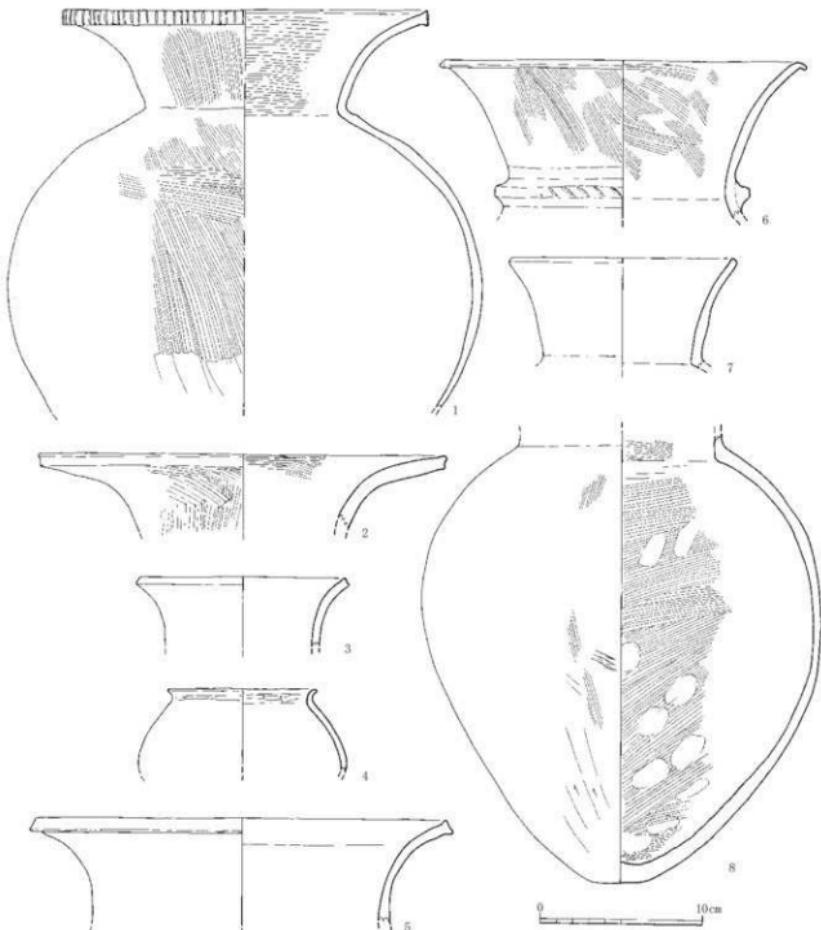
第 12 図 2 号竪穴住居出土遺物実測図① (1/3)



第13図 2号竪穴住居出土遺物実測図② (1/3、23は1/2)

るために接合が困難で、図化できたものは口縁部が中心であるが、胴部の残存は本来はより良好であったと思われる。

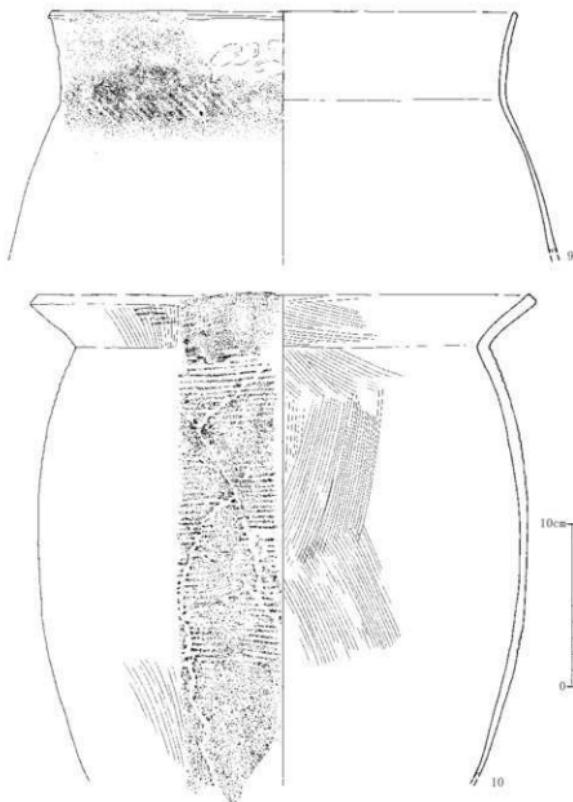
1～8は壺。ラッパ状に大きく開く口縁部が多くを占め、3のように強く短く外反させる口縁部のものもある。口縁部は四角く收めるものが多いが、6は下方へ強くつまみ出す。また、1・5は口縁端部側面を強くナデることにより幅広くつくりだす。特に5はシャープであり、器台の口縁部となる可能性がある。1は口縁部側面に縦方向のキザミを連続させる。また6は頸部に突帯を巡らせ、その上面に斜め方向にキザミを連続させる。調整はハケメを基本とするが、8は部分的にタタキ痕がみられる。4はミガキ調整の可能性を残すが、磨滅がすすみ観察しが



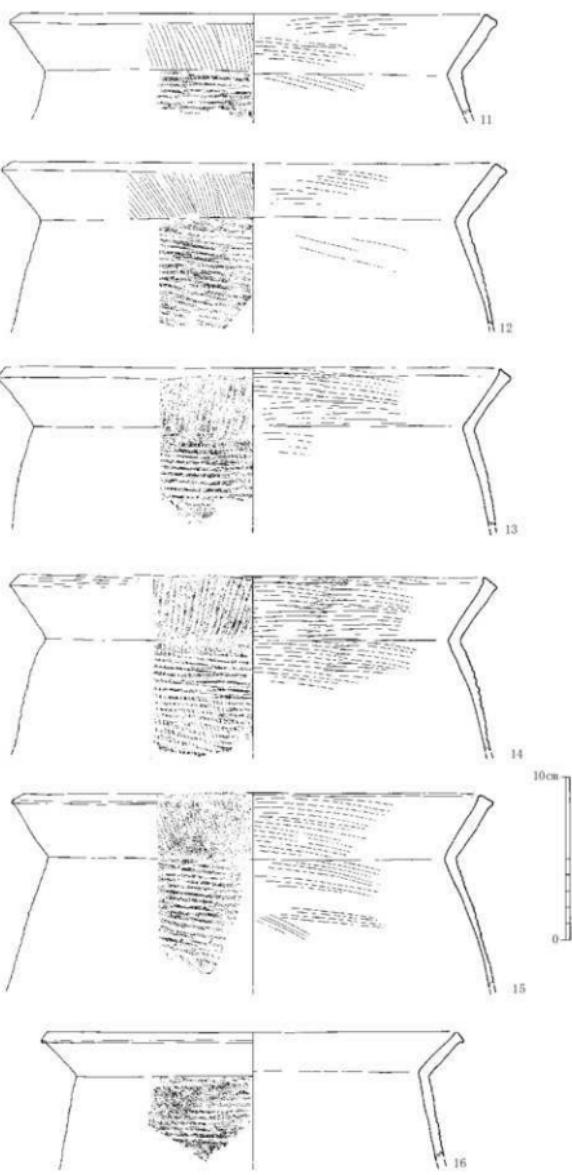
第14図 3号竪穴住居出土遺物実測図① (1/3)

たい。胎土も精良で、丁寧なつくりの印象を与える。9～32は甕。9～22・23～26は胴部が長く延びる形状とみられる。口縁部はく字形に外反するもので、直線的に伸び口縁端部内面を内側に緩やかにせり上げるものと、緩やかに弧を描きながら外反するものがある。後者は口縁端部を下方へ広げるものが多く、口縁部のカーブの違いは口縁端部側面を広くつくるのに、内側に広げるか外側に広げるかの違いであろうか。胴部はタタキ調整によるもので、外面にはタタキ痕を強く残し、ハケメ調整が伴うものもあるがタタキ痕が優位に残る。内面はハケメ調

整によるものが多い。17は頸部に突帯を巡らせ、その上面と口縁部側面にキザミを連続させる。23・27・28は球形の胴部をもち、口縁部は弧を描きながら大きく外反するタイプ。31・32は球形の胴部をもち、口縁部は直立する。31の外面下半および内面の調整はハケメをほとんど残さないもので、イタナデと称すべきか。甕の底部の形状がわかる資料は少ないが、24や30の形状から、丸底に近いもので、平底の名残をよく弱い稜にみることができるものである。33～35は直立する口縁部を伴う鉢。33・34は小型丸底壺に類する形状。35は古墳時代後期の模倣壺と同様の形状であるが、当該期の資料が含まれないため鉢のバラエティーとして捉えるべきか。36～41は鉢で、36・37は内湾する口縁部となる。40は小片であり径は算出できないが、大形の鉢とみられる。42は脚台付きの鉢。口縁部は内湾し、端部は内側に摘み出される。43・44は42と同様の脚台部で、高杯の脚である可能性も高い。44は3方向に方形の透孔を有する。45・46は高杯。45は丸く内湾する壺部に直線的に大きく開く口縁部が続くもの。46は直線的に細く延びる脚上半であり、下端に穿孔がみられるが、残存度の関係で個数は不明である。47～49は方形の透孔を有する器台。大きく外反する口縁部（底部）であり、上下はほぼ同様の形態を示し、どちらが上下であるか判断できない。透孔は上下二段に4方向にあけられる。上下を分かつ高さ、すなわち最小径部に48の場合には7本からなる沈線を巡らせる。ただし部分的に沈線が巡らない箇所がある。



第15図 3号堅穴住居出土遺物実測図② (1/3)



第16図 3号竪穴住居出土遺物実測図③ (1/3)

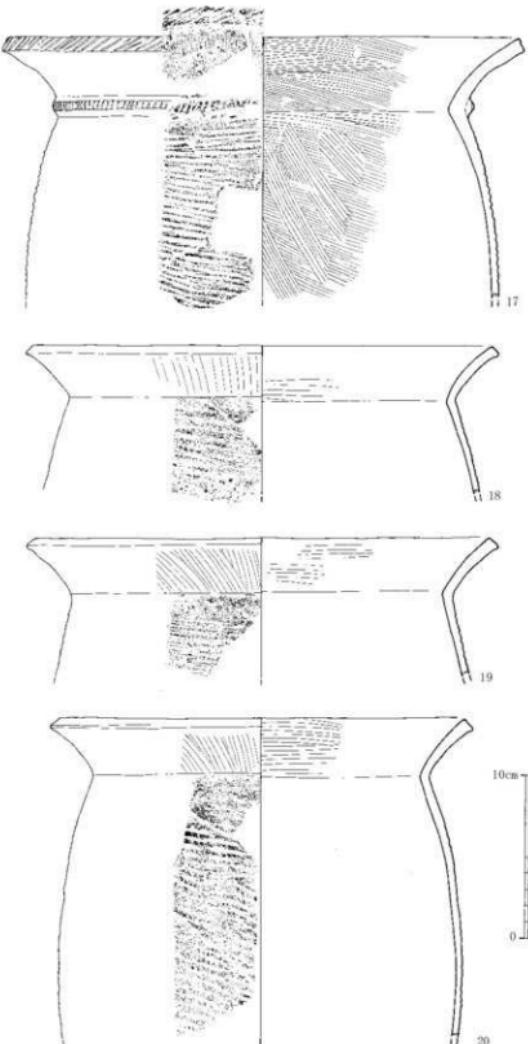
50は安山岩製の叩き石。全面が擦られて成形され、片面に使用痕である溝みが残される。51は安山岩製の石鐵。両面からの剥離により成形され、回基式の形態となる。52は住居跡南西付近を一段下げながら検出中に出土した青銅器小片。床からは約7cm浮いた位置である。腐食・磨滅が著しいが、断面形状から銅鐵の可能性が考えられよう。

4号竪穴住居（第10図）

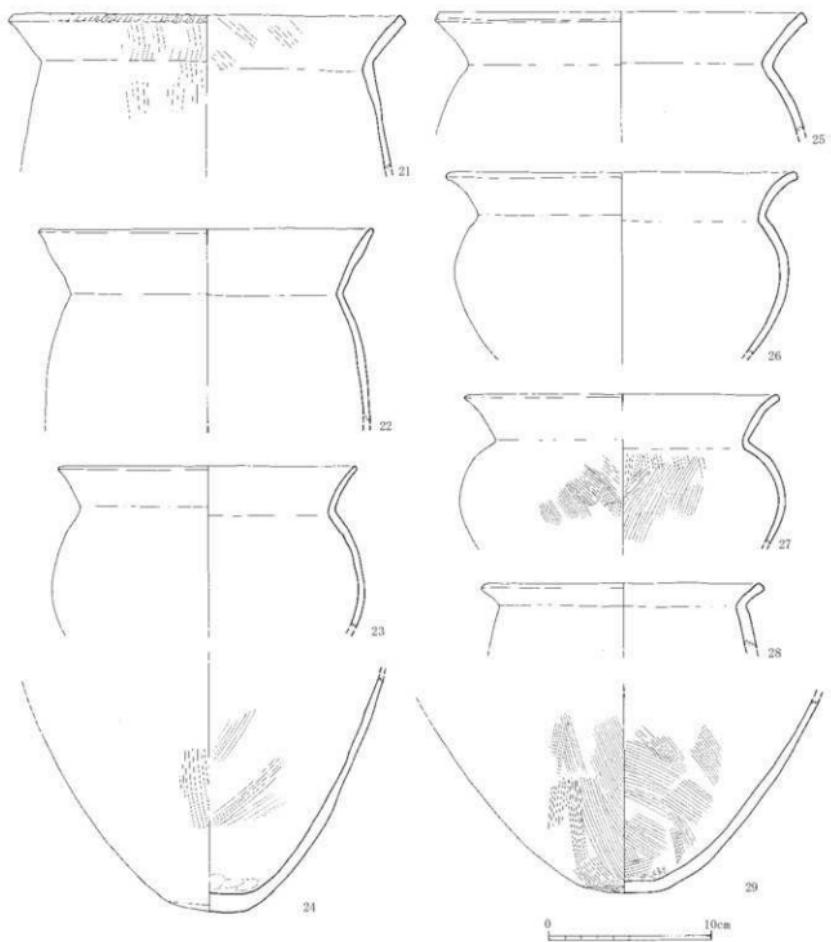
3号竪穴住居の北側にある位置の下層で検出されたもの。西辺および南西コーナーが検出されたが、北側は調査区外へ続き、東に向かっては壁が徐々に失われる形でしか検出できなかった。住居壁はややいびつな屈曲するが、軸は北に対して約10度東に振るものである。住居跡南西コーナーに沿って幅1m程度が高く、ベッド状遺構かとみられる。そのベッド状遺構の角部の内側に径90cmの円形ピット（P344）があり、甕を中心として多量の遺物が出土した。ピット中央部での深さは床面から30cmを測る。

出土遺物（第21・22図）

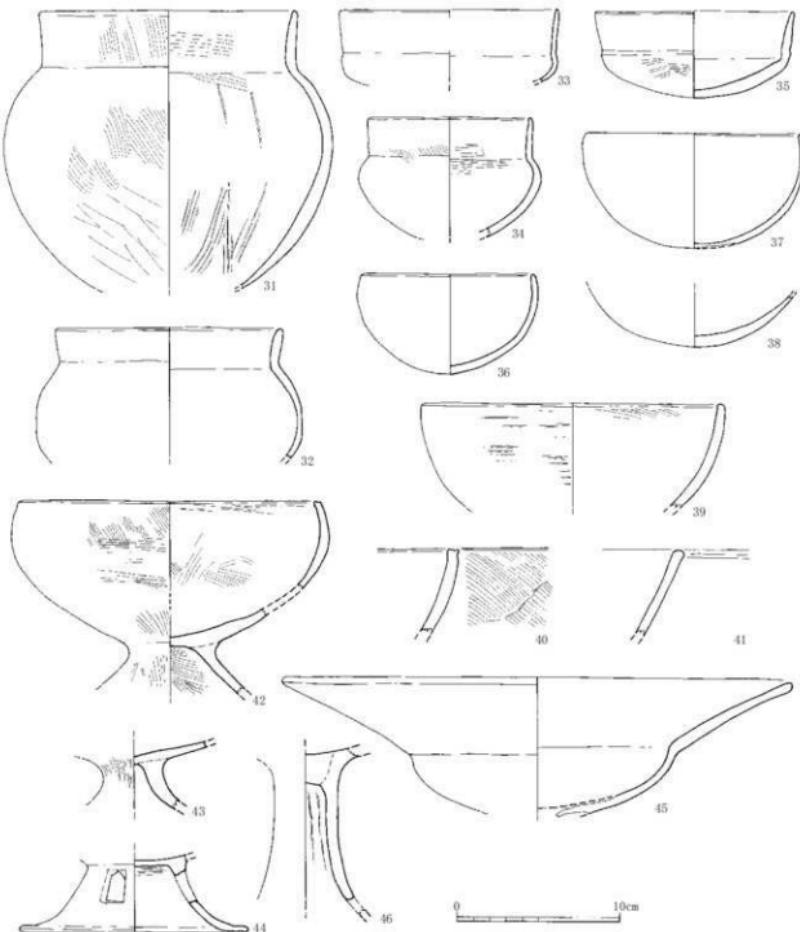
図化したもので残存度の



第17図 3号竪穴住居出土遺物実測図④ (1/3)

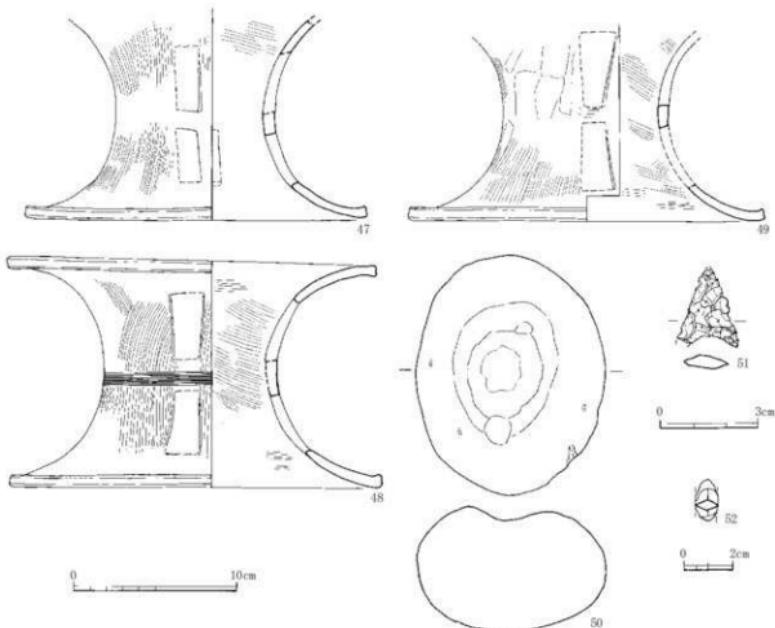


第18図 3号竪穴住居出土遺物実測図⑤ (1/3)



第19図 3号竖穴住居出土遺物実測図⑥ (1/3)

良いもの (1・2・4・5・6・10・11～15) はP344からの出土である。1・2・3は壺。弧を描きながら大きく外反する口縁部をもつもので、端部はヨコナデにより側面を広くつくる。特に3は端部の上下を強く摘み出し、側面を強調する。2は口縁部側面にキザミを施し、頸部には断面三角形の突帯を巡らせるなど装飾的である。底部がわかる資料は少ないが、1は丸底に近い凸レンズ状を呈し、胴部との境の稜はごくわずかなものとなる。4・5は球形に近い胴部をもち、外反する口縁部を伴うもの。5は口縁部側面にキザミを連続させる。6は長胴の甕。口



第20図 3号竪穴住居出土遺物実測図⑦ (1/3、50・52は1/2、51は2/3)

縁部はく字形に強く外反する。底部は丸底となる。7～9は頸部の屈曲が6に比べて弱いが、同様の形状になるのではないかと思われる。11は直立する口縁部をもつ鉢。古墳時代後期の模倣壊に近い形状を示す。12～15は鉢。13は胸部下半外面にミガキが観察される。14・15の外面調整はケズリのちナデによる。

5号竪穴住居（第10図）

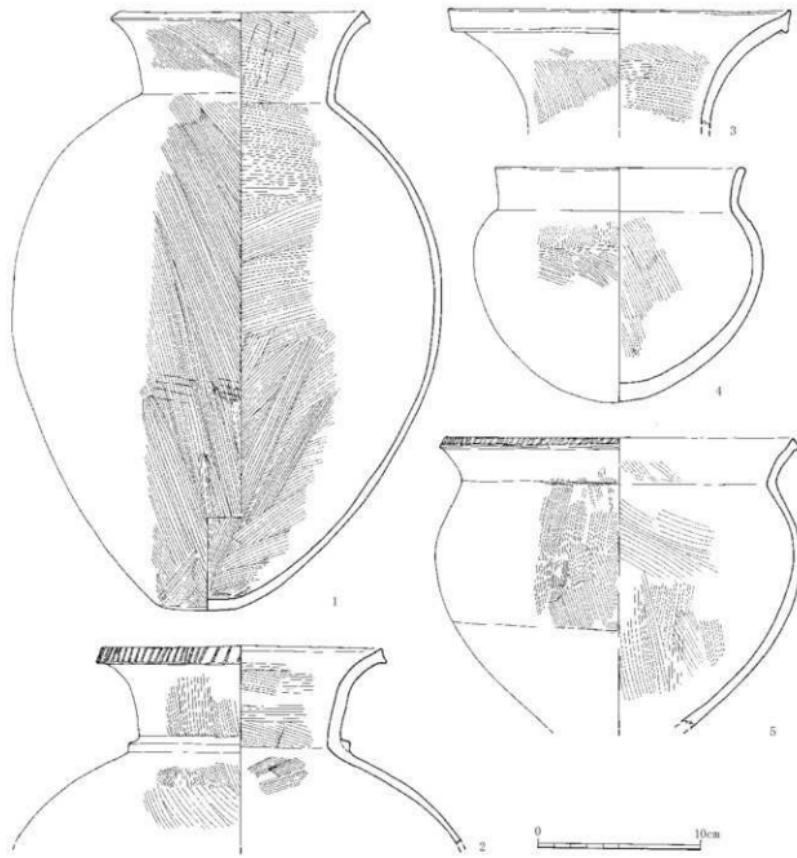
4号竪穴住居と6号竪穴住居の間に炉跡とみられる焼土面が検出されたことから住居跡の存在を考えたが、3号竪穴住居の説明でも触れたとおり、遺構の切り合いが著しく竪穴住居跡として壁等を検出することはできなかった。炉跡周辺には炭化物が多数散在している。上層から検出が困難なものであったこともあり、4号竪穴住居や6号竪穴住居に切られる住居であったと思われる。下記出土遺物をみると3は混入品で、住居の時期は1・2から弥生時代中期の範疇で考えられよう。

出土遺物（第23図）

1は鋤先口縁の甕小片。2は平底の底部。3は胸部下半の資料で、底部は丸底である。

6号竪穴住居（24図）

南西側で7号竪穴住居を切り、北側で5号竪穴住居を切るもの。東側も小形の浅い方形土坑

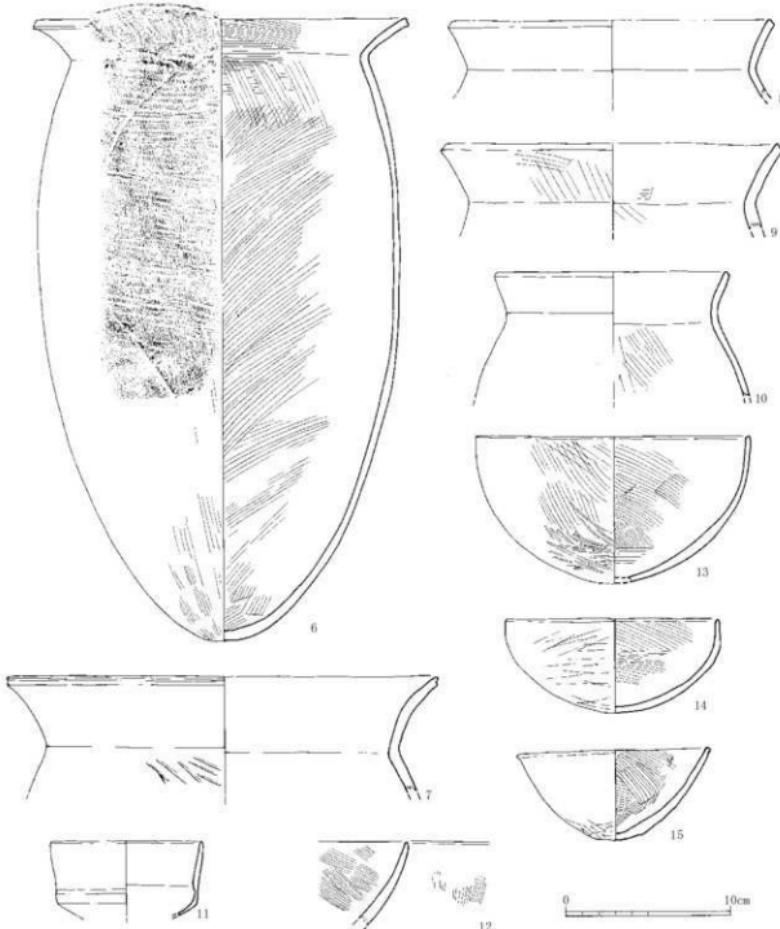


第21図 4号竪穴住居跡出土遺物実測図① (1/3)

により切られる。南北3.2m、東西3.0mのほぼ正方形の竪穴住居として検出した。住居の軸は北に対して50度西へ振る。検出面からの深さは約10cmで東側は浅い。床面にて複数のピットを検出したが、床面からの深さは10cm程度と浅く、中央付近のもののみ約20cmと深めである。

出土遺物（第25図）

1は鋤先口縁の甕で、口縁部上面はやや内傾する。2は内傾する口縁部で、壺となろうか。全面をナデにより調整するもので、器壁は厚手である。3・4は甕底部もしくは蓋の口縁部。径5.4cm程度の小形品であり、高い上げ底の形状。3は全体的に二次加熱により赤変する。5は高杯もしくは器台の底部であろうか。口縁部の可能性も残すが、直立に近いとみられる体部から内

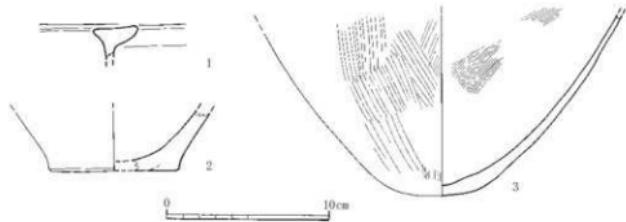


第22図 4号竖穴住居出土遺物実測図② (1/3)

面に稜をつくり端部に向かって大きく開く形態から脚と判断した。脚端部側面に指オサエを連続したキザミ状の文様を巡らせる。外面にみられる横方向のシワ状の凹凸はタタキ痕であろう。6は磨石で約半分を欠損するもの。扁平な形状で全体的に磨がれがみられる。

7号竖穴住居 (第24図)

北東辺を6号竖穴住居により切られ、北西辺は9号竖穴住居をほぼ接する位置で切る。南北3.5m、東西3.3mを測る小形の方形竖穴住居。住居の軸は北に対して35度西へ振る。検出面

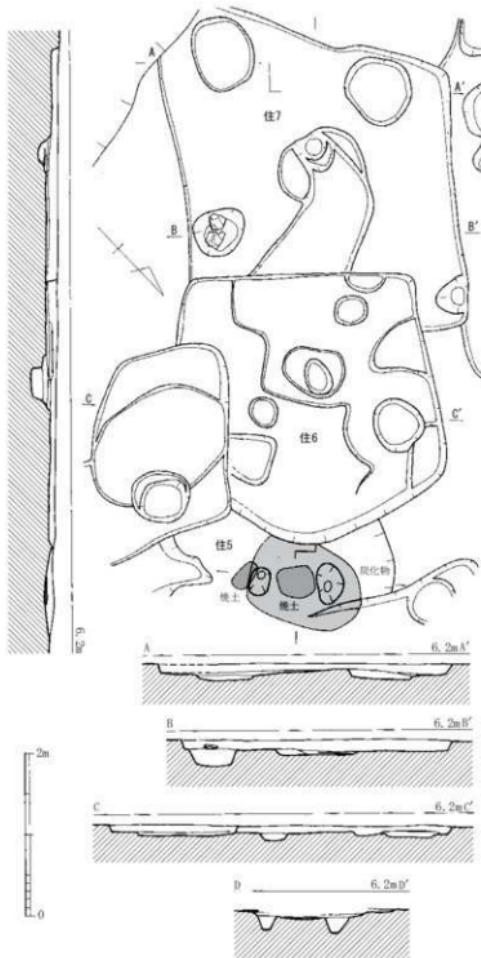


第23図 5号堅穴住居出土遺物実測図 (1/3)

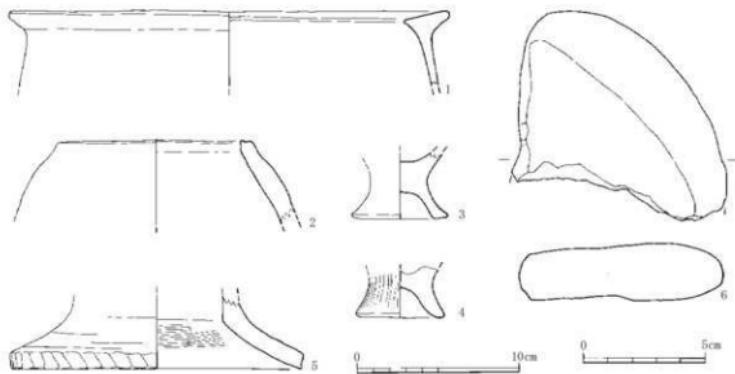
から床面までは 10 cm 程度と浅く、床面にて検出した複数のピットも床面から 10 ~ 15 cm 程度の深さである。住居跡内東端のピットにて比較的まとまった量の遺物が出土した。

出土遺物 (第26図)

1・2は蓋の口縁部で、ラッパ状に大きく開く形状である。1は口縁部側面をヨコナデにより誇張させ、幅は器壁の倍近くとなる。2は口縁部側面にやや傾きをつけたキザミを密に施す。3~6は甕。5は鋤先口縁をもつもので、口縁部上面はわずかに内傾させる。それ以外はく字形に屈曲させる口縁部。6は大部分が欠損するものの脚台が伴うもの。胴部外面の調整は縦方向のイタナデである。7は小片のため傾きに疑問を残すが、直線的に開く口縁部である。口縁部下約 5 cm の位置に低い突帯を巡らせ、米粒大程度のキザミを連続させる。精良な胎土である。8・9は大きく開く体部に屈曲する口縁部を伴うもので、高杯となろう。8は短く弧を描き屈曲させる口縁部で、端部は丸い。9は稜をもつて直立させる口縁部で、端部は四角く收める。10は高杯脚部で厚手のつくりである。



第24図 6・7号堅穴住居実測図 (1/60)



第 25 図 6 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3、6 は 1/2)

8号竪穴住居（第 28 図）

北側の約半分が調査区外へ続くもの。平面プランは方形と考えられるが、コーナーがやや鋭角となる。西側に 1 号甕棺墓が隣接して存在し、南側の住居コーナー部にて 9 号竪穴住居を切る。検出面で炭化物が全体的に散在する状況であり、焼土塊も確認された。また幅 7 ~ 9 cm の建材と思われる棒状の炭化物が平行して二本検出され、焼失住居であると考えられた。床面までの深さは約 10 cm を測る。

出土遺物（第 28 図）

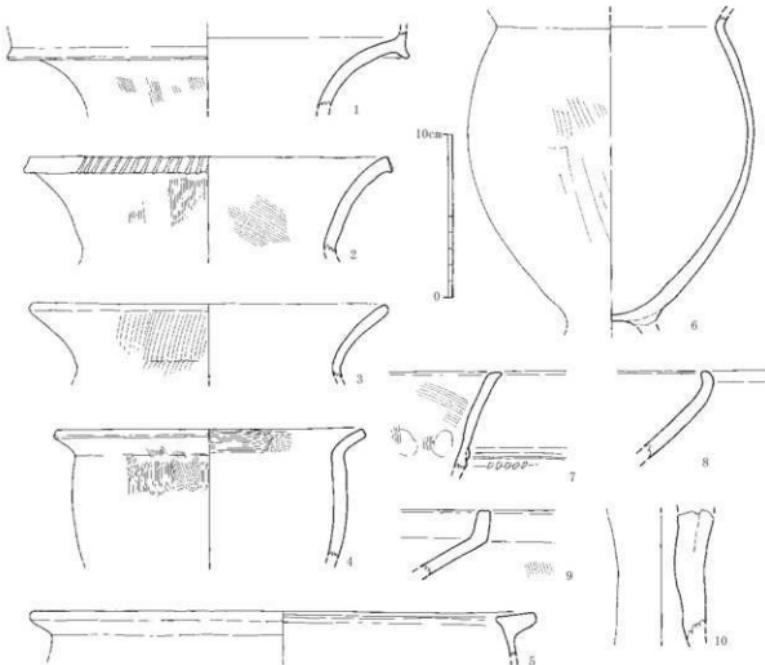
1 は壺の口縁部。大きくラッパ状に開く形状で、口縁部側面はヨコナデにより広くつくられ、斜め方向のキザミが巡らされる。2 は球形の胴部に直線的に開く口縁部が続く形態で、壺の範疇に入ろうか。3・4 は甕。3 はく字形に屈曲する口縁部をもつもので、長胴の体部が続くものであろう。4 は鋤先口縁で、端部は強く跳ね上げる。5・6 は直立する口縁部を有する壺。胴部は球形で、底部は丸底。胴部最大径を境として調整が変化する。7 は高杯の口縁部か。大きく開く体部を直立方向に屈曲させ、口縁部は鋤先タイプとするもの。8 は厚手のつくりの器台。屈曲部における器壁は 2cm 程を測るが、口縁部に向かって直線的に厚みを減じる。

9号竪穴住居（第 27 図）

南辺を 10 号竪穴住居および 12 号竪穴住居により切られ、東辺の一部を 7 号竪穴住居に接する程度の位置で切られる。東西 4.5m、南北 5.2m 以上を測る。住居の軸は北に対して 45 度振る。検出面から床面までの高さは約 15 cm。住居内西寄りの検出面にて焼土および炭化物の広がりを検出したが、この住居に伴うものではなく、これを切る焼失住居である 8 号竪穴住居に伴うものであろう。住居北辺中央の床面にて焼土のひろがりを検出し、近辺で台石等をはじめとしてまとまった量の遺物が出土した。床面にて多数のビットを検出したが、深さ 40 cm を中心とする深いものが主柱穴となろうか。

出土遺物（第 29・30 図）

1 は丸みを帯びる胴部に鋤先口縁が伴う丹塗磨研の甕。口縁部内外面への突出は大きく、口縁部上面は広くつくる。胴部最大径よりやや下位に突出度の高い突帯を 1 条巡らせる。2 ~ 5



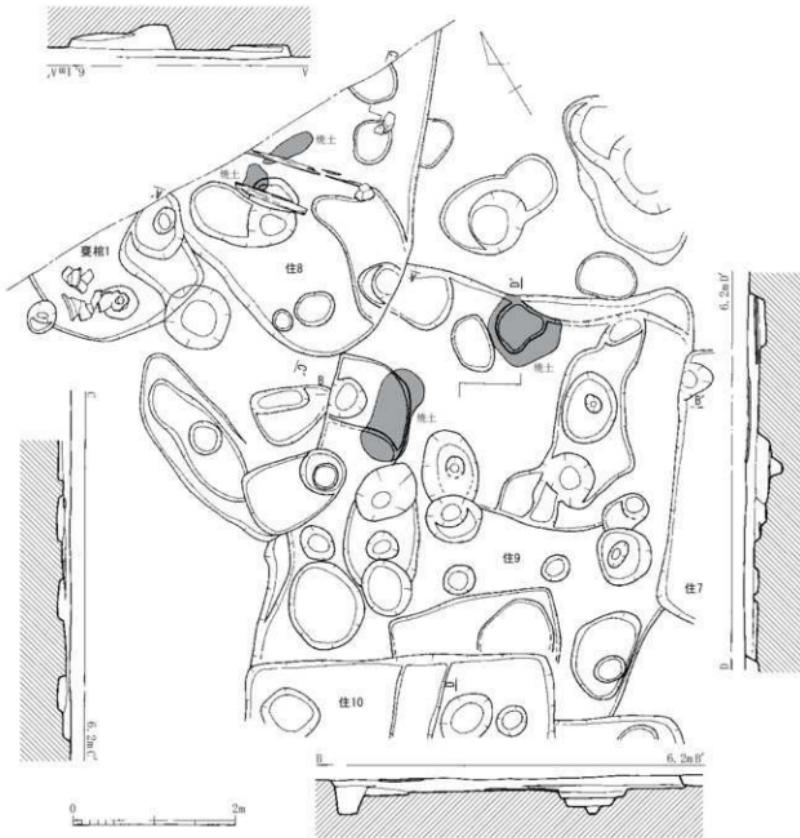
第26図 7号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

は鋤先口縁の甕。口縁部上面はやや内傾するもので、2・3は端部を跳ね上げる形状である。6はく字形に屈曲させる口縁部を有する甕で、体部は浅めであり鉢に近い形状である。7・8は底部で、高い上げ底となる。7は二次加熱により赤変する。9～12は器台で、鼓形をなすもの。

13は石包丁。輝緑結灰岩製で刃部が若干残る程度の小片である。14は太形蛤刃石斧。刃部と基部の一部を欠損する状態で、509gを測る。蛇紋岩製。15・16は磨石。15は全面的に使用が及んでおり、側縁は叩石として使用し二箇所に敲打がみられるが、特に片側が顕著である。16は扁平な円盤状の形状で全面的に使用が及ぶ。17は砂岩製の大形の台石。厚さ9cmを測る方形のもので、上面を中心に使用が顕著であり、平滑な表面となる。

10号竪穴住居（第31図）

北側で9号竪穴住居、東側で12号竪穴住居を切り、南側では11号竪穴住居に切られる形で検出されたもの。平面プランは方形をなし、東西3.7m、南北3.1m以上を測る。住居の軸は北に対して東へ30度振る。検出面から床面までの深さは約10cm。南側のD61の床面検出時に10号竪穴住居に伴うかとみられるコーナーを含む直線が検出されたが、ベッド状構造の肩の可能性がある。床面にて複数のピットを検出したが、床面からの深さは15～25cm程度を測る。



第27図 8・9号竪穴住居実測図 (1/60)

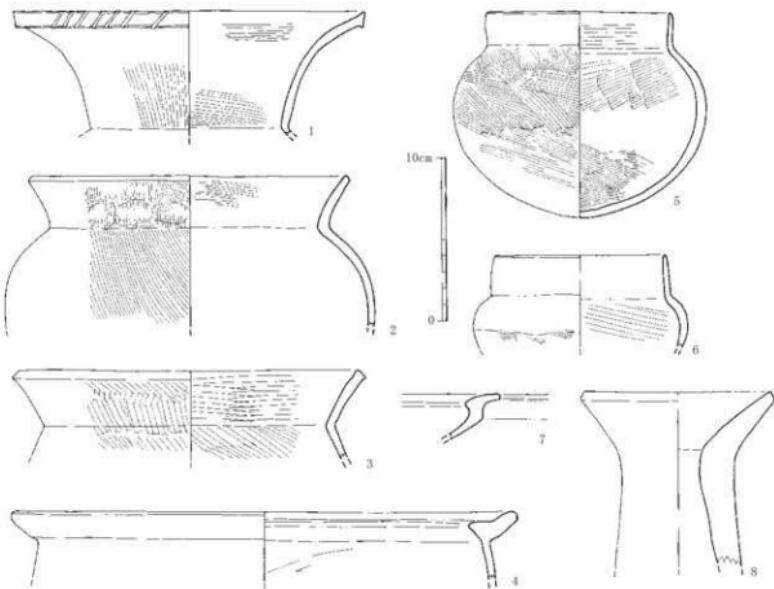
出土遺物 (第32図)

1～4は10号竪穴住居から11号竪穴住居にかけての検出面にて出土したもの。1は突出度のある三角口縁となる甕。2は甕ないし壺の底部で広い底面は若干上げ底となる。3は甕の底部で高い上げ底。4は甕の脚台とみられる。これらの遺物は弥生時代中期を中心とするものであるが、後述するように11号竪穴住居は弥生時代後期と考えられ、これらの遺物は10号竪穴住居に伴う可能性が高い。

5は住居内のピットから出土した突出度のある三角口縁をもつ甕。6はく字形に屈曲する口縁部をもつ甕の小片である。

11号竪穴住居 (第31図)

北側で10号竪穴住居、東側で12号竪穴住居を切り、南側で1号溝に切られる。平面プラン



第28図 8号竪穴住居出土遺物実測図（1/3）

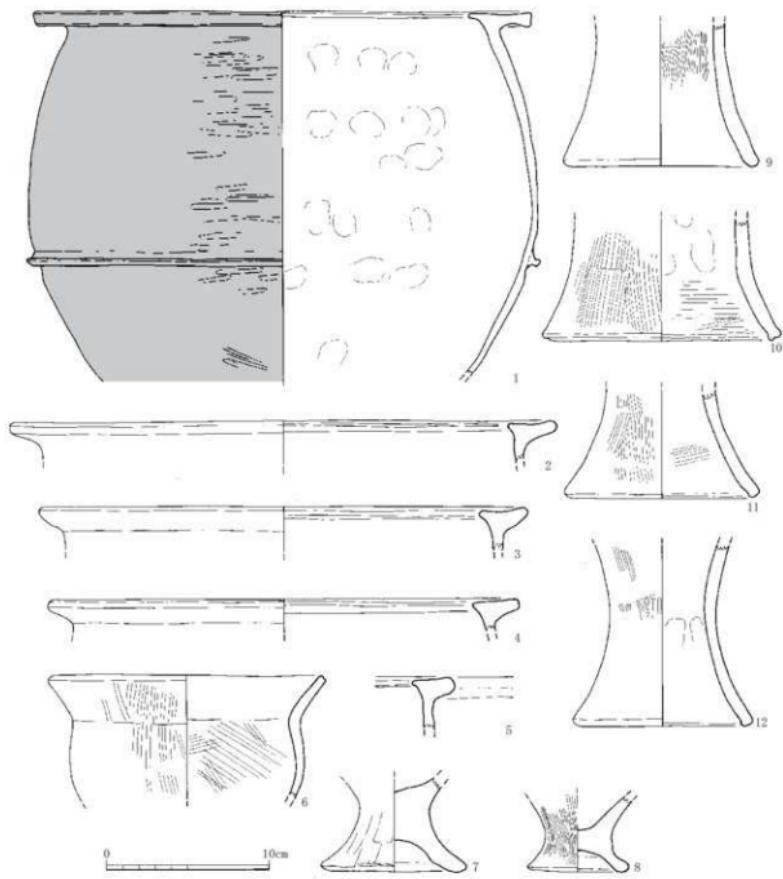
は長方形をなし、東西は4.0mを測る。住居西辺を1号溝まで伸びる形で検出していたが、この南西角は地山レベルが他より高く、住居の南北規模は3.8m程度になる可能性が高い。住居の軸は北に対して15度東へ振る。住居内のやや東寄りの位置で1.5m×1.0mの範囲で炭化物が散布しており、一段下げたところその北東部で濃い密度で炭化物が検出された。これらの炭化物の広がりは検出面に近い位置にあり床面からは浮いているが、炉に伴うことが考えられる。床面を検出した状況で、南側にてコーナーを含む直線プランが検出されたが、1号溝を挟んで南側に位置する13号竪穴住居の住居コーナーの可能性が高いと考えられる。

出土遺物（第32図）

7は球形の胴部に直立に近い角度で直線的に立ち上がる口縁部をもつもの。8は壺肩部の小片で、櫛状工具で横方向に平行沈線をいれ、その下に組紐状に波状文を巡らせるもの。9は直立する口縁部をもち胴部がやや横に張る球形をなす壺。10は手づくねの楕円形土器。11は小形の高杯で、浅い楕状を呈する坏部をなす。12は厚手であることから器台となろう。13は片岩製の刃部を有する石器。7と10は住居内の炭化物の広がりに対応する位置にあるピットから出土した。特に10は炉に対する祭祀が関連するものであろう。

12号竪穴住居（第31図）

西側を10号竪穴住居および11号竪穴住居に切られ、南側は1号溝に切られる。1号溝を挟んだ対岸では続きは検出されなかった。住居の北東コーナーを含むもので、約1/4が検出され



第29図 9号竪穴住居出土遺物実測図① (1/3)

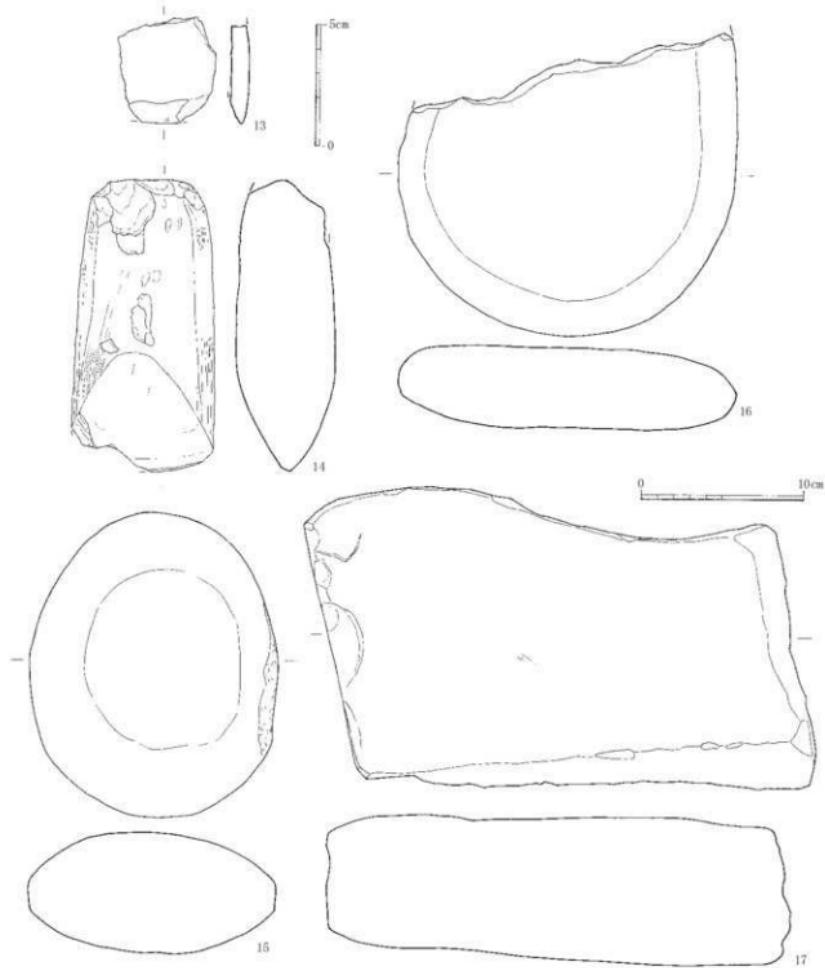
ているものと思われる。住居の軸は北に対して30度東へ振る。住居内北側半分が10cm程度高いテラス状をなす。

出土遺物（第34図）

1は鋤先口縁の甕小片。口縁部上面は内傾する。2は平底の甕底部。3は径5cmの小形の甕底部で、高い上げ底。蓋の口縁部であるかもしれない。4は扁平な円盤状をなす圓石で、両面の中央に顕著な敲打がみられる。

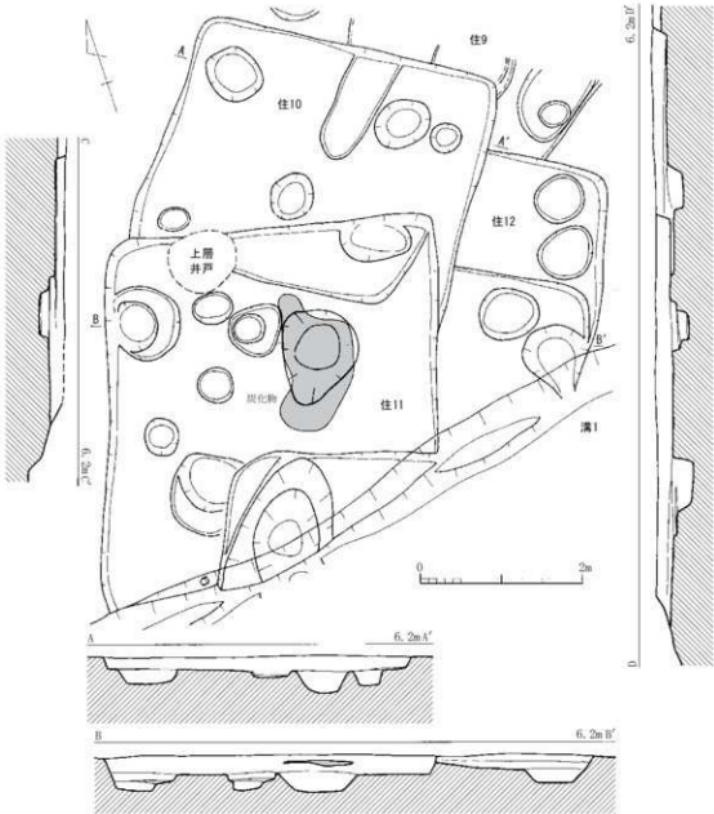
13号竪穴住居（第33図）

北側を1号溝に切られるもので、南側は大半が調査区外へ続く。1号溝と調査区に挟まれた狭い地区での検出であったため、正確にラインを検出できなかつたが、一段下げた時点で東側で直線を検出し、また11号の床面でコーナーが検出されたことから、東西4.0m、南北3.5m



第30図 9号竪穴住居出土遺物実測図② (1/2、17は1/3)

以上の平面プランが方形の竪穴住居として考えられるに至った。しかし1号溝より南側の西辺については、不明瞭な形状でしか検出されなかった。住居の軸は北に対して20度東へ振るとみられる。検出面から床面までの深さは約20cmを測り、床面にて多数のピットを検出したが、主柱穴は判然としない。1号溝の床面が一部大きく深さを増しているのは、この住居に伴うピットが存在するからであろう。



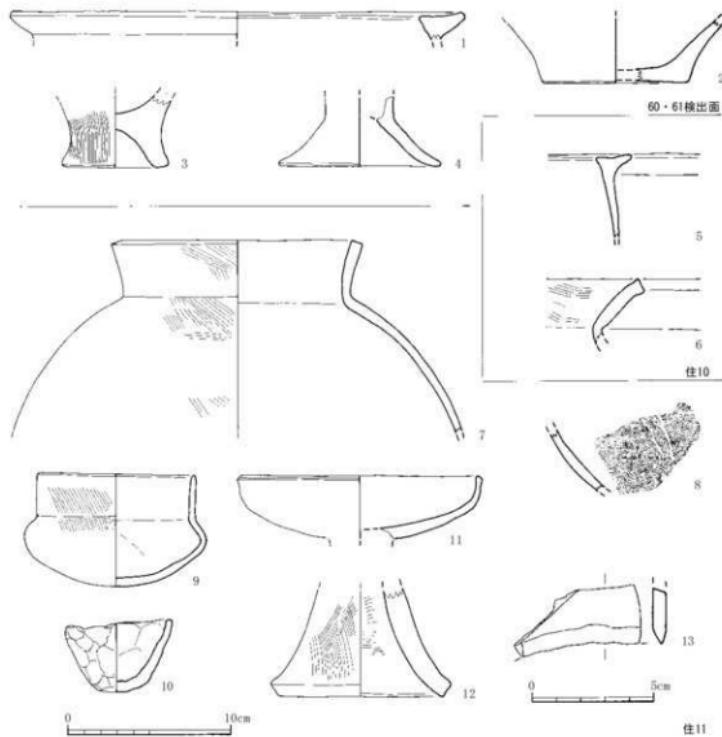
第31図 10～12号堅穴住居実測図 (1/60)

出土遺物（第34図）

6は逆L字形に屈曲する口縁部をもつ甕。7・9は壺ないし甕の底部で、平底であるがやや凸レンズ状となる。8は平底の甕底部で、底面中央に径1.5cmの穿孔がみられる。

14～16号堅穴住居検出面（第35図）

14～16号堅穴住居にあたる地点は切り合いが著しく遺構埋土の識別ができなかつたため、仮番号(D55)を付して取上げを行っていた。精査の結果、遺構の切りあいは複雑な様相を示しており、北西部および北東部にコーナーが検出されたことから住居跡の存在が想定された。北西部コーナーを含むものを15号堅穴住居、北東部コーナーを含むものを16号堅穴住居とし、その中央部の不整形な遺構を14号堅穴住居として調査をすすめることとした。これらを

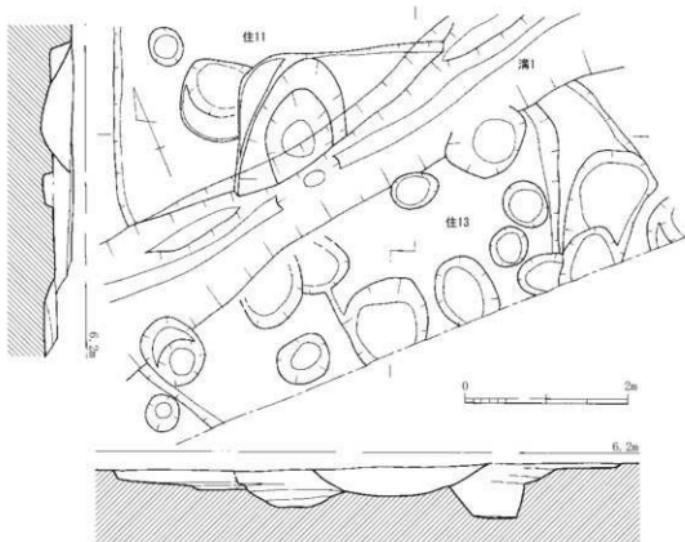


第32図 10・11号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3、13は1/2)

一段ずつ掘り下げることにより遺構の切り合いを判断するよう努めたが、まず一段下がった時点で14号竪穴住居は北側に円形土坑として独立する遺構が検出され、それを4号土坑として取り扱う。その時点で残りの部分の14号竪穴住居は15号竪穴住居を切る方形の遺構として検出され、さらに15号竪穴住居の東辺と考えられるラインを検出した。残された部分が16号竪穴住居の埋土と判断されたが、14号竪穴住居東側の広がりとの間の線引きは最終的に不明瞭であり、また16号竪穴住居下層は凹凸が激しく、落ちるラインも不自然なものであり、住居跡と考えたものの結果として不安を残すものとなった。

出土遺物 (第36・37図)

1～7は長胴となる胴部形態をもつ壺で、口縁部はく字形に屈曲する。胴部はタタキ調整で外面にタタキ痕を顕著に残すものが多く、内面はナデによる調整。口縁部は外面タテハケ、内面はヨコハケである。8はやや横に張る球形の胴部にく字形に屈曲する口縁部が続く壺。口縁部側面にはキザミを連続させる。9はく字形に屈曲する口縁部をもつ大形の鉢。10は内傾する口縁部の素口縁の鉢。11は直線的に大きく開く口縁部をもつ浅い形態の鉢。12は器台もしくは支脚の底部で外面にはタタキ痕を顕著に残す。13は弧を描きながら強く外反する口縁部お



第33図 13号堅穴住居実測図 (1/60)

より底部をもつ鼓形の器台。上下二段に四方に長方形の透孔を設ける。外面は全体に磨滅が進行するが、ハケメ調整が一部に観察できる程度で、沈線等による文様は確認できない。

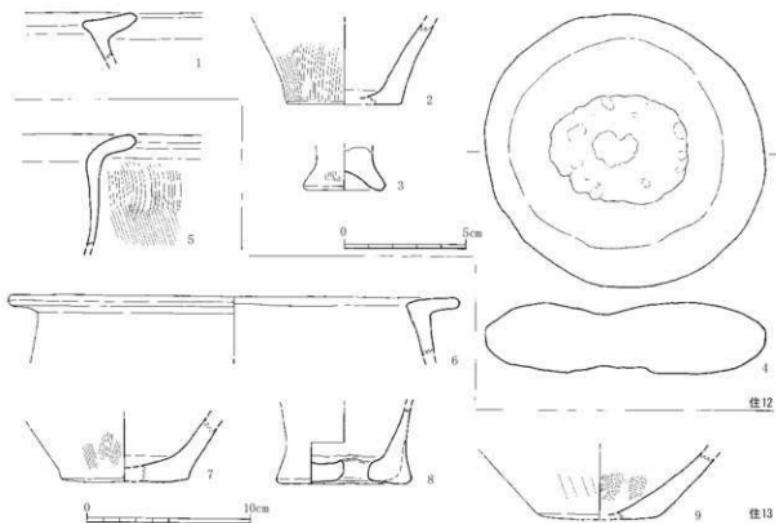
14号堅穴住居（第35図）

14号堅穴住居は一辺約3.0mを測る方形をなす。住居の軸は北に対して30度東に振る。検出面から約5cm掘り下げた時点では中央部及びその南西で焼土の広がりが検出され、小形の甕が横転した状態で出土した。この面が貼床と判断され、さらに5cm程度掘り下げるごとに地山が検出された。中央の焼土を挟んで対峙する位置に柱穴が検出されたが、深いものではなく、主柱穴としては疑問を残す。住居内北西角のピットからガラス小玉が出土した。

出土遺物（第38図）

1～8は住居埋土上層で出土したもの。1は壺でラッパ状に大きく開く口縁部をもつ。口縁部は内面を大きく上方へ摘み出し側面を強くヨコナデ調整し、側面を広くつくりだす。頸部には断面三角形の突帯を巡らせ、上面にキザミを連続させる。2は壺ないし甕の底部。底部コーナーに粘土を補填し、底面を広くつくる。3・4は直線的に開く口縁部を伴う鉢の小片。5・6は弧を描きながら内傾する口縁部となる素口縁の鉢。7は小形の鉢で、指オサエによる成形である。8は高杯で、磨滅が著しいが脚部は縦方向のミガキとみられる。胎土は精良。

9・10は住居床面で出土した資料。9はく字形に屈曲する口縁部。胴部は細長く上半は外面にタタキ痕を残し下半はケズリ調整、内面は斜めないし横方向のハケメ調整である。底部は凸レンズ状を呈するが、胴部との境の稜は残す。10は素口縁の深い鉢で、器壁は薄手である。



第34図 12・13号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3, 4は1/2)

11・12は住居に隣接するピット(P315)からの出土。11は頁岩製の砥石で、欠損後も欠損面を使用している。12は輝緑凝灰岩製の石包丁。使用によりかなり小形化している。13・14は住居に隣接し住居を切る位置にあるピット(P338)から出土した鉄片。両者とも二辺が緩やかな弧を描く厚さ2mm程度を測るもので、刃部をつくりださない。鉄器加工時に生じる鉄片であろうか。15は住居内のピット(P336)から出土したガラス小玉。径4mmを測るもので、色調はマリンブルー。

15号竪穴住居(第35図)

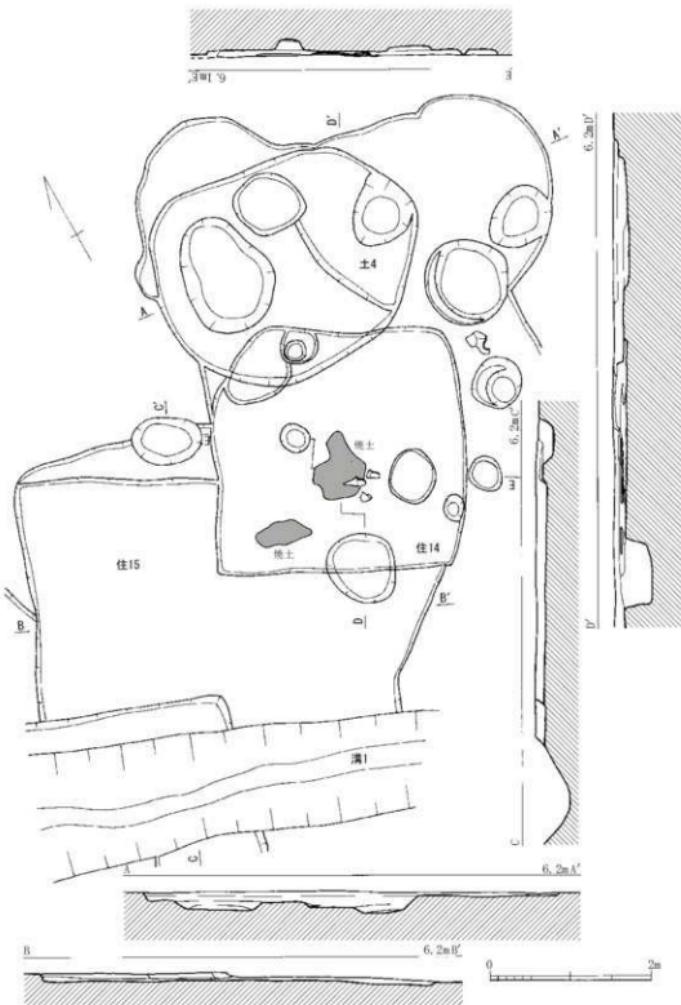
北東部を14号竪穴住居に、南西部を18号竪穴住居に切られる。また南辺は1号溝に切られるようであり、1号溝を挟んだ対岸には遺構の輪郭は確認されない。住居跡の東辺と考えたラインは西辺とは平行にならず、不安を残すが、東西約5m・南北3.5m以上の規模と考えられる。検出面からの深さは約10cmで浅い。床面を精査したが、柱穴は確認されなかった。

出土遺物(第39図)

1は弧を描き強く外反する口縁部を有する壺もしくは甕の口縁部で、胴部は張る形態となる。3は小形の長胴甕。口縁部は欠損するが、おそらく字形に屈曲するものであろう。底部は平底。胴部の外面調整は上半がナデ、下半がケズリである。2・4は半球形の鉢。2はやや凸レンズ状となる底部をもつ。

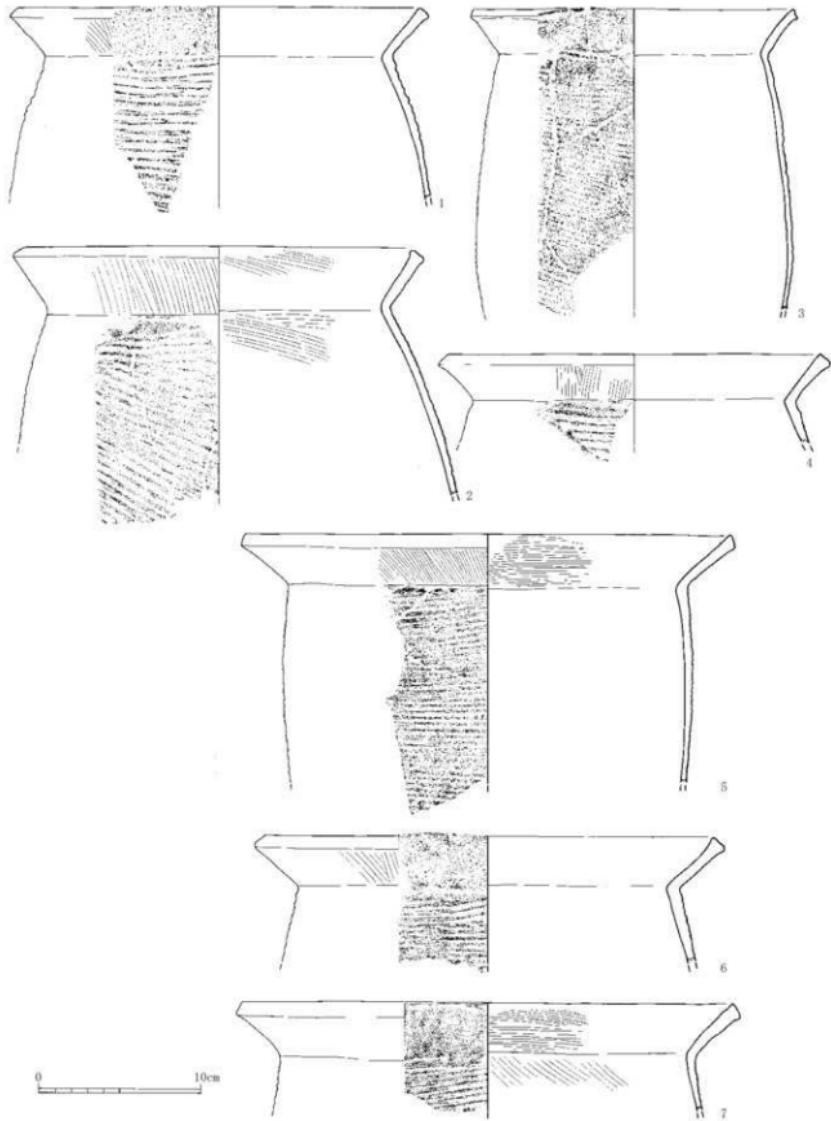
16号竪穴住居(第40図)

切り合いの著しい遺構群の東端に位置するので、直角コーナーを含む二辺が検出されたことから竪穴住居跡と判断して掘削を行ったが、西辺が検出されずかつ床面レベルが不安定な

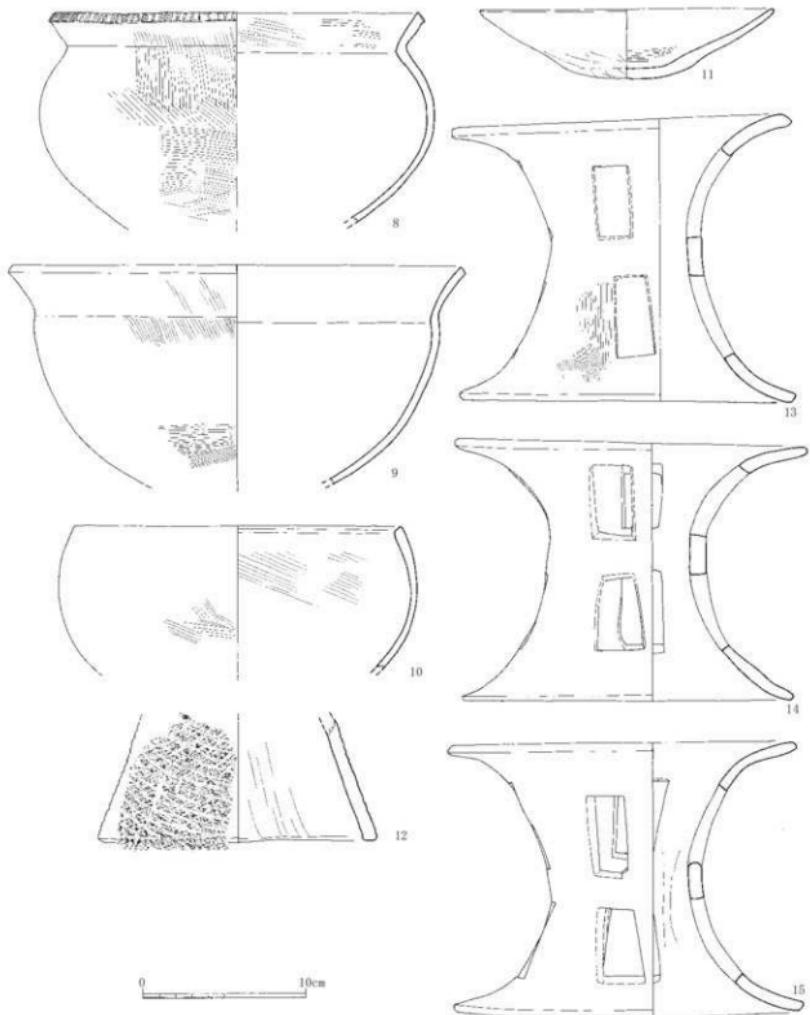


第35図 14・15号竪穴住居・4号土坑実測図 (1/60)

ものとなり、明瞭な住居跡として検出できなかった。東辺のあり方から住居の軸は北に対して20度東へ振るものと算出される。南辺は1号溝に切られるようであり、1号溝を境として南側に位置する17号竪穴住居を切る関係にある。



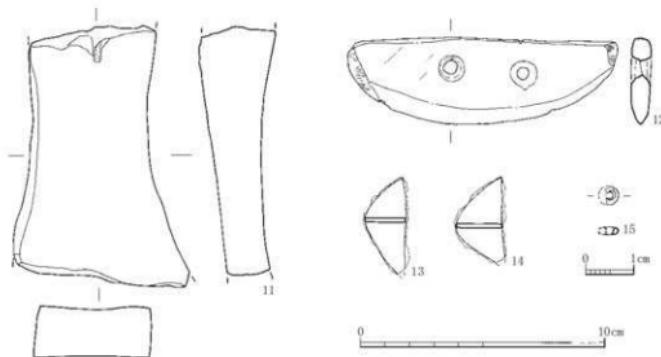
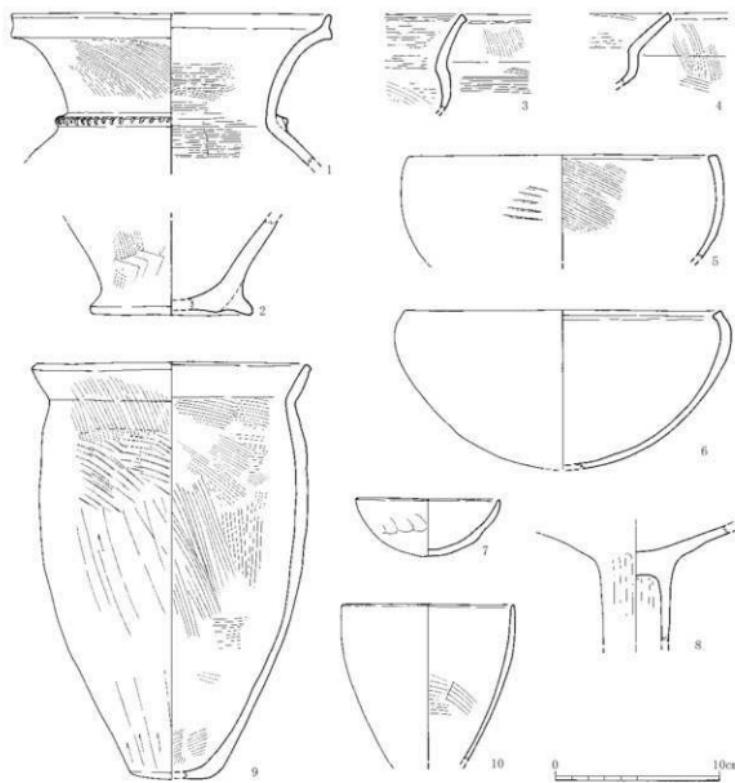
第36図 14～16号竪穴住居検出面出土遺物実測図① (1/3)



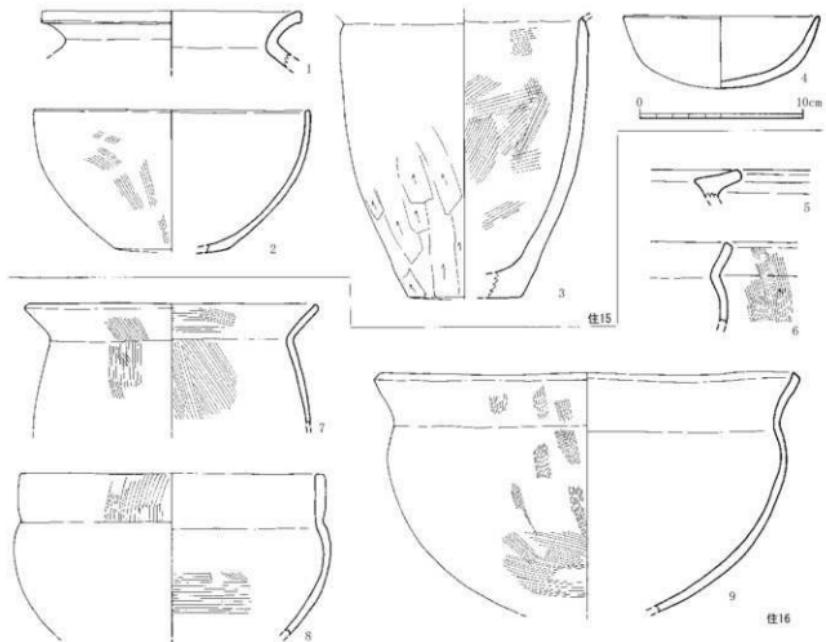
第37図 14～16号竪穴住居検出面出土遺物実測図② (1/3)

出土遺物 (第39図)

5は逆L字形口縁部の甕小片。6はく字形に屈曲する甕ないし鉢の口縁部小片。7はく字形に屈曲する口縁部をもつ甕で薄手の印象を受ける。8は直立する口縁部を有する鉢。9はく字形



第38図 14号竖穴住居出土遺物実測図 (1/3、11～14は1/2、15は1/1)



第39図 15・16号竪穴住居出土遺物実測図（1/3）

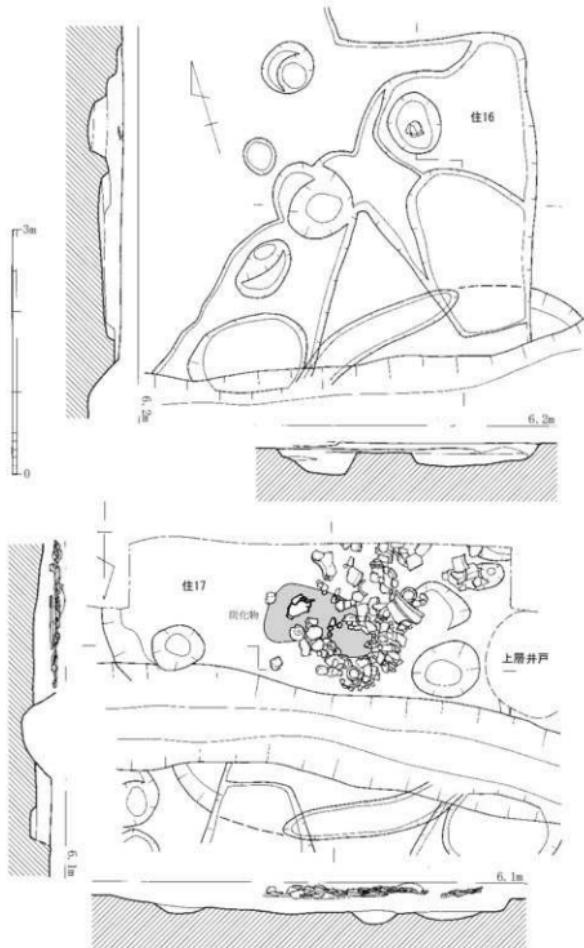
に屈曲する口縁部を有する鉢。大形で口径 26cm を測る。

17号竪穴住居（第40図）

南側大半が調査区外へ続くもので、北辺も 16号竪穴住居により大部分が切られ、わずかにコーナーを確認できる程度である。北辺は 16号竪穴住居地山検出面で確認された緩やかに弧を描くラインと判断され、東西 5m の隅丸方形の竪穴住居跡と考えられる。北辺付近を 1号溝により切られ、西辺を中世井戸に切られる。検出面から多量の遺物が出土したため、調査区をできる限り拡張して調査を実施した。遺物が集中して出土するのは東西 2.5m、南北 1.5m の範囲であるが、それに一回り狭い範囲において炭化物の広がりが確認され、その西半分に焼土が点在する状況が確認された。また焼土が点在する中に、粘土塊が火を受けて塊となったような遺物が出土した。指圧痕が顕著なブロック状のものであるが、支脚として使用されたものであろうか。遺物はある程度の大きさに復元できるものが多いものの、置かれて廃絶したような状況ではなく、投棄されたような様相を呈している。大形の甕や鉢が主体であるが、復元が困難なもののが多いため、図化できたのは口縁部が中心となっている。また、甕が多いにも関わらず底部資料が少ないので、丸底に近い器形が影響しているとみられる。

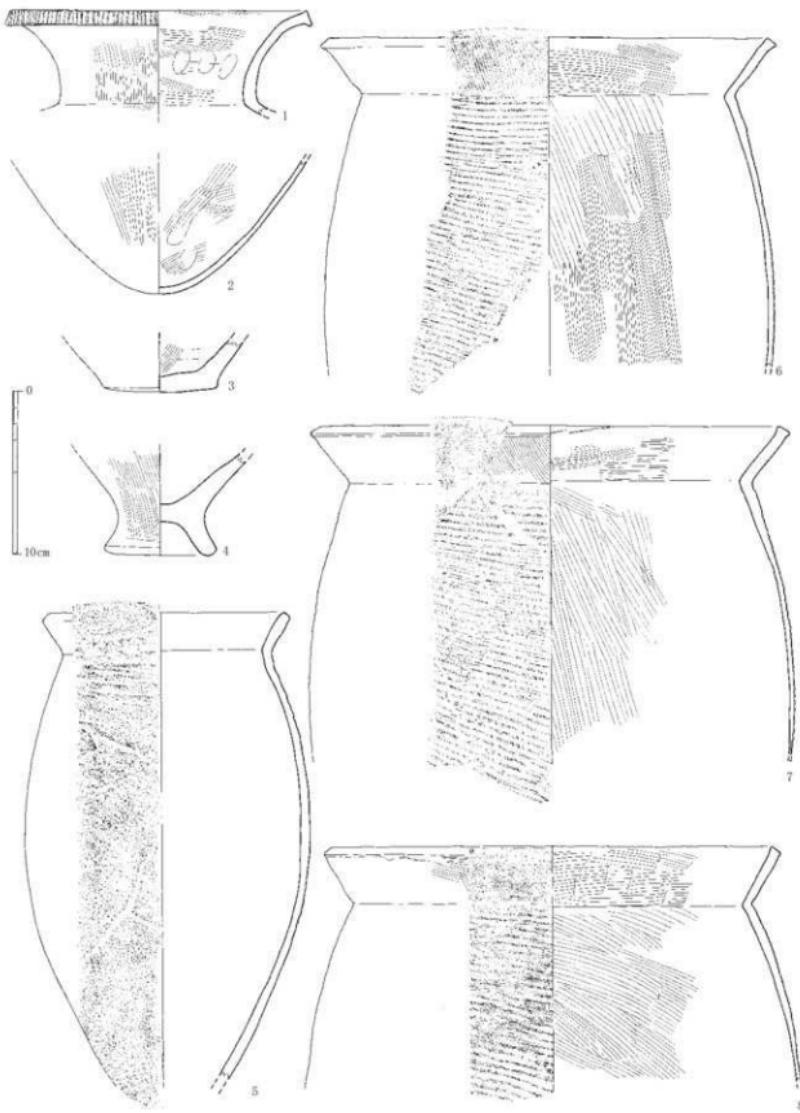
出土遺物（第 41 ~ 46
図）

1 はラッパ状に大き
く開く壺口縁部。口縁
部側面に縦方向のキ
ザミを密に連続させ
る。2 ~ 4 は壺ないし
甕の底部。2 は丸底、
3 は凸レンズ状、4 は
上げ底となる。後述す
る資料からみて 4 は混
入の可能性が高い。5
~ 20 は甕で長胴の形
態をなすもの。口縁
部はく字形に屈曲す
るものであり、緩やか
に内湾するものと緩
やかに外反するもの
の二者がある。口縁
端部は四角く收める
が、側面をひろくつく
るようにヨコナデに
より上下に広げるも
のがある。20 は口縁
部側面にキザミを連
続させて装飾する。口
径が 25cm から 30cm 程
度の大形のものが大
半を占める。5 は口径
15.2cm を測るもので
あり、小形である。口
縁部の外面調整はナ
ナメハケ、内面調整は

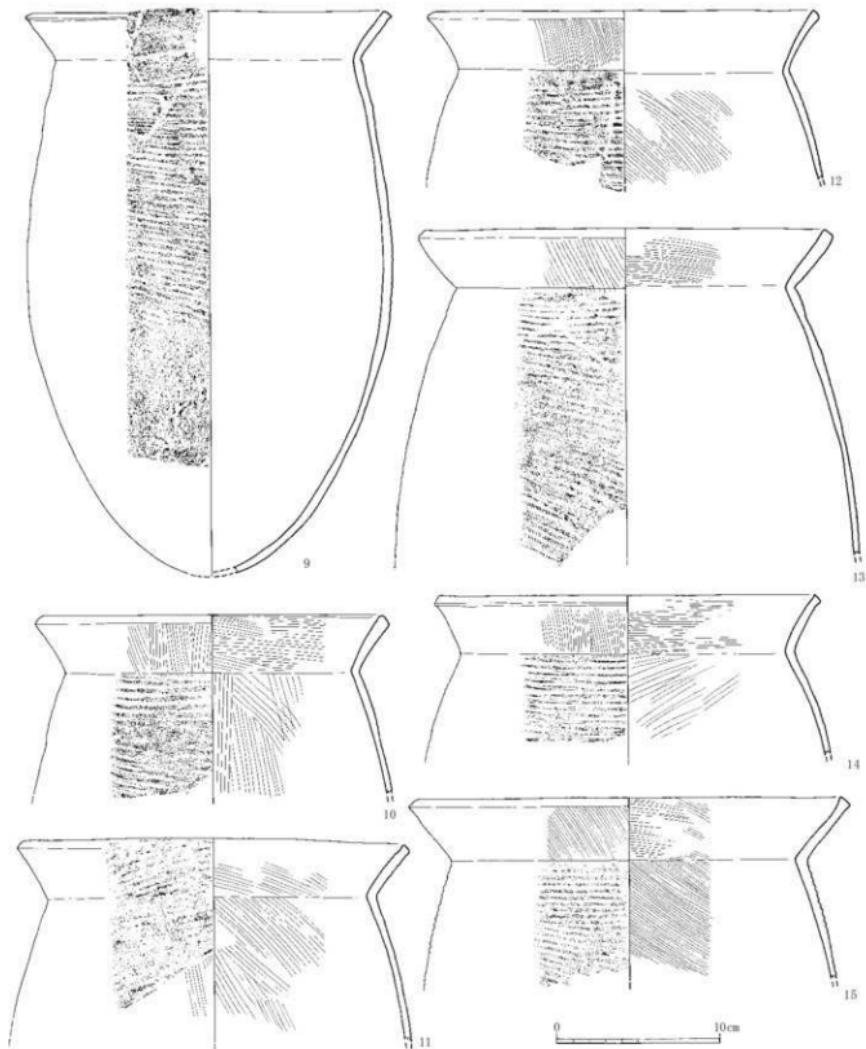


第 40 図 16・17 号堅穴住居実測図 (1/60)

ヨコハケ、胴部外面調整はタタキによりハケメを伴うものも多いがタタキ痕が優位に残される。胴部内面はナナメハケが主体を占める。18 は大形の甕で、接合しないものの同一個体とみられ。緩く外反しながら延びる口頭部に貼り付けにより内傾しつつ端部は垂直に立ち上がる口
縁部を統一、逆く字形の複合口縁をつくる。口縁部上面、複合口縁屈曲部、頸部突帯のそれぞれにキザミを連続させる。また口縁部外面には羽状に刺突文を巡らせる。胴部下半に突出度の



第41図 17号竪穴住居出土遺物実測図① (1/3)

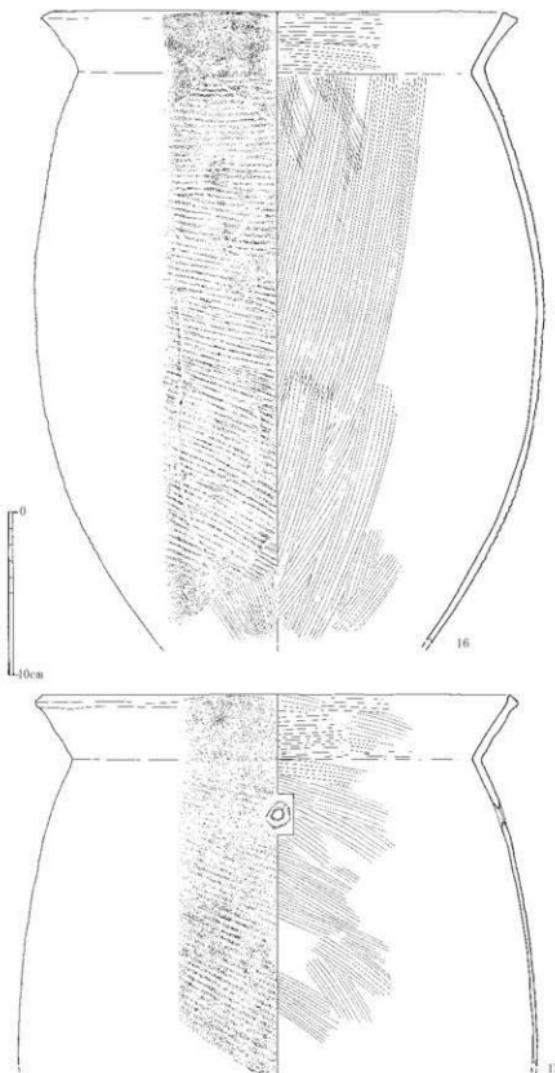


第42図 17号竪穴住居出土遺物実測図② (1/3)

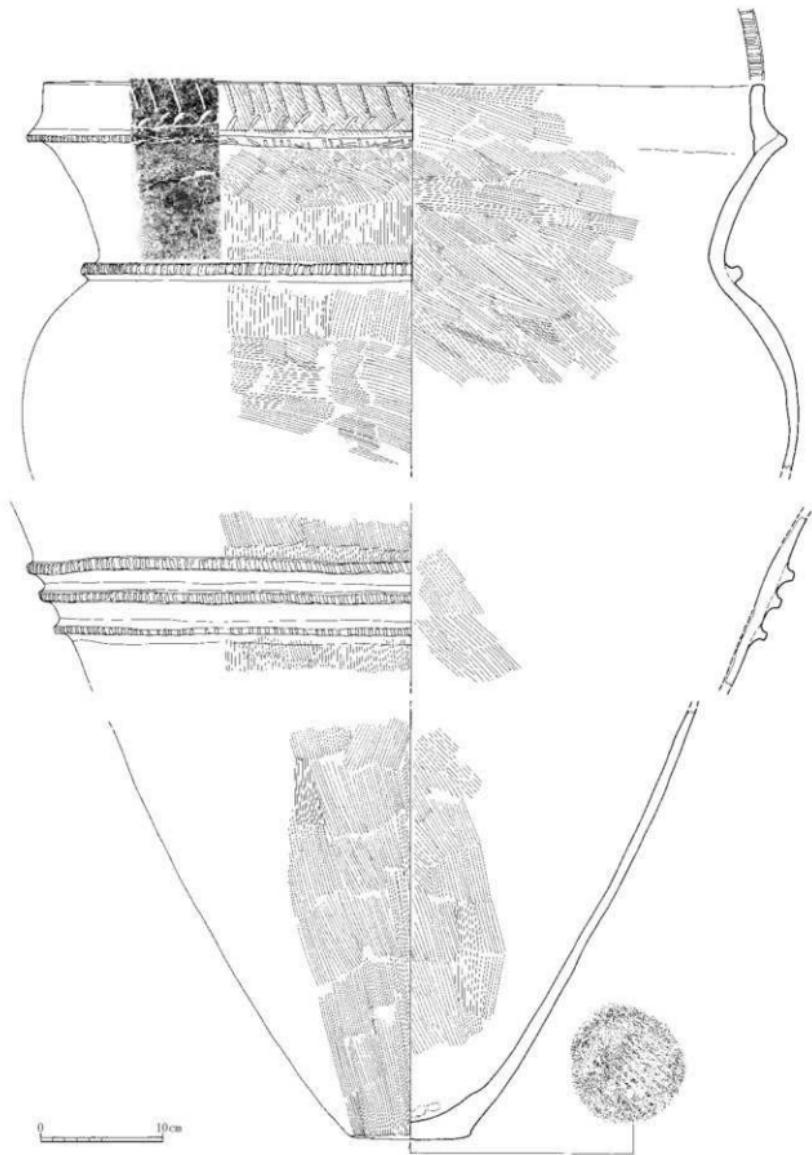
ある突帯を3条巡らせそれぞれの側面にキザミを連続させる。底部は平底に近い突レンズ状であり、底面にもハケメが施される。21～24は扁平な球形の胴部に外反ないし直立する口縁部を伴う鉢。胴部は最大径付近に製作単位があり、調整が下半のケズリに対して上半はハケメと異なる。24は強く水平方向に屈曲する口縁部である。25～27は高杯。半球形の杯部に直線的に大きく開く口縁部が続く。脚部はラッパ状に大きく開くもので、中位よりやや下に円形の穿孔をもつが、おそらく三方に穿つとみられる。28は深い橢形の手づくね土器。29は片岩製の石包丁。

18号竪穴住居（第47図）

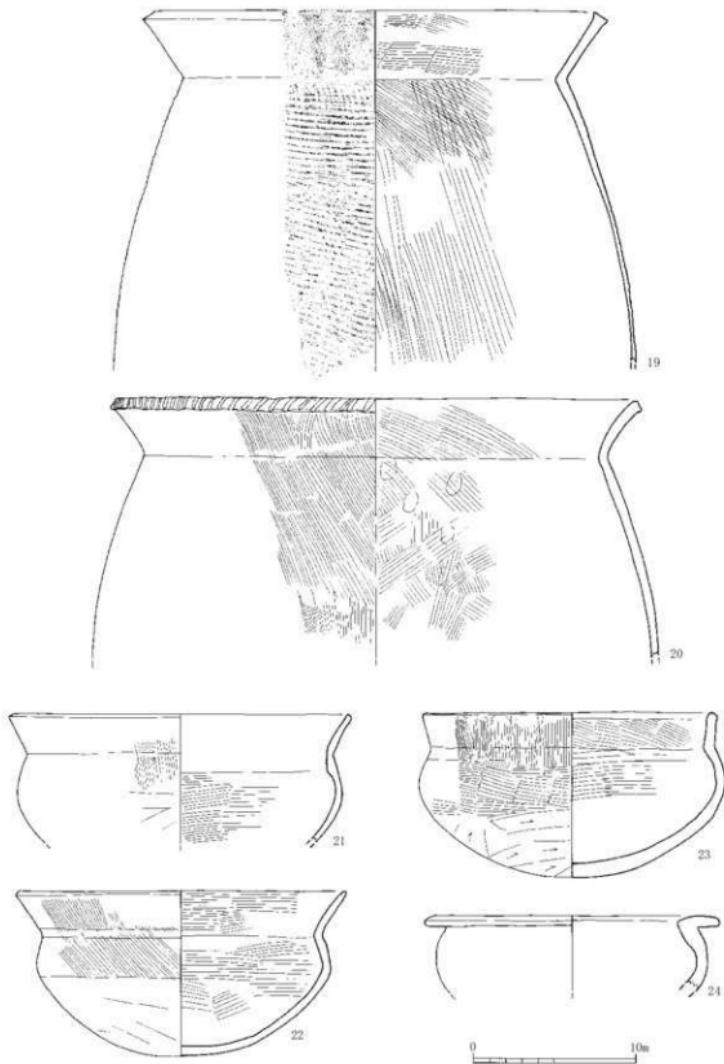
住居中央部を東西に1号溝により切られるが、ほぼ全体を検出できた。北東で15号竪穴住居を、西側で19号竪穴住居を切る。また南側で1号建物の柱穴に切られる。東西5.5m、南北4.2mの長方形を呈する。住居の軸は北に対して70度西へ振る。検出面から床面までの深さは約10cmを測る。住居中央の西寄りに大形のピットがあり主柱穴と考



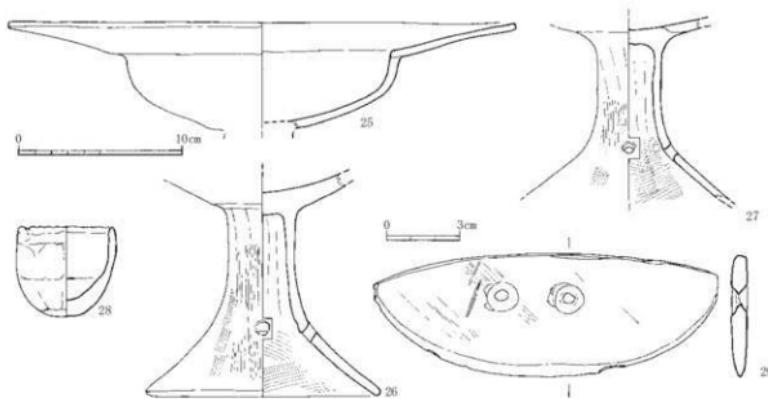
第43図 17号竪穴住居出土遺物実測図③ (1/3)



第44図 17号堅穴住居出土遺物実測図④ (1/4)



第45図 17号竪穴住居出土遺物実測図⑤ (1/3)



第46図 17号竪穴住居出土遺物実測図⑥ (1/3、29は1/2)

えられるが、対になるピットが小規模。主柱穴は東西に長い土坑の一部といえるが、その土坑の東端検出面で鉢が伏せられた状態で出土した。

出土遺物（第48図）

1・2は鋤先口縁の甕。口縁部は内外面に強く突出させ上面を広くつくる。1は口縁部側面にキザミを連続させる。口縁部内部から外面にかけて丹塗りが施される。3はく字形に屈曲させる口縁部をもつ甕。4は半球形の鉢で完形品。胴部下半の外面調整はケズリである。5は高杯の脚部上半。直立する細い円柱状を呈する。6は器台。ほぼ直立する円筒状で、口縁部はわずかに外反する。7はフラスコ状の体部をなす鉢。口縁部上半には沈線文を巡らせ、下半には重圈文を描く。器形・文様から肥後の要素を多く含むと評価できる。8は頁岩製の砥石である。

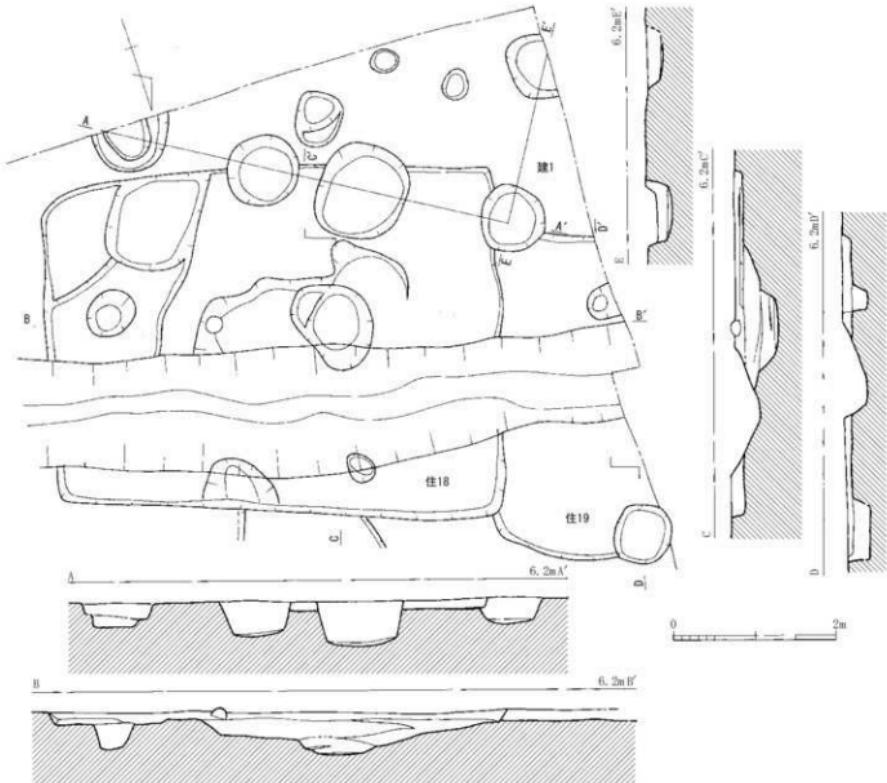
19号竪穴住居（第47図）

第18号竪穴住居の西側に位置し、西側の大半が調査区外となる。18号竪穴住居に切られるが、北東コーナーの位置からみて辺が重なる程度の関係であろう。住居の方位も18号竪穴住居とはほぼ一致するものであろう。南北は4mを測る。検出面から床面までの深さは10cmを測る。

出土遺物（第48図）

9は18号竪穴住居と19号竪穴住居間の検出時に出土した資料。短く外反させる口縁部を有する小形の甕である。それぞれの住居の出土遺物の検討から、19号竪穴住居に伴う可能性が高い。

10・11はく字形に屈曲して外反する口縁部を有する甕。胴部の成形はタタキにより、外面にはタタキ痕を顕著に残し、内面はヨコ・ナナメハケにより仕上げられる。12はく字形に強く屈曲させる口縁部をもつもので、胴部は球形となろう。13は外反する口縁部をもつ器台口縁部。14は弧を描きながら大きく外反する口縁部を有する高杯。15は軽石である。明瞭な加工は認められないが、自然には産しないため持ち込まれたものと判断される。重量は32gを測る。



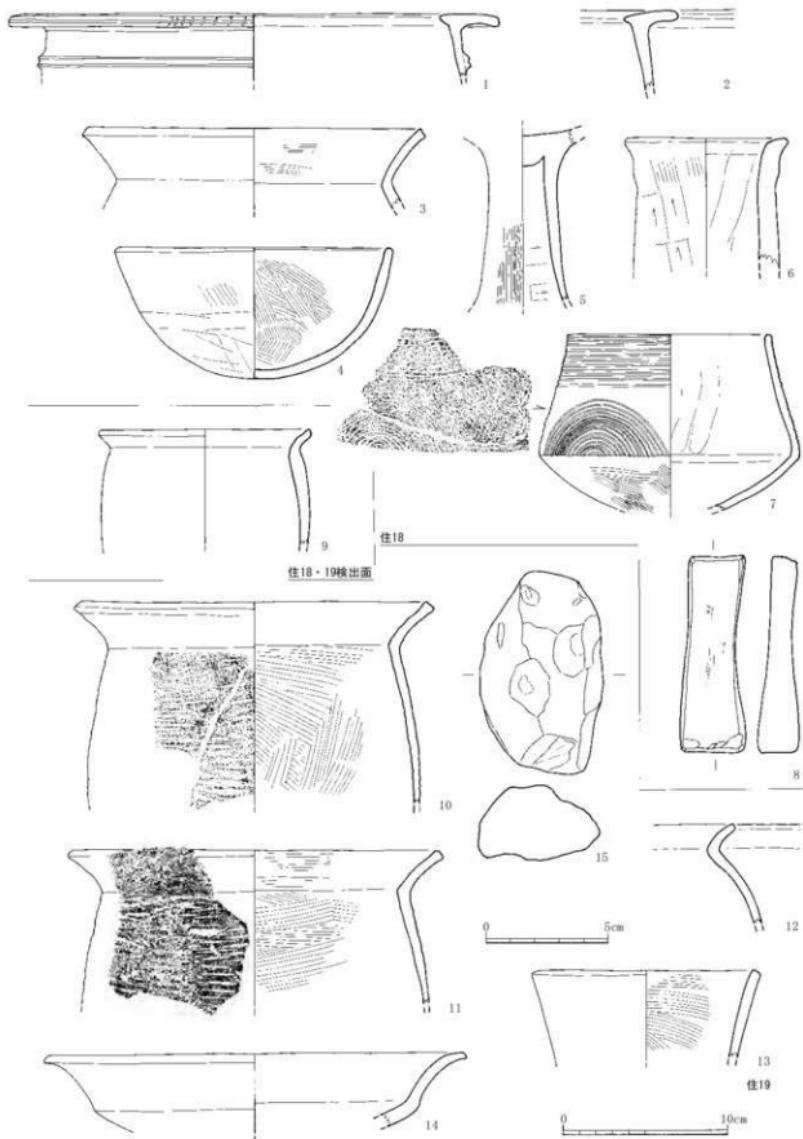
第47図 18・19号堅穴住居・1号建物実測図 (1/60)

20号堅穴住居 (第49図)

15号堅穴住居の北西側で検出された切り合わず単独で位置する堅穴住居。長方形の平面プランをもつもので、南北4.4m、東西3.4mを測る。住居の軸は北に対して15度東へ振る。南北両辺には形状が不安定なもののベッド状造構かとみられるテラスを有し、その幅は50~70cmを測る。検出面からベッド状造構までは5cm、床面までは15cmの深さである。住居内北西角のピットの一角に炭化物が集中して検出される箇所があり、手づくね土器が出土した。

出土遺物 (第50図)

1は小形の壺。直立に近い口頭部であり、口縁部は尖り気味に薄くなる。胴部は上位に最大径があり、頭部に米粒大の刺突文が連続する。丸底に近い形状であるが、ごく狭い底面をもつと観察される。2は手づくねの楕円形土器。3は弧を描き大きく外反する口縁部を有する壺。胴部は丸みをもつ形状である。4・5は半球形の鉢。4は大形で口径22cmを測り、5は諸特徴は



第48図 18・19号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3、8・15は1/2)

4と共通するが口径16.8cmと4を小形化したような形態である。端部は四角く收め、角はシャープである。胸部はタタキ成形後にハケメ調整により仕上げられる。6は粘板岩製の石包丁小片。穿孔部がわずかに確認できる。

21号竪穴住居（第51図）

3区調査区の北東部で検出したもの。西側を23号竪穴住居、南側を22号竪穴住居に切られる。北側は広い範囲で遺物包含層が広がるが、疊層になることもあり検出は困難で、22号竪穴住居の北辺および東辺をおさえることはできず、南辺をわずかに検出したに過ぎない。軸は北に向かって70度西へ振る。検出面から5cm下げるレベルで80cm幅のテラスが検出されベッド状遺構と判断される。さらに5cm下げるとき底面に達し、小ピットが複数検出された。ひとつのピット中より小形の鉢が出土した。

出土遺物（第52図）

1は球形の体部をもつ小形の鉢。口縁部は素口縁で内傾する。2も半球形の鉢で、素口縁で内傾する口縁部といった特徴は1と共通するが、径は19.3cmと大きい。

22号竪穴住居（第51図）

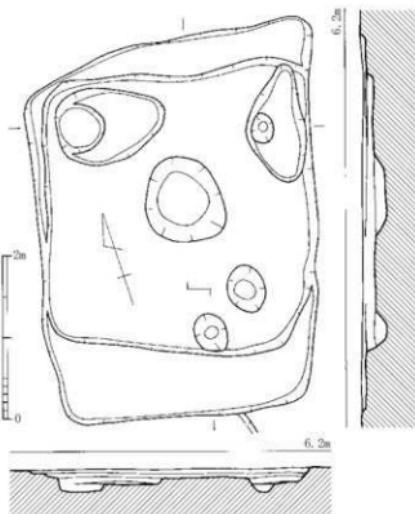
3区調査区東端で検出したもの。約半分が検出されていると思われる。1号溝が東西に横断し、上層からの井戸によても破壊を受ける。23号竪穴住居との切り合いは微妙な位置関係であるが、22号竪穴住居が新しいと判断した。ややいびつな形状となるが住居の軸はほぼ南北を向くものと思われる。南北の規模は5.0m。検出面から底面までは約10cmの深さを測る。

出土遺物（第52図）

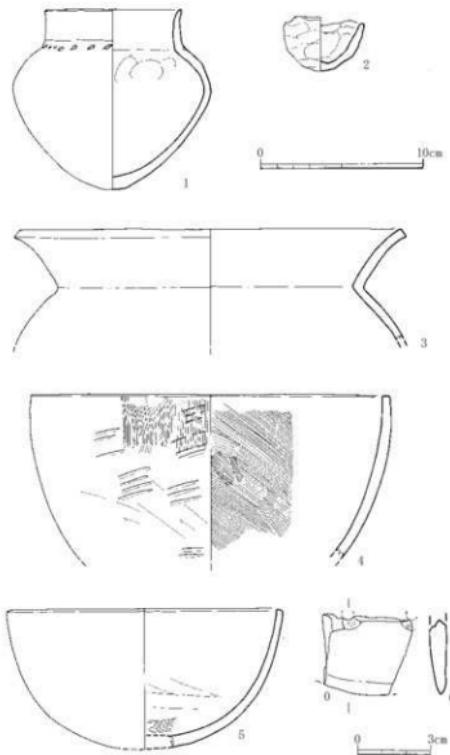
3は逆L字形に屈曲する口縁部の甕小片。4は平底の甕底部。外縁調整は縦方向のイタナデである。5・6は支脚。5は厚手の器壁がそのまま口縁となり筒状となる。6は上面を平坦面とし、1cmの穿孔を施す。

23号竪穴住居（第51図）

軸を北から80度東に振る方形プランの竪穴住居。上層からの井戸により随所に掘削を受けるが、南北5.2m、東西4.5mの規模を導き出すことができる。北辺に沿って東西にベッド状遺構が走る。検出面からベッド状遺構までは7cmを測り、さらに10cm程度で底面に達する。また住居中央部はさらに深くなり、検出面とのレベル差は40cmになる。1号溝によって切られることから判然としないが南辺に沿ってもベッド状遺構とレベル的には判断することができよ



第49図 20号竪穴住居実測図 (1/60)



第 50 図 20 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3、6 は 1/2)

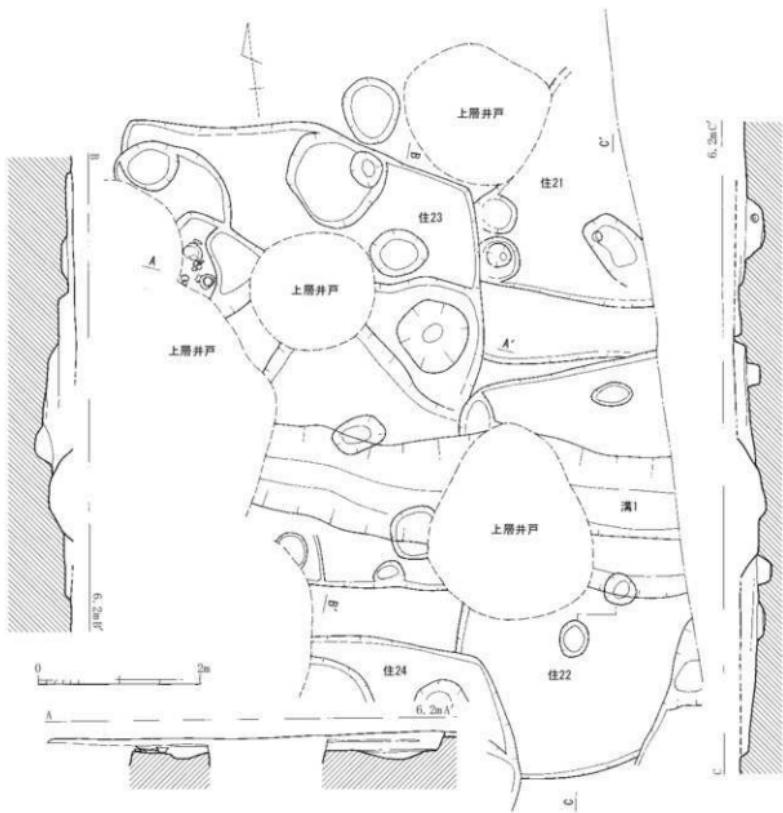
う。住居内西寄りの位置に土器が複数個体押し潰された状態で出土した。

出土遺物 (第 53 図)

1・2 は壺。ともにラッパ状に大きく開く口縁部である。1 は口縁端部側面に斜め方向に浅く太いキザミを巡らせる。3 はく字形に屈曲して外反する口縁部の甕。4 は壺ないし甕の底部。底面は凸レンズ状となる。5 はく字形に屈曲して外反する口縁部の鉢。6 は高杯の脚。脚の高さは 7cm を測り、小形の部類となる。7 は支脚か。円盤状の上部からハ字形に広がる体部がのびる。

24 号竪穴住居 (第 54 図)

北東側にて 22 号竪穴住居を切り、南側は 25 号竪穴住居および 26 号竪穴住居により切られる。また西側は井戸により失われる。東辺が弧を描くいびつな形状であるが、北辺は北から 75 度西へ振る方向に直線となる。住居北辺に沿って 70 cm の長さにわたって炭化物および焼土を含む面が確認された。検出面から 12 cm 下げた面であり、このレベルで貼床が存在するものとみ



第 51 図 21 ~ 23 号竪穴住居実測図 (1/60)

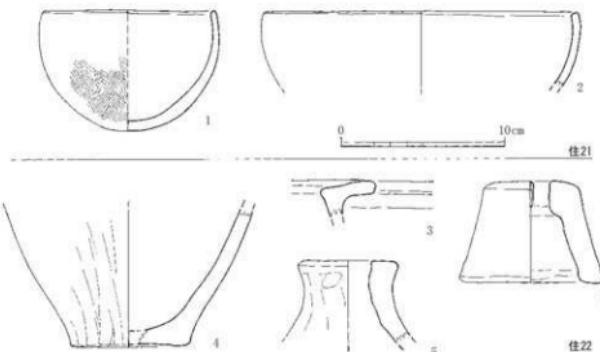
られる。地山面はさらに 10 cm 程度下げた時点で検出される。床面において比較的大形のピットが検出されたが、深さは検出面から 40 cm を測り、湧水のため調査に苦慮した。

出土遺物（第 53 図）

8 は緩やかに弧を描き外反する口縁部の甕。屈曲部内面には比較的明瞭な稜を有する。胴部は内外面ともにハケメによる調整である。9・10 は壺ないし甕の底部で平底の形態。11 は高杯の脚端部もしくは甕等に伴う脚台。

25 号竪穴住居（第 54 図）

井戸群により西側を大きく失う。軸を北から 30 度東へ振る方形プランの竪穴住居で一辺 2.9m と小形である。北側で 24 号竪穴住居、東側で 26 号竪穴住居を切り、南西側で 27 号竪穴住居に切られるという複雑な切り合い関係の中にある。住居内北側で検出したピットは 24 号竪穴住居に伴う可能性が高く、また南側のピットも 26 号竪穴住居西側の深い土坑に繋がるかとみられる。



第52図 21・22号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (第53図)

12は弧を描きながら強く外反する口縁部。胴部から口縁部にスムーズに続く形態で、頸部内の稜は弱い。13は壺ないし甕の底部。底面は狭く、底径は3.8cmを測る。

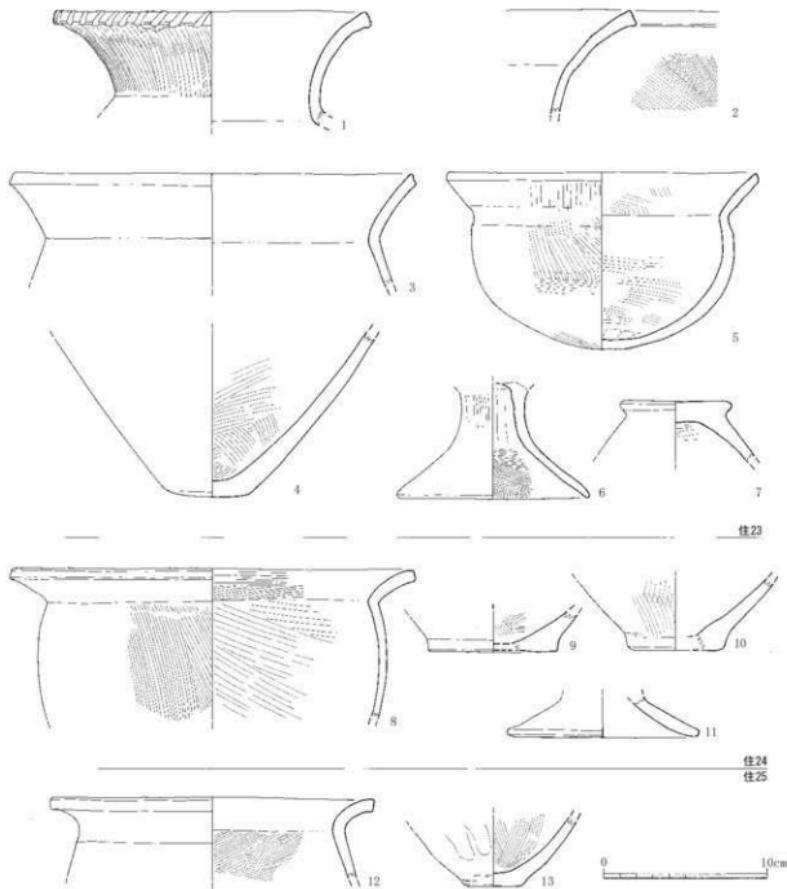
26号竪穴住居 (第54図)

軸を北から20度東へ振る方形竪穴住居。西側で25号竪穴住居および27号竪穴住居に切られ、北側で24号竪穴住居を切る。南側は調査区外へ続き、約半分が検出されているものとみられる。検出面から15cm下がった高さで調査区際に焼土・炭化物がひろがる面が確認され、貼床面と判断される。西辺に沿って鉢を中心まとめた量の土器がならんだ状態で出土した。口縁を上にして置かれるものと、口縁を下にして伏せられているものの両者があるが、元位置を保つものと考えられる。通例、土器が多数出土する住居は甕が主体を占めるが、当住居のように鉢が主体となる事例は珍しい。

西側で大きく下がる土坑状のオチコミがあり、湧水のため床面は正確には検出できなかったが、検出面からの深さは75cmを測る。住居に伴うとしては非常に深く、住居に先行する土坑が存在した可能性がある。

出土遺物 (第55・56図)

1は複合口縁壺。ただし27号竪穴住居の出土破片と接合するため、どちらの住居に帰属するかは明瞭ではない。口縁部は直立し、それに至る口頸部は強く弧を描きながら胴部から立ち上がる。2は球形の胴部に緩やかに弧を描きながら外反する口縁部が続くもの。口縁端部には細かいキザミがみられる。3はく字形に屈曲し外反する口縁部の甕。胴部は長胴となり、外面にはタタキ痕を明瞭に残す。4～6は直線的にのびる口縁部を有し、胴部はやや扁平な球形となる壺。4は小形で、口縁部は開き気味。それに対して5・6の口縁部はわずかに内傾する。7～9はやや扁平な球形の胴部に外反する口縁部が続くもので、鉢に分類すべきか。6も含め、胴部最大径付近に製作単位があり、それを境としてハケメの方向等、調整手法が異なる。10・11は高杯。杯部は半球形で直線的に大きく広がる口縁部が続く。内外面に放射状に暗文が施され

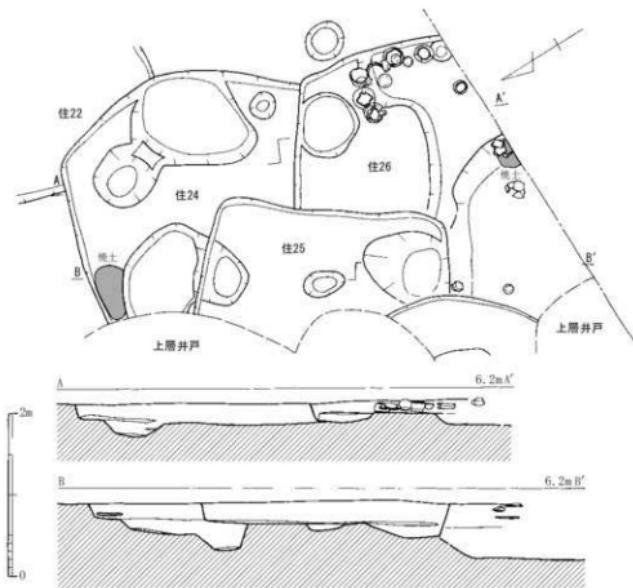


第53図 23～25号竪穴住居出土遺物実測図（1/3）

る。11の脚部は大きくハ字形に開くもので、高さは低く4.0cmを測る。近接する2孔をセットとし、対向する位置に合計4孔の穿孔が穿たれる。12～16は鉢。いずれも半球形の形態で、口縁部はわずかに内湾するものが多いが、16はやや外反する。17・18は大形の鉢。タタキによる成形で内外面ともにハケメにより調整される。19は手づくね土器で、浅い楕円形を呈する。20は袋状鉄斧。刃部周辺は鋒が厚く観察しがたい。

27号竪穴住居（第57図）

隅丸方形の竪穴住居で、長軸3.9m、短軸3.0mを測る。南辺を除き検出面から8cm下げたレ

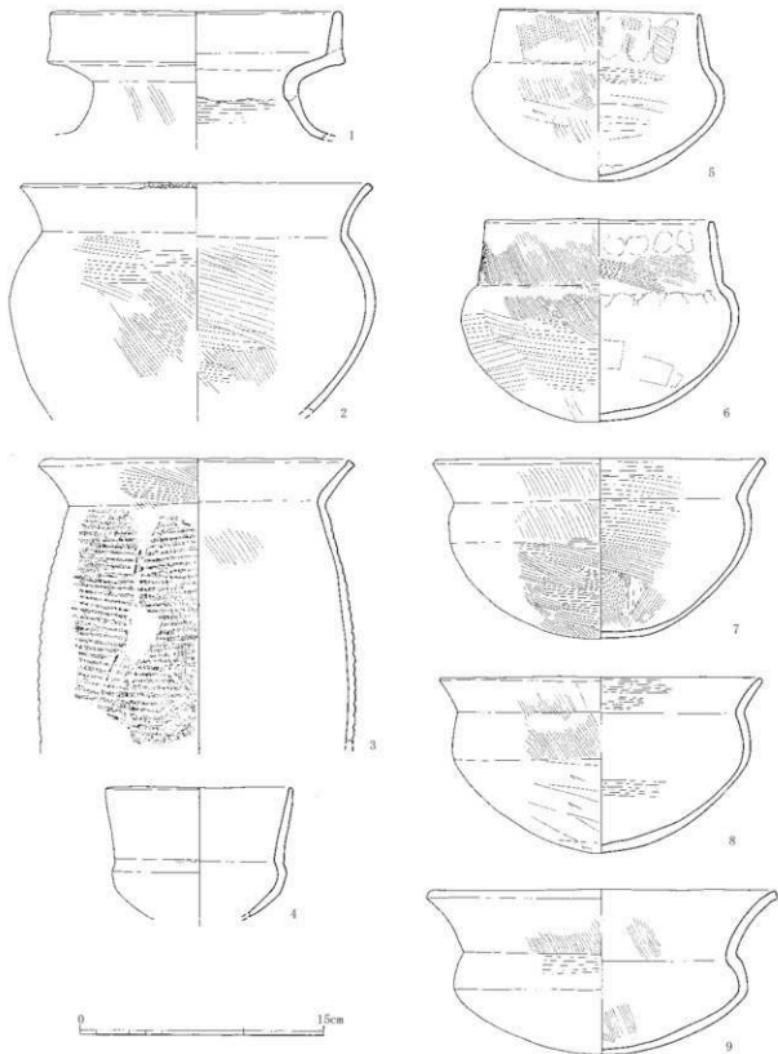


第 54 図 24 ~ 26 号堅穴住居実測図 (1/60)

ベルでベッド状遺構を巡らせる。ベッド状遺構の幅は 50 ~ 90 cm を測る。床面はさらに 10 cm 下げたところで検出されたが、柱穴や炉は検出されなかつた。元位置を保つ状態ではないもののまとまった量の土器が出土した。下記のとおり在地的な甕を含むものの特異な形態の資料が多く含まれ、また器種的にも高杯が多く含まれる等、特筆される事項が含まれる。北西側で 28 号堅穴住居、西側で 30 号堅穴住居を切り、東側では 25・26 号堅穴住居を切ることから、この住居集中地区では最も新しく位置付けられる。

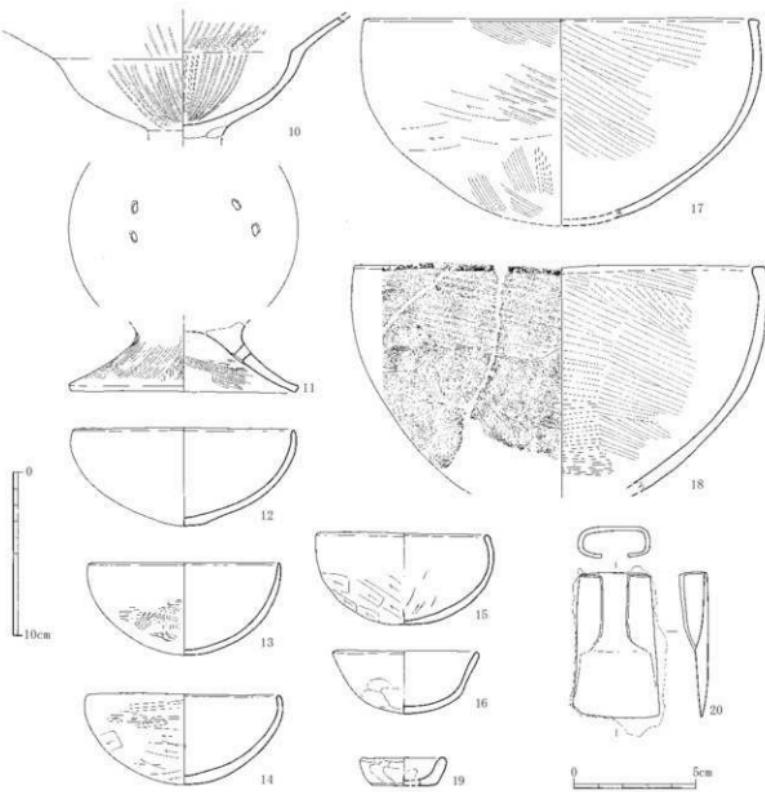
出土遺物 (第 58・59 図)

1 は球形の胴部に細い口頭部が続くもので、特異な形態。口頭部は接合する資料がなく、どのような形状かは不明。底部に径 2cm 程の狭い平坦な底面をつくる。外面は斜め方向に幅の広いミガキが施される。2 は弧を描きながら外反する口縁部をもつ壺で、球形の胴部が続く。3・4 は直線的に開く口縁部の壺。胴部は扁平な球形となろう。5 は直線的にわずかに開く口縁部。口径 9cm と小さく、厚さ 3mm 程度と薄い。6 は徐々に開く口縁部形態の壺。胴部との境は不明瞭で、なだらかな肩となる。7 も同様の形態であるが、接合しないため別に図化した。口頭部と胴部との境は 6 よりも明瞭であり、丸みを帯びる胴部が続くもので、器壁は 3 ~ 5mm 程度で薄い。8 ~ 14 は甕。口縁部はいずれもく字形に屈曲するもので、緩やかに外反する形状。8 ~ 10・14 は長胴タイプで、11 ~ 13 は胴部最大径が口径を上回る胴がはるタイプ。両者ともタタキ成形で、ハケメにより調整する。15 ~ 22 は高杯。15 の杯部は角ばった鉢形の杯部に直線的



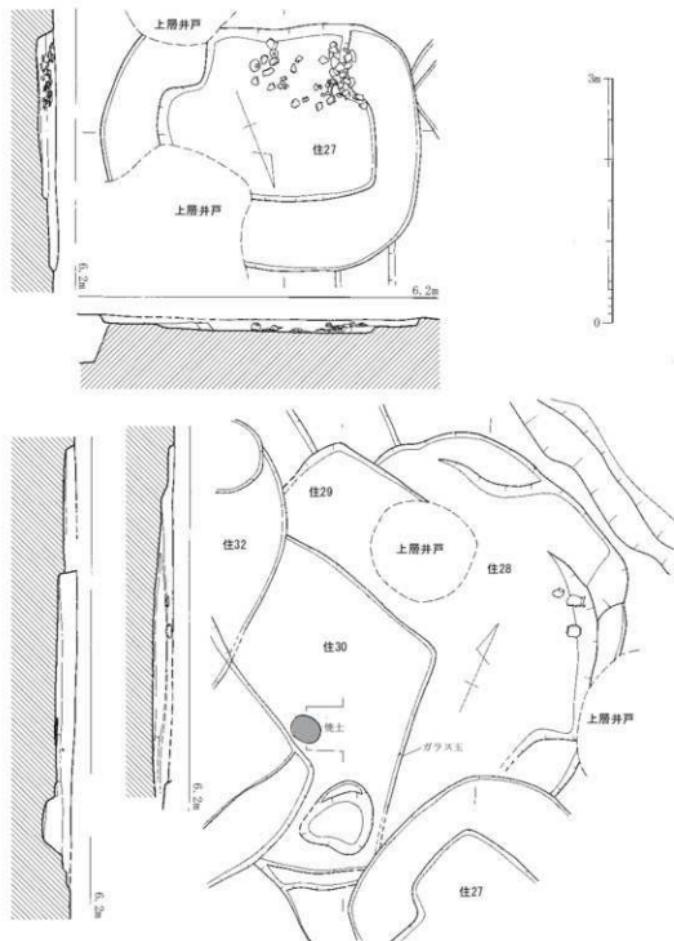
第55図 26号竪穴住居出土遺物実測図① (1/3)

にのびる口縁部が続く形状で、口縁部内面は緩やかに内湾し口縁部側面に文様帯をつくる。口縁部内外面と坏部一段目外面に波状文を巡らせる。脚柱部は内実で脚部に向かってわずかにひ



第56図 26号竪穴住居出土遺物実測図② (1/3、20は1/2)

ろがる形状。脚端部に向かって大きく直線的に広がった後に強い稜を経て弧を描きながら脚端部に至る。直線的に広がる面に透孔が穿たれるが、おそらく3ヶ所設けられるとみられる。全体的に磨滅が進むが、ハケメのちミガキ調整と観察される。16～18は直線的に大きく広がる口縁部で、坏部と口縁部との境の接合部に稜が生じる。調整はハケメを主体とするが、16の外側の一部と内面および17はミガキによる調整である。19は楕形の坏部に緩やかに外反する口縁部が続くもの。20・21は半球形の坏部をもつ小形の高杯。20の内面は放射状にミガキが施される。20は径2.8cmの筒形の脚柱部が続くが、21は径5.0cmの大きくハ字形に開く脚部となる。22は大きくハ字形に開く脚部。23はジョッキ形土器の底部。底面は平坦で銳角で体部が立ち上がり、底部角の稜は鋭い。24は大形の鉢で口縁部は内湾し口縁端部は四角く收める。25は径6.5cmの円盤。甕胴部片の周縁を打ち欠いたものである。



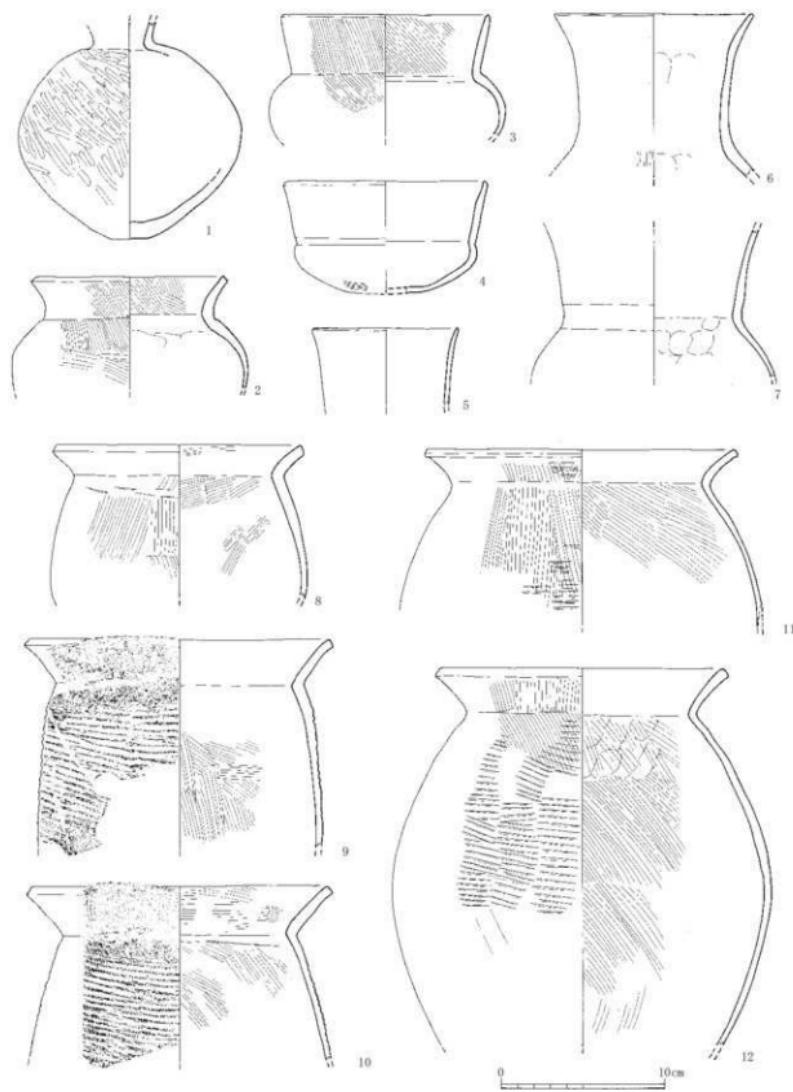
第 57 図 27 ~ 29 号竪穴住居実測図 (1/60)

28号竪穴住居（第 57 図）

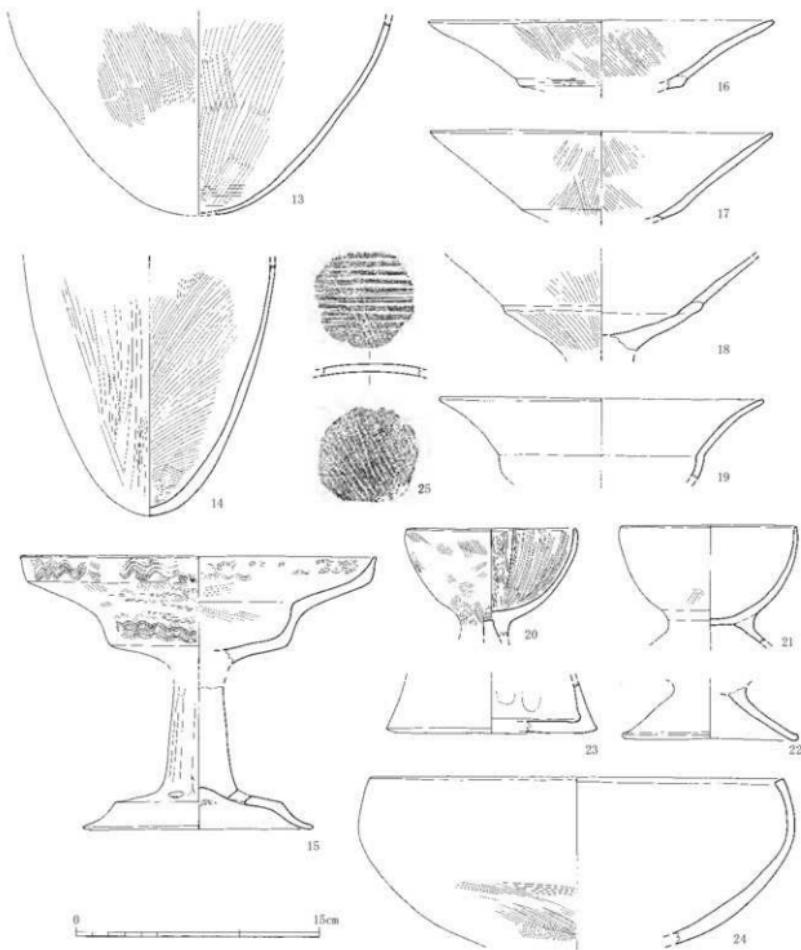
南側で 27・29・30 号竪穴住居に切られ、西側の 31 号竪穴住居を切るものとして検出したが、いびつな形状となり、また 29 号竪穴住居の輪郭がはっきりとしない等、複雑な切り合いのため正確に検出できない可能性がある。床面は検出面から 15 cm 下げた時点で検出した。

出土遺物（第 63 図）

1 はく字形に屈曲して外反する口縁部をもつ甕。器高は 16.2cm を測り、丸みを帯びた胴部と

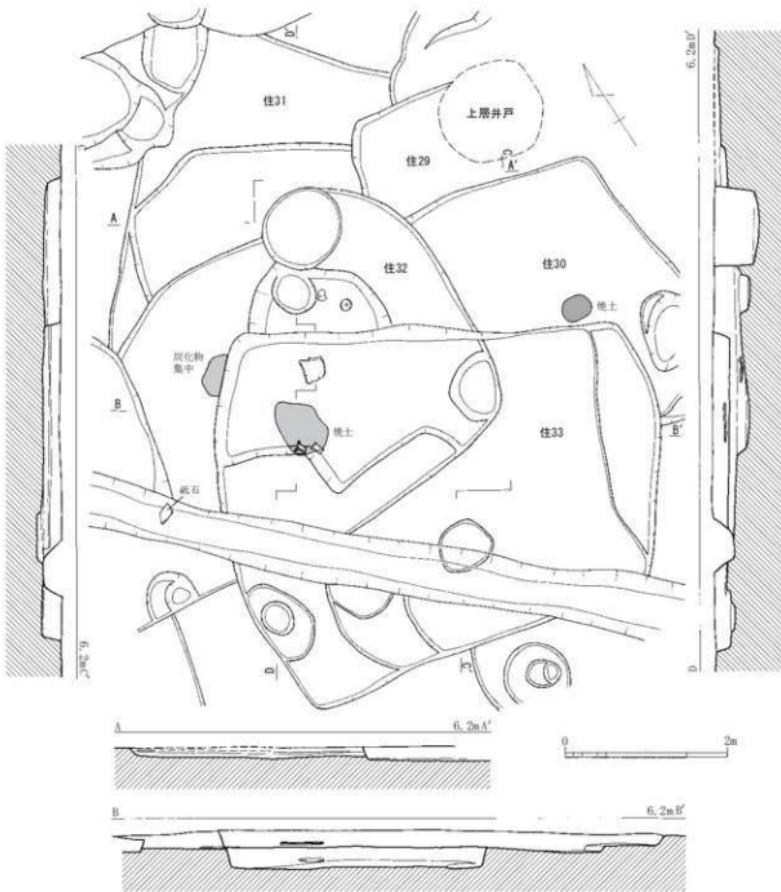


第58図 27号竪穴住居出土遺物実測図① (1/3)



第59図 27号竪穴住居出土遺物実測図② (1/3)

なる。底部は凸レンズ状となる。内外面ともにハケメによる調整であるが、胴部下半は上半に比べて粗いハケメとなり複数の工具が用いられていると観察される。2・3もまたく字形に屈曲する口縁部であるが、その屈曲の稜は弱い。4~6は壺ないし甕の底部。いずれも平底であり、5はつくりが粗雑で厚みがある。7は器台。口縁端部は欠損するが、ハ字形に高く立ち上がる体部に弧を描き強く屈曲する口縁部が続くものである。

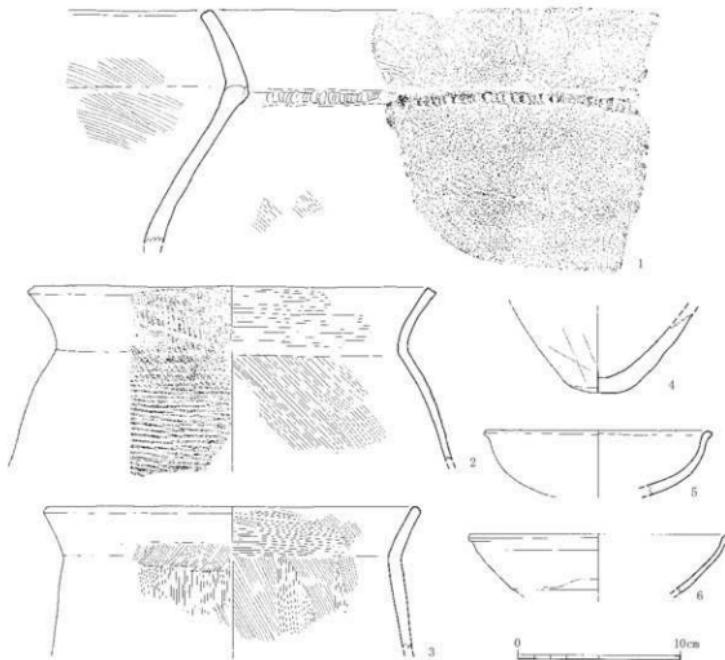


第 60 図 29 ~ 33 号竪穴住居実測図 (1/60)

29 号竪穴住居 (第 60 図)

北西コーナーが検出できた程度に留まり、28 号竪穴住居との切り合いの中で掘削を間違えた可能性があり、28 号竪穴住居内の段落ちが 29 号竪穴住居に伴うものであろうか。西側で 32 号竪穴住居に、南側で 23 号竪穴住居に切られ、北西側で 31 号竪穴住居を切る。軸は北から 15 度程度東へ振るものであろう。

29 号竪穴住居として取り上げることができた遺物で、実測しうるものはなかった。



第 61 図 30 号堅穴住居検出面出土遺物実測図① (1/3)

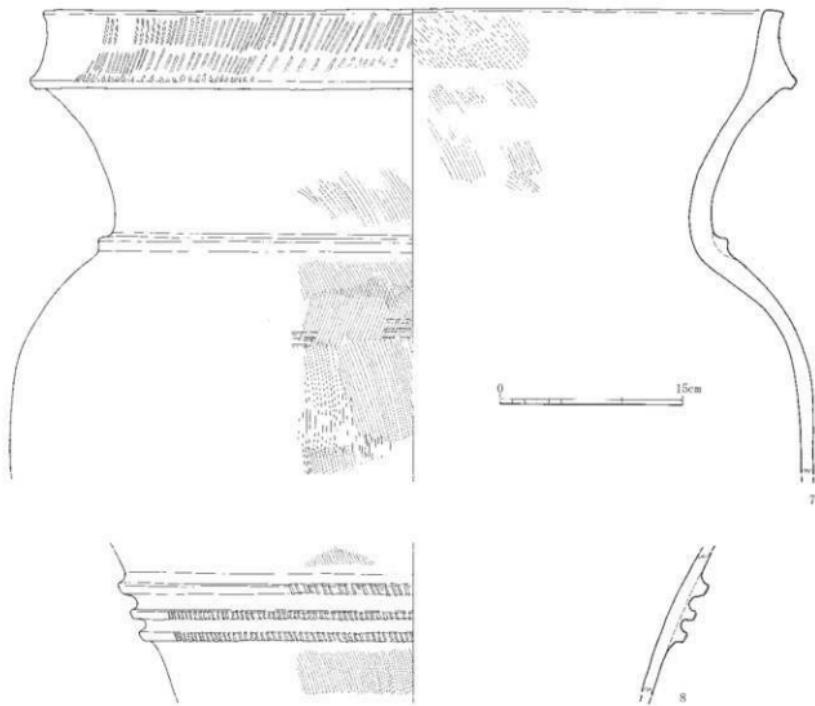
30号堅穴住居（第60図）

3 区上層において 30 号堅穴住居に該当する位置で多数の弥生土器が出土し、仮の遺構番号 (D40) を付して取り上げを行っていた。上層段階では精査しても遺構の輪郭が検出されなかつたが、その遺物を 30 号堅穴住居検出面として報告したい。

下層で検出したこの住居は南西側で 33 号堅穴住居、西側で 32 号堅穴住居に切られる。検出されたコーナーがいずれも鈍角となり、隅丸方形のプランになるかもしれないが、東辺から考えて住居の軸は北から 10 度西へ振るものといえる。南北の規模は 3.5m。検出面から 18 cm 下げた時点で住居中央から東寄りとみられる地点において径 40 cm の焼土集中部が検出され、炉跡とみられる。

出土遺物（第 61～63 図）

第 61・62 図は 30 号堅穴住居検出面の出土遺物。1 は大形の袋状口縁壺。逆く字形に屈曲する稜線は緩やかであるが、キザミを連続させることにより装飾する。2・3 はく字形に屈曲する口縁部の壺である。3 は壺底部で底面は径 3cm 程度の狭い面をつくり凸レンズ状を呈する。4・5 は中世の遺構面に伴う混入品。4 は土師器坏で、5 は白磁である。6 は大形の壺で、頸部から弧を描き緩やかに開く口頸部に、口縁部にて内面に器壁を立ち上げ、断面形状が逆く字形



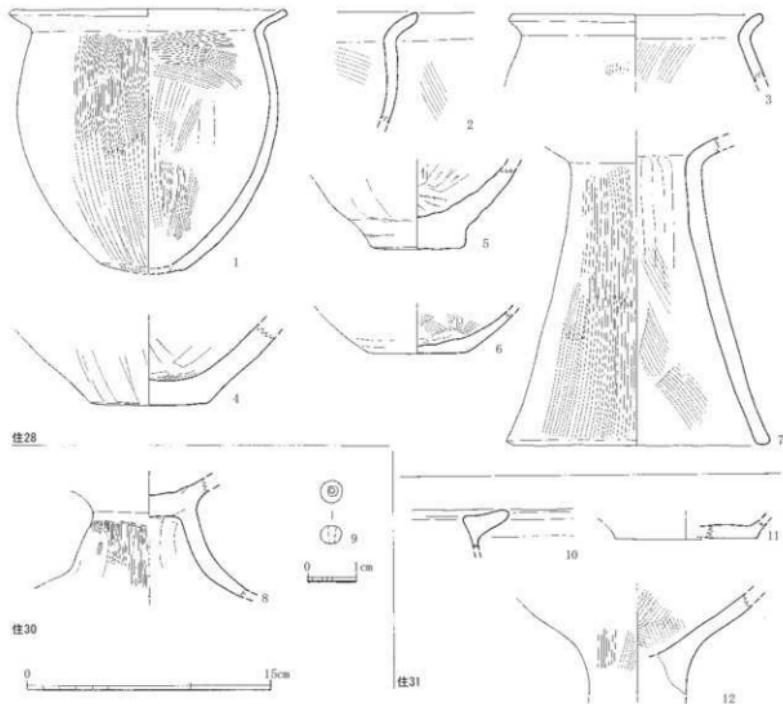
第62図 30号竪穴住居検出面出土遺物実測図② (1/4)

となる複合口縁をつくる。複合口縁の屈曲部外面は外方へ突出される。口縁部側面は斜め方向に長いキザミを連続させる。頭部には断面台形の突帯を巡らせる。胴部は肩が張る形状で、最大径も肩にあるものとみられる。7は6と同一個体と思われる。胴部下半の突帯であり、3条の断面台形の突帯側面にはキザミが施される。

下層で30号竪穴住居として取り上げてきた遺物はごくわずかである（第63図）。8は高杯の脚柱部。環部から弧を描きながらハ字形に大きく開く形態である。透孔の一部が確認できるが、孔数等は残存が悪く確認できない。9はガラス小玉で、色調はスカイブルー。

31号竪穴住居（第60図）

平面プランが方形の竪穴住居で、軸は北に向かって40度東に振る。北西側を1号溝およびピット群に切られ、東側から南側にかけて28・29・32・34号竪穴住居に切られる。その結果としておそらく住居全体の1/4程度が検出されているものと考えられる。北東辺に沿って幅1.0～1.3 mのテラスがあり、検出面からテラスまでは深さ5 cm、床面までは13 cmを測る。床面にてピットは確認されなかった。



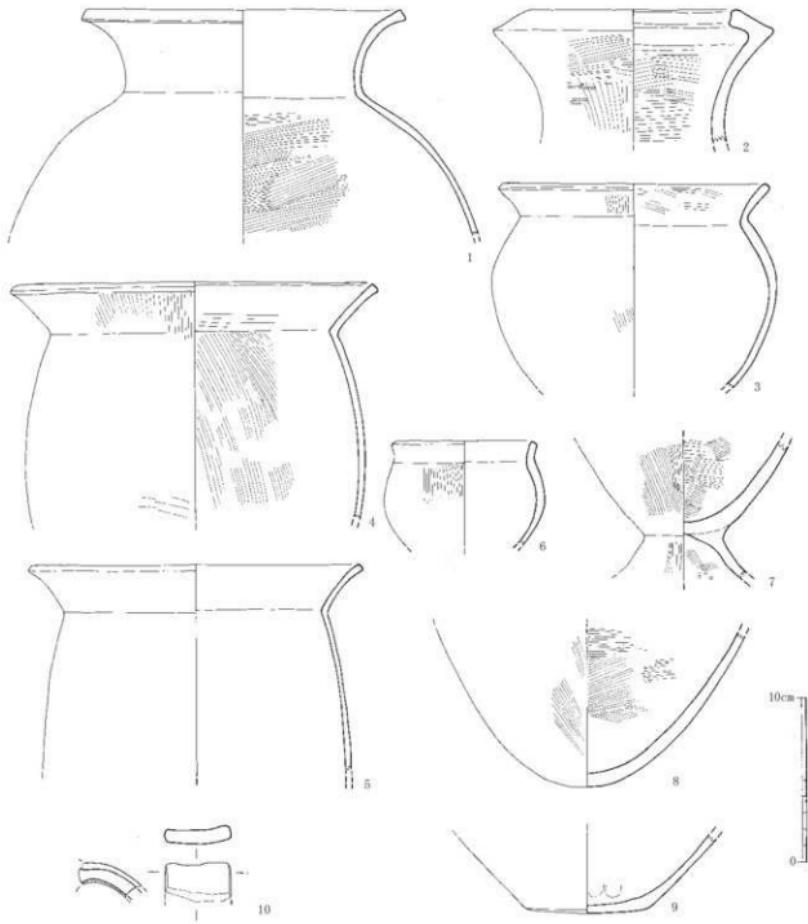
第 63 図 28・30・31 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3, 9 は 1/1)

出土遺物 (第 63 図)

10 は逆 L 字形に屈曲する口縁部。口縁部上面はわずかに弧を描き内傾する。11 は平底の底部小片。12 は甕の底部付近で、厚手の底部となる。

32 号竪穴住居 (第 60 図)

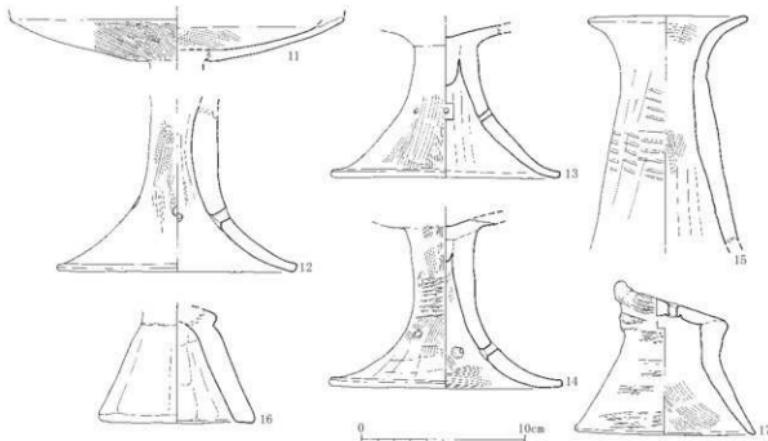
西側を 34 号竪穴住居および 14 号溝に切られ、北側から東側にかけては 29 ~ 31 号竪穴住居を切る。南側で 33 号竪穴住居に切られるが、33 号竪穴住居の床面を下げた時点で 32 号竪穴住居の輪郭が検出された。その結果、南北 3.7m の規模が確認され、東西については 4.0m 以上とみられる。住居の軸はほぼ南北に向くものであろう。33 号竪穴住居下で検出された範囲で L 字形に巡るテラスが確認され、ベッド状構造かと思われる。検出面から 15 cm 下げたレベルで住居中央より西寄りに炭化物が集中する地点があり、炉かとみられる。その東に 1.7m × 1.0m 程度の楕円形ピットがあり、ピットとその西部にかけて比較的多くの遺物が出土した。



第64図 32号竪穴住居出土遺物実測図① (1/3)

出土遺物 (第64・65図)

1は円弧を描きながら大きく外反する口縁部をもつ壺。肩が丸く張る胴部に続く。2は袋状口縁壺。逆く字形に屈曲するコーナーはやや丸みをもつが明瞭である。3～5はく字形に屈曲する口縁部の壺であるが、3は胴部が球形となり口径と胴部最大径がほぼ一致し、壺に分類すべきか中間的といえる。4・5は長胴の形態である。6は球形の胴部に直立に近い短い口縁部がつくもの。7は長胴形態の胴部にハ字形に広がる脚がつくもの。8・9は底部で8は丸底、9は凸レンズ状を呈する。10はジョッキ形土器の把手部。体部との接合面が残る。11～14は高杯。



第65図 32号竪穴住居出土遺物実測図② (1/3)

11は坏部で口縁部の屈曲部から先を欠損する。大きく開く形態で浅い。12～14はラッパ状に広がる脚部。12は4方向に穿孔が設けられる。13の穿孔も4方向かとみられるが、穿孔位置が高い点が特徴的。14は穿孔が5方向に設けられる。13・14の坏部との接合は円柱状の脚柱部に坏部が載るもので、坏部から脚柱部内に高いヘソ状の突起がのびる。14は脚柱部にタタキ痕がみられ珍しい。15は器台で、細く高い形態。弧を描き外反する口縁部は薄くつくられるが、体部は厚い。16・17は支脚。17は傾斜した上面の中央に小穿孔を設け、最上部に角状の突起をつくりだす。

33号竪穴住居（第60図）

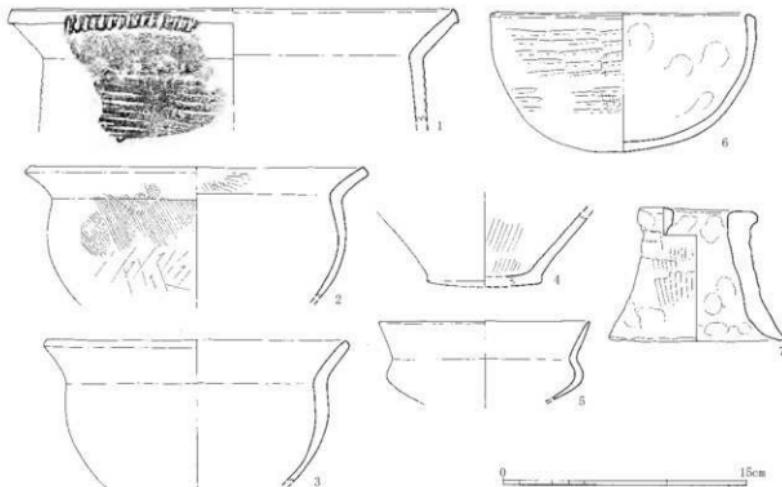
住居の軸を北に向かって西へ60度振る長方形プランの竪穴住居である。北側から東側にかけて30号竪穴住居と32号竪穴住居を切る。14号溝が住居を縦断するが、14号溝よりも南側で検出したラインは北側での検出ラインと方位がずれる。住居内北西寄りの位置に焼土のひろがりが検出され、支脚等が出土した。検出面から12cm下げたレベルであり、この面が貼床面と判断される。

出土遺物（第66図）

1はく字形に屈曲して直線的に開く口縁部。口縁端部の側面にはキザミを連続させる。2・3はく字形に屈曲して外反する口縁部の鉢。5は胎土が精良で器形は畿内系の小形丸底壺に近い。4は甕の底部小片で、凸レンズ状の底面となる。6は半球形の鉢。外面にタタキ痕を残す。7は支脚。ハ字形に開く形態で、上面に平面は設けない。指オサエによる成形で凹凸が多い。

34号竪穴住居（第67図）

東側で32号竪穴住居、南西側で35号竪穴住居を切る方形プランの竪穴住居。14号溝が斜めに横切るが、14号溝より北は遺構の輪郭が不鮮明で、広く取りすぎているかもしれない。検



第66図 33号竪穴住居出土遺物実測図（1/3）

出面から床面まで 10 cm を測る。柱穴は不整形で浅く、主柱穴は不明。なお、北西側にある方形状土坑も竪穴住居になる可能性は残されるが、確証の得られない形状のため報告からは外す。

出土遺物（第68図）

1 は直線的にやや内傾する口縁部で頭部に断面三角形の突帯を巡らせるもので、壺となろうか。2 は算盤玉形の胴部をもつ壺で、胴部上半の上位に沈線文を重ね、胴部最大径との間に重闇文を配するもので、肥後地域を中心に分布する免田式土器。3 は壺の胴部最大径で断面三角形の突帯を 3 条巡らせる。4～6 は甕。4 は口縁部を欠損するが、短く外反する口縁部が続くもの。底部は平底である。5 はく字形に屈曲して外反する口縁部の甕。6 は底面が平底に近いが凸レンズ状となる。7 はコップ形というべきか。平坦な底部に直立する体部が立ち上がる。器壁は 3mm 程度とごく薄い点も特徴的である。8 は器台でハ字形に広がる。9・10 は鉢。平底に近い底部から直線的に広がり口縁部に至る。口縁端部は丸く收める。11・12 は同一個体であろう。楕形を呈する手づくね土器で、底面には径 2.5cm 程度の平坦部をつくる。縦方向にタタキ痕状の凹凸が連続する。13～15 は尖底の手づくね土器。指オサエによる成形で凹凸が著しい。16 は砂岩製の砥石である。

35号竪穴住居（第67図）

北東側で 34 号竪穴住居に切られる位置にある。住居の軸は北に向かって 70 度東へ振る。検出面から床面まで 8cm 程度の深さであり、ごく浅い。東西南北ともに 3.5m を測り、ほぼ正方形ということができる。東西住居内の中央東寄りにある楕円形ピットからは甕が横転した状態で出土した。なお、住居南東角にある長軸 2.5m を測る土坑は 34 号竪穴住居に切られるもので、34 号竪穴住居を下げた時点で遺構の輪郭が検出された。

出土遺物（第69図）

1はラッパ状に開く口縁部の壺。2は袋状口縁壺。緩やかに弧を描き外反する口縁部に内湾する口縁部がつづく。3～6は甕。3は口縁部と胴部との境が不明瞭な形状。4は底面が凸レンズ状を呈する底部。5は丸みをもつ胴部にはほぼ平底の底部が伴うもの。器壁は厚く1cm近い部位もある。6は底部から直線的に立ち上がる体部で、底面はほぼ平底である。

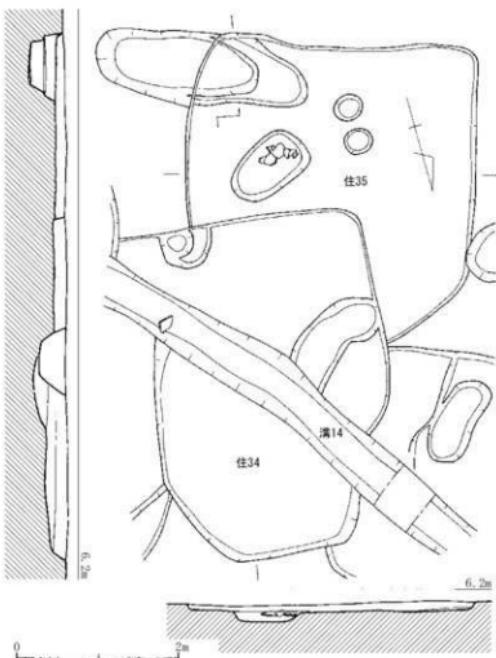
36号堅穴住居（第70図）

方形プランの堅穴住居で、北側は調査区外へのびる。南東側で37号堅穴住居を切る。また14号溝が住居跡を縦断する。住居の軸は北に向かって30度東へ振る。住居南東辺に沿って幅80cmのベッド状遺構が走り、その上面でまとまった量の遺物が出土した。住居のはば中央と

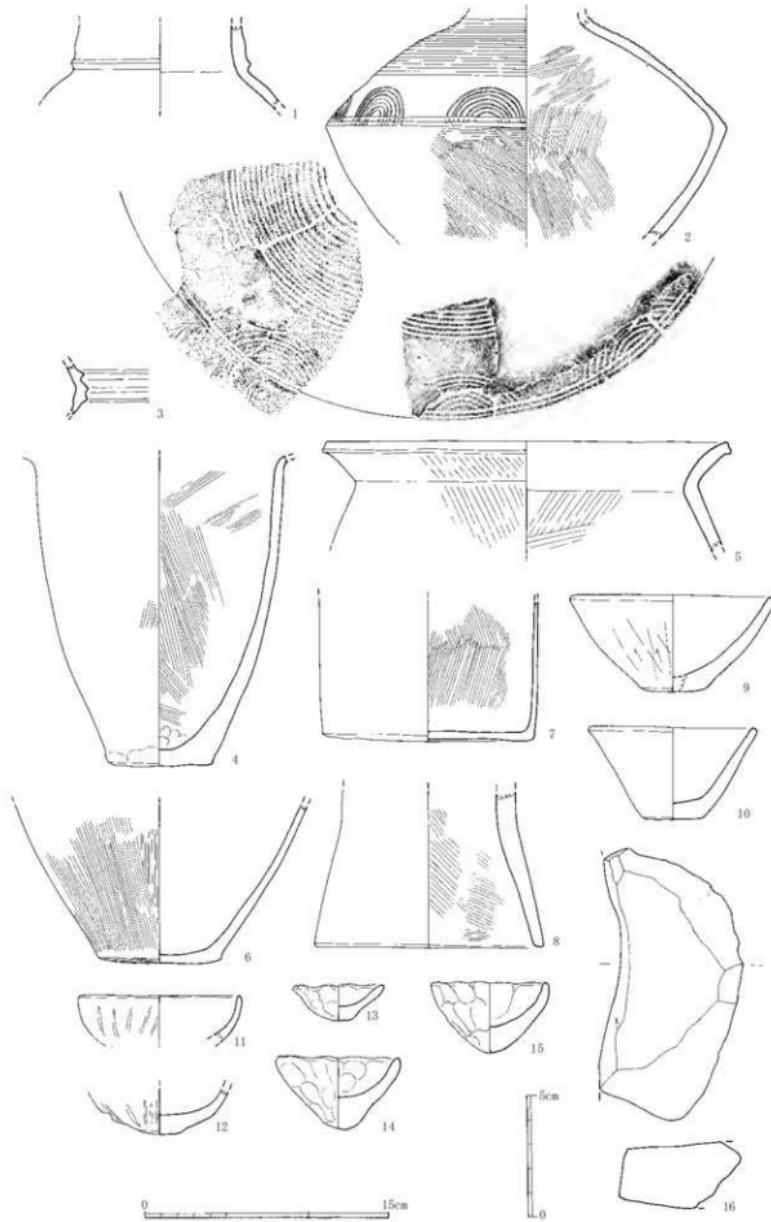
みられる位置に90cm×40cmの範囲で焼土が集中し、炉とみられる。遺構検出面からベット状遺構までは10cm、炉の検出された床面までは20cmを測る。東西の規模を5mとみて遺構検出を行ったが、南西角は大きな土坑状に深くなり不自然な形態になることから別遺構が切り込んでいる可能性が高い。

出土遺物（第71・72図）

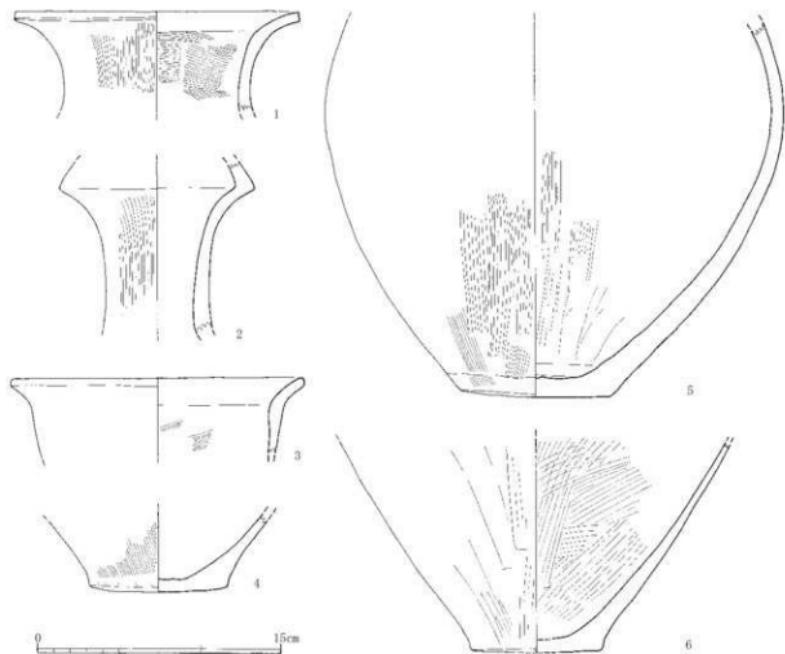
1は円弧を描き外反する口縁部をもつ甕。胴部は丸みを帯びる長胴形で、底部は丸底。胴部は内外面ともにハケメ調整である。2～8は甕。口縁部はく字形に屈曲して直線的に広がるか、もしくは緩やかに外反する。4は屈曲が緩やかで明瞭な稜を伴わない。胴部は長胴形とみられるが、6は丸みを有する。底部の状況が判然としないが、復元時も目立った底部は少なく丸底になるものと思われる。胴部の調整は内外面ともにハケメが主体を占める。タタキ痕を残さないのが特徴といえよう。9は高杯。内湾する杯部に弱い稜を経て外反する口縁部が続く。外面調整は粗いハケメによる。10は半球形の体部に直線的に開く口縁部が伴う鉢。体部外面はタタキ痕をナデにより消す。それ以外はハケメによる調整である。11は球形をなす胴部に緩やかに外反する口縁部がつづく小形の甕。12は11と同様の器種であろう。底部は丸底である。13は鉄鎌。着柄部は鋭角に折り曲げてつくりだす。



第67図 34・35号堅穴住居実測図(1/60)



第68図 34号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3、16は1/2)



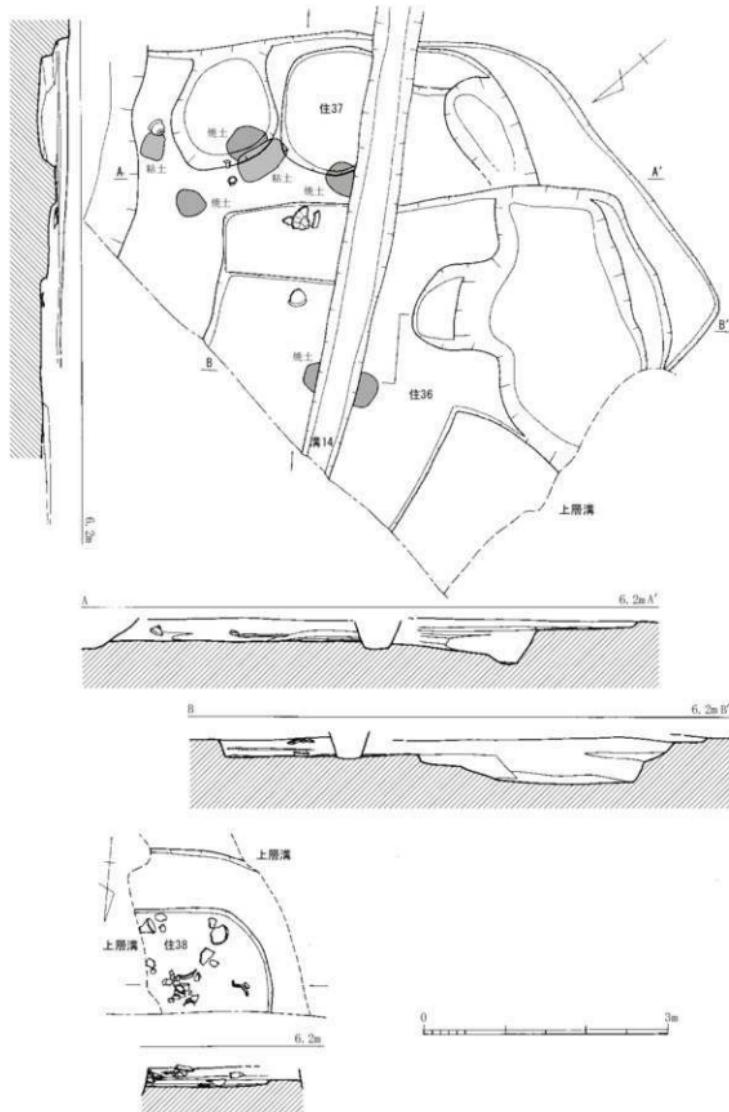
第69図 35号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

37号竪穴住居 (第70図)

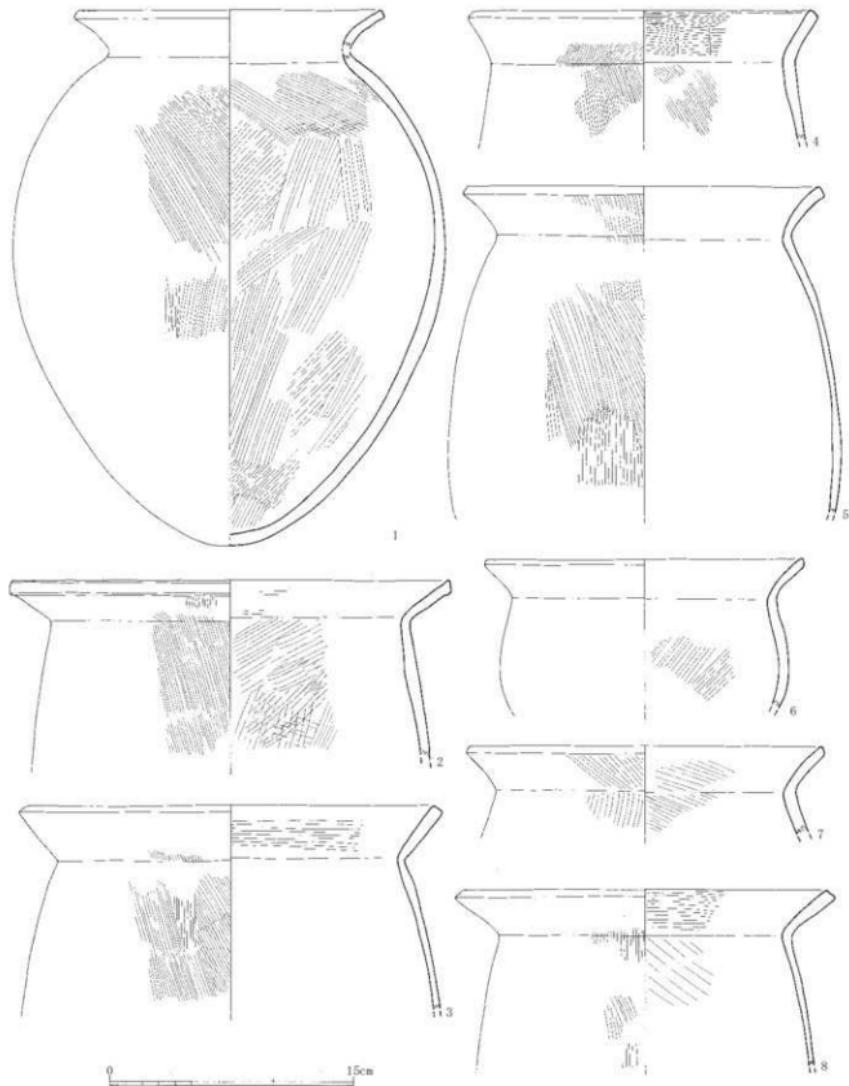
大半を36号竪穴住居に切られるが、南東辺は本来の形状を保ち、南西角が残ることから方形プランをなすものと判断される。住居の軸は36号竪穴住居と同一である。検出面から20cm下げた時点で灰白色粘土が比較的大きなまとまりをもって散在することが確認され、そのやや下位に焼土の広がりが認められた。その周辺から高杯や支脚が良好な状態で出土している。これら焼土等の存在する面が貼床上面と判断されるが、それを除去後に住居壁に沿って2基の径約1.5mの円形土坑が検出された。深さは共に遺構面から40cm程度となり深い。

出土遺物 (第74・75図)

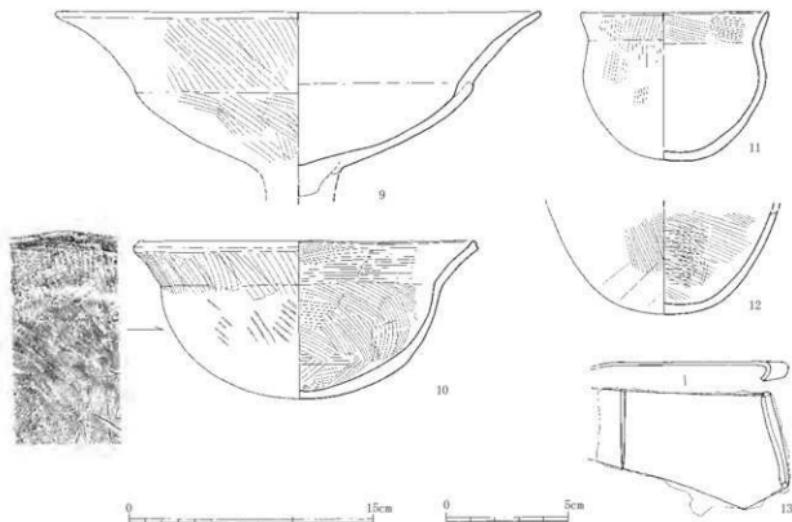
1は球形の胴部に比較的縮まった頸部をもつもので、壺と考えられよう。2はやや開き気味に直線的に立ち上がる口縁部を有する小形の壺で、胴部は球形をなす。3も2と同様の形態となろう。6は緩やかに外反する口縁部をもち、胴部は丸みを帯びる肩部を伴う甕。5・7～11はく字形に屈曲して緩やかに外反する口縁部。4・12は甕の底部で、4は丸底、12はごくわずかながら凸レンズ状の底面を有する。13は浅い球形をなす体部に緩やかに外反しつつ大きく開く口縁部をもつもの。胴部外面はタタキ痕を残し、底部付近にはミガキが観察される。14は脚台付の鉢もしくは壺である。15は小形の鉢。口縁部は直立し、体部は径の割りに深い。



第70図 36～38号竪穴住居実測図 (1/60)



第71図 36号竪穴住居出土遺物実測図① (1/3)



第72図 36号竪穴住居出土遺物実測図② (1/3、13は1/2)

16～18は高杯。16は大きく外反する口縁部で、磨滅が進行するが、内外面にミガキが観察される。17・18は脚柱部であり、17は直立する脚柱部から大きく円弧を描きながら底部に至るもの。18はラッパ状に開く形態。いずれも円形の小穿孔が穿たれるが、一段の個数は不明。19は器台。直線的にハ字形に広がる形態。20・21は支脚。上面に傾斜する平坦面をつくり中央に小穿孔を設ける。20は角上の突起をもつが欠損する。タタキによる成形であり、外面にはタタキ痕を顕著に残す。

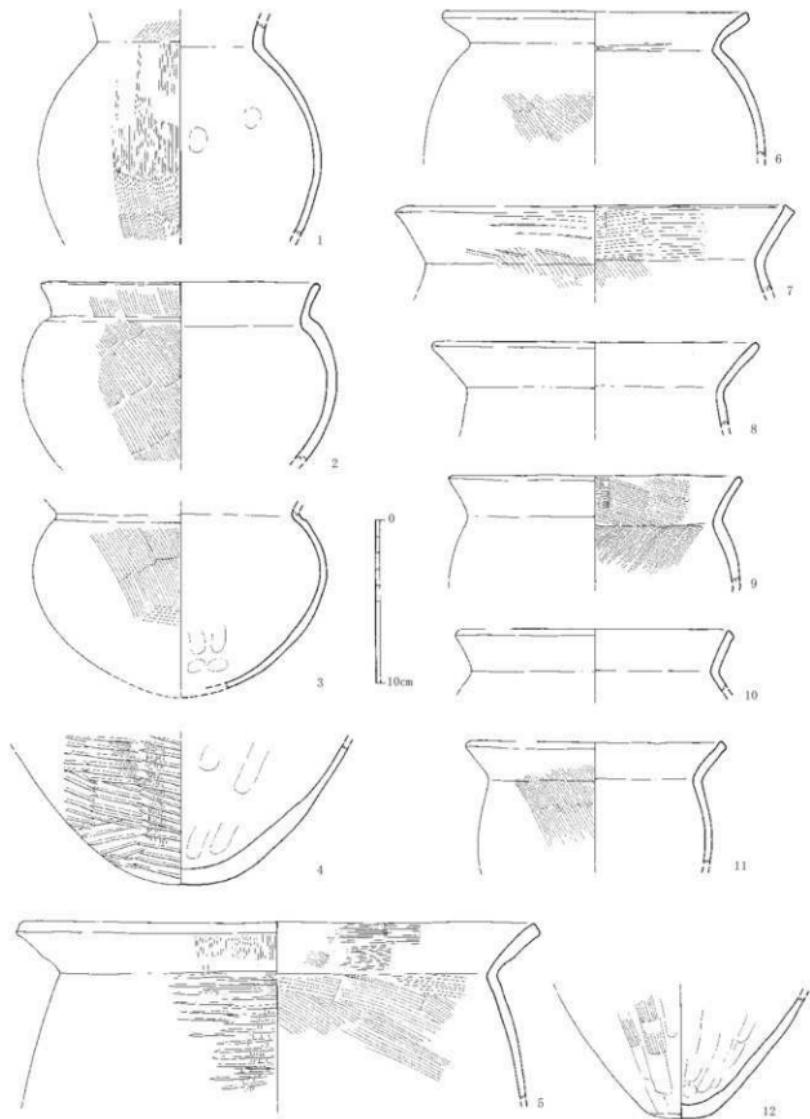
22・23は36号竪穴住居と37号竪穴住居の検出面にて出土した資料であるが、器種構成から後者に伴う可能性が高いと判断される。22は19同様の形態の器台で、外面にはタタキ痕を顕著に残す。23は支脚で、上面に強い傾斜の平坦面をつくり、中央付近に小穿孔を設ける。

38号竪穴住居（第70図）

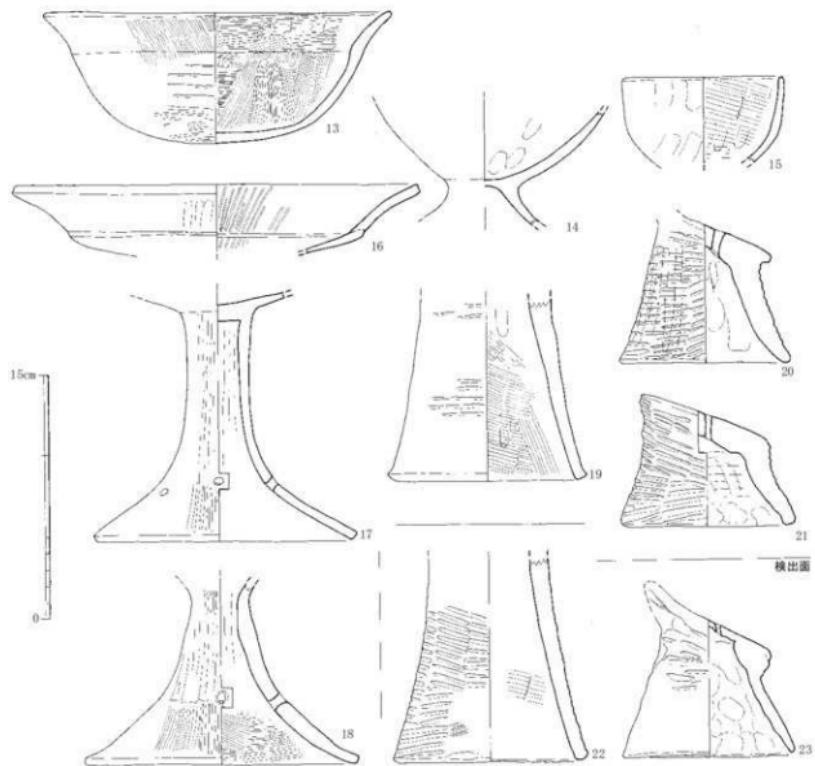
3区の中で最も西寄りに位置するもので、上層の7・8・11号溝に挟まれた中洲状の位置にある。住居南辺が検出された程度で規模は不明であるが、ベッド状遺構の形状から考えて隅丸方形の竪穴住居とみられる。遺構検出面からベッド状遺構までは13cm、床面までは24cmを測る。ベッド状遺構よりも内側から大形破片を含むまとまった量の遺物の出土がみられた。

出土遺物（第75・76図）

1～6は壺であり、他の住居に比べ壺の占める割合が高い。1は頸部から直線的に開き上位で外反度を増すもので、4も同様の形態を呈する。頸部に断面三角形の突帯を巡らせる。口縁端部側面には縦方向のキザミを1cm程度の間隔で刻む。2・3・6は外反する比較的短い口縁部をもつ壺。胴部へは丸みを帯びた肩が続く。5は弧を描きながら大きく外反して広がる口縁部



第73図 37号堅穴住居出土遺物実測図① (1/3)

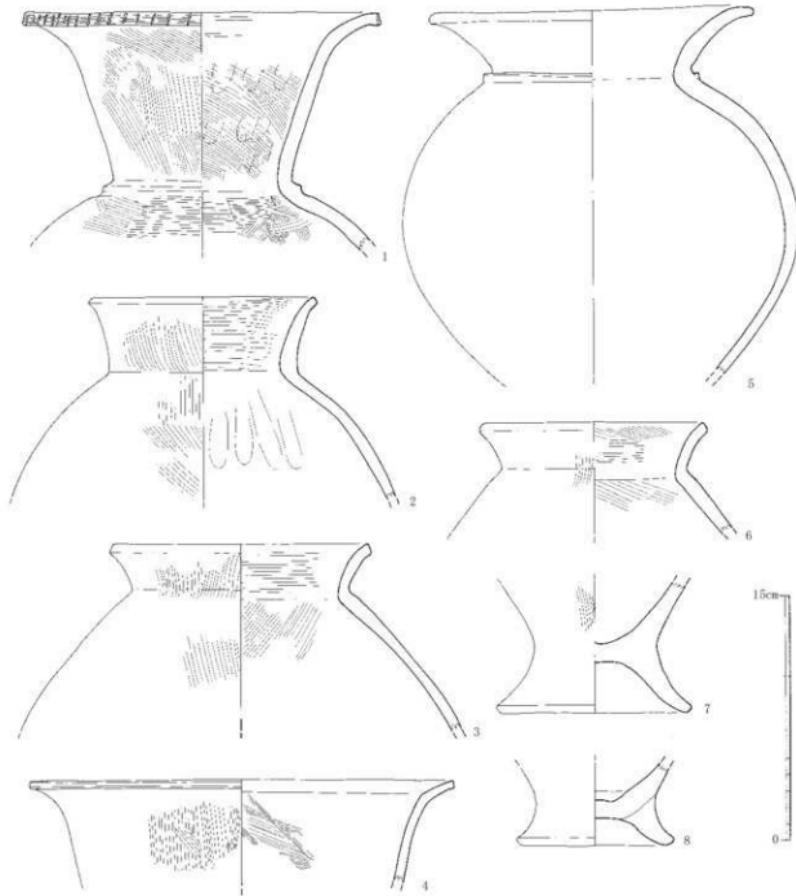


第 74 図 37 号竪穴住居出土遺物実測図② (1/3)

をもつ壺。頭部には断面三角形の突帯を巡らせる。7・8は壺ないし甕の底部で脚台が伴うもの。ハ字形に広がる脚台で7は高さ約4cm、8は高さ約2.5cmを測る。9～13は甕。く字形に屈曲して直線的に開く、もしくは緩やかに外反する口縁部。胴部の内外面の調整は斜め方向のハケメである。13は底部で底面は凸レンズ状を呈する。底部からの立ち上がりが直立することもあり、底面との境の量は明瞭である。14～18は高杯。14は半球形の体部に脚が付くが、脚は欠損する。15は直線的に広がる坏部に直立する口縁部を伴い、口縁部の断面形状は逆く字形となる。16・17は脚部。坏部との接合部から直線的に大きく開く形状である。18は半球形の坏部に強く外反する口縁部が伴う。

39号竪穴住居（第77図）

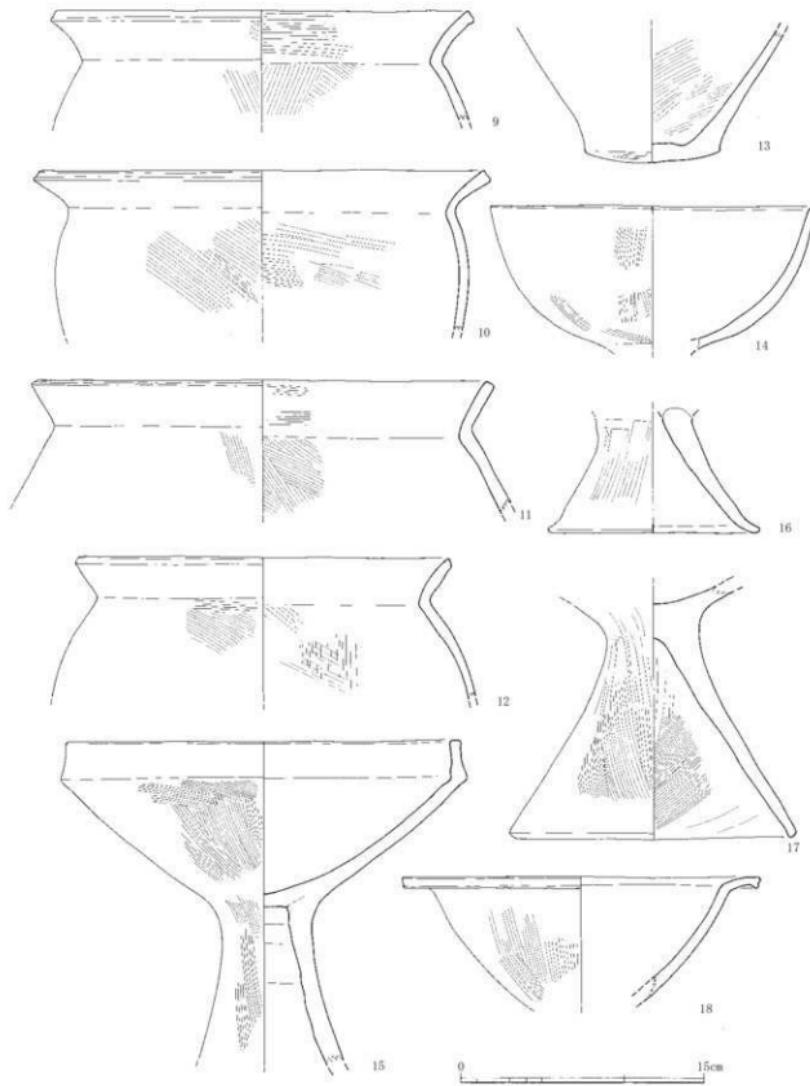
4区調査区北西部で検出したもので、北半分程度が調査区外へ延びるものとみられる。東辺



第75図 38号堅穴住居出土遺物実測図① (1/3)

は比較的明瞭に検出されたが、南～西にかけてはいびつな形状で判然とせず、一段下げた時点で方形堅穴住居に検出した。なお、判然としなかった西側には土器溜り状遺構を検出し、7号として報告する。

住居の軸を北に向かって25度東へ振るもので、東西辺で3.6mを測る規模をなす。検出面から貼床面までは深さ20cmを測り、炉と判断される焼土・炭化物のひろがりが検出された。さらに4cm程度下げた時点で地山面を検出したが、精査の結果でも柱穴は確認されなかった。39号堅穴住居として取上げた資料に実測できる資料はなかった。



第 76 図 38 号堅穴住居出土遺物実測図② (1/3)

掘立柱建物

1号掘立柱建物(第47図)

2区南西角で検出されたもので、大半が調査区外へ続くものとみられるが、2間×1間分が検出された。柱穴は平面形が径80cmの円形で、検出面からの深さは30~40cm。

土坑

1号土坑(第78図)

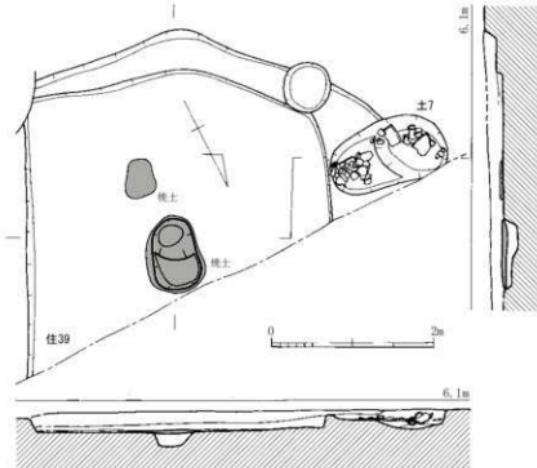
2区下層にて東側に向かって落ちる直線的な落ち込みラインを検出し土坑として扱ったが、これを一辺とする竪穴住居の可能性も残る。検出面から床面までは約15cmを測る。上層で検出した比較的多くの遺物が含まれる不整形土坑(D-29)は、1号土坑の上層として扱うのが適切と思われるため、遺物の説明は併せて行いたい。

出土遺物(第79・80図)

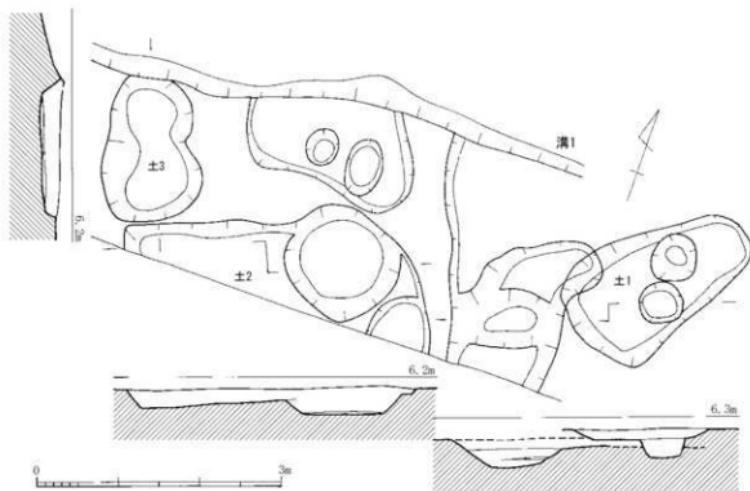
1~2は直線的にわずかに開く口縁部を有する壺。1は頸部に断面三角形の突帯を巡らせる。胴部は球形に大きく張る形状となろう。3~5はラッパ状に外反する壺口縁部。3は口縁端部は広くつくりキザミを連続させる。4はラッパ状に大きく外反する口頸部に直立に近く立ち上がる口縁部がつく複合口縁壺。口縁部屈曲部は外方に突出させ、細かいキザミを連続させる。6~11は鋤先口縁ないしそれに類する口縁をもつ壺で、いずれも小片となる。口縁部上面をやや内傾させるものが多い。12~13はく字形に屈曲して外反する口縁部をもつ壺。胴部外面にはタタキ痕を顕著に残す。13は口径17.0cmを測る小形品である。14~17はやや扁平な球形の胴部に口縁部が続く形態。14~16はやや弧を描きながら外反する口縁部で、17は直線的にわずかに開く口縁部である。18~20は壺ないし壺の底部。いずれも平底である。21~23は脚台部。弧を描きながらハ字形に広がる。24~26は高杯。杯部は半球形の杯部に直線的に大きく開く口縁部が続く。25は直立する脚部に大きく開く脚部が続く。26は脚端部で、直線的に大きく開く形状である。27は凸レンズ状の底部を有する小形の鉢。28は半球形の小形の鉢である。29は粘板岩製の砥石。細長い形状で一端に小穿孔が2孔ある。石剣もしくは石戈の転用品とみられる。

2号土坑(第78図)

2区調査区の南東端部で検出したもの。大半が調査区外へ続くとみられ形状等に不確定要素



第77図 39号竖穴住居・7号土坑実測図(1/60)



第78図 1～3号土坑実測図 (1/60)

が多いが、竪穴住居跡となる可能性もある。方形の落ち込みと径1.4mの円形土坑が組み合わさるもので、円形土坑の底面までの深さは、検出面から35cmを測る。

出土遺物（第81図）

1はく字形に屈曲して外反する口縁部をもつ甕。胴部の外面調整はハケメによる。薄手のつくりである。

3号土坑（第78図）

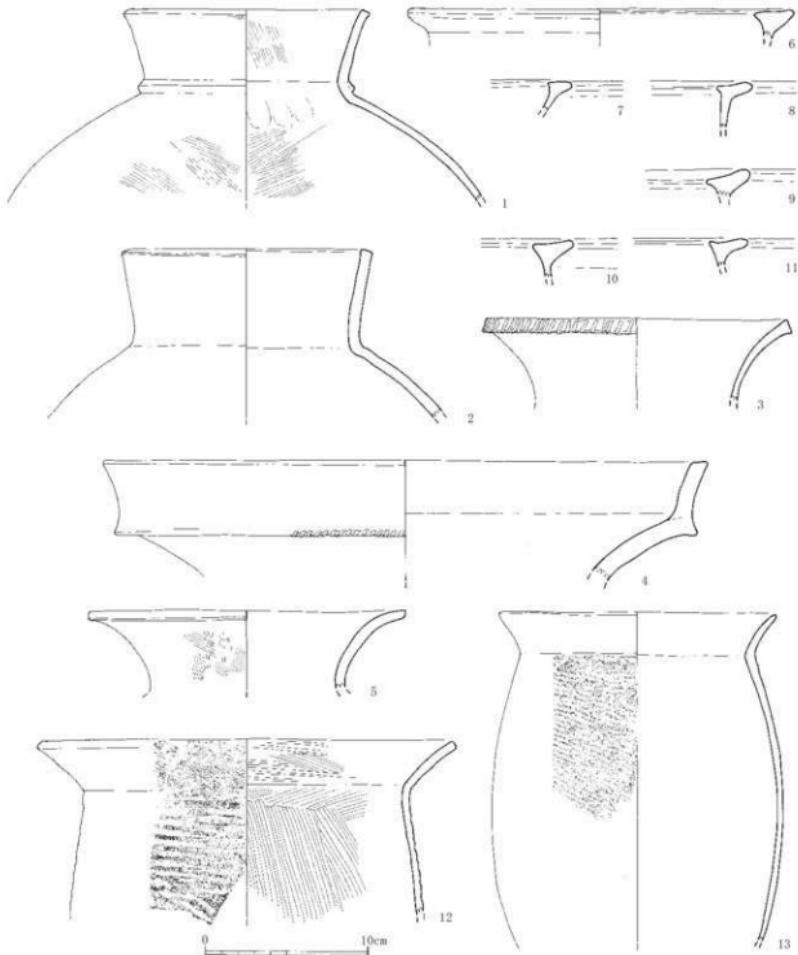
2区調査区の南東部で検出したもの。南北に軸をおく瓢箪形をなすもので、北端を1号溝によって切られる。長軸1.8m、短軸1.2mを測る。検出面からの深さは約25cm。銅鑓が出土した点が注目される。床面からではなく中位から出土した。

出土遺物（第81図）

2はラッパ状に大きく開く口縁部を有する甕。口縁端部には斜め方向にキザミを連続させる。3はく字形に外反する口縁部をもつ甕で、口縁端部は外方へ摘み出す。薄手のつくりである。4は鋤先口縁の甕小片。5は器台の底部で弧を描きながら大きく外反する。6は銅鑓。風化が進行する。鑓をもち、断面はやや歪んだ菱形を呈する。

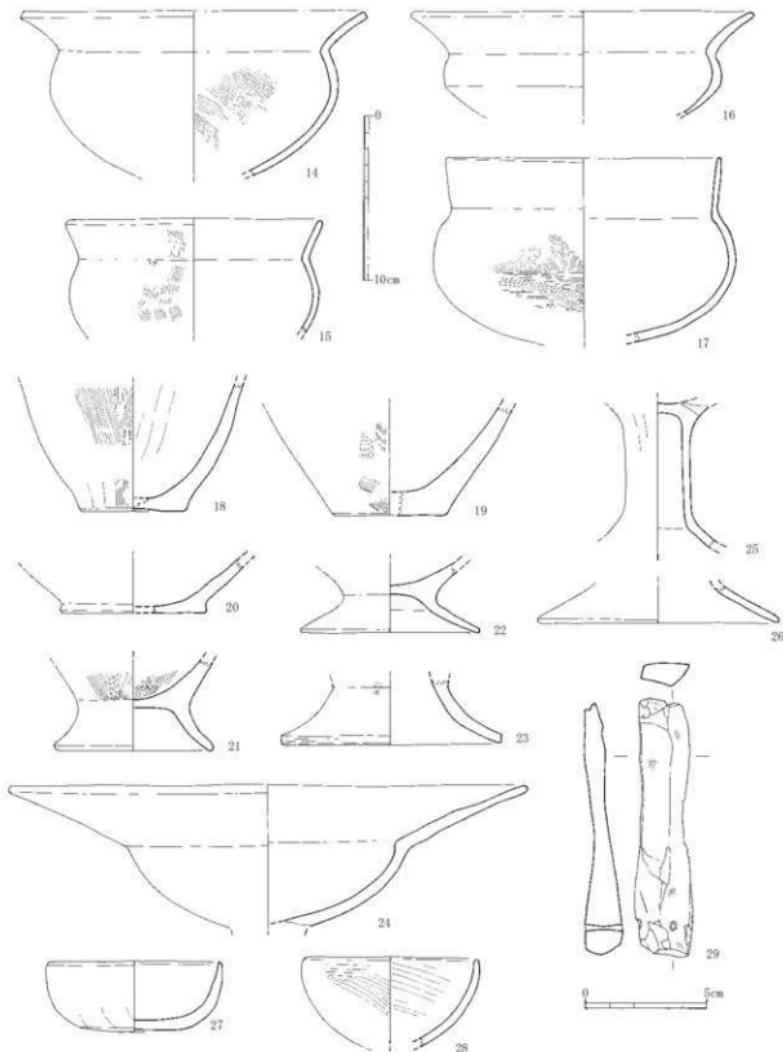
4号土坑（第35図）

14号竪穴住居周辺の切り合いの著しい地点に位置する。14号竪穴住居で述べたとおり、近辺では遺構の切りあいは複雑な様相を示しており、遺物はD55として当初取り上げを行い、さらにD 68として4号土坑と14号竪穴住居とは一連のものと捉え検討していたが、南北2遺構を同一視していたと判断され、北側の円形土坑を4号土坑として報告する。南側は小形の竪穴



第79図 1号土坑出土遺物実測図① (1/3)

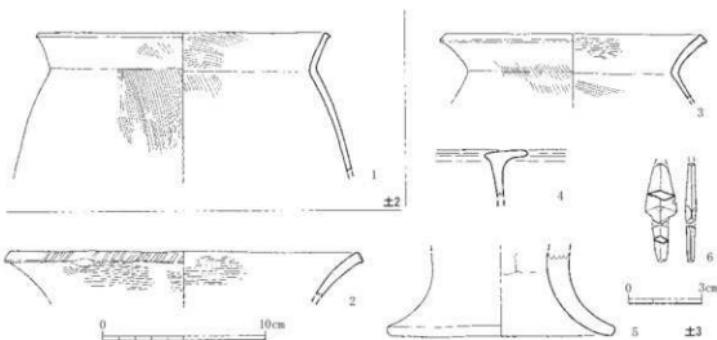
住居跡である14号竪穴住居であり、4号土坑は14号竪穴住居を切る関係にある。東西3.4m、南北2.5mの梢円形を呈するものであり、検出面から底面までの深さは約12cmを測る。底面には比較的大きい複数のピットが散在するが、いずれも浅く配置も規則的ではない。北側および東側に平面形が広がる可能性があるが、一段掘り下げた時点で地山が検出されている。また東



第80図 1号土坑出土遺物実測図② (1/3、29は1/2)

側への広がりはさらに南側に続き16号竪穴住居との境は不明瞭となる。

確実に4号土坑として取り上げできた遺物で実測に耐えうる資料はなかったが、14号竪穴住



第 81 図 2・3 号土坑出土遺物実測図 (1/3、6 は 1/2)

居で図示した検出面出土遺物に含まれている可能性が考えられる。

5号土坑（第 82 図）

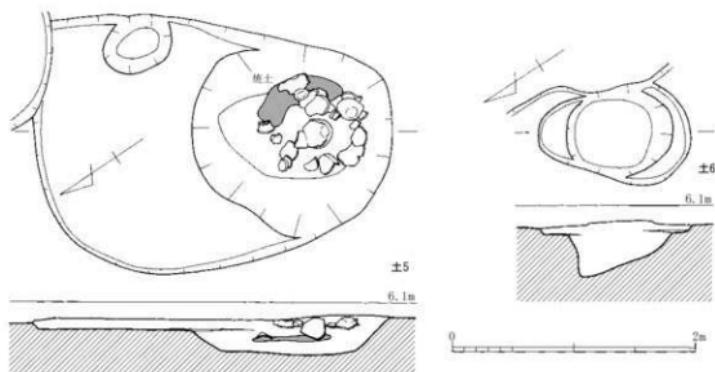
4 区調査区東側で検出された軸を北から東へ 45 度程度振る楕円形土坑。長軸 2.9m、短軸 2.1m を測るもので、北側は浅く、検出面から 6 cm で広いテラス状の面に達し、南側は検出面からの深さ 30 cm 程度の土坑状を呈する。その南側土坑状部分を中心としてまとまった量の土器が出土し、かつある程度元位置を保つとみられる状況であった。土器は北側テラスと同程度のレベルから検出され、土坑床面からはやや浮いた位置に集中する。その土器の下端レベル付近で焼土のひろがりが検出された。

出土遺物（第 83・84 図）

1～4 は壺。1 は袋状口縁壺で外反する口頭部に、わずかに内湾する口縁部が続く。口頭部と口縁部との境の量は明瞭である。頭部に断面三角形の突帯を巡らせる。2 はラッパ状に開く口縁部。頭部に断面三角形の低い突帯を巡らせる。3 は器壁が磨滅・剥離のため調整の観察ができない。底部は平底に近い凸レンズ状をなし、底径は約 10cm と大きい。4 は頭部に断面三角形の突帯を巡らせその下に沈線を巡らせる壺肩部。5 は大きく外反する口縁部をもち、丸く張った胴部を伴う甕。6 は完形に復元できる甕で口径 26.3cm、器高 36.8cm を測る。口縁部はく字形に屈曲して外反する。胴部最大径はほぼ中位にあり、底面は凸レンズ状を呈する。胴部は内外面ともにハケメ調整である。7 は 6 同様の形態をなし、口径は 17.2cm を測る小形品である。8 は完形に復元できる大形の鉢。口径 28.3cm、器高 14.3cm を測る。内湾して立ち上がる体部に外反する口縁部が続くが、その境は明瞭でない。底部は平底で、径は 9.7cm を測り大きい。9 は壺の胴部下半。球形とみられる胴部に底面が凸レンズ状を呈する底部が伴う。10 は低い脚台をもつ甕の底部。11 は鼓形の器台。12 は高杯の脚柱部であろう。13 は磨石。側縁部には叩石として用いたであろう敲打痕を残す。

6号土坑（第 82 図）

4 区調査区の南西部に位置するもので、径 90 cm、深さ 40 cm 程度の円形土坑ではあるが、まとまった量の土器が出土したことから土坑として報告する。当初は長楕円形の土坑として検出



第 82 図 5・6 号土坑実測図 (1/40)

したが、両端は浅く円形の土坑の可能性が高い。ただし北側壁は急傾斜をなし、底面は不自然な傾斜をなすため、地山の判断を誤認していた可能性も残される。

出土遺物（第 85 図）

1～3は甕。いずれもく字形に屈曲して外反する口縁部をもつが、1・3は屈曲度が強い。1は口縁部側面に縦方向のキザミを施す。4は高杯の脚部。外面は縦方向のミガキによる調整である。5・6は半球形を呈する鉢。口縁端部は丸く收める。

7号土坑（第 82 図）

39号竪穴住居西側に隣接する土坑で長軸 1.5m、短軸 80cm を測る楕円形のもの。遺構は浅く、西側で深さ 18cm、東側では 7cm 程度であり、土器溜り的な様相を呈する。同一の形態をなす甕および器台が集合した状態で出土したが、下記のとおり甕が 5 個体と器台が 3 個体からなる。まとまった出土状況であるが、そのまま横転したような状況は呈していない。

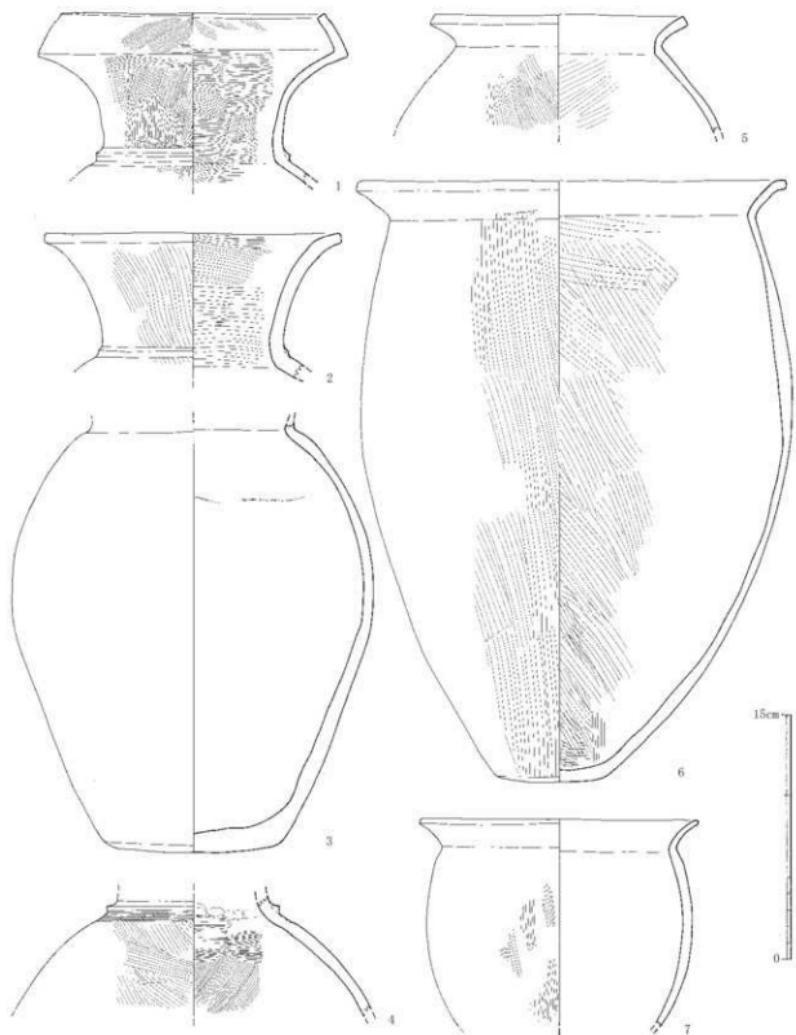
出土遺物（第 86 図）

1～7は甕。完形に復元できたものはないが、同一個体が含まれる可能性は高い。1・2は口縁部を含むものであり、いずれも外方へは厚手で丸みを有する突出で、内面へはわずかに突出させる。2は口縁部下の外面に細い沈線を巡らせる。胴部最大径は胴部上半にある。3～7は底部で、3.5cm 程度の厚底で、底面は 8mm 程度の上げ底である。8～10は器台。口径は約 8.5cm を測る細身のもの。器高は約 13cm で揃う。11は土錘で、長さ 4.4cm、径 1.5cm を測る。

以下に報告するのは、中世の土坑で、大半が井戸状遺構である。3区では井戸状遺構群は東半に集中し、千鳥足状に南北に連なる部分もある。調査区南辺にも確認され、井戸状遺構群は南にさらに延びるとみられる。4区の井戸状土坑は偏りなく分布するが、北西部には集中する地点があり、土坑の切り合いもみられる。

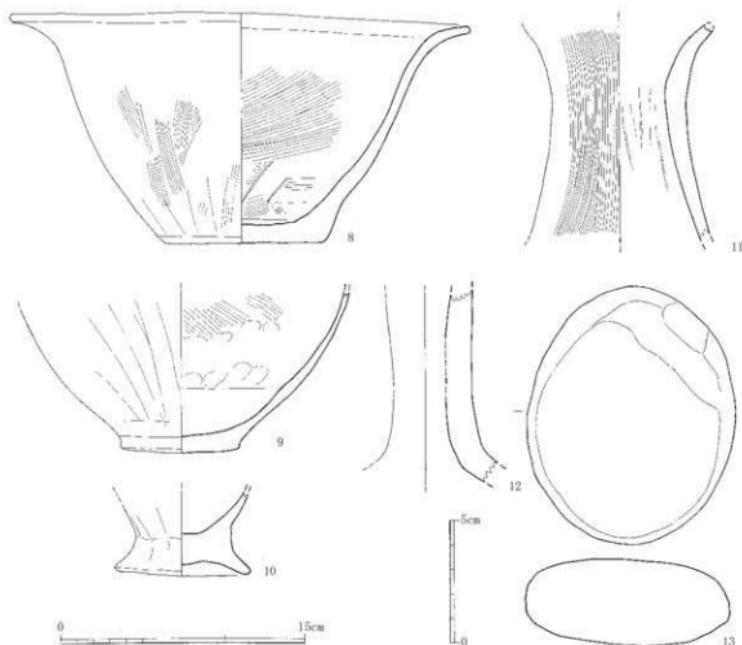
8号土坑（第 87 図）

1区調査区北辺のほぼ中央にあるもので、約 1/2 が調査区外へ続く。調査区壁の観察から、

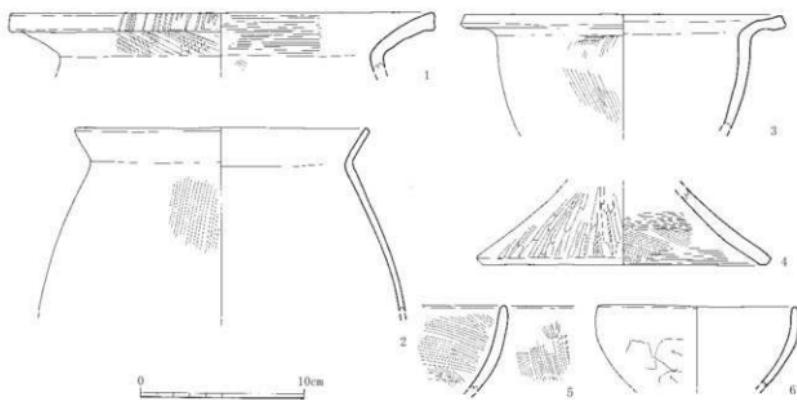


第83図 5号土坑出土遺物実測図① (1/3)

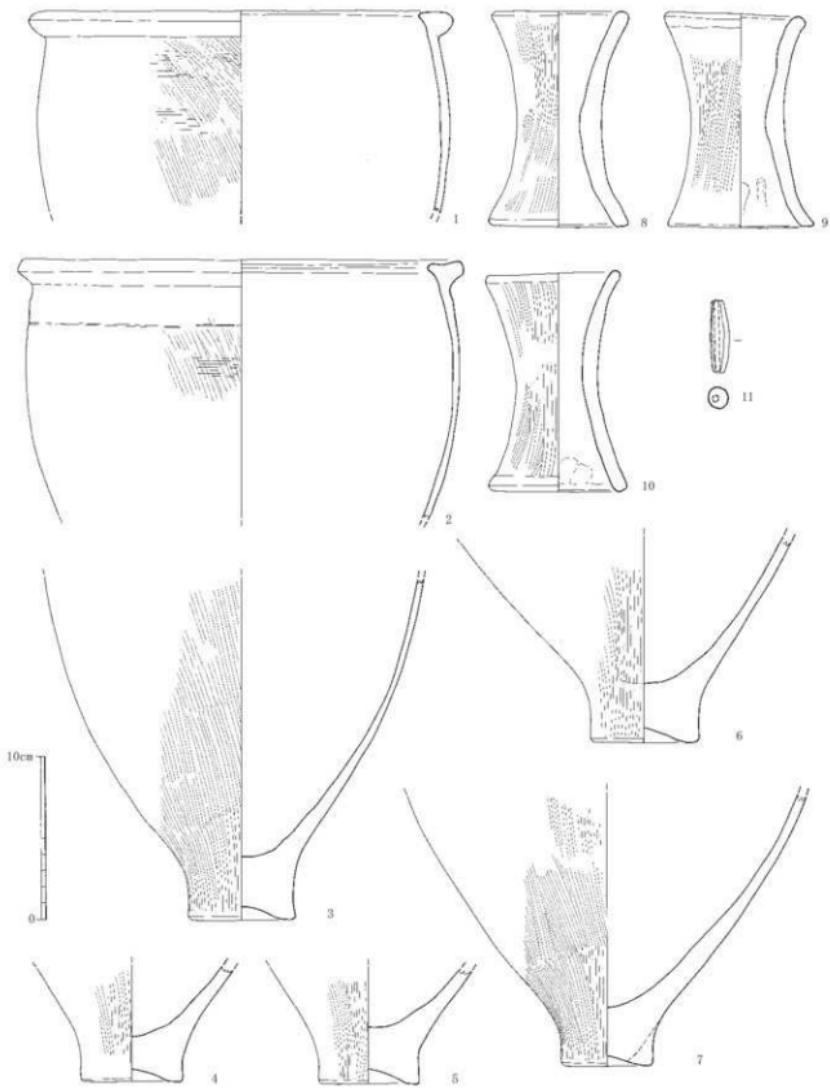
より上層から切り込むものと判断されるが、包含層上層での確認は困難であったものとみられる。MIAを切る関係にあるもので、平面プランは径1.8mの円形。形状から考えて井戸であろう。



第84図 5号土坑出土遺物実測図② (1/3、13は1/2)



第85図 6号土坑出土遺物実測図 (1/3)



第86図 7号土坑出土遺物実測図 (1/3)

検出面から 50 cm の深さまで急な壁にて落ち込み、底面から径 38 cm の木製枠が続く。この木製枠は高さが 20 cm 程の薄い木材を曲げ物状としたものである。この枠上部にも木質が続き、割り貫き式の枠構造が存在したものと考えられるが、腐食していくで不明。

出土遺物（第 88 図）

1・2 は瓦器椀。1 は硬質で内外面ミガキ調整。3 は土師器の椀。

9 号土坑（第 89 図）

2 区調査区の北東で検出された井戸状土坑で、北側約半分が調査区外へ続く。2 区内では他の土坑群とは離れた位置にあるが、北側に展開する可能性もある。包含層から切り込むこともあり若干掘り間違いがあったが、土層の観察から径 1.7m の円形土坑と判断されたが、南北にやや長い可能性を残す。検出面からの深さは 80 cm。上層は灰褐色土が厚く堆積するが、下層はシルト質土が薄い層状に堆積する。

出土遺物（第 90 図）

1・2 は瓦器椀。1 は硬質で、外反する口縁部や細い脚が特徴的。3～7 は隣接する弥生時代遺構からの混入品。3 は短く外反する口縁部をもつ壺。4・5 は弥生時代後期の高杯。6 は小形の椀。7 は頁岩製の大形砥石である。

10 号土坑（第 89 図）

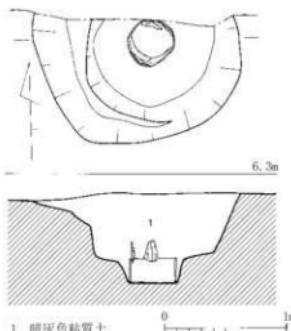
2 区調査区の北辺ほぼ中央で検出された井戸状土坑。10～12 号土坑までは南北に直線状に並び、13 号土坑がそこから東に外れて位置する。北側約半分が調査区外へ続く。東西 1.9m の隅丸方形を呈し、底面は平坦である。検出面からの深さは 65 cm。壁の傾斜は急である。堆積中位に黄褐色土の縮まった薄い面があり、それより下位はシルト質土となる。

出土遺物（第 90 図）

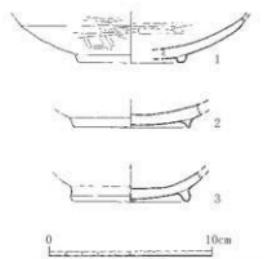
8～12 は瓦器椀。10 は内外面にミガキが密に觀察される。13 は瓦器の鉢口縁部。須恵質に近い硬質の焼成である。14～16 は白磁碗。17 は平底の陶器で、外面には釉が施されるが発色しない。内面には釉が及ばず、瓶のような形状にならうか。

11 号土坑（第 89 図）

2 区の 10 号土坑と 12 号土坑に挟まれた位置にある井戸状土坑。径 2.0m を測る円形土坑で、検出面からの深さは 60 cm。底面は平坦で径は 1.0m を測り、壁の傾斜は緩やかな部類に入る。下層より完形の瓦器椀が出土した。



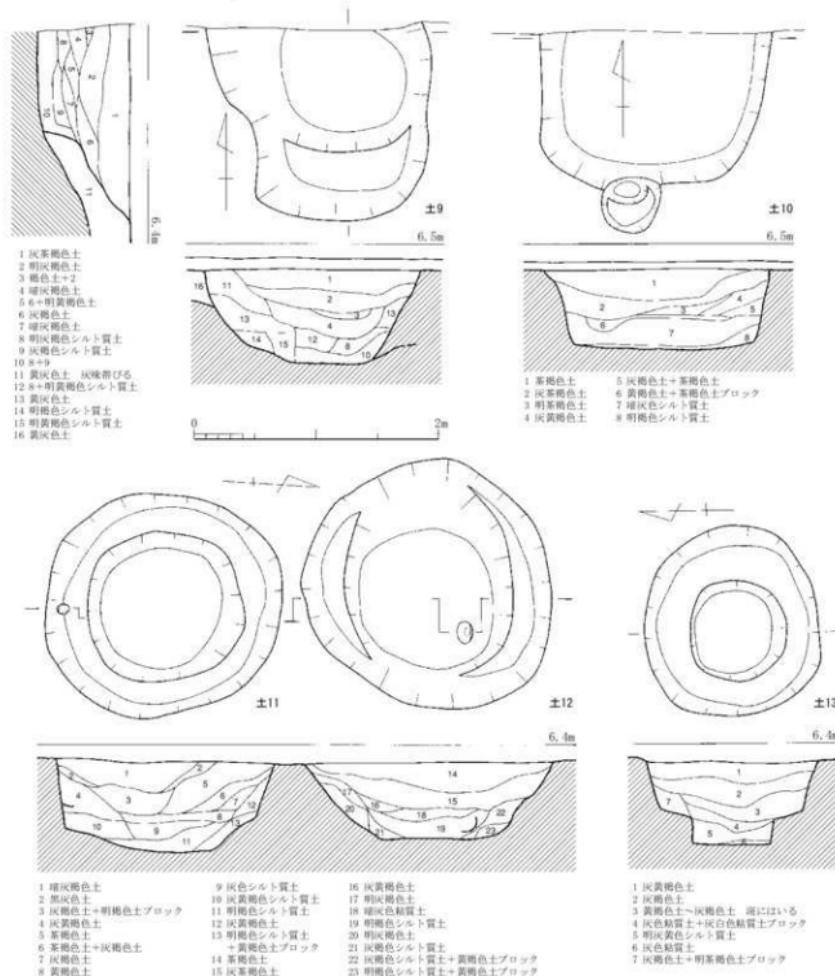
第 87 図 8 号土坑実測図 (1/40)



第 88 図 8 号土坑出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物（第91図）

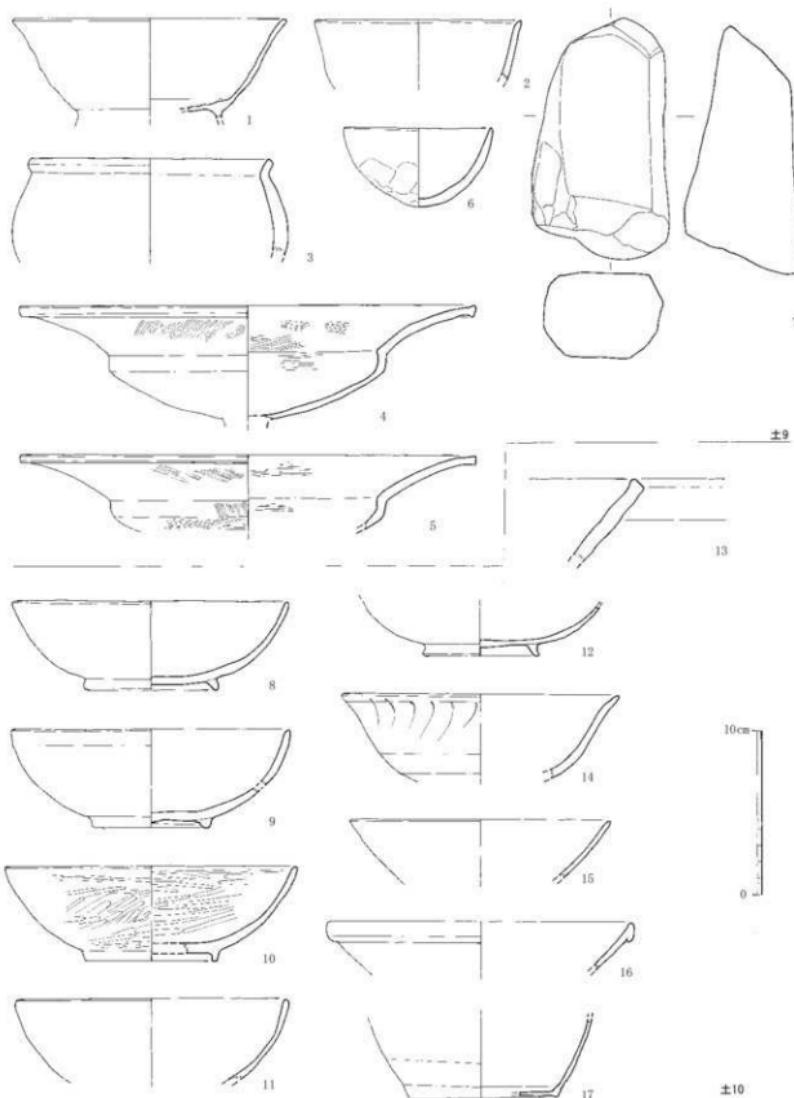
1は土師器杯。2～5は瓦器楕で、内外面のミガキが顕著である。4・5は硬質に焼成。6は白磁口線部小片である。



第89図 9～13号土坑実測図(1/40)

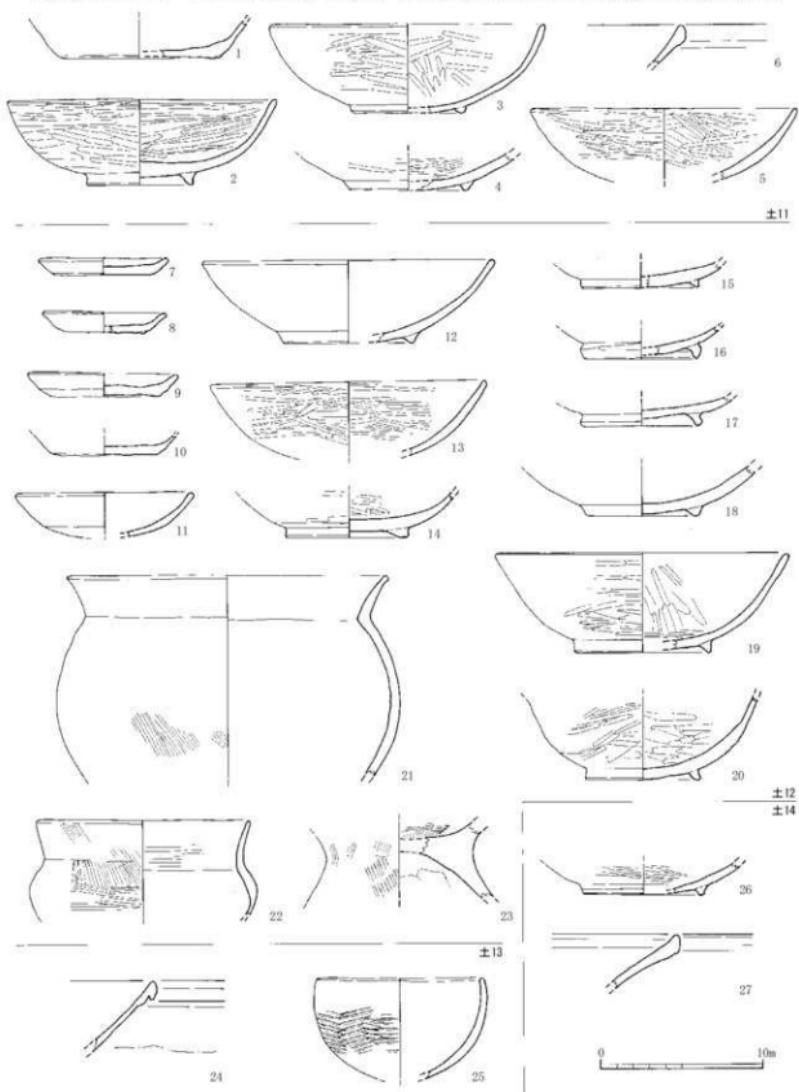
12号土坑（第89図）

2区の11号土坑の南側に隣接して位置する井戸状土坑。径1.8mを測る円形土坑で、検出面



第90図 9・10号土坑出土遺物実測図 (1/3)

からの深さは 75 cm。底面は中央部が低くなり、周縁が低いテラス状をなす。壁の立ち上がりは急傾斜をなす。一旦埋没した後に中央部が再度掘り込まれたように土層からは観察される。



第91図 11～14号土坑出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物（第 91 図）

7～10 は土師器小皿。11 は瓦器小皿。丸みを帯びる底部はケズリのちナデ調整。12～20 は瓦器椀。13・14・16・17・20 は硬質の焼成で 13・20 は内外面にミガキが施される。21～23 は弥生時代遺構からの混入品の壺ないし甕である。

13 号土坑（第 89 図）

2 区の 10 号土坑と 11 号土坑の間からやや東に離れた場所に位置する井戸状遺構。径 1.5m の円形土坑であり、検出面から 40 cm 下げた時点で、中央部に径 65 cm の円形ピットが検出され、さらに 20 cm 下げると地山面に至る。下層ピットは灰白色の粘質土が堆積し特徴的である。井戸枠が存在したような断面形状であるが、木質は確認されなかった。

出土遺物（第 91 図）

24 は白磁碗小片。25 は弥生時代遺構からの混入品の鉢で、外面にタタキ痕を顕著に残す。

14 号土坑（第 92 図）

2 区調査区の南西に単独で位置する井戸状遺構。径 1.2m の円形土坑であるが、検出面から 45 cm まで平坦面をつくり、そこから径 32 cm の木製井戸枠をもって深さを増す。木製井戸枠は地山面より下位から残存するが、土層観察からは木質残存部より 12 cm 上位に井戸枠に対応する掘り込み肩があり、その部分は木質が腐食して失われている可能性がある。その肩付近にて木製容器底部かとみられる円盤状木製品が出土した。検出面から底面までは 1m を測る。狭小部分の掘削と湧水のため井戸枠内部の堆積状況は図化できなかったが、暗灰色粘質土が主体を占めるものであった。木製井戸枠は三段からなり、それぞれ薄板を二枚重ねた曲げ物からなる。下の二段はそれぞれ高さは 25 cm を測り、最上段の高さを 25 cm とすれば上記の掘り込み肩のレベルに一致する。上段は下段の外側を巻くこととしており、最下段端は 4cm 幅の枠を外に嵌める。また、最下段端部近くには円孔を連続させる。

出土遺物（第 91 図）

26 は瓦器椀底部小片。27 は瓦器大形鉢の口縁部小片。

15 号土坑（第 92 図）

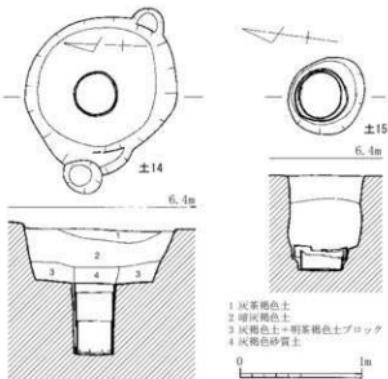
2 区の 12 号土坑の南側 1m 程度離れて位置する井戸状遺構。径 60 cm と 2 区で他に検出されている井戸状遺構と比べて小形である。検出面から 60 cm 下げた時点で木製井戸枠を検出した。この面に至るまで、壁は直立に近いものであり、下半は僅かながらオーバーハングする。木製井戸枠は二段残存し、上段は腐食に半分程度失われているものとみられ、残存高 10 cm である。上段の径は 43 cm を測るが、下段は径 32 cm と小さく、その差の隙間には灰色砂と灰色粘質土を混ぜたもので埋めている。下段の高さは 15 cm。底面の縁には灰色粘質土で目張りした状況をなし、底面中央は 5～10 cm の丸石混じりの灰色砂が堆積する。

出土遺物（第 94 図）

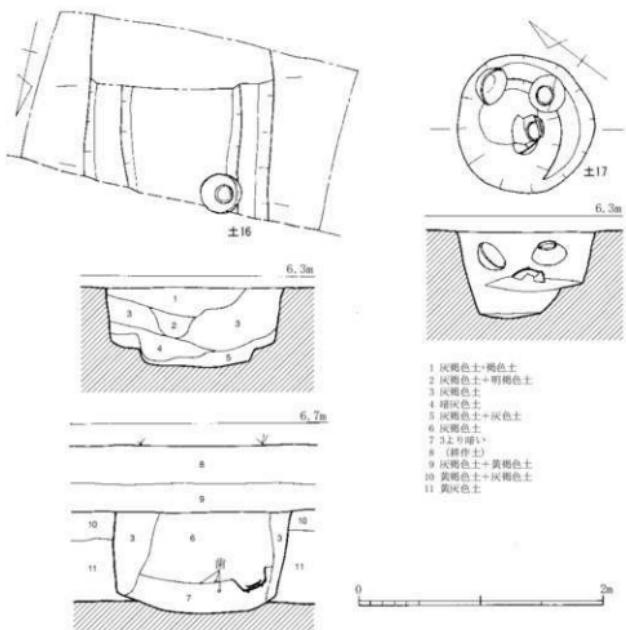
1 は瓦器椀。内外面ミガキ調整で、硬質に焼成される。

16号土坑(第93図)

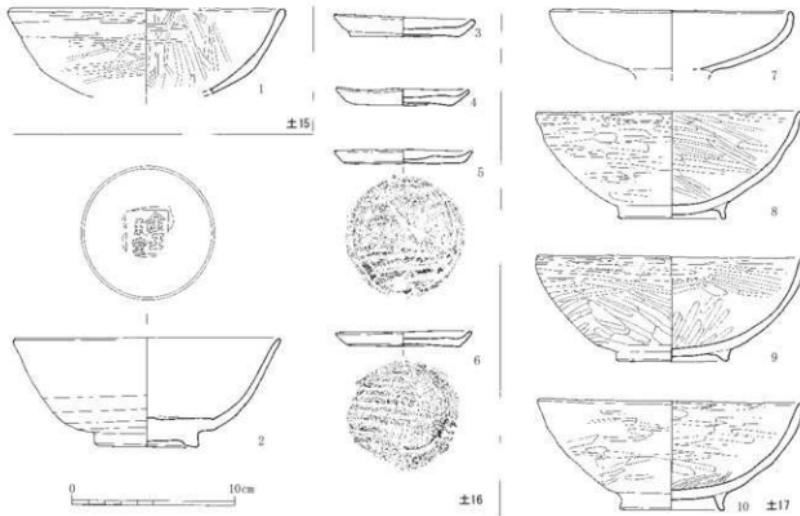
2区調査区南西角付近で検出したもの。大半が調査区外へ続くもので、上層調査時には調査区内にわずかにみえていたと思われるが認識できず、下層調査時に調査区壁面に青磁甕が露出していたことにより確認された。調査区を拡張したところ、おそらく長方形プランの土坑墓と判断されるに至った。幅は1.4m・深さ55cmを測るもので、床面中央部は溝状に窪む。検出時の土層観察では壁に沿って立ち上がる堆積を確認したが、土坑内部での土層観察では明瞭ではない。青磁甕の周辺から歯が数点出土し、東部付近であることがわかるが、人骨は残存していない。青磁内からは土師皿が重ねた状態で出土した。



第92図 14・15号土坑実測図(1/40)



第93図 16・17号土坑実測図(1/40)



第94図 15～17号土坑出土遺物実測図(1/3)

出土遺物（第94図）

2は青磁碗。見込みに「金玉滿堂」の押印がある。3～6は土師器小皿。3は青磁内に重ねられて出土した。

17号土坑（第93図）

2区調査区南東部で検出された径60cmの円形土坑で、1号溝を切る位置にある。ピットとすべき規模であるが、完形品の瓦器椀が3点出土したことから土坑として扱った。埋土は暗灰色土で、瓦器椀はいずれも底面から浮いた位置にて出土した。

出土遺物（第94図）

7は土師器椀。8～10は瓦器椀で、いずれも内外面にミガキを施す。

18号土坑（第95図）

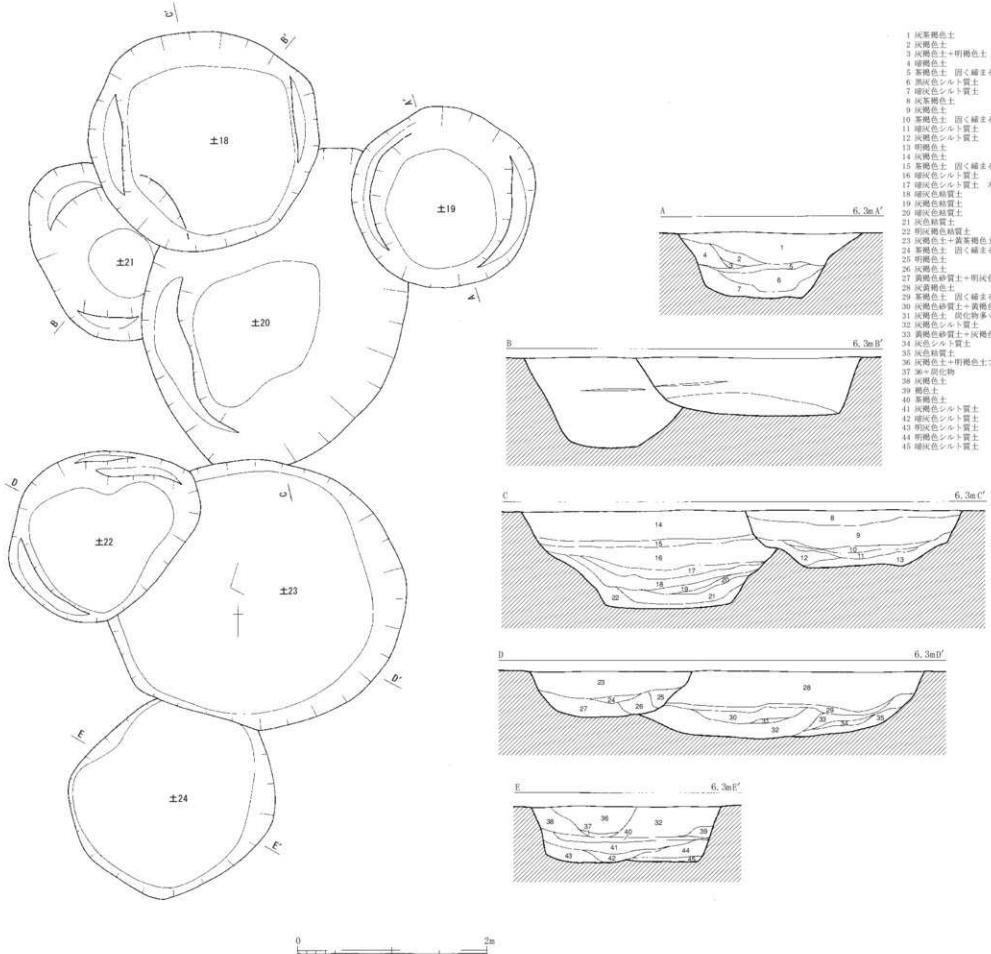
径2.4mの円形の井戸状土坑で、南側の19・20号土坑を切る。壁は床面から一旦は緩やかに立ち上がり、中位に至って傾斜を増す。床面径は1.0m。壁の傾斜が変換するレベルより上層は一気に埋没し、下層は薄いシルト質層が重なる状況を呈する。その境には茶褐色の縮まった面が存在する。検出面からの深さは55cmを測る。

出土遺物（第96図）

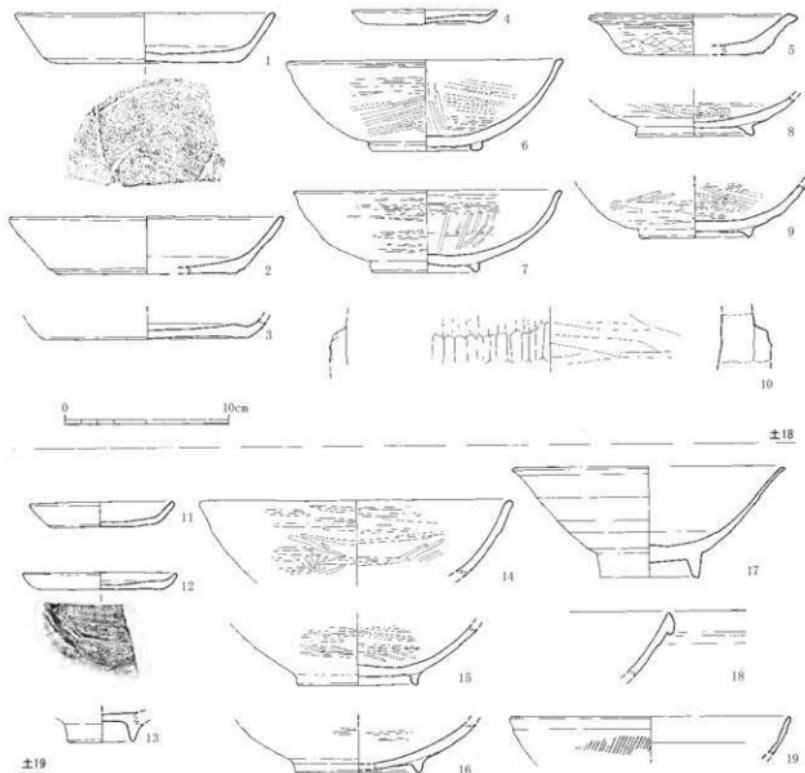
1～3は土師器杯。4は土師器小皿。5は瓦器小皿で口縁部は短く外折させる。6～9は瓦器椀で8を除き硬質な焼成。内外面ともにミガキを施す。10は滑石製石鍋で方形の耳を有する。

19号土坑（第95図）

東側を18・20号土坑に切られる円形井戸状土坑。切り合い関係から、この井戸状遺構群の中で最も古い可能性が指摘できる。径は1.8m程度となろう。平面計ではやや小形の部類に入るが、検出面からの深さは95cmを測り、深い部類に入る。



第95図 18~24号土坑実測図 (1/40)



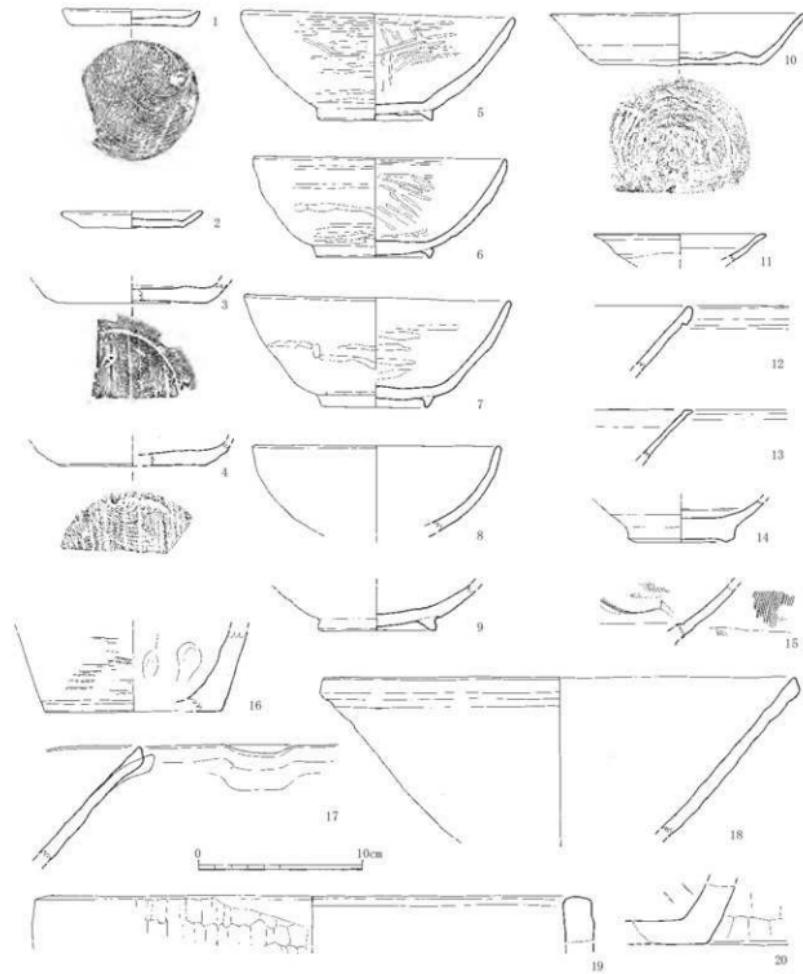
第96図 18・19号土坑出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (第96図)

11・12は土師器小皿。13の高台は土師器である。14～16は瓦器楕でいずれも硬質の焼成。内外面にミガキが観察される。17・18は白磁碗。19は同安窯系の青磁碗である。その他にも滑石製石鍋の小片が出土している。

20号土坑 (第95図)

北側で18号土坑、東側で21号土坑、南側で23号土坑に切られ、西側で19号土坑を切る円形の井戸状土坑。南北3.5m、東西2.7mを測る大形のものである。深さも検出面から1.0mを測り、最大規模である。底面は平坦であるが、平面形はいびつな方形となる。壁は床面から開きながら立ち上がり、中位から傾斜を増すもので、18号土坑の様相に類する。検出面から35cm下げたレベルで茶褐色土を呈する硬く縮まった面があり、それより下層はシルト質ないし粘質土が薄い層を重ねて堆積する。



第97図 20号土坑出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (第97図)

多くの遺物が出土し、器種も多様である。1～3は土師器小皿。4・5は土師器壺である。6～10は瓦器碗。7・8・10は硬質に焼成される。6～8は内外面をミガキ調整するが、7・8は部分的な調整である。11は硬質の瓦器杯で珍しい。12は白磁小皿。13～15は白磁碗。16は同安窯系の青磁碗片である。17は須恵質に近い瓦器の瓶底部。18・19の瓦器鉢も須恵質に近い焼成である。20・21は滑石製の石鍋である。

21号土坑（第95図）

20号土坑を南西側で切る位置にある円形井戸状土坑で、径1.9mの略正円形を呈する。検出面からの深さは70cmを測り、床面から土坑中位にかけて急傾斜で立ち上がり、そこから若干のテラスを経て検出面に向かって開く断面形状をなす。そのテラス面よりやや下位に茶褐色土からなる硬く縮まった面があり、下層はシルト質土が堆積する。

出土遺物（第98図）

瓦器椀を中心として、遺物の出土量が多い。1～3は土師器小皿。4～8は土師器杯。9は硬質の瓦器杯である。10・11は瓦器小皿。いずれも硬質で、11は全体をミガキにより調整する。12は形態や調整は瓦器椀に共通するが土師質である。13～21は瓦器椀。15・21は硬質であるが他は軟質で、軟質の占める割合が高い。22・23は白磁碗。24は滑石製石鍋である。

22号土坑（第95図）

東側で23号土坑を切る円形の井戸状土坑。ややいびつな円形をなすが、径は1.9mを測る。深さは検出面から45cmを測るもので、この井戸状遺構群の中では最も浅い。丸底形状の床面をなし、壁は底面から続く円弧をなして立ち上がる。堆積中位に他の井戸状土坑と同様に硬く縮まった茶褐色土が観察されるが、面的には不明瞭である。

出土遺物（第98図）

1は土師器杯。2は瓦器椀である。3は青磁かとみられるが、釉の発色が悪くすんだ色調となる。

23号土坑（第95図）

北側で20号土坑、南側で24号土坑を切り、西側で22号土坑に切られる円形の井戸状土坑。径は3.1mと大形。検出面からの深さは70cmを測る。検出面から45cm下げた位置で茶褐色土が硬く縮まる面が検出される。それより上層は灰茶褐色土が一気に堆積しており、下層は粘質土による薄い層が重なる。

出土遺物（第99図）

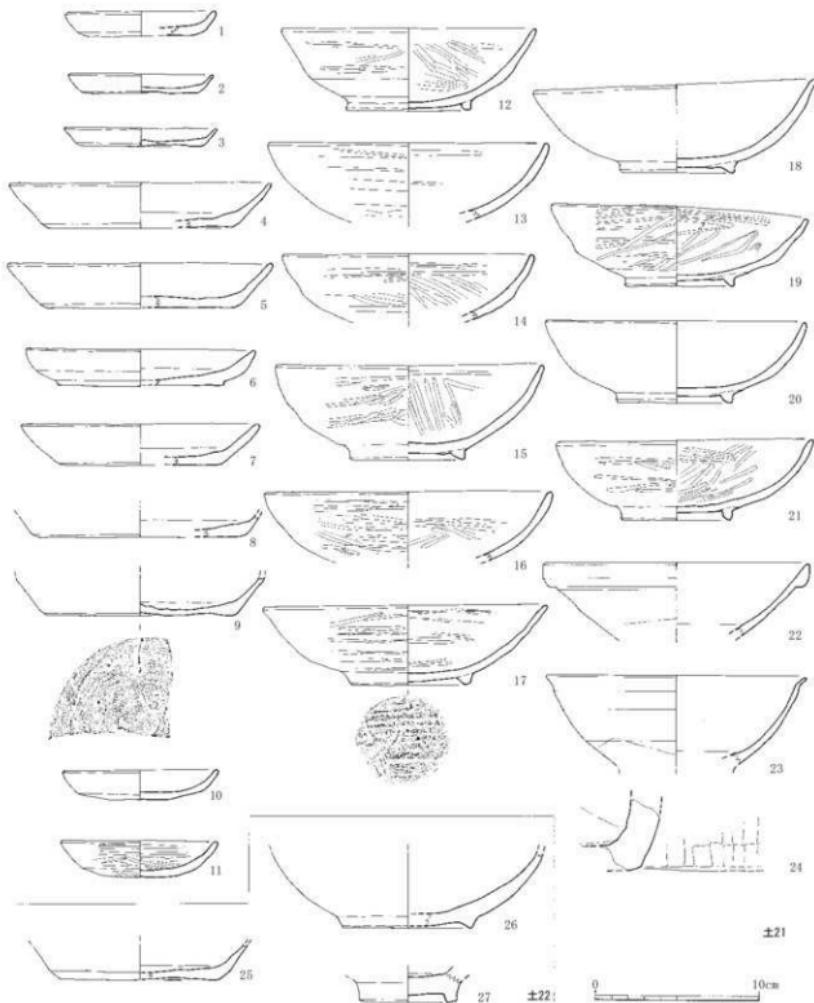
1は土師器小皿。2・3は土師器杯で、2は高台がつく。3は土師器杯。4は瓦器椀で硬質の焼成。5は瓦器小皿。6～11は白磁碗であるが、11は釉の発色が悪い。他に滑石製石鍋が断片的に出土している。

24号土坑（第95図）

北側で23号土坑に切られる円形の井戸状土坑で、径は2.0mを測る。検出面からの深さは60cmを測る。床面は平坦で、壁は床面から直線的に急傾斜で立ち上がる。検出面から35cmで硬く縮まる茶褐色土の面があり、それより下位はシルト質土が堆積する。上層からピットが切り込む状況が土層から観察されるが、出土遺物の分別はできなかった。

出土遺物（第99図）

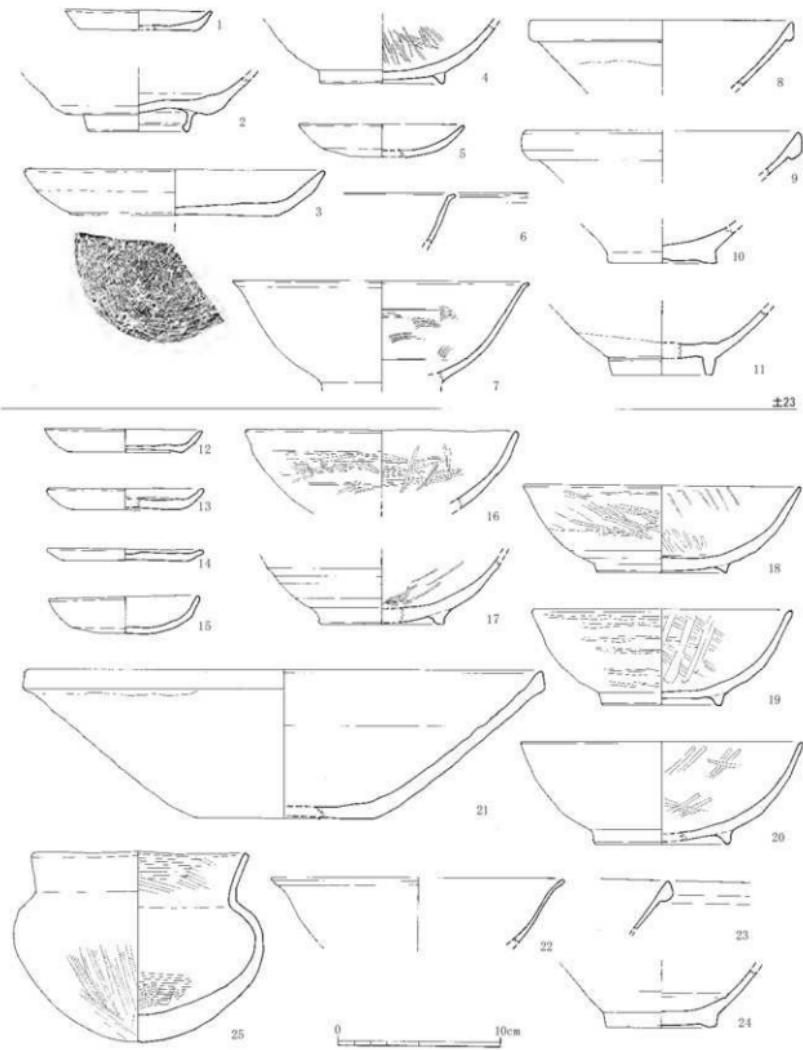
12～14は土師器小皿。15は瓦器小皿。16～20は瓦器椀。内外面にミガキ調整がみられる。20を除き焼成が良く硬質となる。21は瓦器鉢。22～24は白磁碗。25は混入品の弥生土器小形壺。



第98図 21・22号土坑出土遺物実測図（1/3）

25号土坑（第100図）

3区の井戸状遺構群から1mほど北東に単独で位置するもの。径は1.5m、検出面からの深さは1mを測る。検出面における埋土がバラス状の礫であったため、搅乱であるとの判断で掘削を受けたが、土坑中位まではその堆積であったものの下層は他の井戸状遺構と類する粘質土な

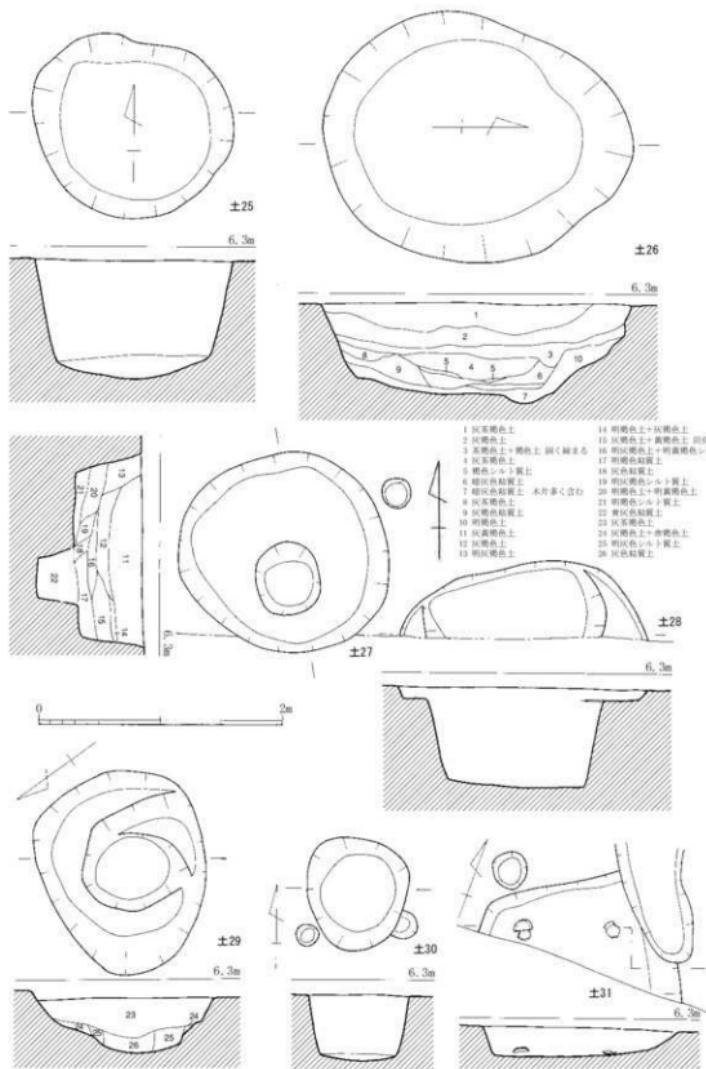


第99図 23・24号土坑出土遺物実測図(1/3)

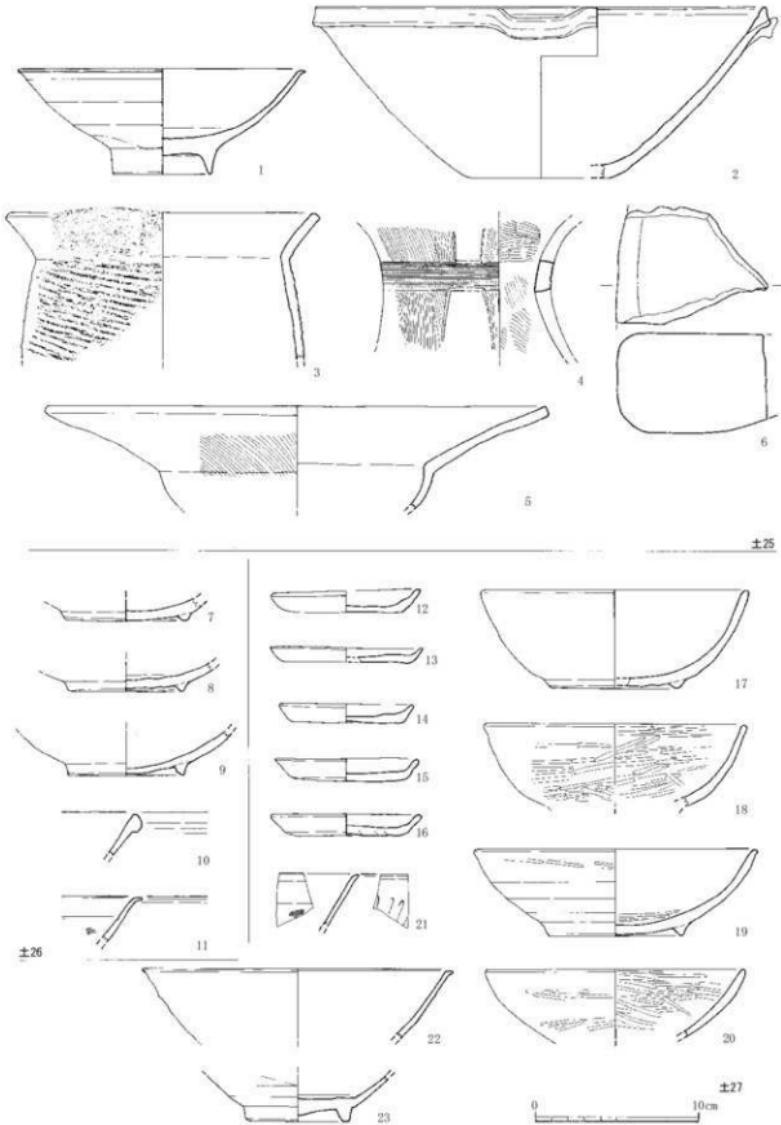
いしシルト質土であり、また新しい遺物も含まれないことから他と同時期のものと判断するに至った。

出土遺物（第101図）

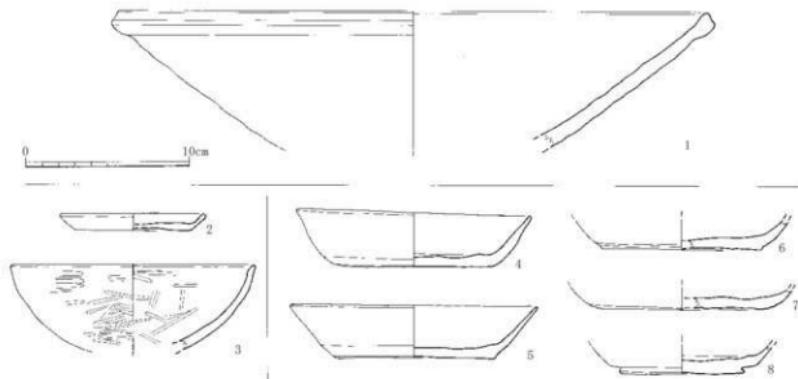
1は白磁碗。2は瓦器鉢で片口がつく。3～6は弥生時代に属するもので混入品。4は方形の



第100図 25～31号土坑実測図 (1/40)



第101図 25～27号土坑出土遺物実測図 (1/3)



第102図 29～31号土坑出土遺物実測図（1/3）

透孔をもつ鼓形器台で、透孔間には沈線を巡らせる。6は頁岩製の大形の砥石である。

26号土坑（第100図）

3区の井戸状遺構群から1mほど東に単独で位置する井戸状遺構。南北2.5m、東西2.0mの楕円形を呈し、検出面からの深さは75cmを測る。ただし断面観察からは本来は径2.0mの円形土坑であり、中段北側にテラスを有するものであった可能性がある。検出面から35cm下げたレベルで茶褐色土の硬く縮まった面が検出される。最下層の暗灰褐色粘質土には木片をはじめとする有機質が多く含まれる。

出土遺物（第101図）

出土遺物は断片的で少ない。7～9は瓦器椀。8・9が硬質であるのに対し、7は土師質に近い軟質。10・11は白磁碗口縁部小片である。

27号土坑（第100図）

3区にて検出された一連の井戸状遺構群の南群にあたる。径1.6mの円形井戸状遺構で、検出面から55cm下げた面で一旦底面とし、さらに径50cmの規模で掘削が及ぶ。おそらく下位の掘り込みには木製井戸枠が用いられたと想定されるが、腐食のためか出土していない。また、その下位掘り込みは土層状況より検出面から40cm下の面から切り込むものと観察される。下層は灰色粘質土が堆積し、検出面から90cm下げた時点では砂層となることが確認されたが、狭小な中でしかも湧水が著しく観察は十分なものではない。

出土遺物（第101図）

12～16は土師器小皿。17～20は瓦器椀で、18・20は硬質で内外面にミガキ調整がみられる。21～23は白磁碗。

28号土坑（第100図）

3区の20号土坑の東に隣接する井戸状遺構で、半分近くが調査区外へ延びると考えられる。径は1.4mか、それより若干大きくなるものであろう。検出面から床面まで80cmを測る。遺構

の壁は急傾斜で立ち上がり、床面は平坦である。

出土遺物で実測に耐えうるものはなかった。

29号土坑（第100図）

3区の井戸状土坑群から2m程度西に外れた位置に単独で存在する円形土坑。径は1.5mを測るが、検出面からの深さは45cmと、他の井戸状遺構に比べて浅く、しかも壁の傾斜は緩やかである。しかし土層観察では、中央部に灰色粘質土を含む径40cmの柱状堆積があり、井戸の可能性が高いと思われる。

出土遺物（第102図）

1は瓦器鉢だが、須恵質に近い焼成である。

30号土坑（第100図）

3区の井戸状土坑群から西へ6m外れた位置にある円形の土坑。径80cm、深さ50cmを測るもの。単純な形状であるが、中世の他ピットに比べて規模がまさるため土坑として扱った。周辺には同規模の土坑が4基程度散在し、調査時には土坑として扱ったが、実測に耐えうる出土遺物があった当土坑のみ報告するものとする。

出土遺物（第102図）

2は土師器小皿。3は硬質の瓦器椀で、内外面にミガキがみられる。

31号土坑（第100図）

3区調査区南西にある溝状遺構が集中する地点にある。北東角を10号溝に切られ、また南側は調査区外へ延びるため形状を正確に把握することはできないが、一辺1.5m程度の方形土坑と判断される。検出面から床面までの深さは20cmと浅い。

出土遺物（第102図）

4～8は土師器杯で、いずれも同程度の大きさを測るものと考えられる。

32号土坑（第103図）

4区調査区北東で検出された南北2.8m、東西2.4mを測るやや楕円形を呈する井戸状土坑。検出面から床面までの深さは60cmを測る。断面観察では複数の土坑が切り合う、すなわち南側から北側に向かって土坑が連続するように観察されるが、底面レベルが一定であることから同一土坑の堆積の違いと判断した。床面はほぼ平坦で、壁の傾斜は強い。

出土遺物（第104図）

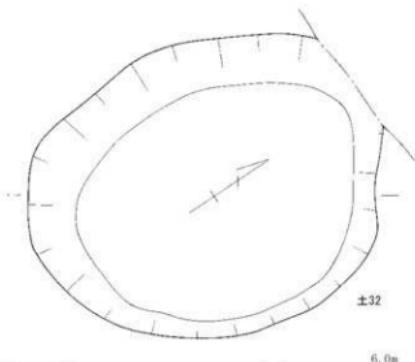
1～4は土師器小皿。5～7は土師器杯。8～10は瓦器小皿。11は瓦器椀。12は白磁碗。13は弥生土器の小形壺である。

33号土坑（第103図）

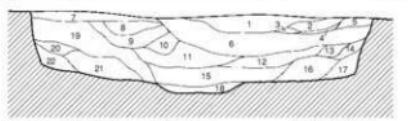
32号土坑の南側に隣接する井戸状土坑で、南北2.6m、東西2.0mの楕円形の平面プランを呈する。検出面から床面までの深さは50cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、東側がより深く切り込む土坑状を呈しており、深さが若干増している。

出土遺物（第105図）

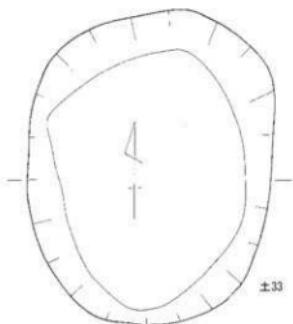
1は土師器杯。2・3は瓦器椀であるが、2は黒色土器の特徴を備える。



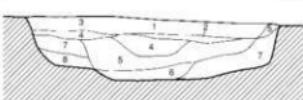
土32



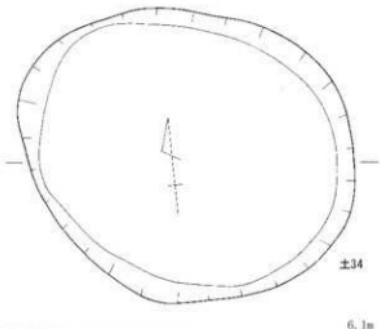
- 1 黒色土 有機物多く含む 9 灰色粘質土 17 明灰色粘質土
 2 黒色土 10 +明灰色粘質土ブロック 18 灰色粘質土
 3 黒色土 有機物多く含む 11 +明灰色粘質土ブロック 19 明茶褐色土 丸礫含む
 4 褐灰色粘質土 12 灰褐色粘質土 20 明茶褐色土
 5 茶褐色粘質土 13 灰褐色粘質土 21 9灰色粘質土
 6 褐灰色粘質土 14 明褐色土 丸礫含む 22 明茶色シルト質土 丸礫含む
 7 茶褐色土 15 灰褐色粘質土 粒状含む
 8 明灰色粘質土+黄褐色粘質土 16 明灰色砂質土



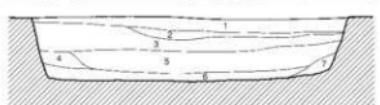
6.1m



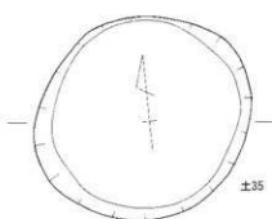
- 1 茶褐色土+灰褐色土 5 灰褐色粘質土+褐褐色粘質土
 2 灰褐色砂質土 6 明灰色粘質土
 3 明褐色土+茶褐色土 7 明褐色粘質土
 4 灰褐色粘質土+褐色粘質土 8 明灰褐色粘質土



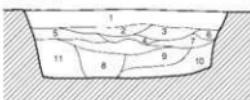
土34



- 1 深茶褐色土 3 灰褐色土+茶褐色土 5 灰褐色粘質土 7 明灰色粘質土
 2 茶褐色土 4 明灰褐色シルト質土 6 明灰色粘質土



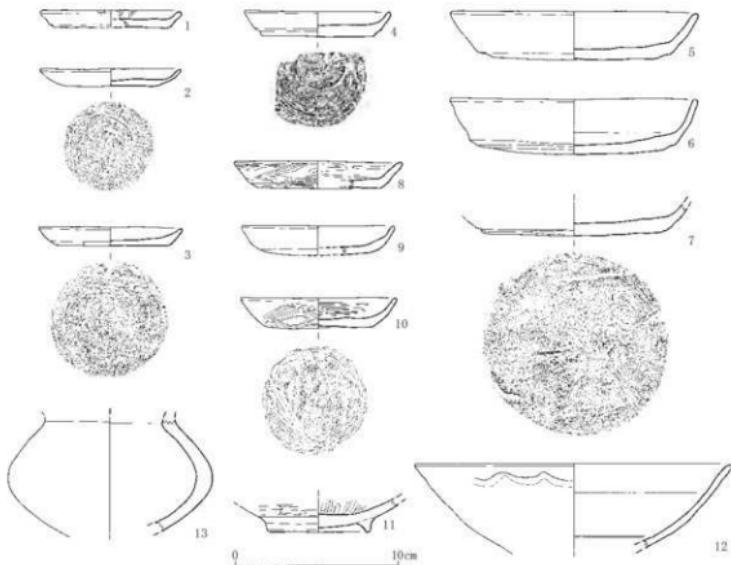
6.0m



- 1 茶褐色土+灰褐色土 小円礫多く含む 7 灰色粘質土
 2 灰褐色土 8 灰色粘質土
 3 灰褐色土 小円礫多く含む 9 灰色粘質土
 4 灰色粘質土+明褐色粘質土ブロック 10 明褐色粘質土
 5 明褐色粘質土+黄褐色粘質土 11 灰色粘質土
 6 明褐色粘質土

0 2m

第103図 32～35号土坑実測図（1/40）



第104図 32号土坑出土遺物実測図 (1/3)

34号土坑(第103図)

4区調査区中央付近に位置する円形の井戸状土坑。東西2.8m、南北2.4mを測る楕円形プランをなす。検出面から床面までは55cmを測る。底面は平坦で壁の傾斜は強い。他の土坑に比べて、堆積は単調な水平堆積をなす。

出土遺物(第105図)

4は瓦器椀で、内外面ともにミガキ調整。5・6は白磁碗である。7・8は滑石製石鍋でいずれも大形品である。

35号土坑(第103図)

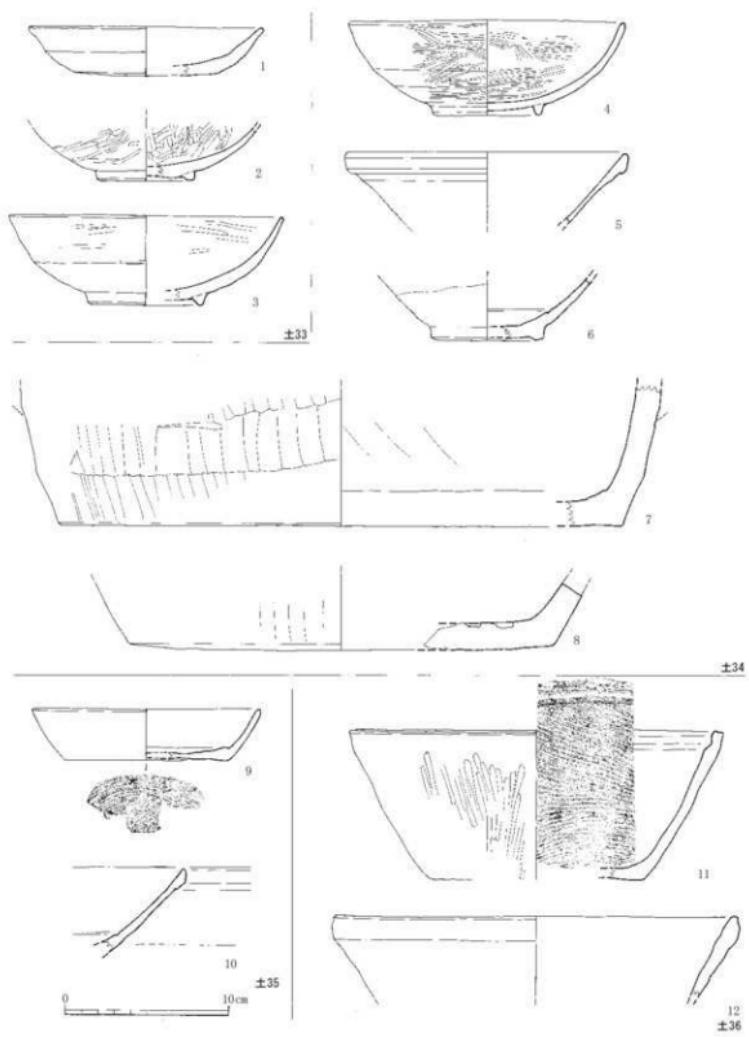
34号土坑の西約2m離れた地点に位置する径1.7mの円形の井戸状土坑。底面は平坦で、検出面からの深さは60cmを測る。壁の立ち上がりは急傾斜である。粘質土が細かい単位で堆積する様子が観察される。

出土遺物(第105図)

9は土師器杯。10は白磁碗である。

36号土坑(第106図)

4区調査区北西角付近に位置する円形の井戸状土坑。北側が調査区外へ続くが、半分以上は検出できていると判断される。東西2.4mを測るが、断面観察からは径1.5mの土坑で西側にテラス状の面を伴うものと判断される。検出面から床面までの深さは90cmと深い。他の土坑と

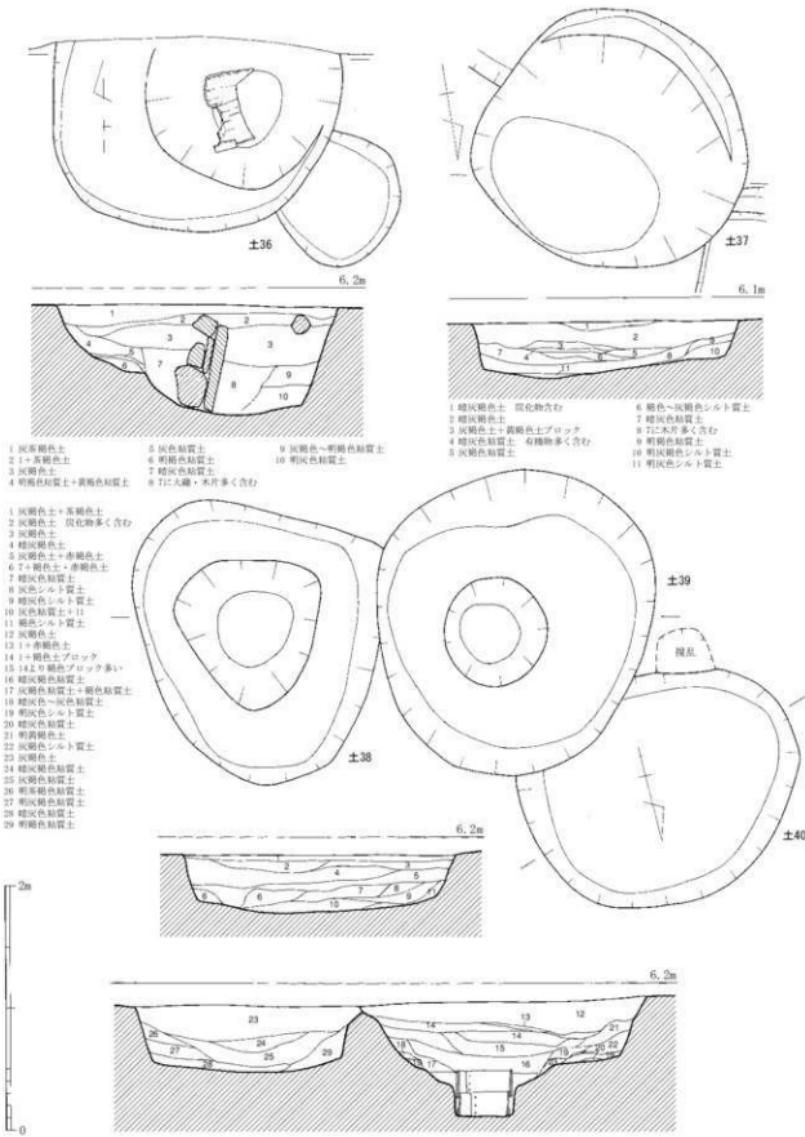


第 105 図 33 ~ 36 号土坑出土遺物実測図 (1/3)

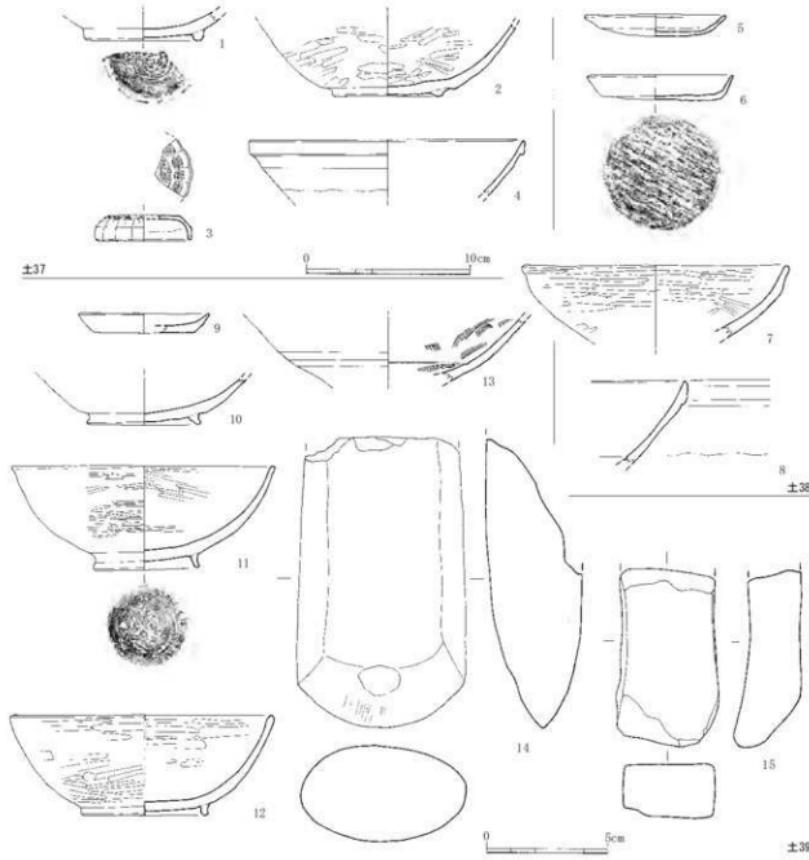
比べて、大小の石材が数多く出土し、木製井戸枠とみられる大形木材も出土した。これらは本来の位置を保つものではなく、破壊されたものが投げ込まれた状況を呈している。

出土遺物 (第 105 図)

11・12 は瓦器の鉢。11 は平底で直線的に立ち上がる体部をなす。口縁部内面は段をつくる。



第106図 36～40号土坑実測図 (1/40)



第107図 37～39号土坑出土遺物実測図 (1/3、14・15は1/2)

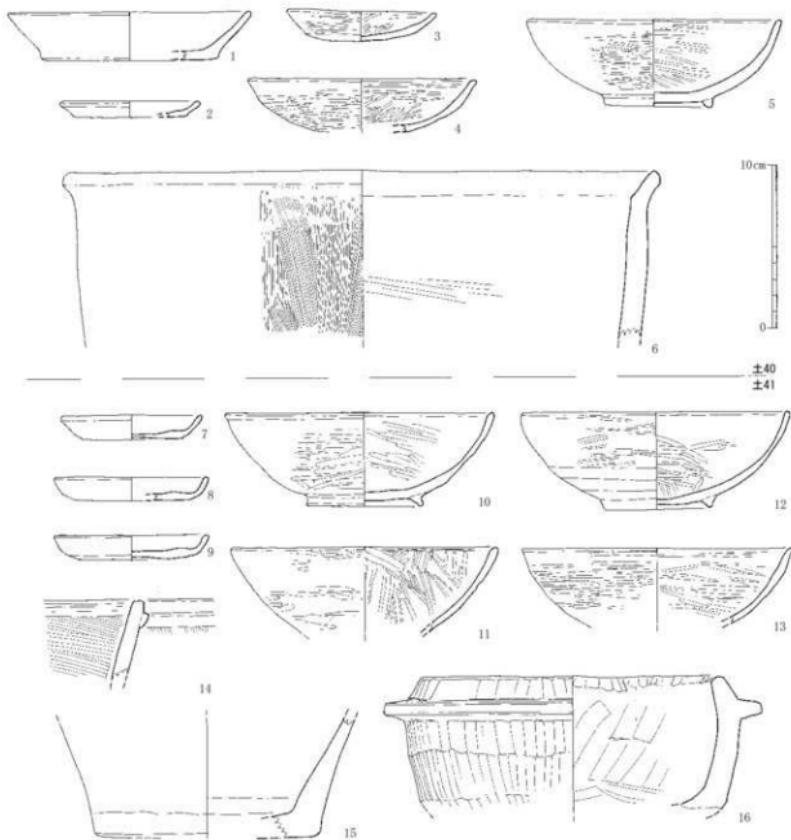
外面は縦方向のミガキ調整、内面はハケメである。

37号土坑 (第106図)

39号竪穴住居の南東に位置する円形の井戸状土坑。径2.2m、検出面から床面まで深さ45cmを測る。南東側中位には幅の狭いテラスをもち、床面は北西部側が若干低くなる。堆積は中位以下が薄い堆積が重なる状況を呈しており、木質をはじめとした有機質を多く含む層が確認される。

出土遺物 (第107図)

1・2は瓦器楕で、1は高台内に細いタッチで×印のヘラ記号を刻む。3は白磁の合子蓋。4は白磁碗である。



第108図 40・41号土坑出土遺物実測図 (1/3)

38号土坑(第106図)

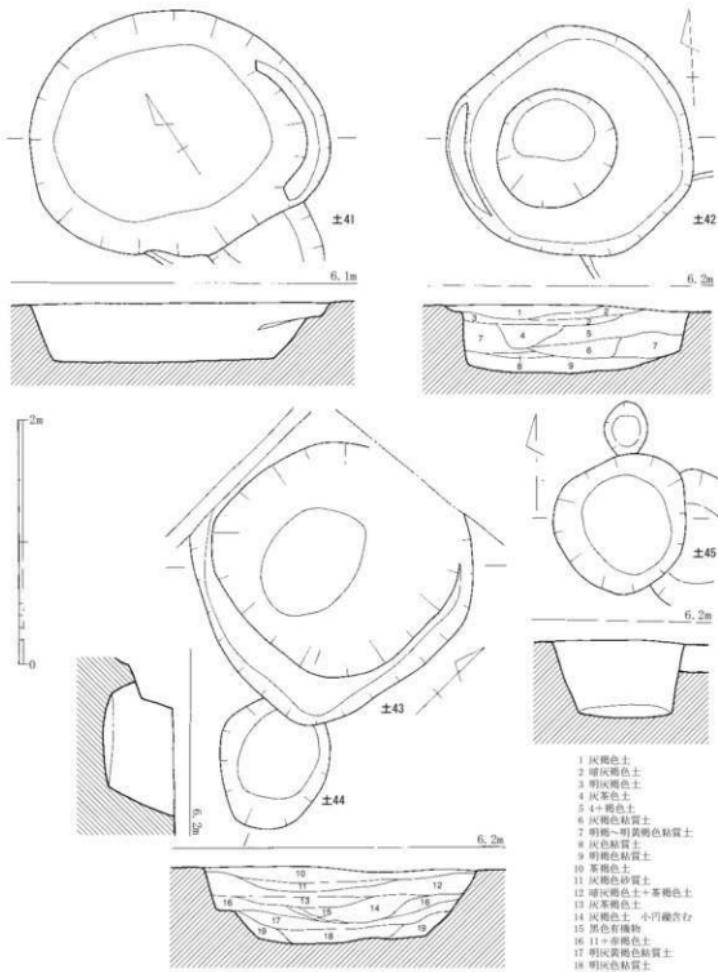
4区調査区北西に集中する一群に属し、西側の39号土坑に切られる。南北2.5m、東西2.0mのややいびつな円形プランを呈する。検出面からの深さは55cm。レンズ状に粘質土が堆積する。

出土遺物(第107図)

5・6は土師器小皿。7は瓦器碗で内外面ともにミガキ調整がみられる。8は白磁碗。

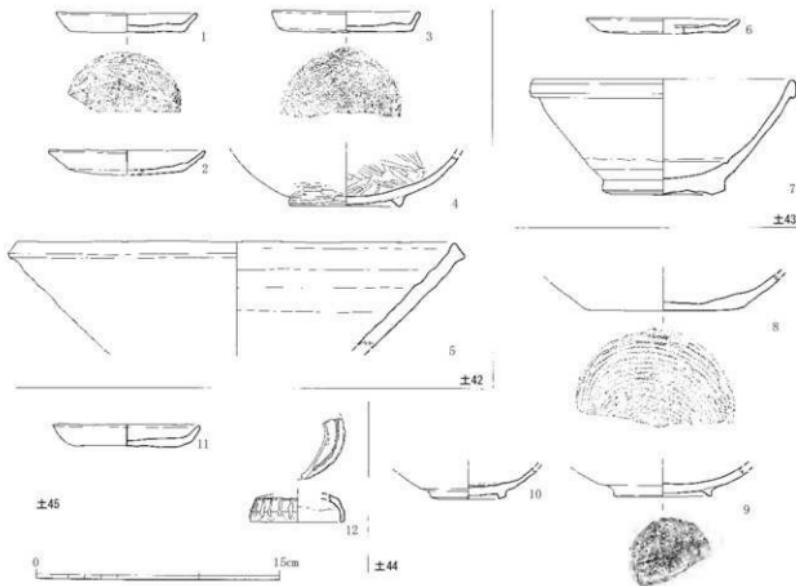
39号土坑(第106図)

東側で38号土坑を、北西側で40号土坑を切る円形の井戸状土坑で、径2.5mの円形プランを呈する。検出面から50cm下げるレベルで一旦平坦面をつくり、土坑中央のやや東寄りに木製井戸枠を伴って径50cm、深さ50cmの掘り込みを行う。木製井戸枠は二段からなり、それぞ



第109図 41～45号土坑実測図（1/40）

れの高さは20cm程度。上段は薄板を二枚重ねるもので、下段は上段の内側へ重ねるもので、薄板一枚からなり、底に接する端部は幅の狭い薄板を外側に巻く。湧水が著しいため井戸枠内の埋土の観察は困難であったが、灰～暗灰色の粘質土を基本とするものであった。井戸枠周縁



第110図 42～45号土坑出土遺物実測図（1/3）

の埋土は細かい堆積が複雑に重なる様子が観察され、それぞれの堆積にも褐色ないし赤褐色のブロック土を多く含んでおり、混ざりの多い印象を受ける。

出土遺物（第107図）

9は土師器小皿。10～12は瓦器椀。10・11は高台内にヘラ記号を刻む。13は白磁碗。14・15は混入品で、14は太形蛤刀石斧、15は砂岩製の砥石である。

40号土坑（第106図）

南東側に39号土坑に切られる井戸状土坑。平面プランは東西2.3m、南北2.0mを測る楕円形で、検出面から床面までは50cmを測る。他の井戸状土坑に比べると、上層まで比較的薄い堆積を重ねた状況が確認され、最後に一気に埋められたといった様相を呈しない。上層の灰褐色土には炭化物を多く含む特徴を有する。

出土遺物（第108図）

1は土師器杯。2は土師器小皿。3は瓦器小皿で内外面ともにミガキがみられる。4は瓦器で、小皿と椀の中間的な大きさである。5は瓦器椀で被熱により磨滅する。6は土師器の大形甕で焼き縮めに近い焼成となる。

41号土坑（第109図）

上層に搅乱があり平面形はやや乱れるが、東西2.4m、南北2.0mの楕円形を呈する。検出面

から床面まで 50 cm を測る。

出土遺物（第 108 図）

7 ~ 9 は土師器小皿。10 ~ 13 は瓦器椀で内外面ともにミガキ調整。13 は黒色土器とすべきかもしれない。12 は高台内にヘラ記号とみられる細沈線がはしる。14 は瓦器鉢の口縁部で、外面に低い突帯を巡らせる。15 は灰釉のかかる陶器で、瓶の底部であろう。16 は小形の滑石製石鍋。内湾する形状で、口縁部下に鈎が巡る。

42 号土坑（第 109 図）

38 号土坑の南側に位置する円形の井戸状土坑で、径は 2.0m を測る。検出面から床面まで 55 cm を測る。壁は垂直に近く立ち上がる。

出土遺物（第 110 図）

1 ~ 3 は土師器小皿。4 は瓦器椀で硬質の焼成。5 は瓦器鉢で須恵質に近い焼成である。

43 号土坑（第 109 図）

4 区調査区の北西角で検出された井戸状土坑。径は 2.4m を測る。北側を除き検出面から 35 cm 下げたレベルで、幅の狭いテラスをつくる。床面はそれより 25 cm 下となる。中位までの堆積の下層に有機物を多量に含む黒色土あり、特徴的である。

出土遺物（第 110 図）

6 は土師器小皿。7 は白磁碗である。

44 号土坑（第 109 図）

43 号土坑の南東に位置するもので、43 号土坑と若干切り合い、43 号土坑のほうが先行する。径 90 cm、検出面からの深さ 55 cm を測る円形土坑で、検出面を中心に骨片が多数出土するため土坑として扱った。骨片はごく細片となっており、部位等は特定できない。

出土遺物（第 110 図）

8 は土師器杯。9 は瓦器椀で高台内に細いタッチで X 印のヘラ記号を刻む。10 は白磁碗。

45 号土坑（第 109 図）

42 号土坑の南に位置するもので径 1.0m の円形土坑。検出面からの深さは 65 cm を測り、その深さから井戸状土坑の可能性が考えられる。

出土遺物（第 110 図）

11 は土師器小皿。12 は白磁の合子蓋である。

甕棺墓

1 号甕棺墓（第 111 図）

2 区の上層で検出された。周辺の弥生時代竪穴住居跡は下層の精査で検出されたものであり、これらの住居よりも層位的に新しいと考えてよからう。大きく上部を削平され口縁部は押し潰された状態で検出されたが、底部付近は本来の埋置状況を保つと思われる。口縁部を西側に向けるもので、現況では単棺分しか出土していない。軸は北に対して 68 度西に振る。埋置角度は 55 度。口縁部からやや離れた場所で薄く広がる骨片を検出したが、形状から考えて頭蓋骨の一部とみられる。底面に近い位置から完形品の鉢が出土した。偶然落ち込んだものではなく、

副葬品として入れられた可能性が高い。なお、今回の発掘調査で確認された甕棺墓は、この1基のみである。

出土遺物（第112図）

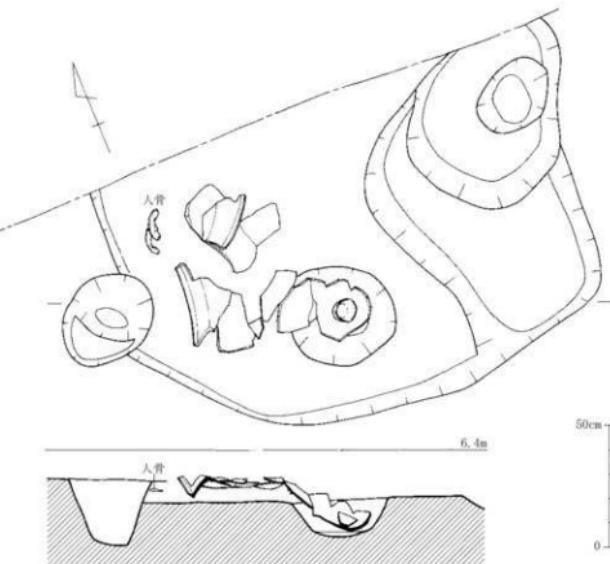
甕棺は胸部上半より上位は破壊された状況であったが、完形に復元することができ、口径46cm、器高68cmを測る。口頸部は弱く弧を描きながら外反し、口縁部は直立に近く立ち上がり複合口縁の形態をなす。口縁端部は四角く收め、複合口縁の側面は広くつくり×字形にキザミを連続させる。頸部には断面方形の突帯を巡らせ、キザミを施す。胴部は最大径を上位にもつもので、肩は円弧を描きながら強く張り、下半は緩やかな円弧を描きながら底部に続く。底面は丸底である。胸部下半に2条の断面方形の突帯を巡らせ、両者にキザミを施す。胴部の成形はタタキにより、突帯より上位は外面のタタキ痕を顕著に残し、他はハケメで仕上げられる。内面はナデによるが、部分的にハケメが観察される。2は甕棺内で出土した鉢。半球形をなす。外面はケズリのちナデによる調整。内面はハケメによる調整であるが、底面付近にはケズリが観察される。

溝

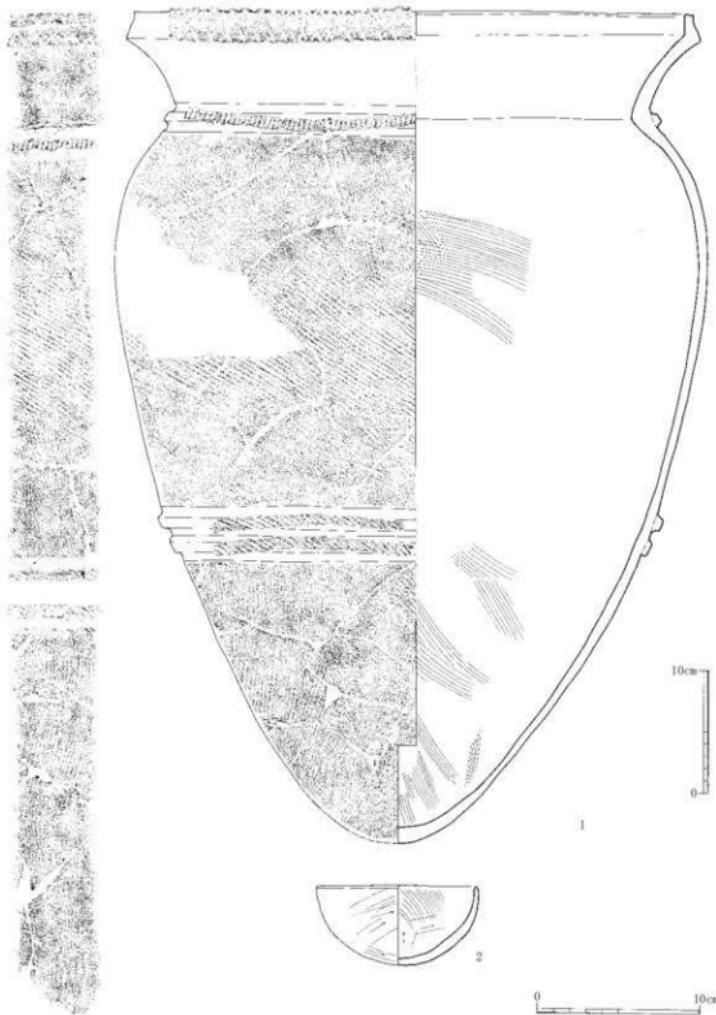
1号溝（第113図）

1～3区に渡って検出された溝状遺構。1区では北に向かって約30度東に振れる方向で検出された。これは1区で検出された2号溝と共通する方向であり、1区内では切り合う位置関係にある。土層の観察の結果、1号溝が2号溝を切る関係にあると判断された。1号溝は1区調査区の南西で方向を東西に変え、2区の方向へ向かう。

2区上層面においては調査区東端で検出されたものの、中世の遺構が展開する範囲においては明瞭には検出されなかった。2区下層において全容が明らかとなり、調査区を東西に貫流するように検出された。直線ではなく、2区のほぼ中央で最南端となり、弧を描くよう北北西へ方位を

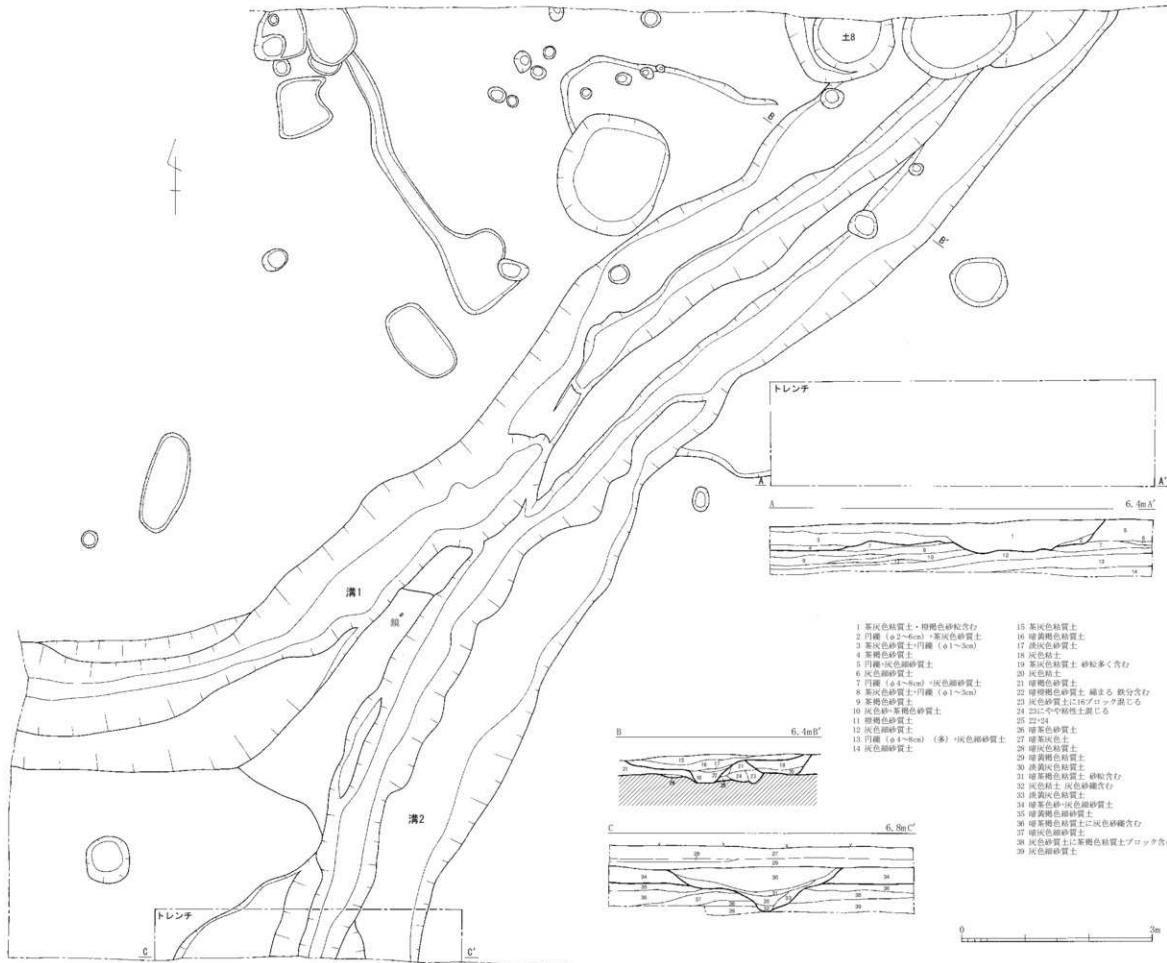


第111図 1号甕棺墓実測図 (1/20)



第112図 1号壺棺墓出土遺物実測図（1は1/4、2は1/3）

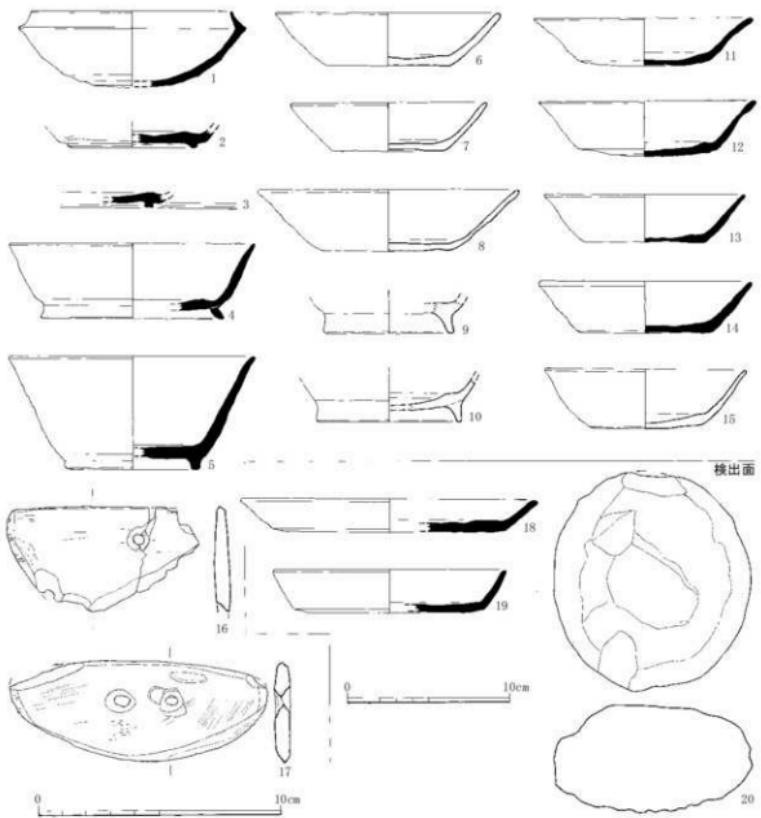
変える。2区内での幅は、東端付近では広く2.5mを測り、中央付近では狭くなり幅1m、西端付近では1.5mとなる。3区では2区で描く弧のラインの延長で屈曲し、3区調査区のほぼ中央



第113図 1・2号溝実測図 (1/60)

-123-

-124-



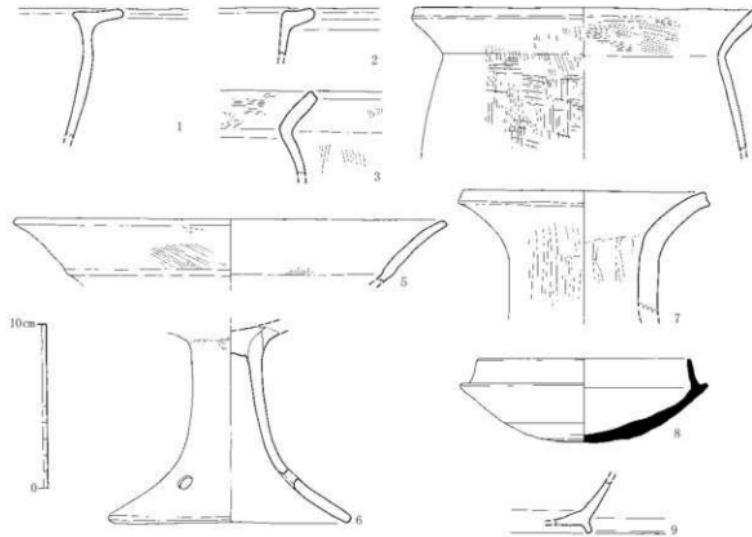
第 114 図 1 号溝出土遺物実測図 (1/3、16・17・20 は 1/2)

で調査区外へ出る。3 区での幅は約 2m を測る。

出土遺物 (第 114 図)

出土遺物には弥生土器が多く含まれるが、周辺の包含層からの混入と判断されるため、石器を除き報告から外している。1 は須恵器壺身で内傾する蓋受けの立ち上がりを有する。口縁端部は丸く收められる。2・3 は低い断面方形の高台をもつ須恵器壺身。4 はやや外側へ開く高台をもつ須恵器壺身。5 は断面方形の高台をもつ壺身で、体部は深い。

6～8 は土師器壺へラ切りの平坦な底部に直線的にひらく口縁部がつづく。9・10 は高い高台付きの壺で、7 は土師器、8 は瓦器である。11～14 は 6～8 に形態が類する須恵器。15



第115図 2号溝出土遺物実測図 (1/3)

は同形態の軟質瓦器である。1号溝は長く走るが、4・5が1区から、1・6・9・10・12～14が2区から、2・3・7・8・11・15が3区からの出土である。

16は片岩製の石包丁、17は輝緑凝灰岩製の石包丁で、混入品と判断される。18～20は上層にて未だ1号溝・2号溝が判断できなかつた段階で出土した遺物。19は浅い体部の須恵器皿。19は須恵器壺。20は凝灰岩製の磨石。

2号溝（第113図）

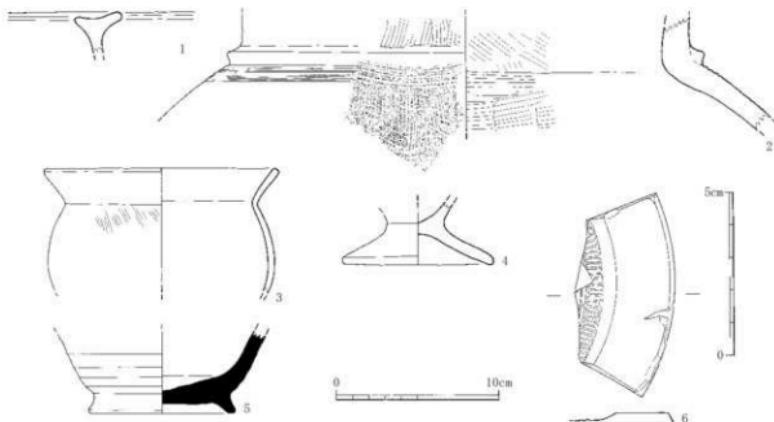
上記のように2号溝は1区内で1号溝に切られる層位関係であり、1号溝は方向を西へ転じるが、2号溝はそのまま方向を変えずに調査区外へと続く。溝の幅は最大で3mを測るもので、深さは40cm程度である。なお、1・2号溝ともに弥生時代の包含層に切り込んでおり、これらの溝を完掘し最終的にその下層包含層を下げている段階で鏡が出土し驚かされた。この溝下層の遺物は第116図のとおりである。包含層の時期は第134～138図に挙げるようく弥生時代後期を中心とするものであり、それに伴うものとして考えられる。

出土遺物（第115図）

1は鋤先口縁、2は逆L字形口縁で弥生時代中期に属する甕。3・4はく字形に屈曲する口縁部。5は高杯の口縁部。6は長脚の高杯の脚部。7は器台の口縁部。3～7は弥生時代後期に位置づけられる。8は須恵器の杯身。高い蓋受の立ち上がりを有し、端部に段はつくらず、古墳時代後期の所産と判断できる。9は瓦器梶小片。整った高台を有する。

2号溝下層出土遺物（第116図）

1は鋤先口縁の甕小片。2は大形の壺頸部で、頸部には断面三角形の突帯を巡らせ、その下に沈線文および波状文を巡らせる。3はく字形に屈曲する口縁をもつ小形の甕。4は甕の脚台部。



第 116 図 1・2 号溝下層出土遺物実測図 (1/3、6 は 2/3)

大きくハ字形に開く形状である。5は須恵器で長頸壺の底部であろうか。6は青銅鏡。割れ口も研磨して平滑となっており、破鏡として使用されていたことが窺い知れる。平縁で内区では櫛歯文まで確認できる。銅の質が良く、舶載鏡と考えられる。下層として取り上げたとはいえ、5は上層の溝に伴うものであろう。

3号溝（第 10 図）

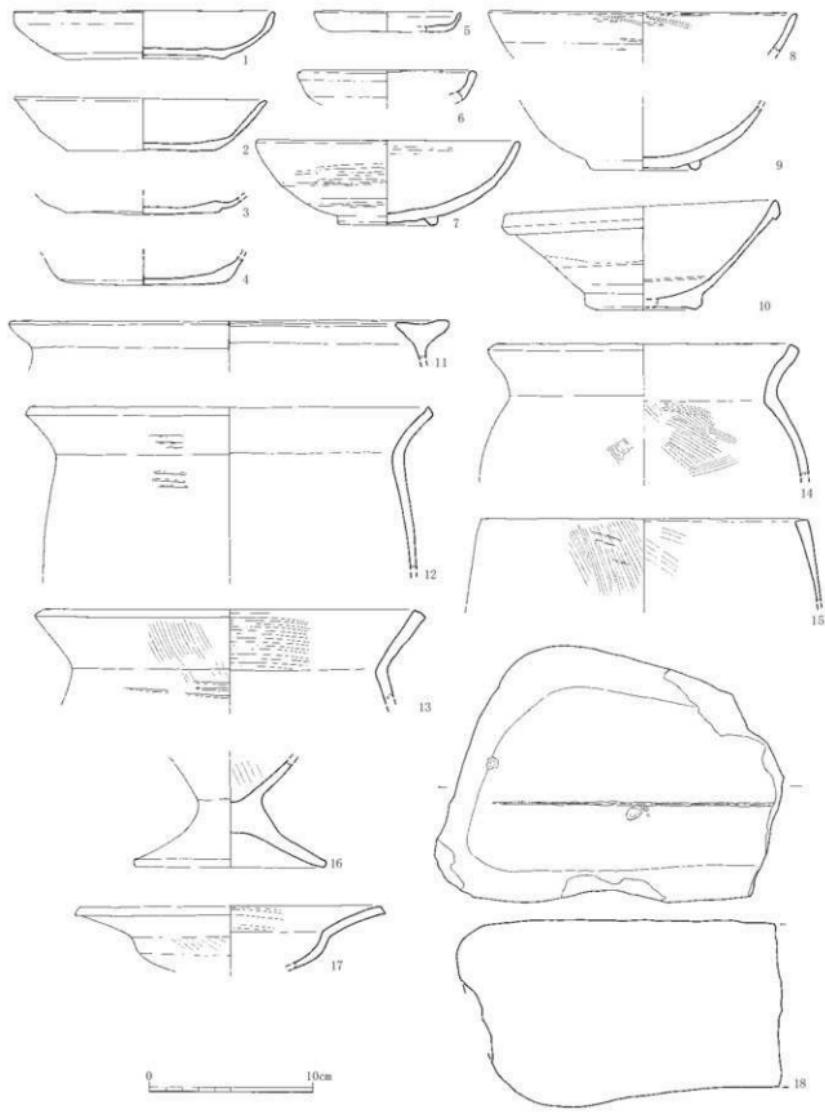
2区調査区上層の北東隅で検出されたもの。3号竪穴住居等の弥生時代の住居跡群を切る。1号溝とはちょうど調査区境で交わる位置となり、切り合ひ関係は不明。北に対して約 30 度西に振る方向にほぼ直線的に走る。検出面での幅は約 70cm、深さは 12 ~ 46cm を測り、北に向かつて深くなる。

出土遺物（第 117 図）

1 ~ 4 は土師器杯。5 ~ 6 は土師器小皿。7 ~ 9 は瓦器椀。10 は白磁碗。11 ~ 18 は弥生土器で、3号竪穴住居等の弥生時代の住居跡群を切ることから、それらからの混入品と判断される。11は弥生時代中期の甌。12 ~ 14 はく字形に屈曲する甌。15 は素口縁の甌で内湾する形態。16は厚底の甌底部で、大きく開く脚が付く。17は小形の高杯。大きく外反する口縁部をもつ。18は安山岩質の大形の砥石で、全面的に使用し擦れるが溝状の凹部が直線的に走る。

2区上層溝群（第 118 図）

2区調査区の南西隅で検出された溝状遺構群。方向的には北西方向にのびると考えられるが、統かない。全ての溝状遺構がほぼ同じ位置で終わっており、深さも浅いため削平されている可能性を残す。平行する溝状遺構群の中で、4号溝のみ連続した溝状を呈しており、他は長楕円形の形状をなす。また調査区外に 16号土坑の土坑墓があり、長楕円形の土坑も墓である可能性も捨てきれないが、出土遺物からは墓特有という状況ではない。



第117図 3号溝出土遺物実測図 (1/3)

4号溝（第118図）

北に対して約20度西に振る方向に直線的に走る。幅は最大で1mを測り、深さは最大で約38cmとなる。

出土遺物（第119図）

1～3は土師器小皿。4は土師器杯。5～10は瓦器椀。11・12は白磁碗。13～15は弥生土器で混入品。13は直口壺。14・15はく字形口縁の甕。

5号溝（第118図）

4号溝の西に隣接して並行して走るもの。重なり合うように走る部分もあり、そこでは4号溝に切られるよう検出された。長さ6mにわたるもので、溝状というよりも土坑の連続という形状である。幅は最大で1m程度、深さは最大で32cm程度であり一定しない。

出土遺物（第120図）

1～5は5号溝とした中の南側土坑、6～7は北側土坑の出土遺物である。1～3は瓦器椀。2・3は硬質の焼成。4・5は混入品の弥生土器甕。6は白磁碗口縁部小片。7は白磁碗底部。

6号溝（118図）

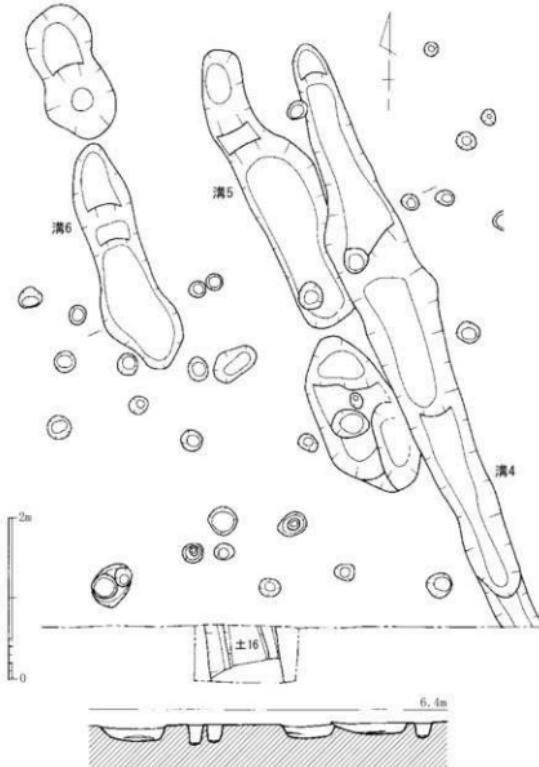
5号溝と同様に土坑の連続状を呈する。5号溝の西側、1.5mの間隔をおいて長さ4.5mにわたって検出された。幅70cm、深さはピット状の地点で43cmを測るが、大半は15cm程度である。

出土遺物（第120図）

8・9は6号溝とした中の南側土坑、10～14は北側土坑の出土遺物である。8は瓦器椀で、須恵質に近い焼成。9は白磁碗である。10は土師器小皿。11～13は瓦器椀。14は白磁碗である。

3区上層溝群（第121図）

3区上層の調査区西半では平行およびそれに直行する溝状遺構群が検出された。南北方向に



第118図 4～6号溝実測図 (1/60)

走るものは、北に向かって約30度西に振れる方向でほぼ一致する。東から順に7・8・9号溝とした3条の調査区の端から端まで続く長くのびる溝がある。また9号溝の西にも10号溝とした平行する細長い土坑があるが、長さは3m程度に留まる。また、7号溝の西側に平行する方向にやや蛇行する幅20cm程度の細い溝状遺構が調査区の両端を除く長さで走るが、深さが10cmに満たない程度のものであり、遺物も出土しなかった。

直行する溝は途切れ途切れの状況であるが、北から11・12・13号溝と3条検出された。11号溝は7号溝を基点とし、その他はすべて9号溝より西側で検出され、7号溝より東側では当該方向の溝は検出されなかった。

7号溝（第121図）

検出面での幅は4m前後を測るが、東側のおよそ半分は土坑状の遺構が連続する形状をなし高低差がある。溝の東壁は比較的緩やかな箇所が多い。西側の半分は底面の幅が1m程度の溝状をなす。西側の溝の底面は平坦で、溝の西壁は急傾斜で立ち上がる。土層の観察によると、当初は西側の溝状遺構があり、後に東側まで及ぶ範囲の堆積が重なる状況が確認できる。

出土遺物（第122・123・126図）

1～5は土師器杯。6～15は土師器小皿。15は口縁部が欠損し円盤状となったものの中央に穿孔を行い、紡錘車であろうか、再利用されたもの。16は高台付き小皿で、高い高台をもつ。17～24は瓦器椀。25は瓦器小皿。26は瓦器鉢。直線的に大きく開く体部で、内面の下半は磨滅するが、使用に伴うものであろうか。底面には糸切り痕を残す。27～29は白磁碗。30～33は龍泉窯系青磁碗。30・31は見込みに花文を描く。34は同安窯系青磁皿。35は青磁の瓶の頸部である。36・37は石鍋で断面台形の鍔を有する。38～40は7号溝の東に連続する土坑状遺構からの出土遺物。38・39は土師器小皿。40は龍泉窯系の青磁碗で、外面に蓮弁を刻む。

混入品と判断される弥生土器は第126図に図示した。1～3は平底の底部で、やや凸レンズ上に膨らむものを含む。4は鼓形の器台。5は黒曜石製の石鏃。6は花崗岩製の石錘。7は棒状土製品で、断面は隅丸方形をなす。

8号溝（第121図）

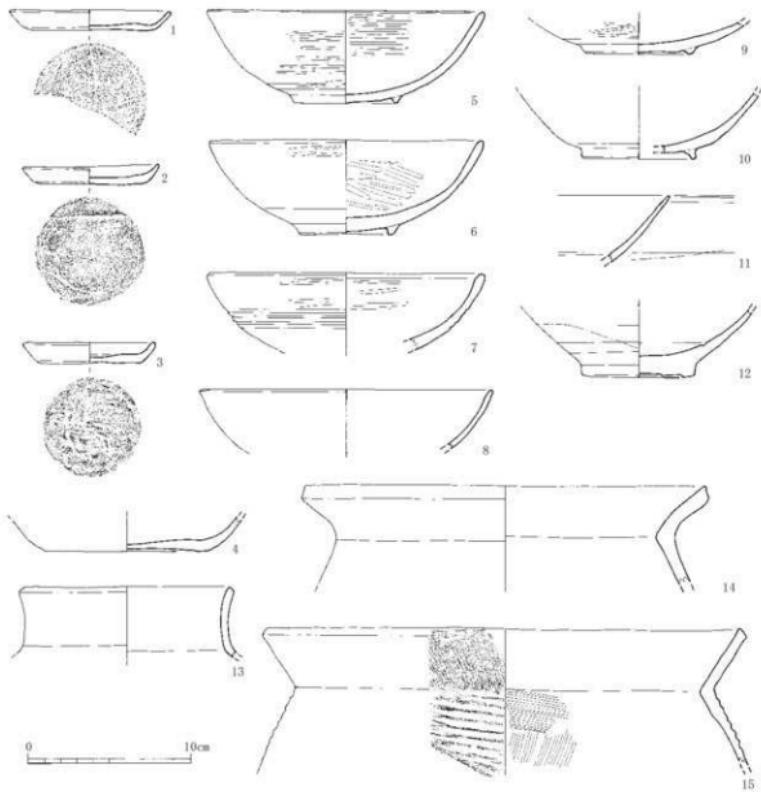
7号溝の西に近接し、最短で約30cm、北側の離れる場所では1.2m程度の間隔となるが、切りあうことはない。検出面での幅は約1m、深さは30cm程度であり、断面はU字形を呈する。

出土遺物（第124図）

1～4は土師器杯。5～12は土師器小皿。13～15は瓦器椀。16は瓦器小皿である。

9号溝（第121図）

8号溝の東に平行して位置する溝。8号溝と平行し、その幅は約2mを測る。道路の側溝の可能性が考えられるが、路面と判断できる堆積は確認されなかつた。幅は80cm～1m程度で、深さは約30cmを測る。断面形状はU字形をなす。調査区の南端付近では幅が広がるが、2条の溝が切りあつていると判断されたが、切り合い関係等は把握できなかつた。



第 119 図 4 号溝出土遺物実測図 (1/3)

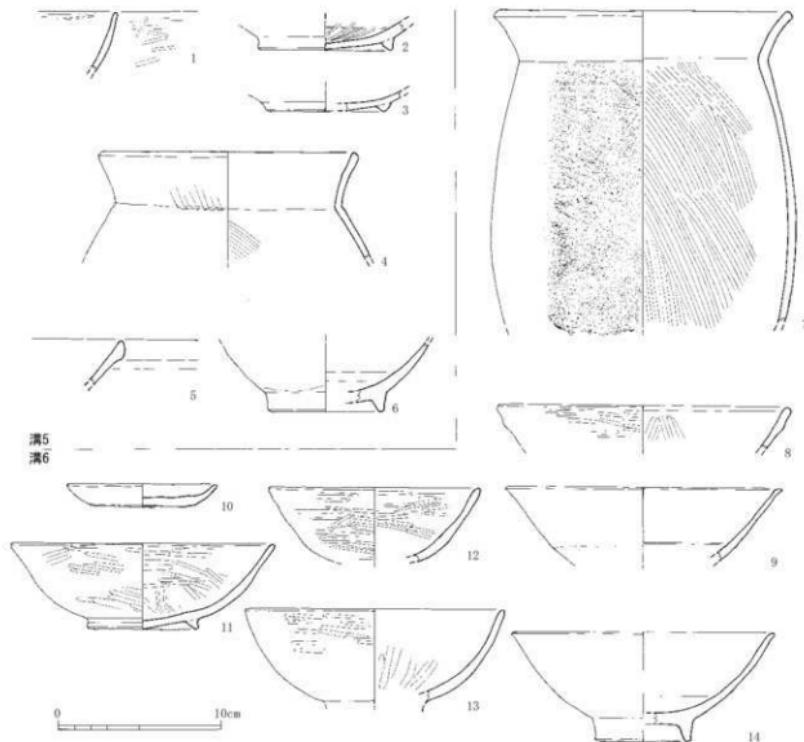
出土遺物 (第 124 図)

17・18は土師器小皿。19は瓦器椀。20・23・24は瓦器椀。21は瓦器で外反する口縁部。22は須恵質の鉢口縁部小片。25・26は玉縁口縁の青磁碗。27・28は滑石製石鍋である。

29～34は8号溝と9号溝の間の遺構面上にかたまって出土した土師器。ピットとしても検出できなかったものである。29・30は土師器杯。31～34は土師器小皿である。

10号溝 (第 121 図)

9号溝の西側に平行するもので、9号溝との検出面での間隔は約 2.3m を測る。幅は最大で 60cm、深さは 10cm 程度と浅い。南西側で 31 号土坑を切るものとして検出した。実測に耐えうる遺物は出土していない。



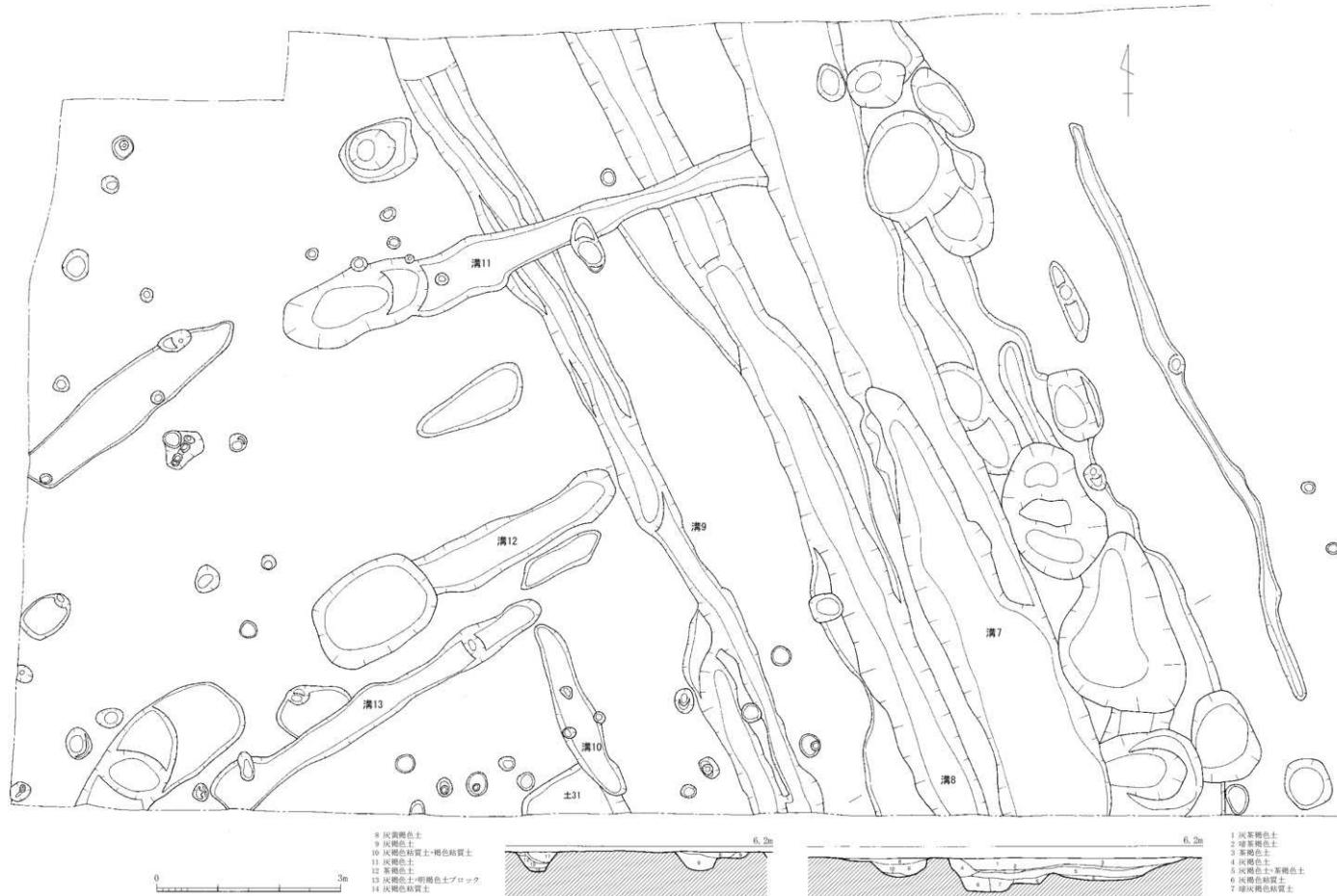
第120図 5・6号溝出土遺物実測図 (1/3)

11号溝(第121図)

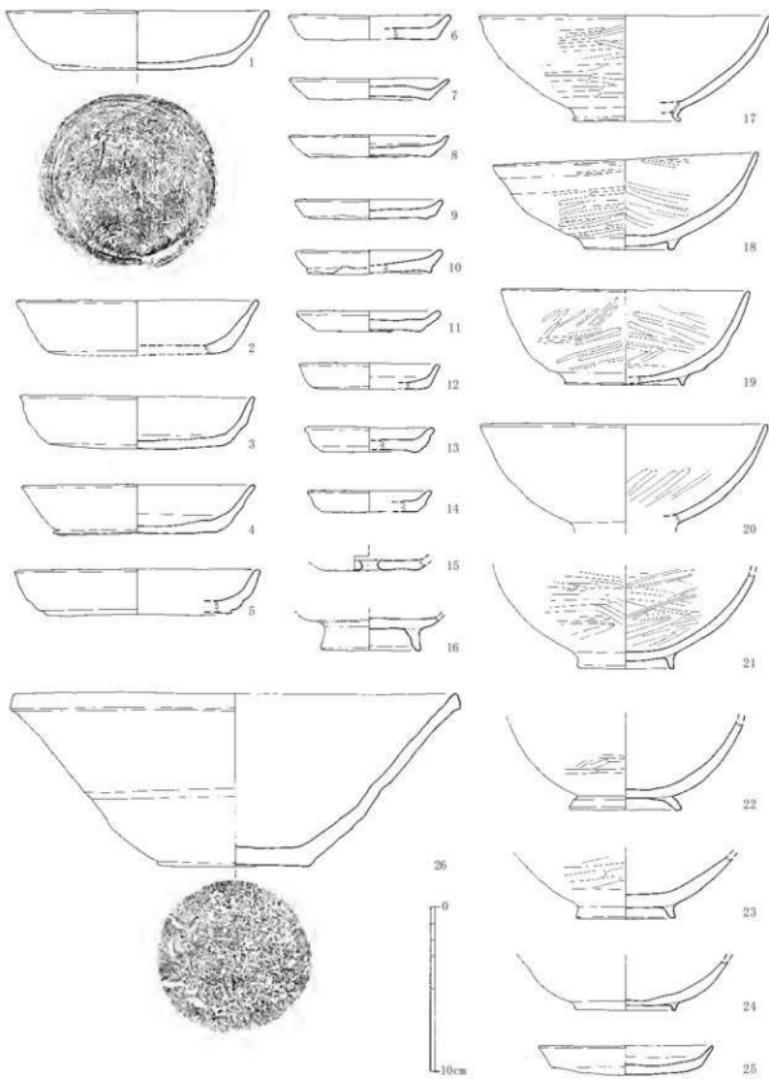
7～9号溝に直行する溝で、西側は7号溝を基点とし、東へのびる。9号溝より西は土坑状の遺構を経て一旦途切れ、再び土坑状の遺構として続く。7号溝と8号溝の切り合い関係は不明瞭で、8号溝・9号溝に対しては11号溝が切る。幅は30～100cmを測る。深さは10cm程度と浅く、また西側に位置する継続するとみられる溝状遺構も6cm程度の残存状況である。したがって一旦切れている部分も本来は溝が走っており、削平により失われている可能性が考えられる。

出土遺物(第125・126図)

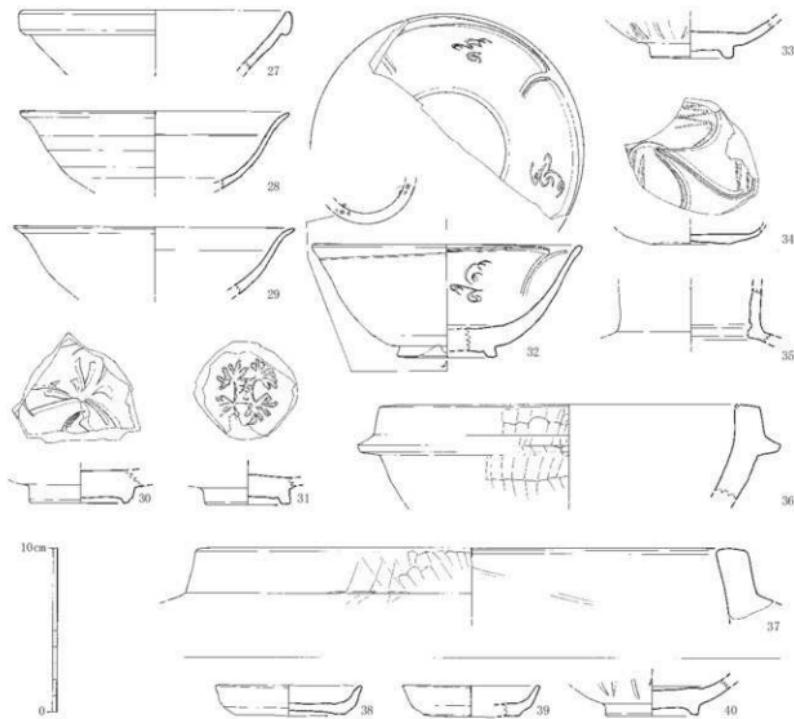
1は土師器小皿。2は白磁底部で高い高台を有する。第126図8は凹石でやや扁平な球形の安山岩の一面に窪みが生じる。3・4は11号溝を切るビット(P243)からの出土品。3は瓦器小皿。4は白磁碗の口縁部である。5・6は11号溝のうち、西側に続く浅い溝からの出土品。5は瓦器椀。6は龍泉窯系の青磁碗である。



第121図 7~13号溝実測図 (1/60)



第122図 7号溝出土遺物実測図① (1/3)



第 123 図 7 号溝出土遺物実測図② (1/3)

12号溝（第 121 図）

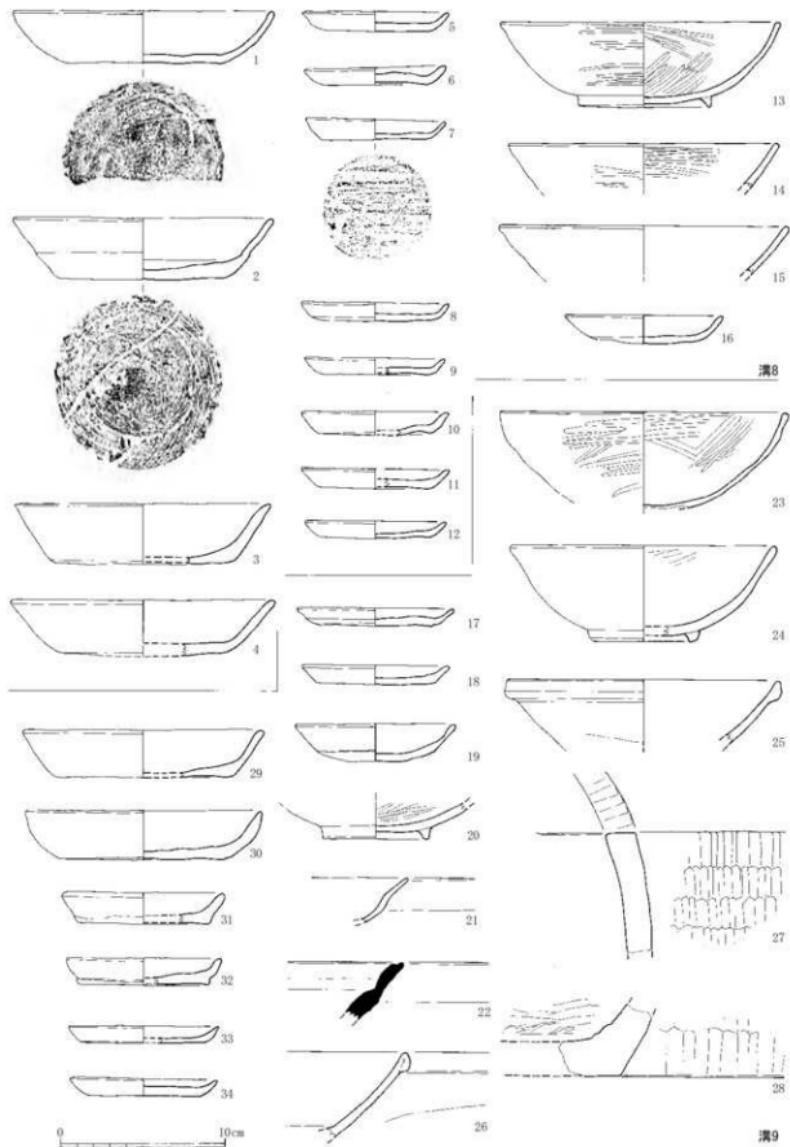
9号溝の西側を基点とするもので、9号溝とは切りあわない。幅は約 80cm で一定し、深さは 20cm 程度である。西側は土坑状となり、その西側は一旦溝が途切れ、1.5m 程の間隔をおいて再び土坑状となる。これら土坑状の部分は浅く、深さは 10cm 程度であり、11号溝と同様、削平を受けて溝が部分的に失われている可能性が考えられる。

出土遺物（第 125 図）

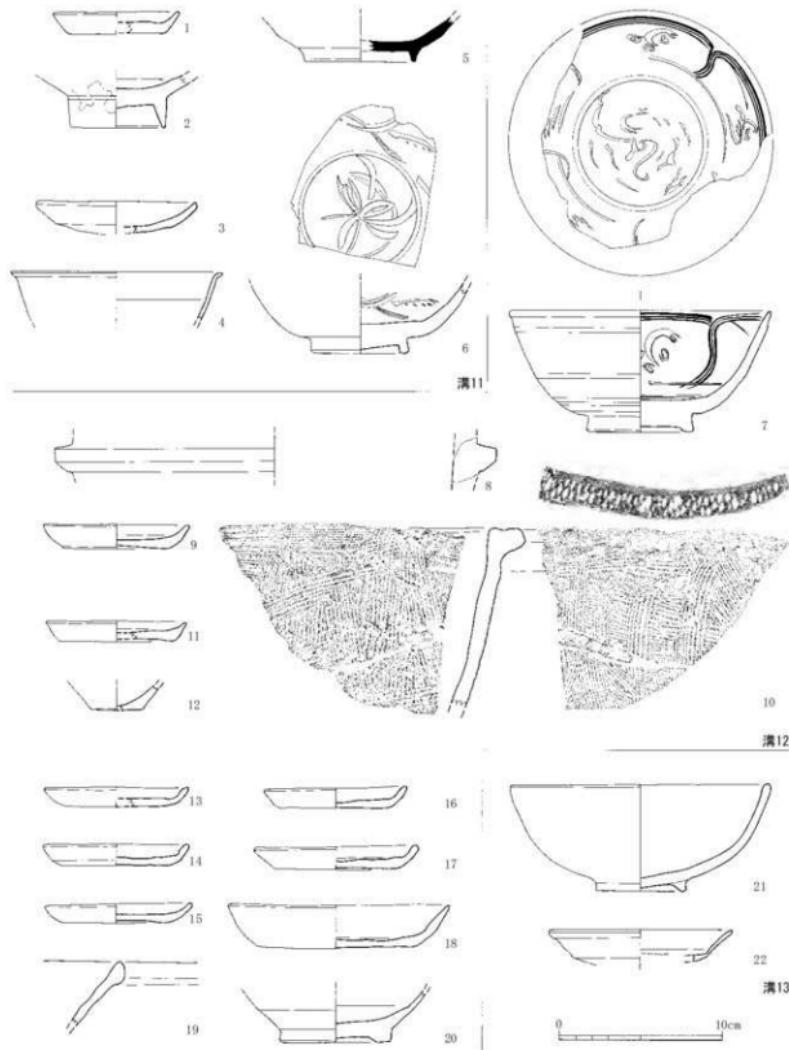
7～10は12号溝としたもののうち西側の土坑状遺構の出土品。7は龍泉窯系の青磁碗。8は滑石製の石鍋の鏃部。9は土師器小皿。10は瓦器の鉢。大形品で口縁部は逆L字形をなす。

11・12は12号溝としたもののうち東側の溝状遺構の出土品。土師器小皿である。

13～20は12号溝としたもののうち中央の土坑状遺構の出土品。13～17は土師器小皿。18は土師器杯。19は土師器の鉢口縁部。20は白磁碗の底部である。



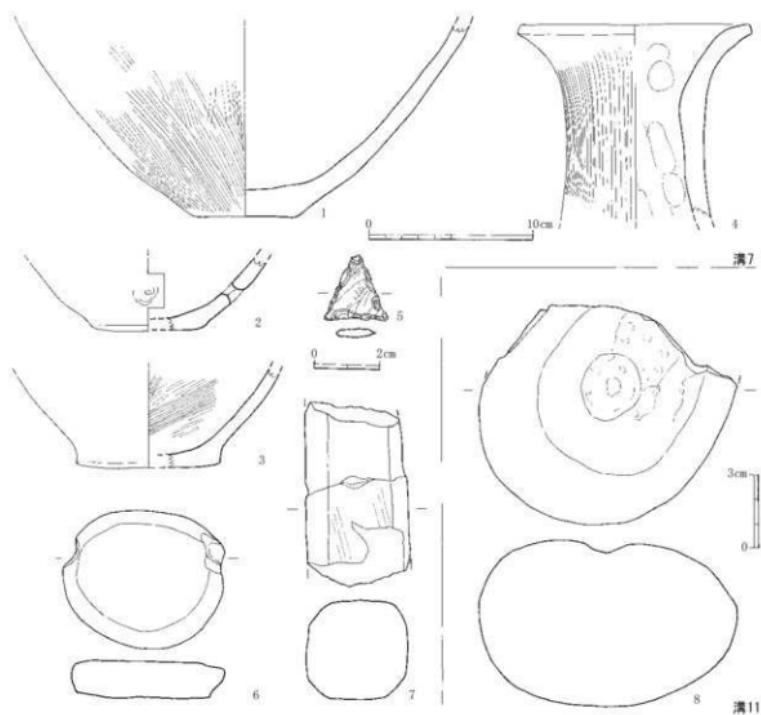
第124図 8・9号溝出土遺物実測図 (1/3)



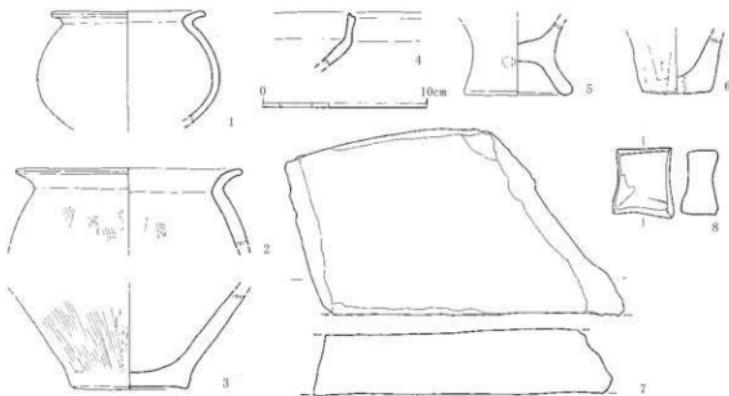
第125図 11～13号溝出土遺物実測図 (1/3)

13号溝(第121図)

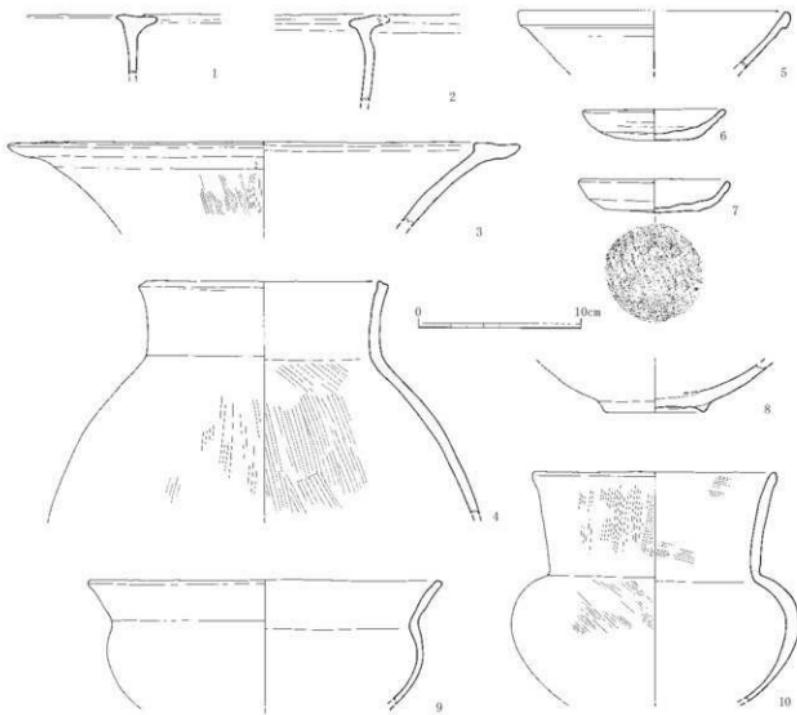
12号溝の南側に近接して位置し、方向も一致して切りあわない。10号溝の北端付近を基点



第126図 7・11号溝出土遺物実測図 (1/3、5は2/3、6～8は1/2)



第127図 14号溝出土遺物実測図 (1/3)



第128図 1区ピット出土遺物実測図 (1/3)

とするが、10号溝とも切りあわない。長さ6mにわたって検出され調査区外に続く可能性が高い。

出土遺物（第125図）

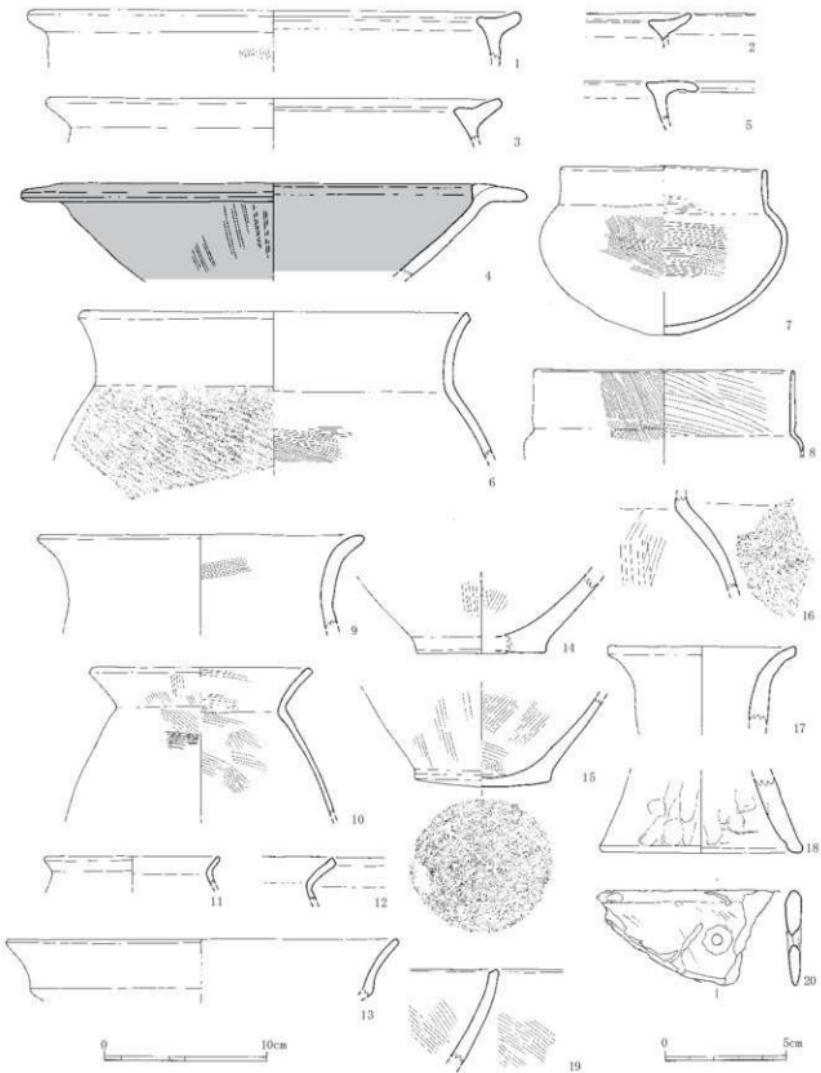
21は瓦器楕で硬質の焼成。22は13号溝に切られるピット（P280）から出土した青磁皿。

14号溝（第60図）

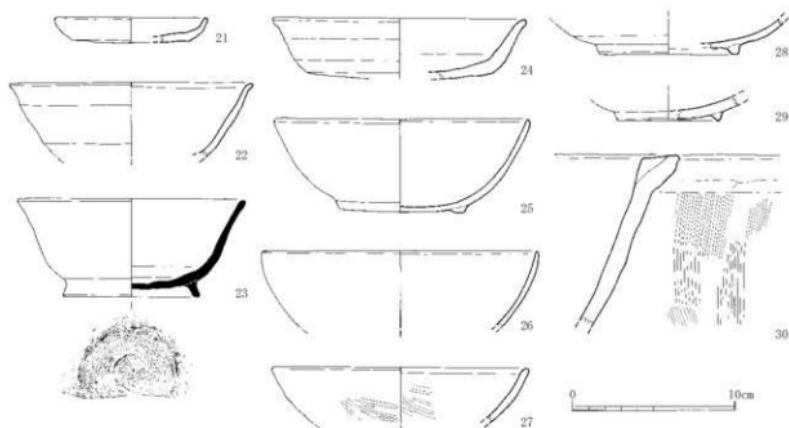
3区下層の調査区ほぼ中央で検出された溝状遺構。北に向かって約45度西へ振る方向にはほぼ直線としてはしる。幅は約60cmで一定。深さは30cmを測る。下記のように遺物からは細かく時期を限定できないが、住居跡群を切る関係と、遺物に古墳時代遺構のものを含まないため、弥生時代の集落の廃絶の頃に位置づけられよう。

出土遺物（第127図）

1は球形の胴部に強く外反する口縁部がつづく小形の壺。2は外反する口縁部をもつ甕。3は平底の底部である。4は内湾気味に立ち上がる体部に直立する口縁部がつくもので、高杯となろうか。5は高い上げ底の甕底部。6は小形の底部で厚手である。7は大形の砥石で凝灰岩質砂岩製。8は砂岩製の砥石である。



第129図 2区ピット出土遺物実測図① (1/3、20は1/2、他は)



第130図 2区ピット出土遺物実測図② (1/3)

ピット

ピットは調査区全体において検出されたが、特に上層の中世遺構面にて検出されたものは、小規模で数が多い。それらにより掘立柱建物を構成するものが多分に含まれると考えられるが、十分な検討が及ばなかった。なおピットはP○、土坑はD○として調査時に遺物取り上げを行つたが、報告に際し土坑としていたものをピット扱いに変更したものがある。

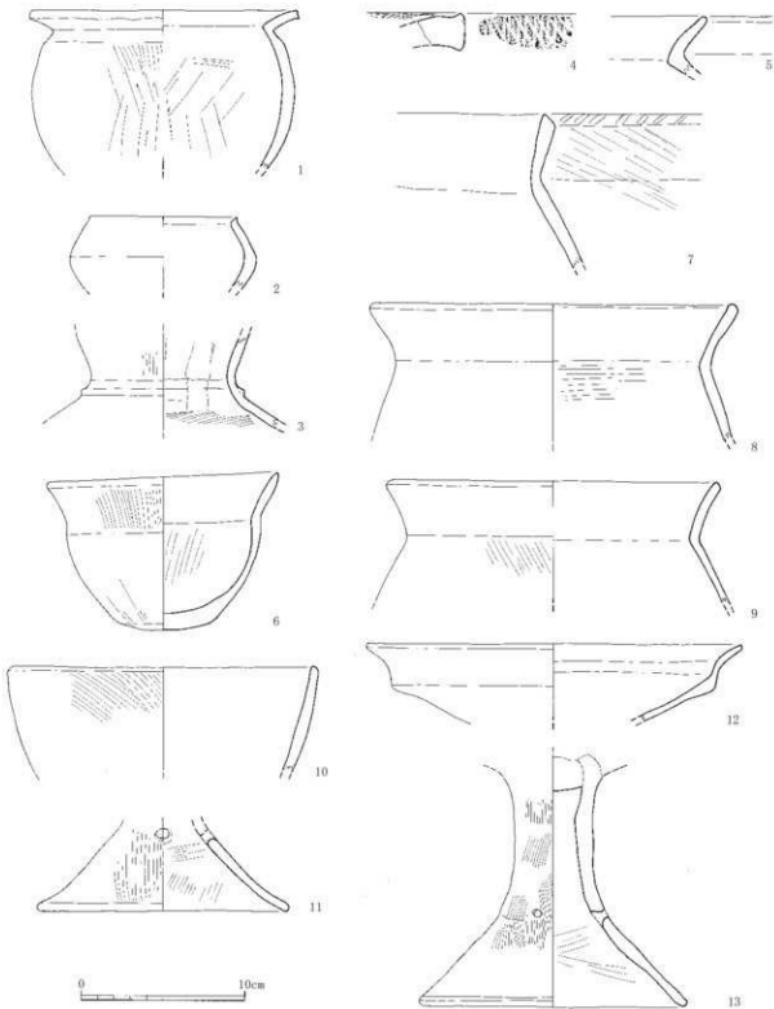
出土遺物（第128～133）

ピット出土遺物を区毎に図示し説明を加える。

第128図は1区のピット出土遺物である。1～3はD6出土。弥生時代中期に位置づけられるもので、1・2は甕、3は広口壺である。4～8はD3出土。中世が主体であることから4の弥生土器直口甕は混入であろう。5は白磁碗。6は土師器小皿、7は瓦器小皿、8は瓦器椀である。9はD10出土のく字形に屈曲する口縁部の鉢。10はD8出土の壺で、緩やかに外反する口縁部をもつ。

第129・130図は2区のピット出土遺物である。1はP99出土の弥生時代中期の甕。2・11・19はP273の出土品で、2は甕口縁で、11は小形壺で短く外反する口縁をもつ。19は鉢の小片。3・4・5はP282出土で、いずれも弥生時代中期。4は高杯で内外面ともに丹塗り。6はP301出土の甕で、緩やかに外反する長い口縁部をもつ。7は直立する口縁部をもつ小形の壺でP328出土。8も同様の形態をもつものでP289出土。9は緩やかに外反する甕口縁部で、P175出土。10はP30出土の薄手の甕。12はP273出土のく字形口縁小片。13は外反する口縁で、高杯の可能性もある。P87出土。14は平底の底部でP324出土。15は凸レンズ状の底面となる甕で、底面にX印の沈線がはいる。P340出土。16は縦方向に波状文状の文様を刻む壺肩部で、P330から出土。17はP70出土の器台口縁部。18はP295出土の器台ないし支脚底部。20はP144出土の石包丁で、輝緑凝灰岩製。使用によりかなり小形化している。

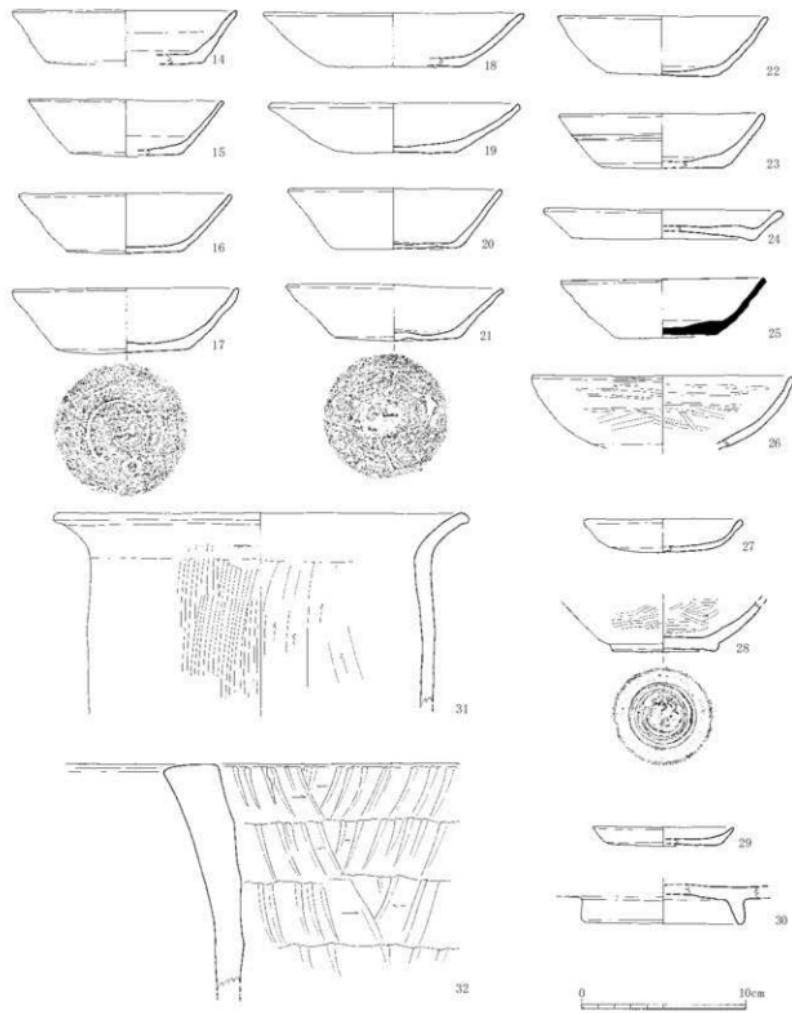
21は土師器小皿でP26出土。22は土師器椀でP175出土。23は須恵器の杯でハ字形に開く



第131図 3区ピット出土遺物実測図① (1/3)

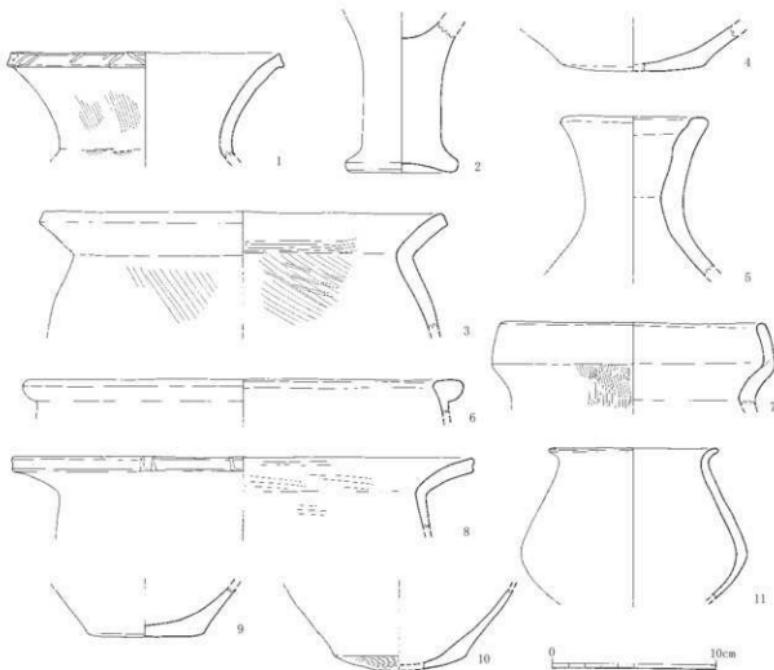
高台をもつ。P356出土。24は瓦器杯で須恵質に近い。P279出土。25～29は瓦器楕。25はP106、26はP135、27はP110、28はP105、29はD23出土。30は土師器の大形鉢口縁部。直線的に開き、口縁部は外折させ内面を肥厚させる。P13出土。

第131・132図は3区のピット出土遺物。1はP381出土の球形胴部をもつ甕。2はP382出土



第132図 3区ピット出土遺物実測図② (1/3)

の素口縁の壺ないし鉢。3はP372出土の壺頸部。4・5はD81からの出土。4は大形壺の口縁部で側面にキザミを施す。5はく字形口縁の甕。7～13は3区上層で23号竪穴住居北側に該当する位置にある不整形ピット(P198)からの出土遺物。6は3区下層で同位置で検出された



第 133 図 4 区ピット出土遺物実測図 (1/3)

P392 の出土品。まとまった遺物量があるため、本来は堅穴住居があった可能性は否定できない。6 は凸レンズ状の底部をもつ小形のく字形口縁の鉢。7～9 はく字形に屈曲する口縁をもつ甕で、7 は口縁端部にキザミをもつ。10 は素口縁の鉢。11～13 は高杯で 13 の脚部には小円孔が穿たれる。

14～26・31 は 3 区北西隅付近にある P356 の出土品。上層中世の面では検出できずにいたが、下層構面に至る重機作業中にも多数の遺物が出土したもの。下層にて精査したが、ピット状としか検出できなかったが、本来は土坑として扱うべきものかと思われる。26 は中世の瓦器椀で混入と判断するが、他は直線的に大きく開く口縁部を有する土師器杯であり、一括性が高いといえる。底面はいずれもヘラ切り。25 は同形態であるが須恵器であり、底面はナデで仕上げられる。31 は土師器の甕で、頸部内面の稜は弱い。27・28 は P222 出土で、27 は瓦器小皿、28 は瓦器椀で高台内は同心円の沈線が巡る。29・30 は P264 出土の土師器で、29 は小皿、30 は高台付の杯といえる。32 は大形の滑石製石鍋で顎著に加工痕を残す。

第 133 図は 4 区のピット出土遺物。1～5 は 4 区南西隅にある D101 からの出土遺物。当初住居跡として調査を行ったが、形状がやや不整形であることと床面が傾斜することからピット扱



第134図 1区包含層（茶褐色砂・灰色砂礫）出土遺物実測図（1/3）

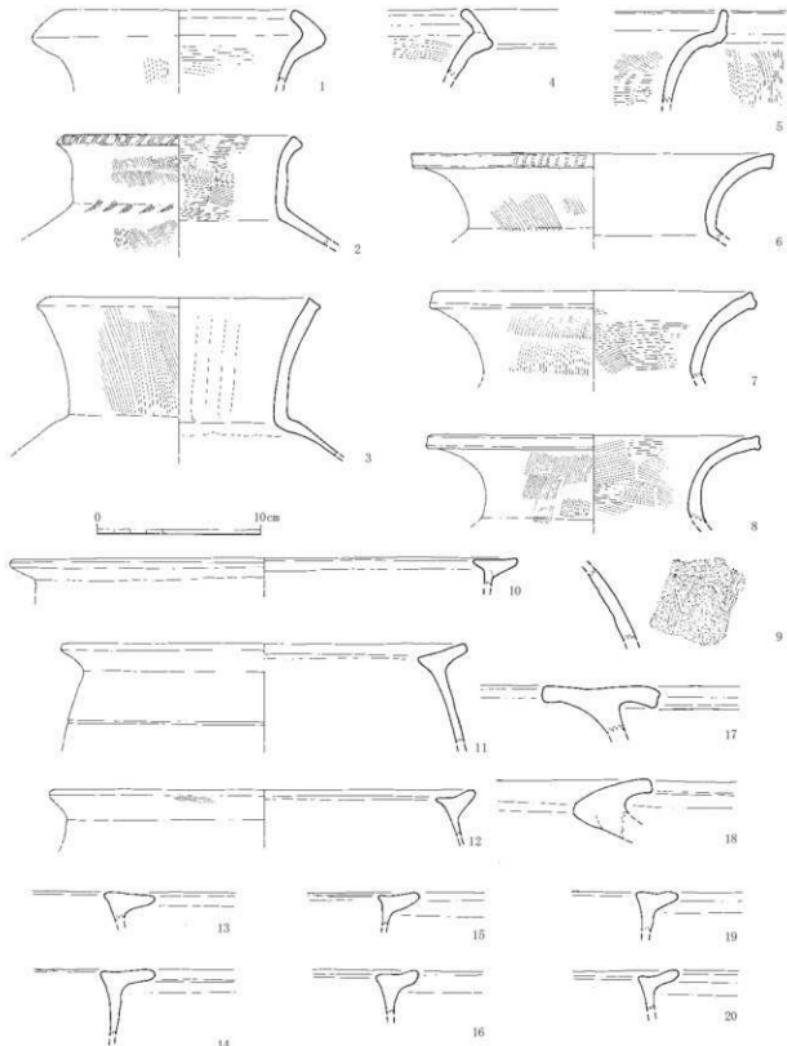
いに変更した。弥生時代後期として一括性はあると判断される。1はラッパ状にひらく口縁部の壺で口縁端部側面にはキザミをまばらに刻む。2は中実の脚柱部をもつ底部で特異な形態。天地が逆で器台になるかもしれない。3はく字形に屈曲する口縁部の壺。4は底面が凸レンズ状を呈する壺ないし甕底部。5は器台であろうか。鼓形を呈し裾は大きく広がる。6はP369出土の壺で、口縁端部は外方へ丸みをおびて突出させる。7はP409出土の袋状口縁壺。8～11はP434の出土品。8は屈曲して大きく外反する口縁部を有する壺。9・10は凸レンズ状の底面をなす甕底部。11は短く外反させる口縁部を有する壺で胴部は強く張る。胎土は精良である。

遺物包含層

遺物包含層の出土遺物を区毎にまとめて報告する。特に集落の中心とする2～4区の縁辺にて遺物包含層が形成されており、遺物の時期も集落の時期と一致するものと判断される。

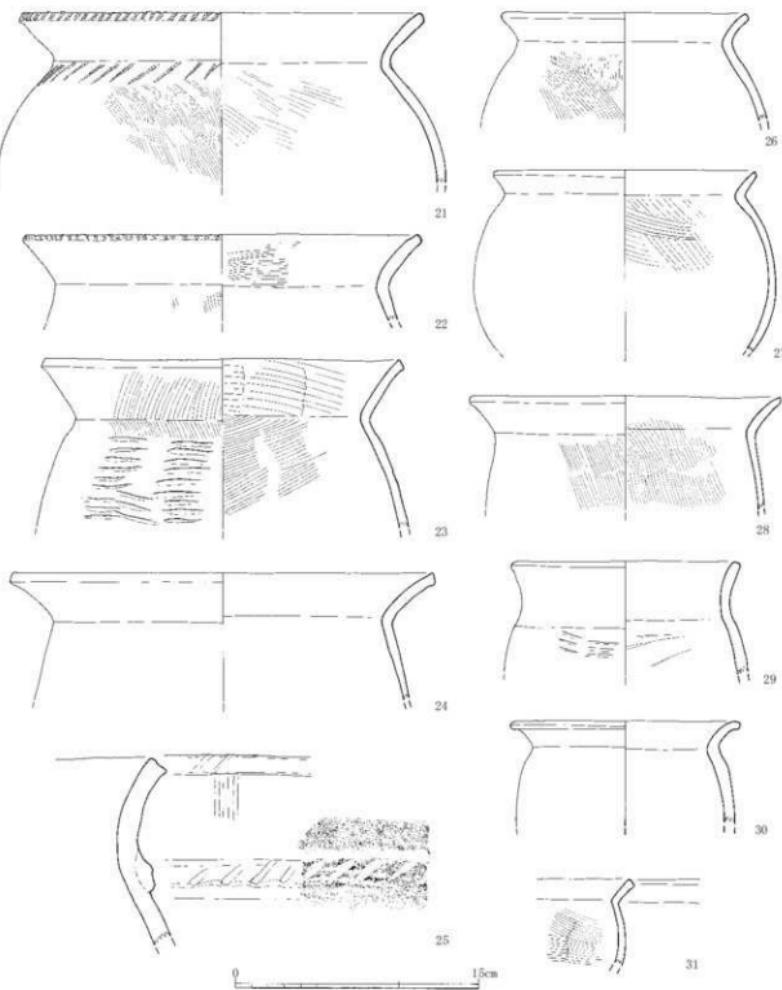
出土遺物（第134～142）

第134～138図は1区に展開する包含層の出土遺物で、第135～138図は茶褐色土の出土品。



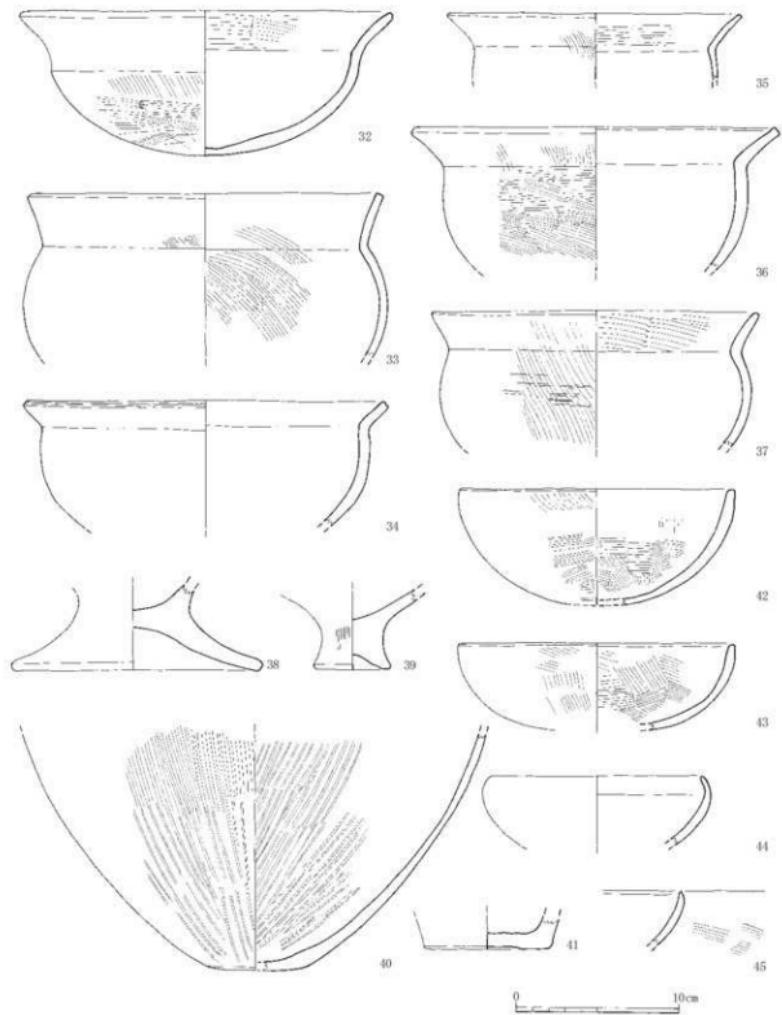
第135図 1区包含層（茶褐色土）出土遺物実測図① (1/3)

弥生時代中期の遺物が断片的に入るが、弥生時代後期が主体を占めるものといえる。1～9は壺。袋状口縁壺やラッパ状にひらく単口縁壺からなる。2は直立に近い口頸部に外反する口縁部が



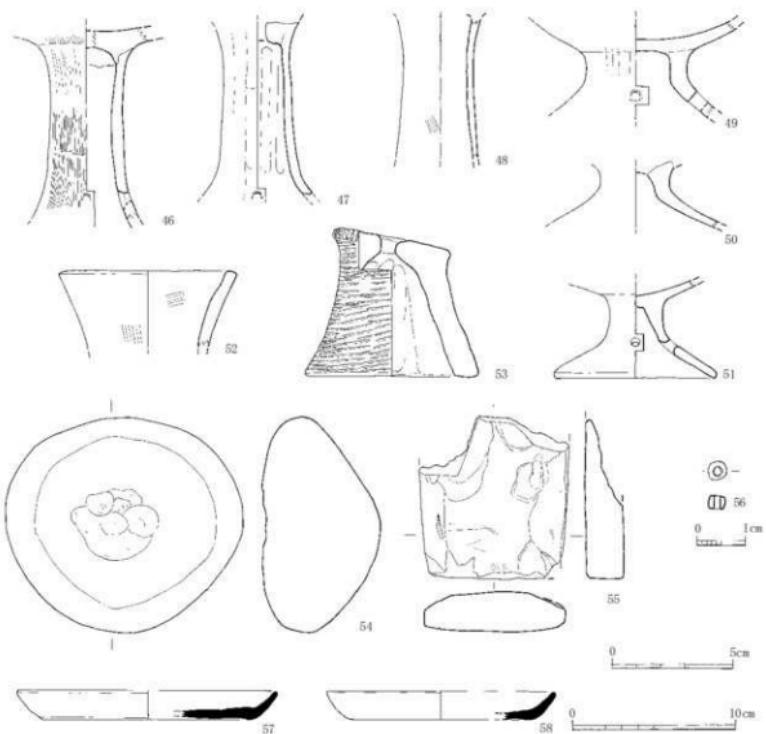
第136図 1区包含層(茶褐色土)出土遺物実測図②(1/3)

続くもの。口縁端部にキザミを施し、頸部には刺突文を連続させる。9は壺の肩部で、横方向の櫛描沈線文の下に波状文を巡らせる。10～20は弥生時代中期の鋤先口縁の壺でいずれも小片である。21～31はく字形に屈曲する口縁部を有する壺。21は口縁部及び肩部、22は口縁部にキザミを連続させる。25は大形の壺で緩やかな頸部に突帯を巡らせキザミを施す。32～37は鉢形の胴部にく字形に屈曲する口縁部がつくもの。38は壺の脚台。39は細くて厚い壺



第137図 1区包含層（茶褐色土）出土遺物実測図③（1/3）

の底部で、蓋の口縁部の可能性も残す。40は底部で、底面の形状は凸レンズ状。41は平底の底部で器壁は直に立ち上がり特殊な器形となろうか。42～45は半球形の鉢。46～48は長脚の高杯の脚柱部。49～51は短脚の高杯の脚部である。52は器台口縁部。53は支脚で、上面



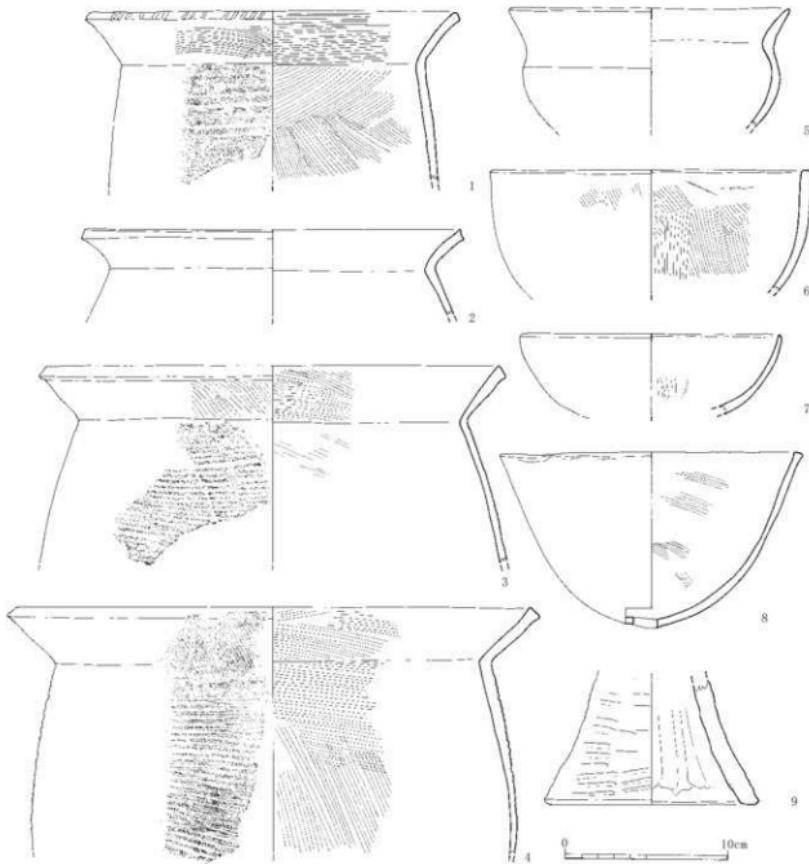
第138図 1区包含層(茶褐色土)出土遺物実測図④(1/3、54・55は1/2、56は1/1)

コーナーにキザミをもつ。54は凹石で片面に瘤みが生じる。磨石としても使われたとみられ、平滑な部位も多い。55は頁岩製の石剣基部。56はガラス小玉で、色調はエメラルドグリーン。57・58は土師器皿で、包含層に切り込むピットがあったものと想定される。

第134図は1区包含層のうち、主となる茶褐色土から分層した堆積の出土遺物。1～4は茶褐色砂からの出土で、1は弥生時代中期の壺小片。2～4はく字形口縁の壺で、弥生時代後期の所産。5～6は灰色砂疊層の遺物。5は短口縁の壺で、6は小形の鉢。分層はできるものの基本的には弥生時代後期の範疇に収まるものであり、1区包含層は弥生時代後期に帰属し、先行する弥生時代中期が若干含まれるものと評価できる。

第139図は2区包含層の出土品。1～4はく字形に屈曲する口縁部をもつ壺。5は外反する口縁部をもつ鉢。6～8は半球形の鉢。8は底部に径1.5cmの穿孔をもつ。9は器台もしくは支脚の脚部である。

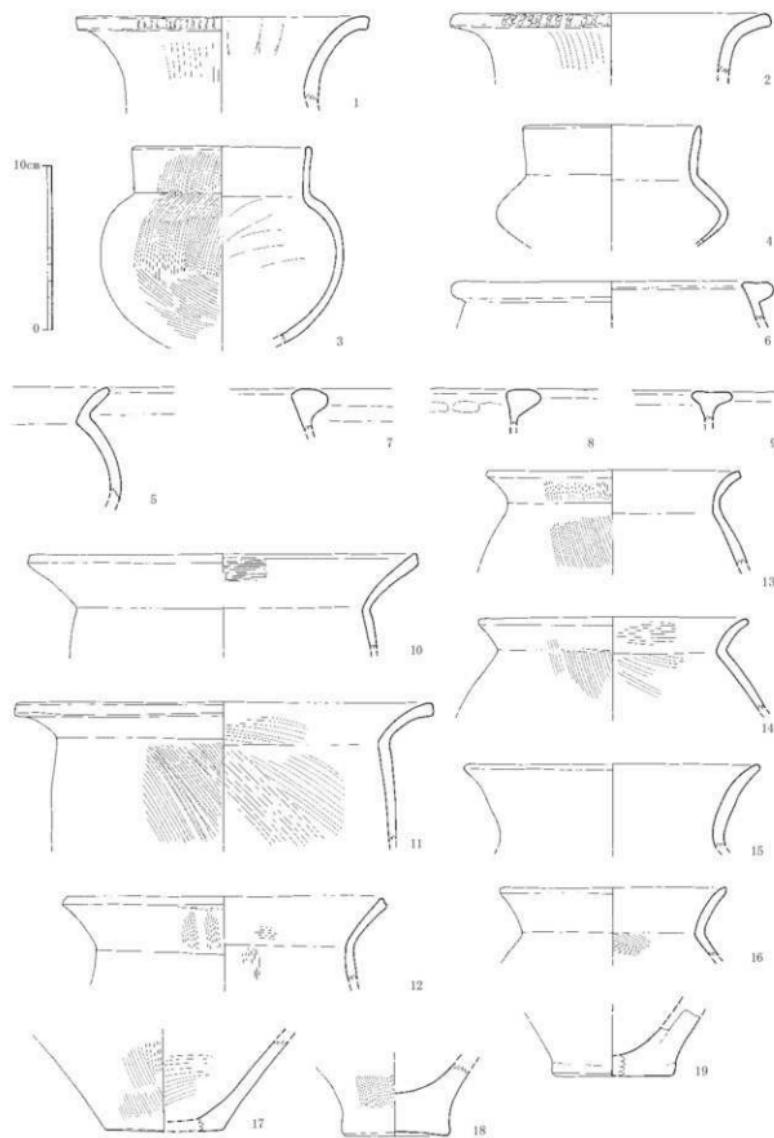
第140・141図は5区・6区の包含層出土遺物。ピット状の遺構から出土した資料を含む。1～2はラッパ状にひらく口縁部で、口縁端部にキザミを施す。3・4は直立する口縁部を有す



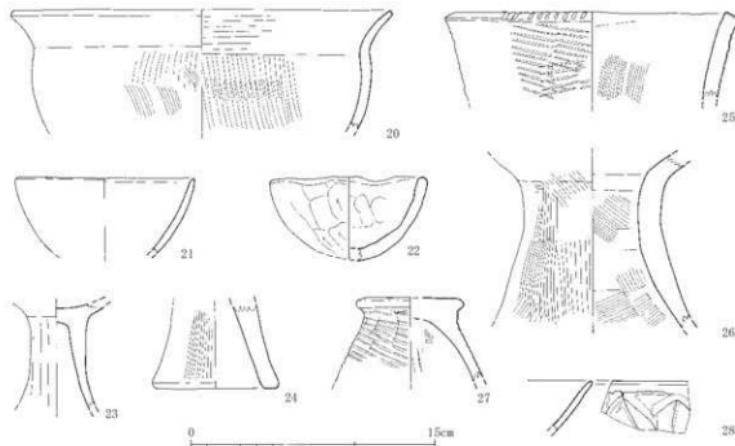
第 139 図 2 区包含層出土遺物実測図 (1/3)

る小形の壺。胴部は 3 は球形、4 は横に張る。6～8 は丸みを有する三角口縁、9 は鋤先口縁の甕口縁部小片。5・10～16 はく字形に屈曲する口縁部を有する甕。17～19 は甕底部で平底のもの。20 はく字形口縁を有する鉢。21 は半球形の小形鉢。22 は手づくねの楕形土器。23 は高杯脚柱部。24～26 は器台。27 は支脚である。28 は鎬運弁を刻む青磁碗の小片。若干の中世の遺物を含むが、基本的には弥生時代後期を主体とすると評価できる。1 区包含層と同様の様相を示すものであり、集落の縁辺に展開される包含層として共通するものと考えられる。

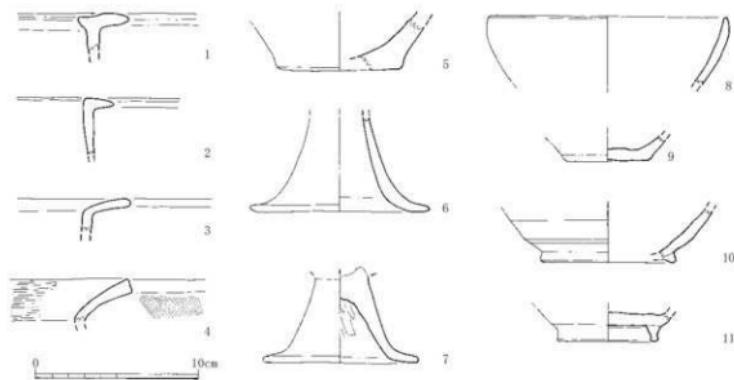
第 142 図は 7 区包含層の出土品。1 は鋤先口縁の甕小片。2 は逆 L 字形で、3・4 は屈曲度の強いく字形をなす。5 は平底の底部。これらは弥生時代中期の範疇に入り、3・4 は中期でも後半に位置づけられよう。6・7 は高杯の脚部で端部は強く外反する。属性は少ないが、古墳時



第140図 5・6区出土遺物実測図① (1/3)



第141図 5・6区出土遺物実測図② (1/3)



第142図 7区出土遺物実測図 (1/3)

代後期頃であろう。8は鉢の口縁部。9は土師器小皿で底面にわずかに糸切り痕を残す。10は瓦器椀。11は高台付きの小皿であるが、近世に属するものかもしれない。何れも小片であり、近隣からの混入品の可能性が高い。

4　まとめ

山門ガラン遺跡では、弥生時代及び中世の遺構が多数確認された。遺跡名でもあり小字名でもある「ガラン」から、寺院関連の遺構が検出されるものかと期待されたが、遺構・遺物からはその痕跡は見出せなかつた。調査区は東西に長いものとなつたが、遺構の密度は2区～3区が中心となり、4区は遺構密度が低くなり、1区および5区以西は遺物包含層となる。地理的環境でも触れたとおり、当地は北東から南西に向かつてのびる微高地が連続する状況であり、それを横断する調査区となっている。したがつて遺跡の展開は2・3区の北東及び南西に続くと想定され、また海の湾入状況から考えて南西方向については集落の縁辺である可能性が高い。

弥生時代に関しては、これまでの土器の編年研究から概ね弥生時代中期から終末期に該当すると判断される。すなわち、壺・甕の底部は平底のものからやや凸レンズ状を呈するものが多く、ほとんど丸底に近い凸レンズ状の底部や丸底のものの段階を含んでおり、いわゆる畿内系の土師器が出土しないことから、弥生時代の範疇で捉えるべきと考える。4区で検出した弥生時代中期前葉のものが、古式のものに位置づけられよう。住居の切り合いが激しく、土色も明瞭ではないこともあり、住居の切り合い順と出土遺物の検討から、検出を認証していたものも想定されるが、後期の範疇での前後関係で考えられるものが多い。切られる住居には弥生時代中期に属するものがあるが、後期ないし終末期に比べ数は多くない。

中世に関しては、多数のピット群および井戸群が検出された。ピットに関しては小規模なもののが多数存在する状況から、本来は掘立柱建物の検討が必要であるが、十分な検討ができなかつた点は反省すべきである。時期は土師器小皿・杯の形態等から概ね12世紀から13世紀を中心とすると判断される。出土遺物は中世特有の土師器小皿・杯および瓦器椀からなり特筆すべきものは少ない。その中で、瓦器は焼成が極めて良好なものが約半数を占める点が特徴的である。いわゆる瓦質という焼成の甘い灰褐色を呈するものではなく、極めて硬質で近現代の瓦に近いいぶし銀という表現に近い、表面に光沢があるものである。

溝状遺構は条里に伴う可能性が考えられるが、出土遺物から9世紀頃に位置付けられる1号溝は規格性のあるものではなく、整然とした方向の溝は中世に位置付けられる。

出土土器の検討については先学の内容を参考にする部分が多いが、今回の調査に加え、九州新幹線建設に伴う調査で、弥生時代を中心としたかなりの資料の増加がみられた。また、有明海沿岸道路建設に伴う調査や民間開発に伴う調査でも良好な資料が出土しており、南筑後地域での土器研究が大きく進むものと期待される。当地は昭和50年代からの農業基盤整備事業関係の調査成果で多数の遺構・遺物の発見があつたが、今一度その成果を評価すべきであろう。今回の調査報告は、出土資料の提示のみで十分な検討をすることができなかつたが、既往の調査成果を総合させ、当地の歴史的具体像が描けるよう検討を重ねなければいけないと感じる。

図 版

1. 遺跡全景
(西から)

手前から
4区
3区下層
2区下層



2. 遺跡全景
(南東から)

手前から
2区上層
3区上層





1. 遺跡全景
(東から)

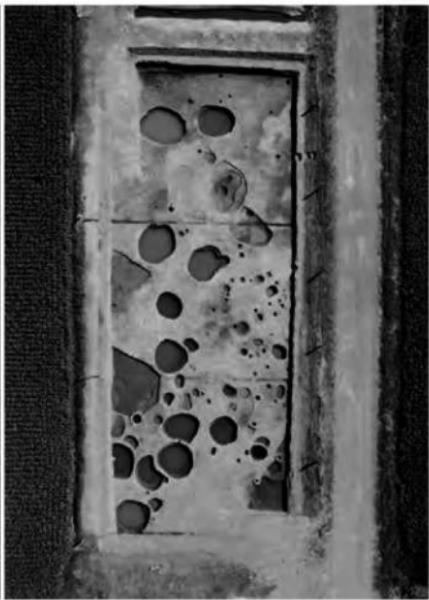
手前から
2 区下層
3 区下層
4 区



2. 1 区全景 (西から)



1.2 区上層全景（上空から） 左が北



3.4 区全景（上空から） 左が北



2.3 区上層全景（上空から） 左が北



4. 山門ガラン遺跡現況



1.2 区下層東
堅穴住居群
(上空から)



2.3 区下層
堅穴住居群
(上空から)



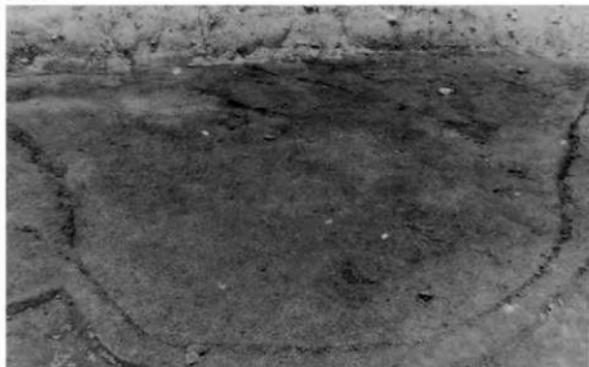
1.2号堅穴住居（西から）



2.3号堅穴住居（南西から）



3.4号堅穴住居内ピット
遺物出土状況（南から）



1. 8号竪穴住居
検出状況（南から）



2. 10・11号竪穴住居（南から）



3. 14号竪穴住居（西から）



1.2 区下層東
堅穴住居群
(東から)



2.17号堅穴住居遺物出土状況（北から）



3.17号堅穴住居遺物出土状況（西から）



1. 18・19号竪穴住居（南東から）



2. 20号竪穴住居（北から）



3. 24・25号竪穴住居（南から）



1. 26号堅穴住居
遺物出土状況（北から）



2. 27号堅穴住居（南西から）



3. 27号堅穴住居
遺物出土状況（北から）



1. 30・33号竪穴住居（南東から）



2. 38号竪穴住居（南から）



3. 1号甕棺墓（南西から）



1.5号土坑（北から）



2.8号土坑（南から）



3.9号土坑（南西から）



1. 11号土坑（東から）



2. 12号土坑（東から）



3. 13号土坑（西から）



1.14号土坑（東から）



2.15号土坑（南東から）



3.18～21号土坑（東から）



1. 22～24号土坑（北東から）



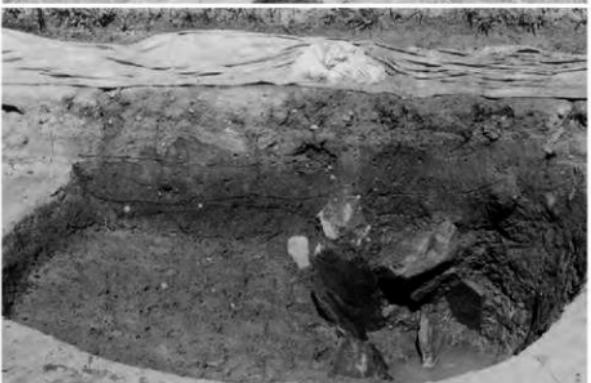
2. 25号土坑（西から）



3. 26号土坑（北東から）



1. 27号土坑（北東から）



2. 36号土坑（南から）



3. 39号土坑（南西から）



1. 16号土坑（北から）



2. 17号土坑（南から）



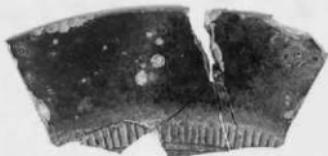
3. 7～9号溝（南東から）



1. 1・2号溝（北東から）



2. 1区鏡出土状況



3. 出土鏡

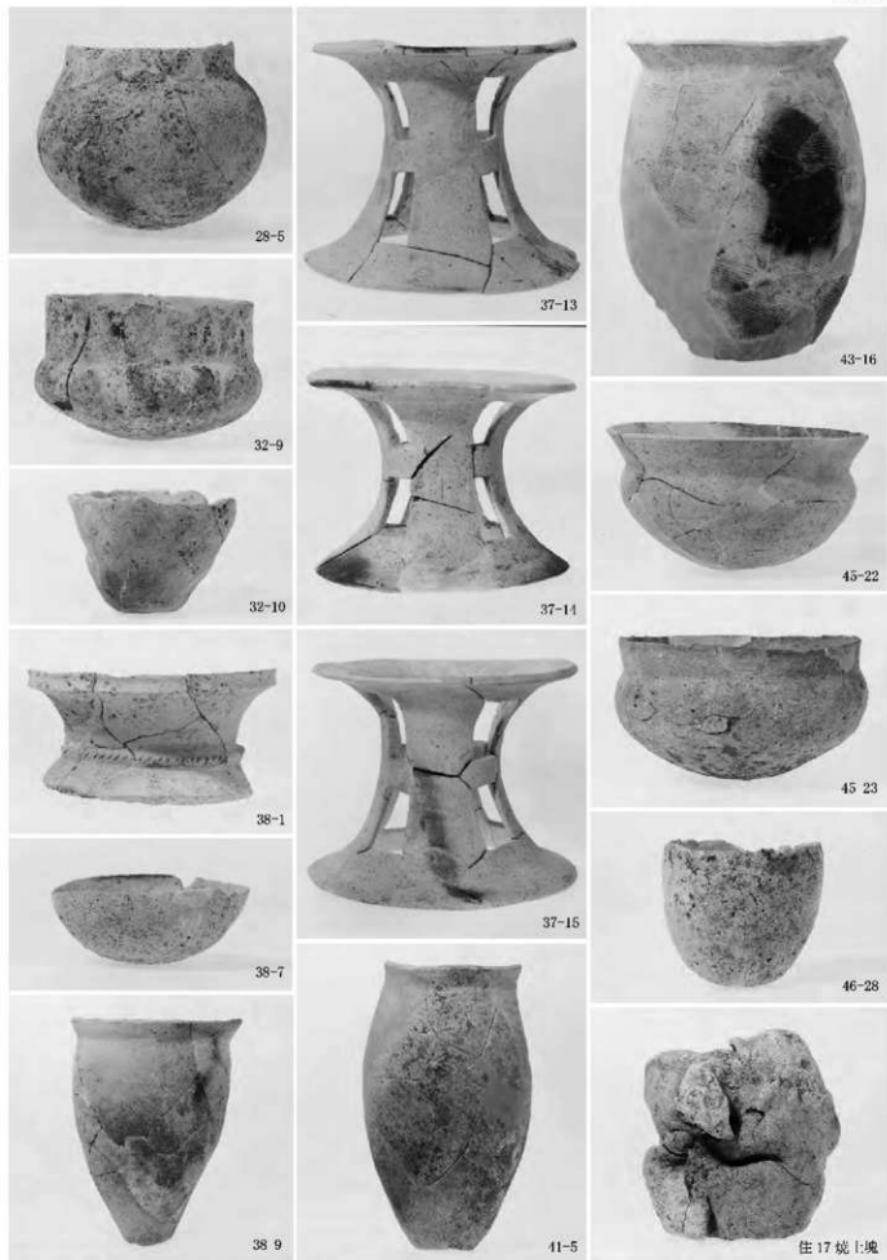
116-6



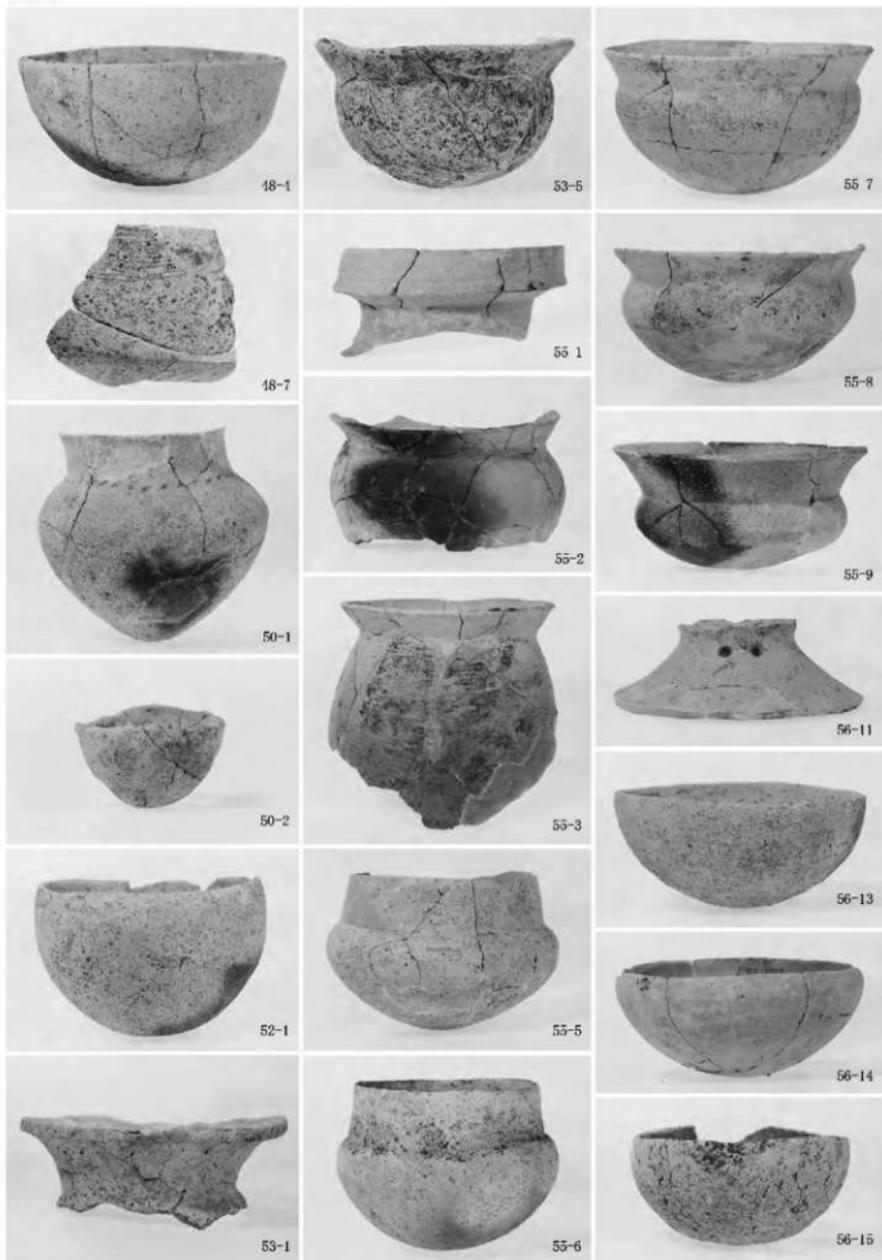
4. 1区包含層堆積状況（北東から）



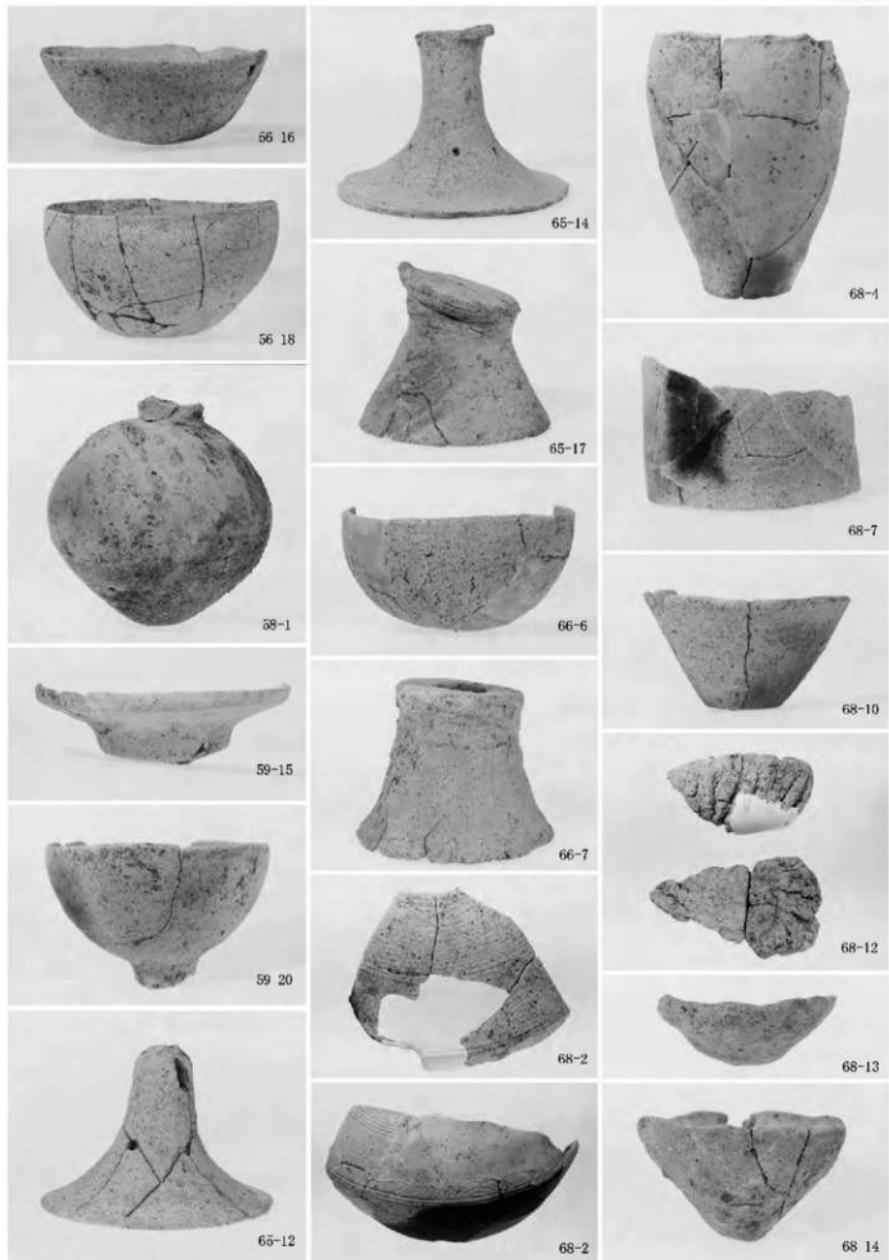
堅穴住居出土土器①



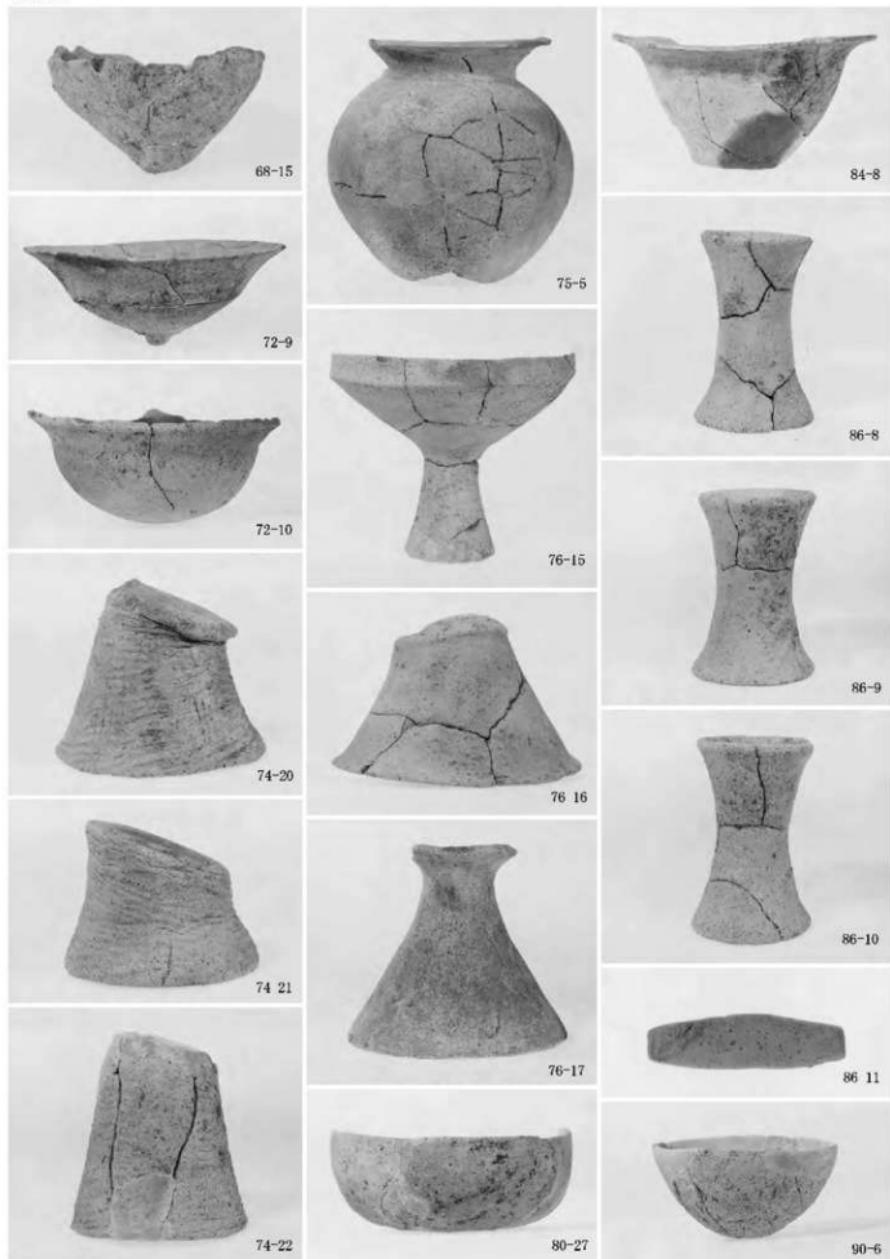
竪穴住居出土土器②



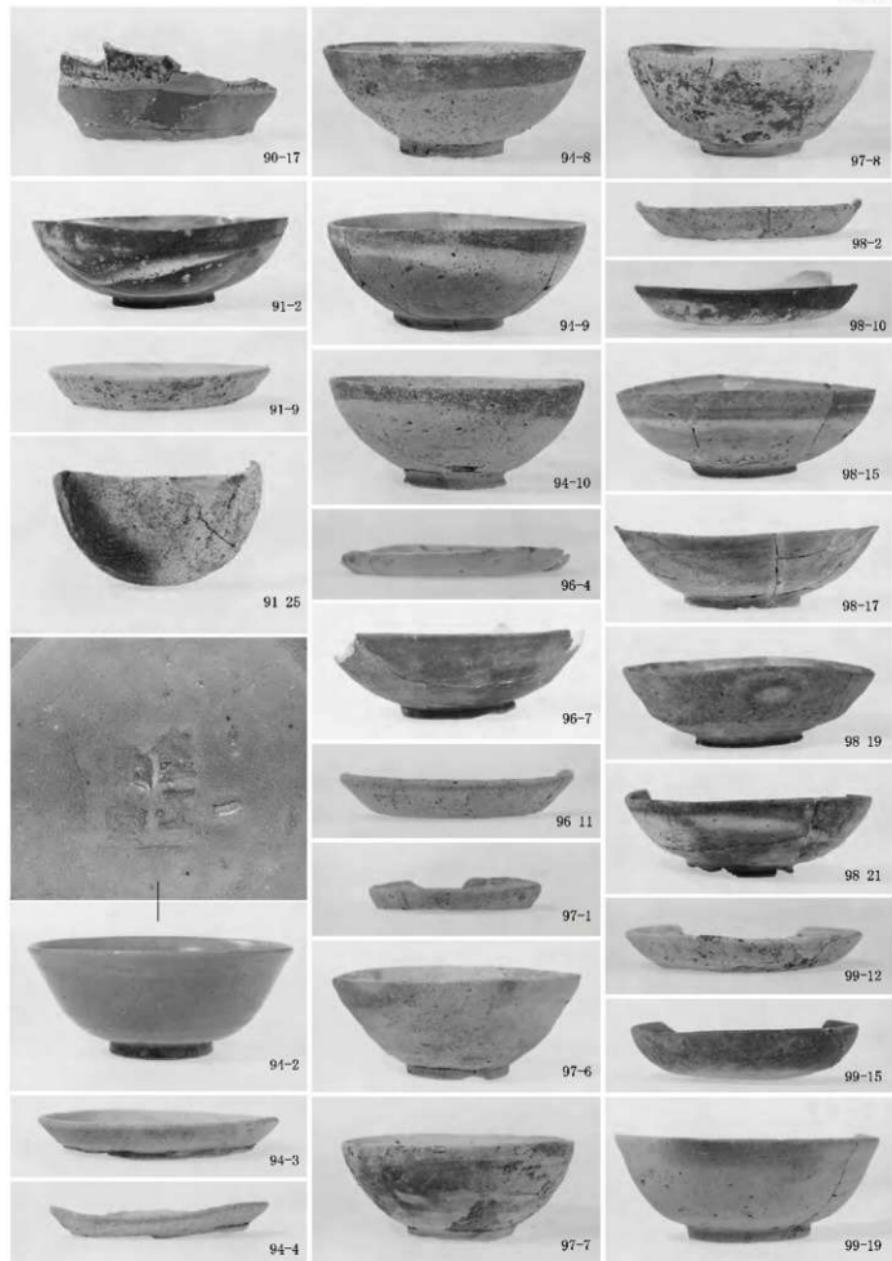
堅穴住居出土土器③



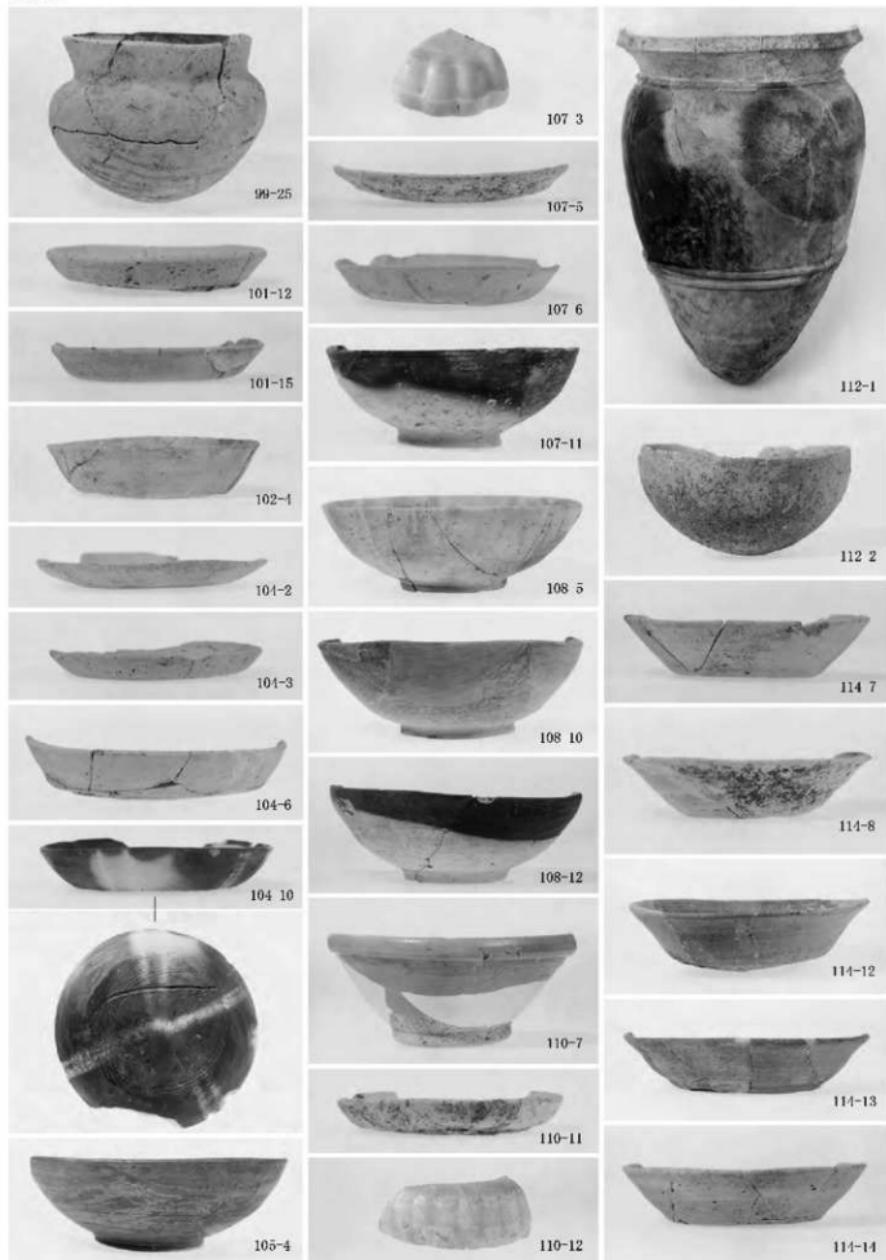
堅穴住居出土土器④



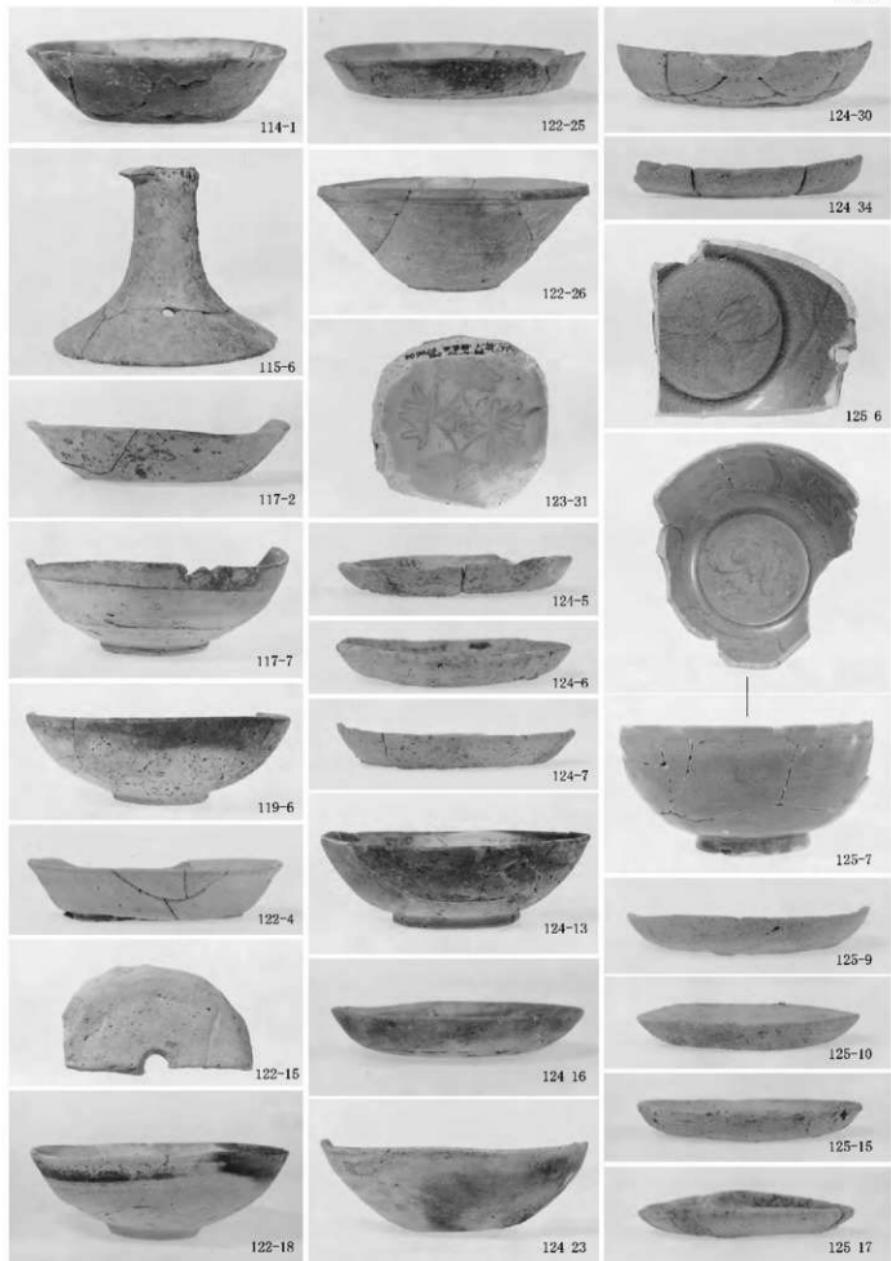
竪穴住居出土土器⑤・土坑出土土器①



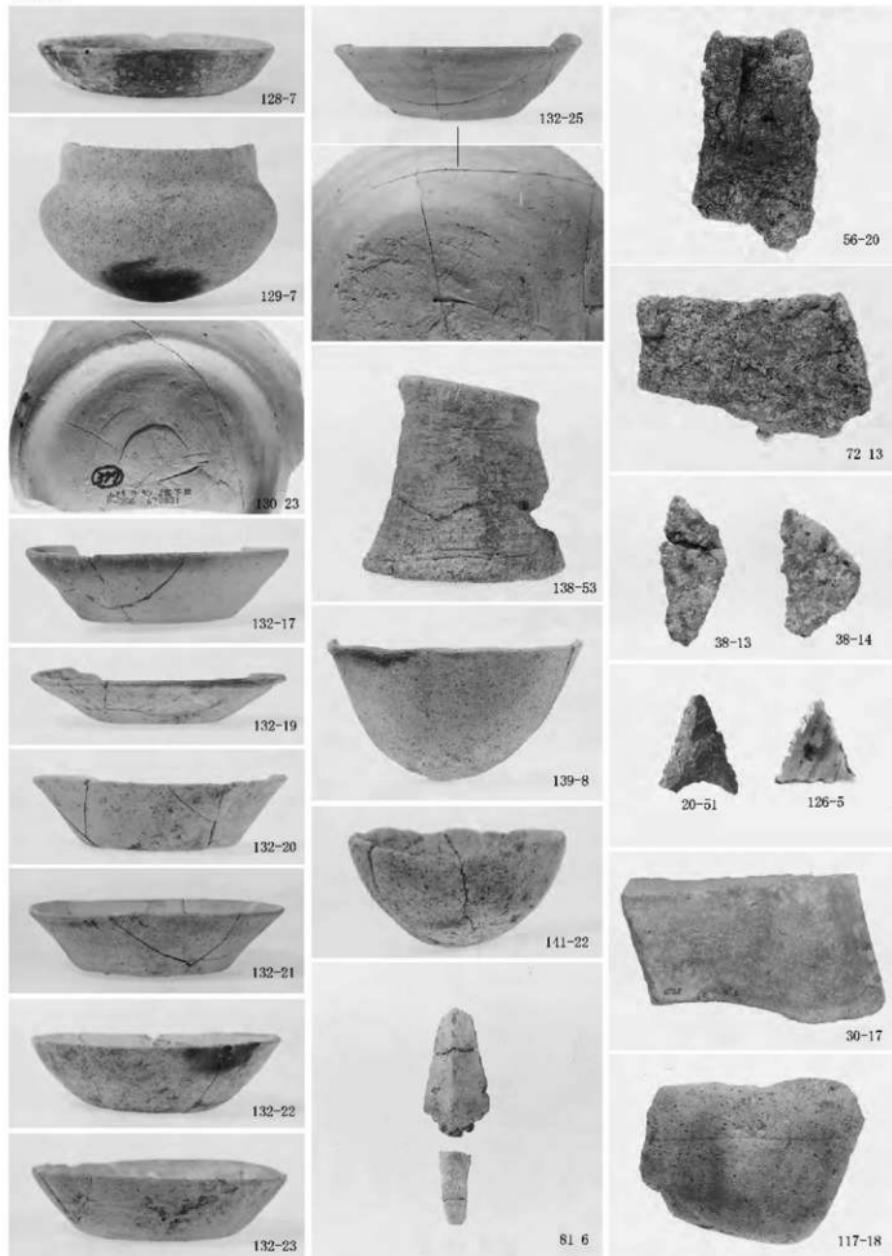
土坑出土土器②



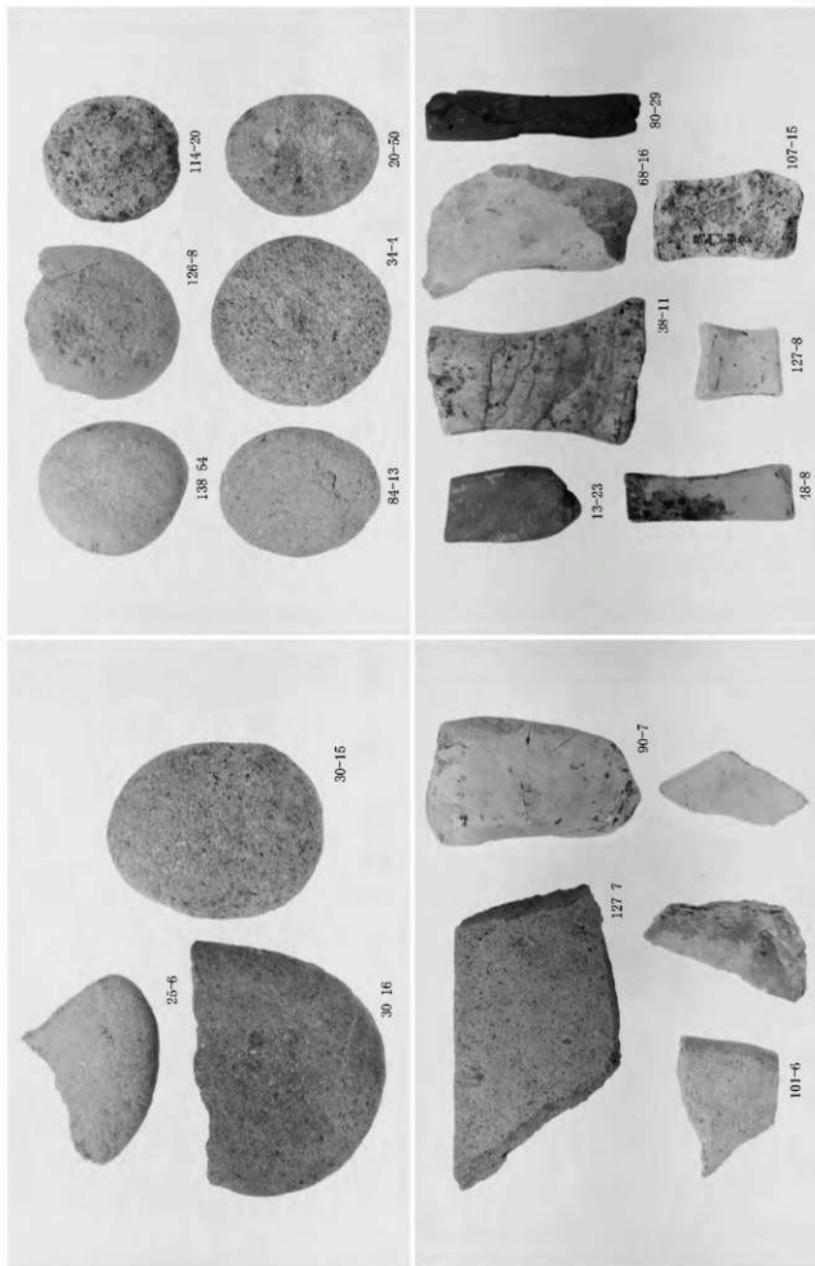
土坑出土土器③



土坑出土土器④



溝出土土器・出土金属器・出土石器①



出土石器②



107-14



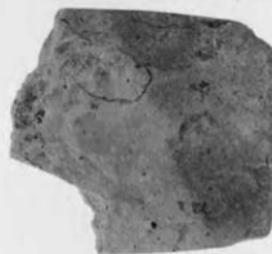
30-14



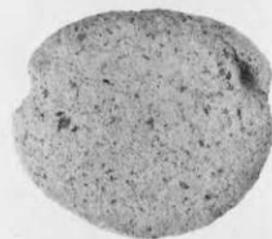
126-7



48-15



126-55



126-6



129-20

114-17

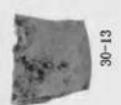


38-12

114-16



46-29



30-13

出土石器③

報 告 書 抄 錄

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2 1 1 4 1 0 7
登録年度 21	登録番号 2

山門ガラン遺跡

(県道本吉小川線関係埋蔵文化財調査報告)

福岡県文化財調査報告書第226集 上巻

平成22年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7-7

印刷 石橋印刷株式会社
福岡市博多区東比恵3丁目21番10号
TEL(092)411-0544